

東 崎 遺 跡 I

— 県立高知農業高校体育館建設に伴う発掘調査報告書 —

1991・3

(財)高知県文化財団

東 崎 遺 跡 I

— 県立高知農業高校体育館建設に伴う発掘調査報告書 —

1991・3

(財)高知県文化財団

序

県立高知農業高校の校庭から、弥生時代の土器や石器が発見されましたのは、昭和の初め頃におけます校舎建築工事時であります。以来、この遺跡は「農業高校遺跡」と呼ばれて弥生時代後期の遺物散布地として知られておりました。

この度、同校体育館の新築工事に伴って高知県教育委員会が平成元年度に発掘調査を実施したところ、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡・溝などの遺構と共に多量の土器・石器・鉄器等が出土し、広範囲な集落跡が所在していたことが明らかとなりました。

本書は、発掘調査の成果を（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター開設準備室でとりまとめたものであります。広く一般に活用され、埋蔵文化財保護の一助ともなれば幸いに存じます。

最後に、本書の刊行にあたりまして御指導を戴きました高知県並びに高知県教育委員会、御協力いただきました南国市教育委員会、高知農業高校、地元の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成3年3月31日

財団法人 高知県文化財団
埋蔵文化財センター開設準備室
室長 小橋 一民

例 言

1. 本書は、県立高知農業高校体育館建設工事に伴い高知県教育委員会が平成元年度に実施した東崎遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 整理作業及び報告書作成は、平成2年度に高知県の委託を受けて（財）高知県文化財団（埋蔵文化財センター開設準備室）が実施した。
3. 東崎遺跡は、南国市東崎957-1他に所在する。
4. 発掘調査は、高知県教育委員会が主体となり平成元年12月4日～平成2年2月24日の間に実施した。整理及び報告書作成作業は、平成2年度に（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター開設準備室が担当した。
5. 現地調査は、高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班主幹 山本哲也が担当し、同課主事松田直則、吉原達生の協力を得た。また、整理作業及び報告書作成は山本哲也（（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター開設準備室調査係長）が担当した。
6. 本書の編集・執筆は、山本が行った。
7. 本書で使用した挿図のうち、第1図（下）及び第2図（上）は、国土地理院発行二万五千分の一地形図「後免」・「土佐山田」を複製使用したものである。
8. 遺物の実測図は、土器1/4・鉄器1/2・石器（1/2・1/4）に統一した。
9. 遺跡は、これまで「農業高校遺跡」・「農業高校果樹園遺跡」・「五軒屋敷遺跡」等の名称で呼称されていたが、高知県遺跡詳細分布調査（香美・長岡ブロック、昭和63年～平成元年度）において「東崎遺跡」に改称された（遺跡番号040185・『高知県遺跡地図』香美・長岡ブロック19-17・1990 高知県教育委員会）。
10. 整理作業・報告書作成等においては、下記の方々の協力を得た。なかでも出土遺物等の復元・図化作業等については、整理作業に携わった諸姉に多大の労を煩わした。記して感謝の意を表したい（文中敬称略）。
山中美代子 山本裕美子 大原喜子 松木富子 橋田美紀 門田美知子 田村美鈴
矢野 雅 竹村延子 宮本幸子 白木由里 宮地佐枝
11. 発掘調査においては、地元東崎地区を始め高知県教育委員会総務課、県立高知農業高校、南国市教育委員会に全面的なご協力をいただいた。また、現地調査では作業員として協力していただいた地元の皆様方を始め、金集昇、溝淵博彦、吉成承三、小松幹明、の各諸氏にはいろいろとご協力・ご援助をいただいた。文末ではあるが、心からお礼申し上げたい。
12. 調査資料及び出土遺物等は（財）高知県文化財団で保管している。

本文目次

第Ⅰ章	調査に至る契機と経過	1
	1. 県立高知農業高校と校庭内遺跡	1
	2. 調査の契機	2
	3. 調査の経過	2
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	3
第Ⅲ章	調査の概要	4
	1. 調査の方法	4
	2. 基本層序	5
	3. 調査状況	6
第Ⅳ章	検出遺構	7
	1. 検出状況	7
	2. 住居跡	8
	3. 壺棺墓	16
	4. 溝跡	17
	5. 柱穴・ピット	17
	6. その他の遺構	18
第Ⅴ章	出土遺物	19
	1. 住居跡	19
	2. 壺棺墓	27
	3. ピット	28
	4. 溝跡・土坑	29
	5. その他の遺物	29
第Ⅵ章	まとめ	30
	1. 遺構	30
	2. 遺物	34
	3. 東崎遺跡小結	40

挿 図 目 次

図 1	東崎遺跡周辺の主要な弥生遺跡
図 2	東崎遺跡 の範囲及び発掘区域の位置
図 3	東崎遺跡 調査地位置図
図 4	試掘調査区配置図及び旧校舎跡検出位置
図 5	発掘区域及び検出遺構
図 6	土層序
図 7	検出遺構全体図 (1/200)
図 8	S T - 1 遺物出土状況 S T - 2・3
図 9	S T - 1 集石状態 (上) S T - 1 (下)
図 10	S T - 4 遺物出土状況
図 11	S T - 4
図 12	S T - 5 遺物出土状況
図 13	S T - 5 検出遺構・集石状態 (下)
図 14	S T - 5
図 15	S T - 6 遺物出土状況
図 16	S T - 6 集石状態 S T - 6 完掘状況
図 17	S T - 7・14遺物出土状況
図 18	S T - 7・12・14
図 19	S T - 8 遺物出土状況
図 20	S T - 8・9・10
図 21	S T - 11・12遺物出土状況
図 22	S T - 11・12
図 23	S T - 13
図 24	S T - 15・ピット群
図 25	P 25・壺棺墓 1・2
図 26	竪穴住居集成図
表	出土遺物観察表

挿 図 目 次

- Fig. 1 ST-1 出土土器
Fig. 2 ST-1 出土遺物
Fig. 3 ST-2～4 出土土器
Fig. 4 ST-4 出土土器
Fig. 5 ST-5 出土土器
Fig. 6 ST-5 出土土器
Fig. 7 ST-5 出土遺物
Fig. 8 ST-6 出土土器
Fig. 9 ST-6 出土土器
Fig. 10 ST-6 出土土器
Fig. 11 ST-6 出土土器
Fig. 12 ST-6 出土遺物
Fig. 13 ST-7 出土土器
Fig. 14 ST-7 出土土器
Fig. 15 ST-8 出土土器
Fig. 16 ST-8 出土土器
Fig. 17 ST-8 出土土器
Fig. 18 ST-9 出土土器
Fig. 19 ST-9 出土土器
Fig. 20 ST-9 出土土器
Fig. 21 ST-10 出土土器
Fig. 22 ST-11 出土土器
Fig. 23 ST-11・12 (392～394) 出土土器
Fig. 24 壺棺 1・2
Fig. 25 SD-3・ピット 出土土器
Fig. 26 ピット 出土土器
Fig. 27 ピット 出土土器
Fig. 28 SX-1・2 及び 包含層 出土土器
Fig. 29 包含層 及び T-3 (479～481) 出土土器
Fig. 30 東崎遺跡 出土石器 (1/2)
Fig. 31 東崎遺跡 出土鉄器 (1/2)

図 版 目 次

調査区・検出遺構

PL. 1	調査地遠景（矢印・北西山側より）	調査対象地近景（南東から）
PL. 2	試掘調査時風景（南東から）	T- 5 検出された溝跡（南から）
PL. 3	試掘調査風景（T- 3・東から）	
PL. 4	調査区南側旧校舎跡（東から）	同上（西から）
PL. 5	調査区遺構検出状況（北東から）	同上 調査区北側（東から）
PL. 6	住居跡検出状況（北から）	同上 調査区西側（北から）
PL. 7	S T-1 検出状況（東から）	S T-1 住居跡内集石（東から）
PL. 8	S T-1 床面（南から）	S T-1 完掘状況（南から）
PL. 9	S T-1（東から）	S T-1・2（西から）
PL. 10	S T-2（西から）	S T-3（東から）
PL. 11	S T-4 検出状態（東から）	S T-4 遺物出土状態（南から）
PL. 12	S T-4・S T-13・S T-15（南から）	S T-4 完掘状況（北東から）
PL. 13	S T-4 中央ピット土器出土状態（北西から）	P-25土器出土状態（北東から）
PL. 14	S T-5 検出状態（東から）	S T-5 埋土（南西から）
PL. 15	S T-5 集石（南から・H-5-C）	S T-5 床面遺構検出状態（南西から）
PL. 16	S T-5（南から）	S T-5（北東から）
PL. 17	S T-6（東から）	S T-7 検出状態（東から）
PL. 18	S T-7 周辺（北東から）	S T-8 遺物出土状態（北から）
PL. 19	S T-6・S T-8～10（北から）	同上（北西から）
PL. 20	調査区西側（北東から）	S T-10（北から）
PL. 21	S T-11・12検出状況（北東から）	S T-11（手前）・12（奥側）（北から）
PL. 22	S T-11・12層序（東から）	S T-12北側壁体断面（東から）
PL. 23	S T-13（南から）	S T-13（東から）
PL. 24	S T-14・S T-7（北から）	S T-7・S T-12（北から）
PL. 25	調査区東側ピット群検出状態（東から）	調査区東側（北西から）
PL. 26	壺棺墓 1（北から）	壺棺墓 1 埋設状況（南から）

出土遺物

- PL. 27 S T - 1 土器 (1.24~6.9~11.13.14.18~20.24.25)
- PL. 28 S T - 1 土器 (8.16.21.28.33~47)
- PL. 29 S T - 2 ~ 4 土器 (49~51.54.56.58~62.65.66.74)
(74 内面放射線状のヘラミガキ。)
- PL. 30 S T - 4 土器 (67~85)
- PL. 31 S T - 5 土器 (86.87.90.95.101~103.105.115.118.125)
- PL. 32 S T - 5 土器 (91.94.96.97.104.108.109.112~114.116.123.135.136.140.141)
- PL. 33 S T - 6 土器 (142.143.147.162.167.172.174.176)
- PL. 34 S T - 6 土器 (150.177~180)
- PL. 35 S T - 6 土器・石器
土器 (145.146.149.151~153.182.183.185~187.206.207.211.222.223)
石鏃 (485)
- PL. 36 S T - 7 土器 (224.225.227.229.230.236.237.240.241.242.246.256~259.261)
- PL. 37 S T - 8 土器 (235.264~266.270.273.279.291.294~296.300.301.306.307.310.327)
- PL. 38 S T - 8・10 土器 (280~282.311.322.324) ST - 8
(349~351.353.357.358.360.362) ST - 10
- PL. 39 S T - 9 土器 (331.335~340)
- PL. 40 S T - 11 土器 (363.365.369~372.385.386.390.391)
- PL. 41 S T - 12・15 S X - 1・2 土器
(392~394) ST - 12 (420~423) ST - 15
(458~461) SX - 1 (465・466) SX - 2
(345.366.433.445) ST - 10・11、P71・133追加資料
- PL. 42 P - 25土器 (410.411.413.414.417~419)
- PL. 43 包含層及びT - 3 出土土器 (473~478)
- PL. 44 包含層及びピット出土土器
(467.469.471.472) 包含層
(404~406.428.436~440.443.446.449.452.453.454¹) ピット
- PL. 45 鉄製品 (鉄鏃) (I - 1~4.7~11.19.21.24) ST - 1.4.5.7.8.P - 25 出土
- PL. 46 鉄製品 (I - 5.6.12~18.20.22.23.25) ST - 4~8.T - 3 出土
- PL. 47 石製品 (482) ST - 2 (483) ST - 4 (486.487) ST - 6 (488) ST - 8
(491) ST - 11 (493.494) 包含層 (484.489.490.492) ST - 5

第Ⅰ章 調査に至る契機と経過

1. 県立高知農業高校と校庭内遺跡

今回の調査は、県立高知農業高校の校庭で行われた。同校は明治創立の伝統校で、校庭等から弥生土器片などが出土することは早くから知られていた。学校の沿革と遺跡との関わりについて少し触れておくことにする。

明治23年（1890）3月、高知市北門筋（現在の永国寺町）に「高知県農業学校」が設置され（県令第29号）、同年9月の開校式後に授業開始となり、ここに「高知農業高校」へと至る礎が築かれる。その後、大正12年（1923）3月に長岡郡長岡村（南国市東崎、現在地）に新校舎が落成したのを機に移転し、昭和23年（1948）4月には新制度によって高知県立高知農業高等学校と改称されて今日に至っている。この間、数多くの農業等後継者が育成されると共に、幾多の逸材を輩出している。また、スポーツ活動等も盛んである。現在、農業経営科・園芸科・畜産科・林業科・農業土木科・食品化学科・生活科学科・農業科（定時制）が設置され、生徒総数829名（平成2年11月）を数える⁽¹⁾。なお、平成2年11月16日には、創立100周年記念式典が開催された。

同校敷地から、多数の弥生土器が発見されたことが記録されたのは昭和10年（1935）で、同校校史によれば校舎改築工事に際して校舎下から発見されている⁽²⁾。また、昭和16年（1941）2月6付け『土曜新聞』には校庭から弥生土器が出土したことが報ぜられている⁽³⁾。

遺跡としては、昭和27年（1952）の安岡源一編『高知県縄文式・弥生式・古墳文化遺跡地名表』に「遺物包含層」として記載され⁽⁴⁾、昭和37年度には『高知県遺跡地名表』に⁽⁵⁾、また昭和51年に発行の『全国遺跡地図-高知県-』において「農業高校遺跡」「農業高校果樹園遺跡」として掲載された⁽⁶⁾。なお、「農業高校果樹園遺跡」は南国市東崎字五軒屋敷の同校の実習田・果樹園から弥生土器等が出土したことによる。

上述のごとく校庭・校舎下・実習田等から弥生土器・須恵器等が出土することから、弥生後期・古墳後期の集落跡が所在する事が推察されていたが⁽⁷⁾、遺跡の内容については不明瞭なままであった。昭和57年1月中旬、南国市東崎字五軒屋敷の農道脇から、農道拡幅工事中に壺棺1基が発見され、緊急調査の結果、壺棺墓2基・土坑墓3基を検出し、弥生後期後半～末の墓域の一部が検出され⁽⁸⁾、翌昭和58年には五軒屋敷地区についての遺跡範囲確認調査として初めての学術調査が実施された。この範囲確認調査によって、弥生後期末～古墳前期初頭の竪穴住居址3棟・土坑墓3基・壺棺墓2基・溝跡1条・柱穴・ピット等が検出され、遺跡の内容が明確になると同時に南北350m東西150mの範囲を持つ広範囲な遺跡であると考えられるようになった⁽⁹⁾。昭和58年の調査成果は、その後の「東崎遺跡」へと至る過程のなかで、長岡台地上に立地する弥生後期～古墳前期の拠点集落を把握するうえでの契機となったことは評価される。現在では、五軒屋敷遺跡⁽¹⁰⁾は東崎遺跡の一画であると考えられている。

2. 調査の契機

平成元年度に、農業高校校内敷地の一部でテニス場として活用されていた場所が新体育館建設地として選定され、平成2年度の完成予定として実施設計等の基礎作業が進められていた。同校の敷地内は、「農業高校遺跡」として遺跡の所在が周知されている場所であり、建設工事に際して地下遺構等の所在が明らかな場合は事前の発掘調査等の対応を要する地点であった。

しかし、これまでも同校校内で校舎改築工事及び倉庫等小規模施設の建築が行われているにもかかわらず、埋蔵文化財に関しては出土遺物等の発見などにより調査に至る機会はなく、また、昭和前半に弥生土器等の出土が報告されているものの現在まで発掘調査等の対応が行われていないことから、現校舎建築時に遺物等の出土がみられたが、遺跡の大半は破壊されているのではないかとの見方が優勢であった。一方、昭和58年の五軒屋敷地区の調査により弥生後期～古墳前期にかけての集落跡の所在が確認されており、予想以上に集落範囲の規模が広範囲な場合は、同校敷地についても同遺跡の範囲に含まれることが想定されることや、建設計画地のテニス場は、かつてはグラウンドとして利用されており、基礎掘りの深い校舎等の施設は建築されていないことから、地下遺構遺存の可能性がもたれるなどの理由から、確認調査の実施は最低限必要であるとする意見もあった。このため、高知県教育委員会総務課と同文化振興課において数度の協議がもたれ、事前の確認調査（試掘調査）を平成元年度に実施することになった。

3. 調査の経過

確認調査（試掘調査）

平成元年5月24日～5月31日の間に、新体育館建設予定地のテニスコート場を対象に1.5m～2.5m×3m～5m範囲の調査区を、テニスコート場の周囲に8ヶ所設定した（T-1～8・調査面積80㎡）。このうち4ヶ所の調査区で地表下1.5m～1.8mで遺構が確認され、弥生末～古墳前半の竪穴住居址3棟・溝跡1条が検出され弥生土器・石器・鉄器が出土した（T-2・3・5・8）。調査結果から、事前の本発掘調査を要することが必要となった。

本発掘調査

平成元年12月4日～平成2年2月24日にかけて新体育館建設予定地を対象に、約1,200㎡の範囲を全面発掘した。検出遺構は、竪穴住居址14棟・掘立柱建物跡・壺棺墓・土坑・柱穴・ピット等で多量の土器類が出土し、また住居址内からの鉄器類の出土が多いことが注目された。遺構は攪乱により破壊されている部分も認められたが、旧グラウンド下の条件もあり、比較的良好に残存していた。竪穴住居址の密集度は五軒屋敷地区とは対照的に高く、集落跡のなかでも中枢域であることが考えられる。全体的に遺構等の確認が後手であったことが残念である。なお、年内調査の消化のため調査時期を後半期としたが、12月から翌年1月にかけての連続降雨により調査期間が長期化し、体育館建設スケジュール（創立式典までの完成）との兼ね合いなどから、終了時期をめぐって調査後半はかなり厳しい条件下であった。調査後の現地公表等についても、豪雨最中での発表となるなど天候不順に苛まれた調査であった。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

東崎遺跡は、南国市東崎（なんごくし・ひがしざき）に所在する。JR「後免」駅から線路沿いに約600m程北東へ離れた場所で、県立高知農業高校の新体育館建設地が今回の調査地点である。調査地から、線路づたいにさらに約150m程北東部で、線路北側の農業高校実習田・果樹園等が昭和58年に調査された五軒屋敷遺跡で、東崎遺跡はこの五軒屋敷地区を含めて東西600m南北400m以上の範囲を持つ広範囲な集落跡であると考えられる。

遺跡所在地は、高知平野の北東部「香長平野」の中央部に位置し、古物部川の形成による古期扇状地で、台地状の地形を呈することから通称「長岡台地」とされる河岸段丘上に立地している⁽¹⁾。周辺は標高16mから18m前後を測る微高地であるが、南側は河川の浸蝕作用による崖地で、舟入川を挟んで新时期扇状地である段丘地形が広がっている。

この「長岡台地」と呼称される古期扇状地は、長さ8km最大幅2kmの中規模扇状地で洪積世最終氷期の礫層堆積物に覆われるとされ⁽²⁾、土佐山田町から南国市小籠周辺にかけて南西方向に連なる段丘地形を形成している。また「長岡台地」は、縁辺部を除いて大部分は古代～中世では林野であり、近世初頭までは広域な開発はされていなかったことが指摘されている⁽³⁾。耕作地としての開発には水利確保の問題等、先学が指摘されるように近世初頭までは困難な区域で、生産主体は長岡台地の外周域である新时期扇状地であったと推測される。近世前半に野中兼山（1615～1663）による物部川の山田堰の建設と取水事業、舟入川・上井川・中井川などの灌漑用水路の完成によって、荒野であった長岡台地の生産性は一段と飛躍している⁽⁴⁾。

長岡台地の縁辺部には、東崎遺跡の他、南国市・金地遺跡⁽⁵⁾、土佐山田町・ひびのき遺跡⁽⁶⁾などの弥生後期後半～古墳前期の拠点集落が形成されており、弥生後期後半を境に長岡台地上に新たに形成される遺跡が増加している。遺跡数の増加は、土佐山田町から南国市小籠周辺に至る南西方向の長岡台地縁辺部に集中しており、あたかも「遺跡ベルト」とでも呼称されそうな帯状の遺跡集中地帯を形成している。この現象は、単位遺跡の事例ではあるが、かつては弥生時代を通じて母村的な大規模集落跡であった南国市・田村遺跡群が後期後半～終末では衰退し古墳時代前期へと続かない事象とは対照的である。

弥生後期末以降の長岡台地上での遺跡数の増加についてはこれまで、古物部川の堆積作用の進展による新时期扇状地での農業立地条件の安定化とみる自然要因論や⁽⁷⁾、物部川水系の共同体の変質と捉える考え方など⁽⁸⁾諸論が提示されている。東崎遺跡では、後期前半の集落跡を基にして後期後半～古墳前期にかけての時期に活発な遺構形成が認められる。このうち後期末の段階（ヒビノキⅡ式併行期）が画期となっているようで、新たな集落形成をもたらす要因が発生したことが類推される。なお、ヒビノキⅡ～Ⅲ式併行期は、本県における古墳時代への胎動期に該当する。明確な前期古墳が現状では発見されていない高知平野においては、どの段階から首長墓が成立するのか等課題が残されており、本遺跡を含めて長岡台地上の該当期諸遺跡の動向は、古墳時代社会への移行を探るうえで重要な要素を含むものと考えられる。

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法

調査地は、県立高知農業高校の校内で、敷地北側の旧テニスコート場である。平成元年5月24日～31日にかけて行われた確認調査（試掘調査）時では、テニスコート場が使用されており、確認調査区は周辺部分に設定した。従って、確認調査区に囲まれた内側の部分が新体育館建設地であり、本発掘調査の対象地となった範囲である。

確認調査区（T-1～8）は、一辺1.5～2.5m×3～5m前後の小トレンチで、北側・東西方向に4ヶ所（T-1～4）・東側・南北方向に3ヶ所南側（T-5～7）・東西方向に1ヶ所設定した（T-8）。調査面積は80㎡である。トレンチ名は、北側西端の調査区をT-1とし、順時計廻りにT-8まで冠した。調査用測量基準点については、後の本発掘調査を配慮して、調査地点西側で南北方向の直線上に3点配点し、セメント敷の校内路にコンクリートピンを打設した。基準点間の方向ラインは現地の地形に応じたもので任意設定である（磁北から31°東偏）。基準点は北からTP1～3とした。TP1からTP2までの距離は13.00m、TP1からTP3までの距離は46.00mである。TP1～3のラインを基準に、TP1から東へ直交して12m・20m・28m・34m・46mの距離に測量杭を打ち、T-1～7の測量点とした。また、TP3から東へ直交して15m・23m・30mの距離に同様に測量杭を配し、T-8の測量点とした。T-1～8までは、重機を使用して盛土・旧耕土等を除去し、土器片を含む遺物包含層が確認されてからは人力で遺構等の検出作業を行った。確認調査区のうちT-2・3・5・8から遺構等が検出され弥生土器片・石器・鉄器（鉤・T-3）が出土し、本発掘調査が必要であると判断された。

本発掘調査は、平成元年12月4日～平成2年2月24日にかけて実施され、1,200㎡の調査面積で行われた。調査では、溝状遺構（T-5）を除いて住居址等の遺構が検出されなかったT-5～7の範囲が、新体育館建設区域外であることから排土置場として利用し、重機（PC120）を使用して盛土・旧耕土等を除去したうえ、人力で遺構等の検出作業を行った。検出遺構の内、ST-2・4・8・9・11・12の各住居址については新体育館建設区域外に広がり有し、調査区域外であるため今回の調査では完掘することができなかった。また、ST-3については住居址上に東西方向に污水管が配管埋設されており、現使用施設であるためST-3南側を完掘することはできなかった。

測量基準点は、確認調査時に設定したTP1～3南北ライン（NE31°）を基準線として東西方向に直交する測量点を配点し、測量杭を配した。また、100m四方の方眼を基に東西1～25・南北A～Yとして、4m方眼による調査区の割付を行った。さらに、4m区画内は左上から順時計廻りにa～dの小区に分割した。測量点の名称は小区の右上に冠し、A-1-a～c等と呼称することにした。調査区全体としては、西側はD-1からN-3にかけて、東側はC-8からK-11にかけての範囲となる。なお、TP2の2m東がF-1-a、4m東がF-1-bに該当する。

2. 基本層序

調査区の層序は、西壁側で5層に区分される堆積土が、また東壁側では7層に区分される堆積土が認められた。基本層序については主として、上面の攪乱の度合いが少なく且つ遺物包含層の層厚が厚かった西壁側の土層断面観察に基づいて記述することにする。層序は次のとおりである。

1層・黄茶色土で盛土。テニスコート場等の整地土である。2層・灰茶色粘質土で攪乱土。2'層・黄茶色土で1層に類似し、旧グラウンドの整地土。3層・灰色粘質土で旧耕作土。4層・黒褐色粘質土で遺物包含層。5層・茶褐色粘質土で地山土である。

なお、図示した調査区西壁の土層断面図（第6図）のうち北側部分ではS T-11・12（竪穴住居址）が存在し、4層下の堆積土は住居内埋土である。

4層・黒褐色粘質土の堆積は調査区全体で認められ、弥生土器片等を含む遺物包含層である。学校敷地内であるものの調査対象地に残存していたのは、該当地が開校以来グラウンド等して利用され、校舎等の大型建物の建築から免れたことに起因しているものと考えられる。遺物包含層の上部は軟質の締まりであるが、下部は比較的硬質である。この包含層の下部は、弥生～古墳前期に属する遺物が主体で、古代・中世等の遺物は含まない。包含層の層厚は、東壁側で12～20cm前後を、西壁側で14～40cm前後を測り、調査区東側では上面の削平が著しい。東壁側が7層であるのは、4層より上層の攪乱土等が分層されるためである。

5層は、調査区の地山土で、上面から遺構が検出される。検出遺構の覆土は上記4層である。5層上面の検出高は、東壁側で標高16.30M前後、西壁側で15.80M～16.00M前後を測り東高である。遺構検出面は西にかけて緩やかな勾配が認められる。5層下は灰褐色礫層で、この礫層は遺跡の立地する古期扇状地「長岡台地」を構成する基盤層である。S T-1・5・6・7の床面下で確認され、検出高はS T-1で標高15.88M前後（ベット状遺構下段で15.70M前後）、S T-6で15.70～78M前後、S T-5で15.50M前後、S T-7で15.50M前後（ベット状遺構下段で15.35～15.40M前後）を測る。調査区東側で検出されたS T-1・6と調査区西側で検出のS T-5・7の数値を比べれば、約20～38cm前後の比高差がある。なお調査区北西で検出されたS T-11・12の床面下からは、標高15.00M前後においても礫層は検出されていない。S T-12はS T-7と隣接していることから、礫層は調査区西側のS T-7付近において西方向の傾斜を持つことが推察される。また、S T-6の北側から検出されたS T-8～10付近においても、標高15.10M前後では礫層は検出されておらず、基盤礫層はS T-6からS T-5方向にかけて鞍状に西方向へ傾斜堆積していたと考えられる。

昭和58年に調査が行われた五軒屋敷地区では、遺構検出面（第Ⅲ層・明茶褐色土）は標高17.40M前後であり、基盤礫層は17.10～20M前後で検出されていることから、礫層上面は凹凸をもちながら1.40m～1.70m程の比高差で、北東部が段状に高くなった地形を呈していたことが推測される。この標高差については、五軒屋敷地区に比べて当遺跡がさらに「長岡台地」の縁辺部に位置しているためとみられる。

3. 調査状況

確認調査（試掘調査）で設定したトレンチ（T-1～8）のうち、遺構等が検出されたのはT-2・3・5・8の各調査区である。この調査区は、対象地が調査段階でテニスコート場として活用されていたためコートの外周に設けたもので、T-8設定地を除いて新体育館建設範囲の外側に該当している。検出遺構が竪穴住居跡であると判断されたため、工事範囲の全域調査を行う事になったが、調査対象地は新体育館建設範囲に限定され、T-2・3・5付近は未調査のままである。本発掘調査で検出された竪穴住居跡S T-1・2・4・9・11・12についても住居跡の部分調査にとどまっております、将来体育館周辺で工事等が行われる場合は、事前の調査が必要である。なお検出遺構と確認調査区の位置関係であるが、T-2がS T-9の一部にまたT-8がS T-3に該当し、鉤が出土したT-3周辺については別の竪穴住居跡等の遺構が存在するものとみられる。

本発掘調査では、遺物包含層である第4層・黒褐色粘質土の上面まで機械掘削を行い、下層は人力で調査が行われた。近現代の攪乱遺構を除いて竪穴住居等の遺構が検出されたのは第5層・茶褐色粘質土上面である。4層は上部と下部で硬軟質の堆積の違いが認められたものの、土壌成分・色調などは同一で分層することはできなかった。また、4層中には土器片・石器片などが含まれていたが、遺物の集中個所として特定される散布状況を呈する場所はみられなかった。出土土器片の中で比較的破損度の低い破片は、住居跡等の遺構周辺から出土した遺物である。なお、4層下部の精査において竪穴住居跡の内側に投棄された集石の上面が検出され、この集石の存在が作業過程のなかで竪穴住居跡検出の目印ともなった。

4層上面で確認された近現代の攪乱遺構の中で、掘削深度が深く基盤層の礫層まで達していたのはS T-1東側の溝状攪乱遺構と、S T-2西側の攪乱坑である。このため、S T-1・2は部分的に破壊を受けていた。また、S T-3の上部は東西方向に掘削された污水管の埋設坑により破壊を受けていた。S T-1・2付近では、大正～昭和前半の木造校舎跡とみられる東西方向の建物跡2棟（幅10m以上・長さ21、23m以上）と南北方向の付属施設等（幅5m・長さ9.4m、10.5m以上）の基礎が検出され、2時期にわたる木造校舎と2時期の付属施設等が存在していたようである。これらの近現代攪乱坑はそれぞれ切り合い関係を有し、4時期の変遷が認められる。校舎の基礎跡は幅50cm前後の布掘り溝跡に小礫を充填したもので、溝底面は4層上部でとどまっていた。S T-1・2は旧校舎下で検出されたことになる。近現代の攪乱坑のうち地下遺構等へ影響を与えていたのは、時期的に最も新しい攪乱であるS T-2西側の付属施設等の攪乱坑である。

調査区東側では、4層上に旧耕作土の灰色粘質土が堆積し、灰色粘質土上には4層の転用土とみられる黒褐色粘質土が堆積していた。この灰色粘質土中から寛永通宝1枚が出土している。大正年間に学校敷地に転用されるまでは、調査地は近世以降から耕作地であったことがうかがわれる。また、調査区東側で4層の上部が削平を受けているのは、水田・畑地の転用時に4層が黒ボク土（肥沃土壌）として利用されていたことを示しているものと推測される。

第Ⅳ章 検出遺構

1. 検出状況

旧テニスコート場下の調査区全域から、弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡15棟・土坑・溝・壺棺墓2基・柱穴・ピットなどが検出され、調査区は集落跡の中心区域の一画であることが明確になった。また、遺構形成範囲は、調査地北側の国道195号線下及び調査区周囲の現校舎下から学校敷地南側の長岡台地段丘端にかけて存在していたものと推測される。

検出された遺構の中で、竪穴住居跡は遺構の重複関係が認められ、少なくとも3～5時期にかけて継続的に集落跡が形成されていたことが明らかである。また、竪穴住居跡の集中度からみて調査区一帯が、集落の存続期間において居住区域として適切な場所であったことが推察される。さらに、今回の調査地である南国市東崎975-1番地の西側隣接地において平成3年1月7日～2月2日にかけて実施された借店舗建築工事に伴う調査では⁹⁹⁾、当該期の竪穴住居跡10棟・方形周溝墓1基・壺棺墓1基・土坑6基・溝13条・柱穴・ピット等が検出されており、遺構形成の広がり確認されている。昭和58年度の五軒屋敷地区の調査成果⁹⁹⁾を併せてみると、東崎遺跡は長岡台地の縁辺部に形成された広範囲な拠点集落跡であったことがうかがわれる。

遺構は、長岡台地を構成する礫層（灰褐色礫層）とその上部に堆積した茶褐色粘質土の上面から検出されたが、遺構の平面的な切り合い関係が認められるものの各遺構間における間層の所在は認められなかった。また、遺構内埋土は黒褐色粘質土を主体とし、検出遺構における遺構内堆積土の相違は確認されなかった。土質の同様な黒褐色粘質土の堆積においては、本来区分されるべき堆積土の相違を把握することが困難な要因ともなっており、竪穴住居跡の重複関係について平面的に捉えることはできても、土層堆積土から分層区分することは難しかった。

遺構のなかで、竪穴住居跡については調査区の全域で検出されたが、なかでも調査区中央部から北側にかけて集中して検出された。その平面形態としては円形・隅丸方形・方形のプランをもつ住居跡が検出され、このうち方形の竪穴住居跡に関しては、軸方位の類似する住居跡例が認められてグループ分けが可能である。同例については集落の中での住居群の計画的な配置や住居跡群の構成単位について検討素材になるものと考えられる。

なお、検出遺構のうちS T-7と先後関係のある小竪穴遺構については竪穴住居跡の範疇に含めることにし、S T-14として扱った。また、調査区西側のピット群と環状の溝状遺構に関しては、遺構の検出状況から円形住居跡等の痕跡を推定しS T-15として扱った。

この他、調査区南東側で壺棺墓・溝状遺構・ピット群が検出されている。ピット群は、S T-6南側から壺棺墓検出地との間にかけて集中して検出され、調査区東側にかけて形成されていることが確認されている。このピット群については、柱穴・柵列等の一部である他、1間×1間又は1間×2間規模の小規模な掘立柱建物跡が数度にわたって建て替えされた痕跡である可能性を帯びるが、判然としない。従って、ピット群として総体的に扱うことにした。

以下、検出された各遺構の概要について記すことにする。

2. 住居跡

S T-1

調査区の南東端で検出された方形の竪穴住居跡でベット状遺構を持つ。長径4.5m短径4.1m以上を測り、主軸方位はほぼ磁北方向である。東辺側が後世の攪乱により部分的に破壊されていた。平面形態のなかで、北辺側の隅部はやや丸みを持つ。ベット状遺構（屋内高床部・以下ベット状遺構と呼称する。）は、西辺の一部・北辺部及び東辺部に設けられ、床面に対して0.133～0.223m程高く、地山土である第5層茶褐色粘質土を掘削した地山整形による作り出しで、床面は、基盤層である灰褐色礫層の上面となっていた。なお、ベット状遺構の床面と住居跡検出面との高低差は0.275～0.286m程である。

壁溝は、住居跡の各側辺（但し東辺部は不明）とベット状遺構の下段に設けられ、幅18～28cm深さ3.0～5.1cm前後を測る。なお、壁溝底面の比高差からみると、約3.5cm前後、北辺側のベット状遺構下段の溝が深い。

主柱穴はP 1～4の四本で、柱間距離はP 1～2間2.10m・P 2～3間2.25m・P 3～4間2.25m・P 1～4間2.0mを測る。P 1～3の検出状況から、壁溝の掘削後に柱穴が掘られたものとみられる。P 1は外径36cm内径25cm前後・深さ22.8～34.4cm前後で二度にわたる掘削が行われている。P 2は径18cm深さ28.2cm前後・P 3は径28.0cm深さ21.6cm前後・P 4は径25cm深さ19.4～20.2cm前後を測る。

床面の土坑は、長軸1.07m短軸0.50m深さ4.4～18.2cm前後で中央部がやや深くなった浅い土坑である。埋土は黒褐色粘質土で、遺物の出土はなかった。

S T-1の埋土は黒褐色粘質土で、埋土中に約220個余の自然礫の集石が認められた。この集石は、遺構検出面上から確認され、特に住居跡の凹部（ベット状遺構以外の空間）に集中していた。自然礫は、調査地の基盤層である灰褐色礫層（長岡台地の構成基盤層）に含まれる砂岩・珪岩・チャート礫等で、集石中の砂岩のなかには擦痕・敲打痕などが観察されるものが、また、集石の一部には被熱赤変化が認められるものが存在した。この被熱赤変化した石は、集石中から散発的に検出されたもので、焼土面としての広がりなどは確認されなかった。集石からは、土器片と共に鉄鏃等の遺物が出土した。

S T-2

調査区南側、S T-1の西側で確認され、部分検出にとどまる。検出範囲・長径4.0m以上短径1.15m以上の隅丸方形の住居跡で、西側は後世の攪乱により破壊されていた。北辺を基準とした主軸方位はN54° Eで他の住居跡に比べて東偏である。埋土は黒褐色粘質土である。床面は、茶褐色粘礫土で住居跡検出面との比高差は、0.297～0.418m前後である。住居壁に則して幅0.25～0.52m・床面との高低差14.6～25.9cm前後を測る段状部が認められ、地山整形によるベット状遺構の一部である可能性がある。壁溝はもたない。床面で主柱穴の一つとみられる径41～44cm深さ27.4cm前後のピットが検出されている。埋土中から土器片・砥石片が出土した。

S T-3

確認調査（試掘調査）のT-8調査区で検出された隅丸方形の竪穴住居跡で、S T-4の南側に接する。調査区南西端に位置し、南側は住居跡上面に埋設されていた便益施設（污水管）のため調査できなかった。長径2.50m以上短径4.10mを測る。北辺を基準とした推定主軸方位はN 5° Eである。壁高は10～18cmを測り、床面は茶褐色粘礫土である。埋土は黒褐色粘質土で埋土中から土器片が出土した。

S T-4

長径5.55m短径4.67mを測る方形住居跡で、平面形態は長形状を呈する。西側の一面は調査時に使用施設であった駐輪場が所在したため未発掘である（調査区外）。住居跡の主軸方位はN 7° Eである。遺構埋土は暗褐色粘質土で、床面は茶褐色粘礫土である。暗褐色粘質土の下層には部分的に褐色粘礫土と暗褐色粘礫土の堆積が認められる。出土遺物は、暗褐色粘質土に含まれていた。検出面から床面までの比高差は10.2～33.9cmとやや浅い。北辺と西辺の壁際に壁溝をもつ。北辺側の溝跡は幅14～21cm深さ3.4～7.5cmを測り、西辺側は幅11～13cm深さ2.2～9.0cmである。

床面から、溝跡・ピット（中型・小型）・柱穴・焼土面が検出され、土器片・砥石片・鉄器類が出土した。住居跡中央部の円形ピットは、径50～56cm深さ19～23cmを測るピットと後出す径71～82cm深さ25.2～39.7cmのピットで、後者には台石とみられる円礫（砂岩）・甕片・壺片が埋もれていた。また、焼土面は住居跡の北壁側で検出され、径20cmの範囲に黄褐色土が床面上に薄く堆積し、側には被熱赤変化した自然小礫が認められた。

柱穴・ピットは中央ピットを除いて5個確認されている。このうち主柱穴と考えられるピットは住居跡の長辺に平行する中軸線上の二個のピットで、径18cm深さ23.1cm前後・径27～30cm深さ34.9～36.8cm前後・柱間距離2.40mを測る。なお、住居跡北東隅部で柱穴状のピットが確認されている。S T-4西側の一部が未掘であるため、この柱穴状のピットとの対関係については不明である。また、住居跡の南側隅部では精査にもかかわらず柱穴跡の痕跡は検出されなかった。床面に直接据えられた柱の存在についても考慮すべきであろうが、S T-4では四本柱構造以外の住居跡であったことが推測される。

南壁側では、中央部に長軸1.02m短軸0.50m深さ12.9～17.7cmの長形状の掘り込み（方形土坑）と、約10～17cm前後の間隔で離れて両脇で平行する2本の区画溝が検出されている。区画溝は長さ1.160m幅20～27cm深さ6.9～9.4cm（西側）・長さ1.0m幅21～22cm深さ6.4～9.9cm（東側）・中心間の距離1.50～1.60mを測り、南壁に対してほぼ直交している。西側の区画溝に近接する柱穴はなく、延長方向ではあるが北辺側に柱穴が存在する。東側の区画溝では1.150m程の距離をおいて延長方向に東側の主柱穴が存在する。前記方形土坑と区画溝との関係については必ずしも明確ではないが、区画溝については柱壁間溝としての機能が想定され、住居内における屋内区分施設の一つであると考えられる²⁾。

S T-5

調査区中央部で検出された方形の竪穴住居跡で、S T-7の南側に位置する。長径6.70m前後短径6.30～6.50mを測り、主軸方位はN4°Eである。

遺構検出面から床面までの比高差は、47.4～69.4cmと比較的深く、住居内の埋土は他の住居跡に比べて厚く堆積していた。埋土は5層に区分され、1層黒褐色粘質土（基本層序の第4層・包含層に該当）・2層暗茶褐色粘礫土・2'層褐色粘礫土・3層茶褐色粘礫土・3'層茶褐色粘質土・4層暗褐色粘質土・4'層褐色粘礫土・5層茶褐色粘礫土で、床面の地山は基盤層である灰褐色礫層である。床面全体には4層が堆積し、2層及び3層は主に住居跡中央部に堆積していた。2・3層には自然礫を含み、約395個余の礫石による集石が認められた。この集石のなかにはS T-1の集石と同じく表面が被熱赤変化したものや、痕擦・敲打痕の認められる砂岩が僅かではあるが含まれていた。また、集石中から土器片・石器（砥石・敲石）・鉄器片が出土した。埋土のなかで3層に関しては、住居跡の中央窪地部分に堆積した状況を呈していた。

床面から3.2～13.8cm前後直上で土器片・鉄器類・土玉等が出土し、床面では柱穴・ピット・溝・土坑が検出された。床面検出の遺構の埋土は、4層が主体であった。

柱穴は、P1～4を主柱穴とした四本柱構成で、住居跡北東及び北西隅部においても柱穴状のピットが検出された。主柱穴P1は径38～44cm深さ39.8cmを測り、P2が径50.0cm深さ45.3cm、P3が径42～43cm深さ43.9cm、P4が径38～50.0cm深さ44.1cmを測る。柱間距離はP1～2間で3.10m・P2～3間が3.0m・P3～4間で3.0m・P1～4間が2.80mを測る。なお、北辺側の柱穴状ピット間の距離は、4.50mと4.80mであった。

P2の北側には径28～30cm深さ7.2cmのピットが、またP4の南側には径28～30cm深さ9.1cmのピットが所在し、それぞれP3及びP1方向に延びた区画溝（西側・長さ2.05m幅17～20cm深さ3.9～8.5cm東側・長さ3.22m幅19～24cm深さ2.6～6.5cm）と接続していた。両ピットの柱心間の距離は5.60mを、また区画溝中心間の距離は3.60mを測る。区画溝は、支柱穴とみられるピットと接続しており、柱壁間溝ないしは間仕切り溝としての機能がうかがわれ、屋内区分施設の一つであると考えられる²⁰。

住居跡の中央部では、中央ピット計4が所在し、東側・深さ8.9～11.4cm北側・深さ18.5～18.9cm南側・深さ17.2～17.7cm西側・深さ17.7～20.6cmを計測する。焼土等はみられず遺物の出土もなかった。

壁溝は、南辺中央部の一面を除いて全周しており、幅22～43cm深さ2.2～12.4cm前後を測る。東壁側の壁溝が若干幅広である。南辺中央部では南壁にほぼ直交する区画溝と接続する。

南壁側では、壁際に長さ3.320m幅22.0～32.0cm検出面からの比高差18.3～24.0cm床面との段差33.5～37.4cmの範囲で段状部が存在する。また、南辺中央部に長軸0.73m短軸0.67m深さ15.3～17.6cmを測る平面類五角形の土坑が所在し、両脇には約16～20cm離れて区画溝が検出されている。区画溝は西側が長さ1.60m幅36～43cm深さ7.2～13.5cm、東側で長さ1.10m幅16～22cm深さ2.6～3.6cm前後を測り、壁溝と接する。床面からの掘削深度は浅い。

ST-6

調査区北東部で検出された方形の竪穴住居跡で、長径6.20～6.26m短径5.65～6.00m前後を測り、主軸方位はN18°Eである。ST-6の南側には柱穴・ピットの集中範囲が所在する。

平面形態としては、軸線に対して東辺と西辺側がほぼ平行するのに比べて北辺と南辺側では不平行である。これは、西辺長6.00mに対して東辺長5.60mと東辺側が短く、南辺の東側が北辺寄りになるためである。北辺の両隅部と南辺の東隅部、西辺の一部の壁体に僅かな段状部が認められた。

住居跡検出面から床面までは22.7～38.6cmを測り、床面はほぼ平坦である。床面の地山は、基盤層である灰褐色礫層である。埋土は黒褐色土が主体で、西辺側の小範囲に黒褐色土下で淡茶褐色土・茶褐色土の堆積が認められた。床面から6～18cm前後上部に自然礫の集石が認められ、集中範囲としては南辺の西側寄り（170個余）・東辺の北側寄り（50個余）・北辺の西側寄り（78個余）の三ヶ所であった。集石は基盤層に含まれる礫石によるもので、少数の擦痕・敲打痕のある砂岩や表面被熱赤色化したものがみられた。集石の点数は約298個余である。集石中から土器片・石鏃・土玉等が、床面直上から土器片・土製支脚等が出土した。

ST-6では床面からの検出遺構は確認されなかった。ST-6の床面は灰褐色礫層であり、埋土は黒褐色土である。遺構所在の判別が容易であるにもかかわらず、柱穴・ピット等は検出されず、礫層下10cmまで精査したが成果はみられなかった。なお、床面の硬軟度の差異についてもST-6では判然としなかった。

柱穴等のみられない当該住居跡等では、床面に直接または木製礎板や台石を利用した柱跡の存在が想定されるが、なお検討を加える必要がある。

ST-7

ST-5の北側に位置する竪穴住居跡で、平面形態は隅丸方形を呈する。北東隅でST-1 4とまた北西隅でST-1 2と切り合い関係を持つ。長径6.40～6.48m短径6.38～6.46m前後を測り主軸方位はN13°Eである。平面プランはやや不整形で、南東隅では幅20～40cm深さ11.4cm前後で一部拡張部分が認められる。全周するベット状遺構を有し、各辺からの床面幅は1.10～1.50m前後を計測する。住居跡検出面からベット状遺構の床面までは23.6～56.2cm前後の深さで、住居跡床面までは37.6～60.2cm前後である。なお、住居跡床面からベット状遺構床面までの検出高は9.6～16.4cm前後である。検出面としては、北辺側に比べて住居跡南側が約16.5～27.8cm前後地盤高が高かった。

検出面は茶褐色粘質土で、埋土は黒褐色粘質土である。ベット状遺構床面から住居跡床面にかけては地山である灰褐色礫層で、ベット状遺構は地山掘削による整形である。

住居跡検出面の南側では、上部から埋土中に自然礫の集石が認められた。この集石は、南辺側の検出面から住居跡床面上部にかけてレンズ状に堆積していたもので、特に南壁側での堆積が厚かった。集石の検出範囲としては、南辺中央の壁際から帯状に北西方向に散布しており、他の部分での堆積は認められなかった。

ベット状遺構の床面から柱穴4（P1～4）が、住居跡床面から柱穴3（P5～7）が検出された。西辺側のベット状遺構床面及び住居跡床面の南東隅では、精査にもかかわらず柱穴跡等は検出されなかった。各柱穴跡の規模は次のとおりである（深さは床面周辺からの計測値）。P1・径60～63cm深さ37.1～42.8cm P2・径60～63cm深さ44.2～49.8cm P3・径68～70cm深さ30.5～39.5cm P4・径43～48cm深さ13.6cm前後 P5・径38～42cm深さ43.9cm P6・径22～27cm深さ49.6cm P7・径35～45cm深さ43.3cmである。

柱穴間の距離は、P1～2間2.60m P1～4間5.0m P2～3間2.0m P5～6間3.20m P5～7間3.30mを測る。

ベット状遺構については、北辺沿いに床面との比高差5.7～10.3cm西側の幅約30cm前後・東側の幅50～71cmを測る有段部が、また、南辺沿いに長さ4.50m幅12～26cm前後深さ2.8～6.5cm前後の浅い溝が検出され、床下段には北辺と東辺沿いの壁際に幅10～20cm深さ5.6～26.4cmの壁溝が確認されている。

床面では、南辺側に長軸1.10m短軸0.67m深さ16.5～25.3cmを測る類長方形の平面を持つ土坑が検出されている。

出土遺物としては、ベット状遺構床面上部から鉄器・土器片が、住居跡床面上で土器片が得られた。この他、西辺側のベット状遺構床面上で径32cmの範囲で焼土面が確認されている。

なお、住居跡の検出状態としては、北西隅のコーナーがS T-12によって切られておりS T-7はS T-12より先行するものとみられる。また北東隅では、S T-14と切り合い関係を有する。S T-14と重複した範囲においては、S T-7の輪郭（北東隅コーナー）は不鮮明である。後述するS T-14の埋土は、S T-7と同様な黒褐色粘質土であり、堆積土からでは前後関係を明確にし難い。ただ、①S T-7の東壁が残存し、下面はS T-14の床面に比べて10.9～13.6cm程低い。②北辺側の段状部では、S T-14の掘削による影響が認められない。③S T-14の輪郭からみれば、S T-7のプランがS T-14の西側拡張部を切っているように考えられる。などの諸点から、S T-7はS T-14に後続した住居跡であることが推察される。

S T-8

長径6.70m以上短径6.70m前後を測る不整隅丸方形の住居跡で、調査区北東部で検出された。全体の規模は、調査区外に広がるために不明である。西辺と南辺は直線状で、隅丸方形のコーナー部分が認められるが、東辺側は楕円状に膨らむ形状を呈する。東辺と西辺北側に高床部をもち、ベット状遺構を有する。検出面から床面までの比高差は、西辺側で31.5～43.2cm東辺側で21.8～32.5cm南辺側で30.5～57.7cmを測り、北側と比べて南辺側が17.9～22.5cm程地盤高が高かった。ベット状遺構は、床面との比高差が西辺側で8.4cm～12.7cm東辺側で4.7～8.0cm程で、地山整形である。

埋土は3層に区分され1層褐灰色粘質土2層褐色粘質土3層茶褐色粘質土で地山は2'層暗褐色粘質土3'層暗褐色粘質土と4層黄茶褐色粘質土である。床面を被覆するのは第3層で、上層の2層は住居跡内を全体に覆う埋土である。出土遺物の多くは3層から得られた。床面の

標高は15.30～15.40M前後である。なお、埋土中から集石60個が検出され、表面が被熱赤変化した自然礫12個・擦痕のある自然礫1が含まれていた。

床面直上及び5.6～25.5cm前後上部で、土器片・土玉・鉄器・砥石等が出土した。また、床面から柱穴9・溝3・土坑2が検出されている。柱穴の規模は南東隅の検出例（径60cm深さ30.9～41.3cm）を除いて、径12～26cm深さ4～39.1cm前後である。柱穴の配置状況から支柱穴として中央部の4柱穴が、また支柱穴として周辺の2柱穴が想定される。なお、柱穴間を繋ぐ床溝が西辺側で2（幅8～10cm深さ9.2cm前後）東辺側で1（幅12～18cm深さ4.9～7.4cm）検出されており、北辺側の支柱穴と支柱穴を結ぶ柱間溝であるとみられる。溝の性格としては、屋内区分施設にかかわる遺構であると考えられる。

住居跡中央部の土坑は長軸1.5m短軸0.9m深さ4.5～14.6cmを測り、また南辺側の土坑は長軸1.32m短軸0.5m深さ8.2～11.3cmを測る。

S T-9

調査区北東端の壁際で検出された住居跡で、S T-8・10と重複する。平面の検出状況からはS T-8・10を切っている。遺構は調査区北側に広がりを見せる。S T-8・10の検出により、部分的に調査区外へ拡張して調査を行った結果、S T-9が検出された。

検出範囲は東西5.6m×南北1.9mで、平面形態は2.12m・2.30m・1.12m・1.12m以上のライン（西側より計測）を短辺とする多角形状のプランを呈している。地山整形のベット状遺構を有し、床面から柱穴2が検出されている。検出面から床面までは西側で23.5～38.6cmを、S T-10の床面からは32.6cm前後の比高差を測り、ベット状遺構の床面までは西側で15～27.6cmを、S T-10の床面からは10.6cm前後を測る。ベット状遺構の床面からの差は、11.9～21.8cm前後である。埋土は暗褐色粘質土で、床面は黄茶褐色粘質土（地山）である。埋土中から土器片が出土した。床面の柱穴は径22～24cm深さ36.7cm前後で、柱間距離は2.580mを測る。支柱穴の一部であると考えられる。柱穴間の方位はN30°Eに復元される。

S T-10

長径6.72m短径5.80mを測り、楕円状の平面形を持つ。北側はS T-9に切られている。検出面から床面までは6.3～26.7cmを測る。住居跡中央部に長軸1.12m短軸0.58m深さ13.3～17cmの土坑が、また床面に柱穴6が確認されている。埋土は、暗褐色粘質土で床面は黄茶褐色粘質土（地山）である。埋土中から土器片が出土した。

支柱穴はP 1～4で、P 1・径26～28cm深さ38.0cm P 2・径18cm深さ31.0cm P 3・径40cm深さ94.2cm P 4・径20～40cm深さ24.8～30.6cmである。柱間距離としては、P 1～2が3.750m、P 2～3が2.610m、P 3～4が2.60m、P 1～4が2.70mを計測する。南北に並列した柱穴の方位から復元される主軸方位はN37°Eである。

S T-10はS T-9に先行する時期の住居跡であることは明白である。なお、S T-6の北側、S T-8の東側に隣接する位置から検出されたが、堆積土の観察等により層位的にこれらの住居跡との前後関係を明らかにすることはできなかった。

S T-11

調査区北東端で検出された方形の竪穴住居跡で、南側はS T-12と重複する。調査区外に広がり有し、西辺側は未検出である。長径5.50m前後短径4.70m以上東辺長4.70m前後を測る。主軸方位はN21°Eである。東辺と南辺側に地山整形のベット状遺構を有し、検出面から5.8～9.0cm（南辺側）35.3～38.3cm（東辺側）1.1～14.3cm（北辺側）の比高差を測る。また、床面までは、45.6～50.3cm前後を測り、南辺側でS T-12床面との比高差は18.6cm前後である。ベット状遺構の高さは床面から11.8～15.8cm（南辺側）3.7～8.3cm（東辺側）で、東辺北側に比べて南辺側での遺存度が高い。ベット状遺構下の壁溝は、東辺側の一部で深さ5.1～7.3cmの小溝が確認されている。

東辺側のベット状遺構床面上で35×84cmの範囲で焼土面が検出され、北東隅及び南東隅のコーナー部では柱穴状の土坑が検出されている。また、床面では径20cm深さ13.3～15.3cm前後の柱穴3がベット状遺構下端のコーナー部で、長軸0.85m以上短軸0.80m深さ12.2～14.4cmの土坑が南辺側で検出されている。

遺構埋土は床面を被覆する暗褐灰色粘質土と上層の褐灰色粘質土で、地山は茶褐色粘質土である。床面から7～15cm上で土器片・砥石等が出土した。

S T-12

S T-11の南側で重複して検出された。南東隅のコーナー部は、S T-7西辺北端部のプランを切っている。隅丸方形の竪穴住居跡であると推測され、長径5.0m短径4.3m以上の規模に復元される。東辺北側には、幅25～35cm床面との比高差5.3～14.1cmを測る段状部が（検出面から深さ15.7cm前後）、南東隅のコーナー部では幅25cm深さ3.9cm前後の溝状遺構が壁際で検出されている。住居跡検出面から床面までは、南辺側で29.8～55cm東辺側で23.0～27.5cm前後の深さで、南辺側の遺存度が高い。床面は標高15.30m前後でほぼ平坦である。床面からS T-11のベット状遺構床面までの比高差は5.8～9.0cmを、またS T-11の床面までは18.6cm前後の比高差を測り、S T-11側が低い。

埋土は検出面から床面まで褐灰色粘質土で、上層の黒褐色粘質土は住居跡全体を覆う遺物包含層である（基本層序第4層）。なお、地山は茶褐色粘質土である（基本層序第5層）。

床面からP 1（径21cm深さ33.3～35cm）・P 2（径32cm深さ36.2～38.1cm）・P 3（径25×40cm深さ13.4cm）の柱穴3と土坑1（長軸1.04m短軸0.62m深さ10.9～21.3cm）が検出されている。また床面上部と南辺壁際で土器片等が出土した。主柱穴はP 1・2とみられ、柱間距離は2.70mを測る。柱穴の配置状況及び東辺・南辺から求められる主軸方位は磁北である。

S T-12の北辺に関しては、検出時にS T-11との境界が明瞭ではなかったが、調査区西壁の土層断面観察等により、S T-11南辺壁際に版築状に（平面的には帯状に）、厚さ4～8cm前後を測る褐色土・黄茶色土・黒褐色土・黄茶色土・褐灰色土（上層から順に）の堆積が認められ、S T-12の北壁の一部である可能性がもたれる。S T-11の廃絶後にS T-12が構築され、軟弱であった北壁側の地盤が補強化されたことが考えられる。

S T-13

調査区南西部でS T-4に隣接して検出された小竪穴住居跡で、平面形態は方形を呈する。長径3.380m短径2.95m前後を測り、主軸方位はN9°Eである。床面の周囲を全周する壁溝を有し、北辺から西辺及び南辺西端にかけては、検出面との比高差5.1～9.0cmを測る幅狭の有段部を持つ。床面は、中央部が僅かに低いもののほぼ平坦な面を呈する。検出面からは北辺側で12.9～15.9cm東辺側で8～13.5cm南辺側で6.8～8cm西辺側で8.8～15.9cm前後の比高差を測る。壁溝は、床面からの深さ2.7～6.6cm幅12～22cm前後を測る。床面から柱穴5が、床面から壁溝にかけて柱穴4が、北辺側の有段部から柱穴1が検出されている。柱穴の規模は次のとおりである。P 1（径27cm深さ6cm）P 2（径20cm深さ6.9cm）P 3（径25～27cm深さ9.6cm）P 4（径23cm深さ5.9cm）P 5（径17cm深さ9.3cm）P 6（径20cm深さ8.2cm）P 7（径25～35cm深さ21.3cm）P 8（径22cm深さ2cm）P 9（径12cm深さ4.3cm）P 10（径15cm深さ27.0cm）である。このうち主柱穴とみられるのはP 1～5で、P 9・10は支柱穴とみられる。なお、対角線上に位置するP 1・2を主柱穴とし、他のP 3～6・P 9～10を支柱穴とする見方も可能である。参考までに柱穴間の距離を記しておく。P 1～2（1.60m）P 3～4（2.20m）P 3～5（2.20m）P 4～5（2.0m）P 9～10（1.55m）P 4～9（1.65m）P 5～10（1.45m）である。

埋土は暗褐色粘質土で、検出面及び床面は茶褐色粘質土（地山）である。埋土及び床面からの出土遺物は見られなかった。

規模及び平面形態等からS T-13の機能としては通常の居住用の竪穴住居跡としてではなく、作業場や儀礼的な要素を帯びる目的に供せられた施設である可能性も考慮される。また、住居跡の配置状況としては、S T-4との関連性がうかがわれる。

S T-14

S T-7の北東隅に接して検出された小竪穴住居跡である。検出状況からS T-7に先行する。長径4.40m短径3.90m前後を測り、西側ではさらに1.0×1.50mの範囲で拡張され、西端はS T-7によって切られている。方形の平面形態を呈するが、全体的に不整形である。検出面から床面までは10.5～15.7cmの比高差で比較的浅い。東辺側に2柱穴（径24cm深さ4.9～7.3cm・径31cm深さ4.8cm）西辺側床面に1柱穴（径28cm深さ10.3～11.5cm）・西辺側壁際の検出面上に1柱穴（径25cm深さ15.3～23.5cm）が検出されている。

埋土は黒褐色粘質土で、埋土から少量の土器片・自然礫等が出土している。住居跡として機能していたのか否か不明で、小竪穴遺構として捉えておくことにする。

S T-15

S T-7の南側、S T-5西側で検出された柱穴・ピット・土坑・溝跡の集中範囲について、平面形態が弧状を描く溝跡の所在やピットの検出状態、中央ピット状の土坑の存在などから竪穴住居跡等の痕跡を想定しS T-15として扱った。S T-15の想定範囲は、東西方向に近接して検出されたP 42・26・29・31のラインを北縁とし、東縁はS T-5によって切られた溝跡とS

T-13北側の東西方向の溝状遺構を結ぶラインを、またP 4北側の東西方向で弧状の輪郭を呈する溝跡を南縁とする範囲である。北縁から南縁までの推定径は13.2m前後を測り、この範囲の中央部には中央ピット状の土坑S K-1が所在する。

S K-1は長軸2.35m短軸1.05m周辺の深さ6.2cm中央部の深さ31.2～35.3cmを測り、南縁とした溝跡は幅22～40cm深さ6.0～9.7cm前後を測る。また、柱穴・ピットのなかでP 12は（径70～80cm深さ12.7～19.5cm）P 22（径33cm深さ9.6cm）P 25（径58～78cm深さ10.4～15.0cm）P 29（径32～36cm深さ39.9cm）P 31（径64～70cm深さ33.8cm）を測る。なお、P 25からは多量の土器片・鉄鏃1が出土した。

遺構検出面は茶褐色粘質土（地山・基本層序第5層）で、遺構埋土は黒褐色粘質土である。検出状態としては、住居跡に関連する壁面・周溝等は確認されず、部分的に溝跡が検出され、柱穴・ピット・土坑等が確認されたのにとどまる。柱穴・ピットの検出位置からは直線上に並列する遺構は見出されず、掘立柱建物跡等の存在を想定することは困難である。S T-15が住居跡の痕跡であると仮定すれば、中央ピット・柱穴・ピット・床面と溝跡が検出されていることになるが、住居跡の存在を積極的に肯定するには、遺構の残存状態はあまり明瞭ではない。なお、S T-15の南側にハ字型に並列する柱穴跡が検出されている（西側はP 1～4）。

S T-15に関連した施設（張出部・露台など）となる可能性も帯びる。

S T-15については、①堅穴住居跡の床面上部が削平を受け、掘削深度の深かった遺構の一部が残存した②堅穴をもたない平面住居跡③一定の目的のために作業場として利用された空間などの諸点が想起されるが、西側には未調査区もあり、前記諸点を踏まえた再検証が課題である。

3. 壺棺墓

調査区南東部、S T-1北側で壺棺墓2が検出された。検出面は茶褐色粘質土（地山）上で、遺構埋土は黒褐色粘質土である。2基の壺棺墓は隣接し、東側を壺棺墓1、西側を壺棺墓2と呼称することにした。両壺棺墓とも、使用された土器の形態・分量などから乳児用の壺棺墓であると考えられる。検出場所の周辺では柱穴・ピット等が集中していた。

壺棺墓1

基本層序第4層の黒褐色粘質土（遺物包含層）を精査中、壺棺の一部が検出され（396下胴部）、埋納土坑を伴う壺棺墓であることが確認された。壺棺の上端部は、土坑検出面から約6.7cm程上部に位置していた。検出範囲は、0.55×0.78m深さ22cm前後の楕円状の掘り込みで、壺棺周囲の堆積土壌はやや軟質の黒褐色粘質土であった。掘り込みの東縁に壺棺が埋納されていた。壺棺は、396の底部を斜め上に、また下側に395の上部を合わせた状態で据え置かれていた。395は口縁部が打ち欠かれ、396は上胴部より上が打ち欠かれており、破片の一部が合わせ口付近で396の下端に接して置かれていた。壺棺内は細粒の灰黒褐色土が堆積していたが、副葬品類や骨片等の遺物の存在は確認されなかった。

壺棺の取り上げ後、検出範囲を精査した結果、長軸1.2m短軸1.05m深さ11.3～26.1cmで不整

楕円形の平面形を呈した土坑が確認された。土坑内における壺棺の位置は、中央部からやや西寄りであった。

壺棺墓 2

壺棺墓 1 の西側に接して検出され、土坑は0.9×0.9mを測る不整形楕円を呈する。壺棺 (397) は東縁寄りに上向きに置かれ、上胴部から口縁部にかけての破片が壺棺内に落ち込んだ状態で検出された。壺棺内には上胴部まで灰黒褐色土が堆積していたが遺物の存在はなかった。

壺棺の南東脇には15×25cm厚さ9.4~13.8cm大の自然礫 (砂岩) が置かれ、土坑北西端でも10×22cm大の自然礫が検出された。土坑は、検出面からの深さ3.1~7.9cmで比較的浅く、壺棺の出土位置では径0.5×0.62m深さ12.5~22.0cmの掘り込みが認められた。

壺棺397は、棺内の破片をもとにほぼ完形に近い状態で復元された。397に伴う他の壺棺や蓋石の存在は確認されてはいない。壺棺の埋設に際しては木製蓋の使用や粘土と土器破片による封鎖などの方法が考慮される。

4. 溝跡

調査区内で検出された不整形の溝跡状遺構をSD-1~5と呼称した。なお、当該遺構は小範囲で帯状に広がる遺構や (SD-1・4)、後世の攪乱のため形状が不確定のもの (SD-2・3)、調査区外に延びるもの (SD-5) など不明な要素が多く、通常の溝跡として捉えることが適切ではない遺構が含まれていることを付言しておく。

SD-1

ST-15南側で検出された。幅0.65~0.9m深さ7.1~12cm前後を測り、西側で別の溝状遺構と重複する。北縁のラインは弧状の溝状遺構の延長ラインである可能性もある。

SD-2

検出長1.50m幅0.42~0.73m深さ2.8~5.8cmの浅い遺構である。埋土は黒褐色粘質土で南側は攪乱されている。

SD-3

SD-2の東側で検出され、北東方向に曲折する遺構である。SX-2と重複し、同遺構の南辺部を切る。検出長2.30m幅0.43~0.58m深さ11.2~15.7cmを測り、埋土は黒褐色粘質土である。

SD-4

P129の北東部で検出された。検出長2.75m幅0.34~0.43m深さ7.5~9.8cmを測る。

SD-5

調査区南東端で検出された。北東方向に直線的に延びる。検出長2.15m幅0.3~0.36m深さは西端部で4.6cm中程で12.1cm東端で20.4cm前後を測る。埋土は黒褐色粘質土である。

5. 柱穴・ピット

調査区からは約170前後 (ST-15以外の住居跡内検出数を除く。) を数える柱穴・ピットが検出されている。このうち遺物包含層下で遺構検出面から確認されたものは、約160前後である。検出状況としては、ST-7北側・ST-15周辺・ST-8・10南側・ST-6南側の各範囲か

ら確認されており、なかでもS T-15周辺とS T-6南側での検出数が多い。遺構埋土は黒褐色粘質土を主体とし、土器片等の遺物が出土した遺構もみられた。また、遺構の集中地点では重複関係を有するものや接続する例などが確認されている。

遺構の内、P 128からは磨石が出土しP 25からは鉄鎌1が、またP 1・2・6・12・22・25・29・31・34・39・51・58・60・65・71・76・93・101・112・122・129・133・141・142・144・153・154・157では土器片が出土した。

S T-13の西側、S T-4北側の範囲では、ほぼ直線上に並ぶP 1～4が検出されている。P 1（径49～53cm深さ52.8cm）P 2（径32×46cm深さ7.5～9.6cm）P 3（径64～75cm深さ55.5cm）P 4（径47cm深さ56cm）を測り、P 1～3間1.40m P 3～4間1.35mの柱間距離である。P 1・3・4の柱間ラインの方位は、磁北方向である。このP 1・3・4については、柱穴の規模・掘削深度・柱間距離・検出位置などから一連の遺構であると考えられる。なお、P 1～4の東側で（S T-13の東側）、ハの字状に並列する2個の柱穴が検出されている。柱穴の性格としては、西側未調査区との関連で現段階では不明確ではあるが、①掘立柱建物跡の東辺または②ハの字状に東側のピットと並列する検出状態から、S T-15の関連遺構で住居跡の張出部（露台等）等が推察され、検出状態からは②である可能性が高い。

S T-15の柱穴・ピット群に関しては前述したとおり不規則な配置を示している。これに比較してS T-6南側のピット群のなかには直線的に並ぶ状態で検出された遺構がみられ、掘立柱建物跡等が存在していたことが推考される。ピットは壺棺墓1・2の北側で特に集中しており、S D-3・4を切るものや重複・接続する遺構が多かった。ピット群からは複数の組み合わせが想定されるが、1間×1間又は1間×2間程度の小規模な掘立柱建物跡等（推定約2.5×3.0mなど）が数度、建て替えられていた可能性が強い（P 102・105・138-2・131、P 106・110・114・119・124・125など）。

6. その他の遺構

S X-1

S T-6の西で検出された舟底形の土坑で、西端はP 65と接続する。東端の壁面は斜行し、検出面から底面端までは約10cm前後を測り若干播鉢状を呈する。長軸4.4m短軸0.9m深さ13.1～15.1cmを測り、埋土は黒褐色粘質土である。埋土中から多量の土器片が出土した。土坑底面は平坦で、床面直上からの出土遺物はみられなかった。

S X-2

S D-3に接して検出された楕円状の不整形土坑で、南辺はS D-3に切られている。長軸1.50m短軸1.25m深さ4.1～10.3cmを測り底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土で土器片が出土した。S D-3の低面はS X-2床面から約7.6cm程の比高差で低い。

第V章 出土遺物

基本層序4層（黒褐色粘質土・遺物包含層）下部・住居跡内堆積土、同床面上・柱穴・ピット・土坑・壺棺墓などから弥生後期後半～古墳時代前期にかけての土器類・石器・鉄器等が出土した。遺物の多くは土器片で、住居跡・土坑・ピットの一部・包含層からの出土が主であった。なお、本遺跡では住居跡（S T-1・4～8）・ピット（P25）等から総数25点の鉄器（手鎌2・鋤先鉄先2・鉄鎌17・鍬2・不明2）が出土し、良好な資料を得ることができた。

以下、各遺構ごとに出土遺物の概要を略述することにする。

1. 住居跡

S T-1

S T-1では、埋土中に約220個余の自然礫が含まれ住居内の凹部に堆積していた（東西2.2m×南北3.2m範囲）。遺物はこの集石中から出土し、ベット状遺構及び床面上からの出土遺物はみられなかった。集石内では、土器片甕（4・13）・壺（5・11）が住居跡南側から、壺（3）が南西隅から、壺（6）と鉄鎌（I2）が中央部からで、北側から鉄鎌（I1）と細片の土器片が出土している。他の遺物は、集石上部の堆積土や覆土中に含まれていた。集石中における土器片等の出土状態としては特に集中する場所はなく、住居跡南側の壺・甕の破片のまとまりが留意された程度である。土器は特定の場所に配置されたものではなく、集石と共に廃棄されており、意図的に割られたことも想定される。集石の意義については明確ではないが、集石+土器類+鉄器を用いた廃棄行為が復元され、住居跡廃絶に伴う埋設祭祀が考えられる。なお集石には、被熱赤変化が認められる礫石や擦痕・敲打痕のある砂岩が含まれており、日常生活に使用されたと考えられる石が確認されている。石材は他所から運ばれたことも考慮されるが、集石は床面下の礫層中に包含されている石質であることから、①住居周囲の周堤等に、掘削時に掘り出された石と土が利用されていた②廃絶時に住居内で使用されていた不用石材と共に埋め戻された、などS T-1に身近な石材であった可能性を指摘しておきたい。

土器については、実測可能であった32点と口縁部等の形態差により個体識別のできた15点の計47点が確認できた。内訳は壺11点・甕21点・高杯4点・鉢8点・坏（小型手づくね）1点・土製支脚1点・土製円板1点である。このうち甕（8・16・36・39～41・45～47）鉢（37）は搬入品であり、（8）が四国東部（阿波か）、播磨（16）・畿内（河内）（36・47）・在地外で地域不明（15・39～41・45・46）から運ばれてきたものであると考えられる。甕（36・47）は庄内式土器の範中で捉えられ、甕（16）は口縁部内面の凹部と2本の条線・胎土の特徴から播磨・川島遺跡20溝甕B類に類似する資料である⁽²³⁾。搬入土器の数量の増加傾向は、留意される事項である。

在地の土器としては壺（1～3・5・6・11・38・42・43）甕（4・7・9・10・12・13・14・17・31・33・44）高杯（18～20・28）鉢（23～27・29・30）土製支脚（22）土製円板（34）小型手づくね土器（32）が掲げられる。なお、（21）には外面に弧帯文状の線刻が、（35）に線刻

の一部が、甕（33）には外面にヘラ記号とみられる2本の刻線が観察される。土製円板（34）は土器片を再利用したもので外面に格子状の刻目を有する。また、小型手づくね土器（32）は坏状で内外面とも指頭圧痕が顕著である。壺（2）は複合口縁、（3）は胴部が張り外面は丁寧なヘラミガキが施されている。壺（5・6・11）は集石南側で出土したもので、（5）の胴部は丸味を持ち内面下半には指頭圧痕が認められる。また（6）の内面は、胴部上半から頸部にかけてハケ調整のうえにスリナデを施し、さらに指ナデによる指頭圧痕が認められる。（11）は口縁部と胴部の一部にわずかな欠損があるものの関係の5/6程度に接合・復元され、口縁部は上部が内傾する複合口縁である。甕（4・13）は壺（5・11）の傍らで出土し、（4）の胴部は卵形の形状を呈している。（9）の口縁部はくの字形に外反し、内面胴部にはハケ調整のうえに縦方向のスリナデが施されている。器厚4mm前後で、器壁は薄い。（10）の胴部は長胴気味で、内面ハケ調整のうえ頸部まで縦方向のスリナデが施されている。（14）の底部は丸底である。

鉢（24）は凸状の丸底をもち、器高は低く浅鉢状である。（25）は平底で、内面ハケ調整のうえ縦方向のスリナデが施されている。

壺・甕とも外面はタタキ+ハケ+ナデ、内面はハケ調整やスリナデによって器面調整が行われている。内面ヘラケズリによる整形は、在地の土器には採用されていない。胎土・色調が異なりヘラケズリによる砂粒の移動が観察される土器片は総て搬入品等在地外の土器である。

甕類のなかでは、（9）の如く器厚の薄い土器も見られた。搬入品等の土器類に影響された「指向甕」である可能性も内包する。また、在地の技法では到達点のひとつであると考えられる。

その他、壺・甕の形態の特徴として①体部の球形化の進行②壺（2・3）などの器種の存在。また調整技法としては①外面タタキ消去の発展②内面頸部及び胴部下半における指ナデ調整の多用化、などが留意される。

土製支脚（22）は、支脚脚部の破片である。筒状中空ではないことから、角状把手をもち脚底部が緩やかな八字形をする土製支脚の一部に復元される。

鉄器（I1・2）は集石中から出土した。（I1）は柳葉鎌で、全長6.80cm鎌身長4.7cm全幅1.73cm全厚0.387cm茎残存長2.1cm茎厚0.49×0.4cm重量7.2g（処理前8.0g）を測る。鎌身は両鑄造で刃部刃先は三角形を呈し側刃は直線的である。関は角関で、茎断面は関寄りが隅丸方形、端部が方形である。頸部は持たない。柳葉形銅鎌に類似し、銅鎌模倣の鉄鎌と考えられる。銅鎌形鉄鎌又は類銅鎌鉄鎌と呼称される鎌の一群に属するものと考えられる。類銅鎌鉄鎌としては、茎断面は隅丸方形であるが、小形であり鎌身長3～5cm重さ10g前後で無頸の範疇であることから杉山分類第Ⅲ形式-第1型式-A類に該当しよう⁽²⁴⁾。（I2）は、圭頭鎌の範疇に含めることにする。なお、幅広の三角形の刃部の特徴などからは、三角形鎌に類似した要素も有している。残存長4.9cm鎌身長4.0cm全幅2.4cm全厚0.25～0.4cm重量9.4g（処理前14.6g）を測る。鎌身は両丸造で、茎の断面は方形を呈する。茎の大半を欠損する。銹の進行度が強く劣化している。

S T-2

部分検出の住居跡であるため、点数は少ない。遺物は埋土中から壺2・甕2・蓋1・鉢4・土製支脚3・砥石1と土器片が出土した。

甕(50・51)は体部上半に最大径をもつ甕類に復元され、(51)はやや長胴である。鉢(53)は内湾する体部を持ち、外面はナデられている。(57)は小形の鉢である。土製支脚(56)は中空で、外面にはタテハケが施されている。また(58)は小形器台状で、受部は中空である。丸底土器の固定等に利用されたと推測され、土製支脚の範疇に含めた。砥石(482)は砂岩製で両面使用である。

S T-3

遺物は埋土中から出土した。実測可能な土器片として甕1・鉢4・高杯1・土製支脚1が得られた。甕(60)は体部下半の破片で、外面はタタキ+ナデが、内面には上方向のナデが施されている。鉢(61)は外面太めのタタキの上にナデが施され、内面は荒いハケ調整が行われている。底部はやや凸状の丸底である。(63)は平底で体部は逆ハ字状である。土製支脚(66)は脚底部片で、胎土には小砂粒が含まれる。

S T-4

壺4・甕3・高杯1・器台1・鉢10の計19点と、鉄器4(手鎌1・鉄鏃2・鋤先鉄先1)・砥石1が出土した。遺物のなかで壺(69)と甕(71)は中央ピットから、鉢(84)は北西隅の柱穴内から、壺(73)甕(70・72)高杯(74)器台(75)鉢(76~82)は床面上で、他の土器類は埋土中からの出土である。なお(74・79・81)は住居跡の南西隅から、(70・72・73・77・78・80)は住居跡中央部で出土した。

壺(67)は複合口縁、(68)の口縁部は直立し端部がわずかに外反する。(69)の体部は張り底部は丸底である。(73)は、胎土から在地外の搬入品とみられる。甕(70)はやや長胴であるが底部は丸底状である。(71・72)の体部は中央部に最大径を有し、外面にはタタキ+スリナデが施されている。共に器面に煤が付着し、(72)の底部付近は加熱による器表剥離と赤変化が観察される。高杯(74)は内外面とも淡褐色で、内面には暗文風のヘラミガキが施されている。畿内からの搬入品とみられる。器台(75)は外面に丁寧なヘラミガキが施されている。S T-4では鉢類の出土点数が多い。鉢(76・77)の底部は平底で、(77)の底面には木葉痕が認められる。(80)の体部は内湾し、口縁端部は丸味を持つ。(85)は小型手づくねである。

鉄鏃(I3)は住居跡北辺の壁溝脇から、また(I4)は埋土中から出土した。(I3)は鏃茎の破片で、残存長4.6cm全幅0.7cm全厚0.4cm重量1.8g(処理前2.7g)を測る。(I4)は圭頭鏃で、刃部は正三角形を呈し鏃身は平造り状、関は無関で茎の断面は方形である。全長4.9cm刃部長2.7cm全幅1.6cm茎長2.2cm全厚0.2cm重量4.1g(処理前4.5g)を測る。鉄器(I5)は小形の方形板状の素材を両側から折り返し、片側を刃部としたもので刃先は欠損している。折返部の形状はU字型で、背部は4mm前後の装着用の隙間があるものの刃部側は閉じられている。折返部は長さ2.6cm幅0.2~0.75cmを測る。刃部長4.3cm幅2.5cm中央部の幅0.35cm重量10.3

g (処理前13.6 g) を測る。小形品であるが鉄製鋤先鋤先の類に含めることにした。用途としては先端が撥形の木製農工具に装着されていたと類推され、手撥 (手鋤) 状の使用が推測される。鉄製手鎌 (I 6) は残存長5.5cm刃部残存長3.2cm残存幅3.0cm全厚0.4cm重量16.0 g (処理前24.9 g) を測る。基部の破片であり刃部の大半を欠損する。折返の残存部は内側の高さ6mm厚さ0.25cmを測り、刃部に対する装着角度は10°を計測する。(I 5・6) は住居跡北東隅から検出され、I 5が床面上でまたI 6は壁溝から出土した。

その他の遺物として、砥石 (483) が中央ピットの周辺から出土している。

S T-5

埋土及び床面上から土器・土製品 (舟形・算盤玉) ・鉄器 (鉄鎌4・手鎌1・鋤先鋤先1・鉋1) ・石器 (敲石1) が出土した。土器類等は、壺2 甕10高杯9 坏7 鉢18器台1 甌1 土製支脚6 土製品2 の計56点が確認され、このうち床面上からは壺・甕・高杯・器台・土製支脚各1 鉢5 坏3 の計13点が出土した。在地外の搬入品は吉備甕 (87) のみで、S T-1 に比較してきわめて少量である。また、壺の個体数が少なく鉢類の数量が多いのが留意される。

壺 (86) は複合口縁で口縁端は内傾する。器形としては防長系で、西部瀬戸内地域の土器類に類似する。胎土は在地である。(88) は胴部中央部に最大径をもち、体部の輪郭は横位の卵形である。外面には細かいタタキとハケが施され、内面はハケの上を縦方向にスリナデする。胎土に赤色チャートの小砂粒を含む。甕 (90・91) は口縁部に擬凹線を持ち内面は横方向のナデが施される。混入品とみられ他の土器類に比べて古相である。甕底部片 (89・92~94) のなかで (89) は底面までタタキが施される。(92) は丸底である。甕 (96) は体部が張り外面のタタキは細かい。内面頸部下にハケとスリナデが施される。高杯 (100・104) は体部片、他は脚部片である。(100) の口縁は逆ハ字形に外反し、内外面にはハケが施される。(104) の体部は内湾し外面にはヘラミガキが施されている。(105~108・110) には透孔が認められ、(110) は4孔である。壺 (88) 甕 (89) は住居跡北西部で、また高杯 (104) は鉢 (129) と共に住居跡東側で出土した。

鉢類は、体部から口縁端部にかけて直線的に開く (98・99) や、椀状の (111~113)、底径の小さな (102・117)、小形の鉢 (114・116・119・129)、(121) など数種類にわたる。(119) は集石中から出土した。住居跡の床面からは (117・129) が、また北西隅の壁際で (114・116・121) が出土しており組成の一端をうかがうことができる。なお、椀形態で小皿状の器種は坏類に含め、鉢類と区分した。坏 (124) は鉢 (114・116・121) と共伴し、(126・130) は床面上で出土した。

土製支脚 (133~135・137~139) は脚部と角部片で、(138) が住居跡北西隅の壁際から出土した以外は主に埋土中から得られた資料である。(135) は筒状中空で分厚く、指頭圧痕が顕著である。(136) は、住居跡北東部の柱穴内から出土した。中空で内外面には細かいハケが施されている。用途としてはS T-1 の (58) と同様に丸底土器の固定用に供されたと推測され前述の土製支脚の範疇に含めることも可能である。

甌（103）は底部片で、底面に小孔が穿たれているが未貫通である。（140・141）は祭祀用の土製品で、埋土中から出土した。（140）は平面匙状の形態で側面は舟の舳先に類似する。一端に粘土を寄せ両側から指頭で摘むことにより舳先状の端部が作り出されている。なお底面は平坦である。部分破片であるが、舟形土製品であると考えられる。（141）はいわゆる算盤玉で中央部に孔を持つ。側面には不整形な山形波状の線刻が施されている。（484）は砂岩の自然礫を使用した敲石で側面に敲打痕が観察される。

鉄器は、鉄鎌・手鎌・鋤先鎌先・鉤が出土した（I7～13）。（I10・11）が集石中から、（I7）が住居跡南辺の東側区画溝脇で床面直上から出土した。手鎌（I13）は住居跡北西隅の柱穴上で柱穴跡の検出面から40cm上部で出土し、鋤先鎌先（I12）についても床面から30cm上部からの出土である。また他の鉄器については床面の遺構検出面上から13～18cm上部で出土した。鉄器類の出土状態としては、（I7）を除いて床面から遊離しており、集石の下部ないしは埋土下部からの出土である。出土鉄器類の総てがS T-5に伴う遺物であるのか判然とはしないが、S T-1例のごとく住居廃棄に伴う廃絶祭祀的な側面も考慮する必要があると考える。

床面上部及び集石中からは以下に述べる鉄器類の他、形状不明の鉄小片も出土している。

鉄鎌は4点出土した。（I7）は柳葉鎌で茎の一部を欠く。残存長9.8cm鎌身全長4.7cm刃部長2.9cm茎幅0.5cm厚さ0.37cm重量14.2g（処理前25.8g）を測る。刃部先端は不整形の三角形状、側面は直線的で斜行気味に茎に至る。鎌身は両丸造りで無関である。杉山分類第IV形式第2型式（無鎌身関）に該当すると考えられる^{（前記註24）}。（I8）は小形の圭頭鎌で、鎌身は平造り無関である。茎は細く断面は方形である。全長3.9cm全幅1.1cm全厚0.2cm茎幅0.24cm厚さ0.15cm重量0.9g（処理前1.1g）を測る。（I9）は鎌茎部分で、残存長4.5cm全幅0.61cm全厚0.4cm重量2.2g（処理前3.3g）を測る。（I10）は小形の圭頭鎌で残存長2.7cm鎌身長1.5cm全幅1.3cm全厚0.5cm重量2.4g（処理前2.7g）を測る。鎌身は両丸造りで無関である。（I11）は鉤の先端部片で、反り返しの先端と身が欠損している。裏透きである。残存長3.6cm先端幅0.73cm幅0.26cm重量2.3g（処理前3.7g）を測る。

小形の鋤先鎌先（I12）は、湾曲する刃部と平面U字形の折返を持ち刃部先端を欠損している。刃部長6.6cm全幅4.07cm先端厚0.3cmで、折返は長さ2.7cm幅1.75cm基部1.12cm・長さ3.45cm幅1.2cm厚さ0.24～0.3cm、刃部厚0.36～0.43cm、重量45.6g（処理前53.5g）を測る。手鎌（I13）は残存長6.0cm全幅3.14cm全厚0.51cm重量11.8g（処理前19.1g）を測り、折返厚0.2cm高さ0.9cm装着角度4°である。また、折返端部は内側にわずかに折り込まれており、端部と内側面との間隔は6mmを測る。折返から刃部にかけては直線的で、刃部先を欠損している。

S T-6

埋土及び床面上部等から壺23甕26高杯5鉢9坏1土製支脚11器台4甌1土玉2の計82点の土器類と鉄鎌1鉄片4石鎌1砥石2が得られた。出土点数の多い土器類は、遺構検出面から集石上部にかけての埋土中が36点、集石及び集石下部等から46点、うち集石中及び床面直上が13点(壺5甕2高杯2鉢1器台1土製支脚2)の出土である。なお、床面直上の遺物としては、壺(142・162・165)甕(184)土製支脚(207)が、集石中から高杯(196)器台(212)土玉(222)が出土している。

壺のなかで(142)は外方向に直立する口縁部を有し、球形状の胴部を持つ。(147)は体部が張り、外面には丁寧なヘラミガキが施されている。(149～153・158)は複合口縁で、(150)は大型である。なお、(149)の外面には丁寧なヘラミガキが施されている。(162)は、広口の口縁部を有し体部中央部に最大径を持つ。外面はタタキがハケ調整によって消され、加えてナデ調整が施されている。(165)は壺体部下半の破片で、体部の張る器形を呈し、平底である。また甕は、長胴タイプの形状を呈するものや(171・174・176など)、上胴部の張るタイプ(172など)がみられ、底部も平底と丸底状のものが混在している。(174)については上胴部だけの破片をみれば体部の張る甕の形状をしているが、下胴部はすぼまり気味に底部へと続く形状を示し、接合状況としては体部上半に最大径をもち若干長胴気味の形態をなす甕であることが明らかである。出土した甕類は総体的に長胴タイプの形態を示す器形の割合が高い。S T-6では、壺・甕の指数に格差はみられない。

高杯(196)は集石中からの出土で他は埋土中からの出土である。(196)の内外面には丁寧なヘラミガキが施され、透孔は二孔が残されている。短脚で裾部の開きが大きい。(197)の坏部は椀状である。鉢類は、丸底で小形椀状のタイプと(202～204)、平底でボウル状の形態のもの(235・236・241)、小形丸底状(242・244)、平底で体部が直線的に開くもの(240・245)など数種に分類できる器種が出土した。また、小形手づくねの土器(坏221)、鉢状の器形の底部に穿孔を持つ甌(170)、土製支脚(206～210・214～219)器台形の支脚(211～213・220)が出土している。土製支脚は角部の破片と脚部片で、筒状のものはみられない。また、器台形の支脚については中空タイプと(211・212・220)、盤状形(213)がみられた。その他の遺物として、無茎石鎌(485・二等辺三角形形状で頁岩製、重量4.2g)が埋土中から、砂岩製砥石(486・487)、土玉(222・223)が出土している。土玉(222)は算盤形の形状を呈し、また(223)については、側面に人面模写状の刺突線刻(目・鼻・口か)があり注目される。

鉄器・鉄片(I 14～18)は、(I 14)が刃部片で残存長3.5cm全幅0.8cm全厚0.2cm重量2.6gを測る。片刃で茎等を欠き旧形不明。鉄鎌以外の製品である可能性もある。(I 15)は鉄片で重量3.41g。(I 16)は片側を折返し、端部にさらに幅0.56cmの輪状鉄板を巻く。用途不明で未製品か。重量10.65g。(I 17)は残存長5.3cmで、鎌身及び茎の一部と推定されるが断片のため不明瞭。茎該当部分の断面は方形で幅0.64×0.92cm。重量7.70g。(I 18)は残存長5.8cm全厚0.4cm重量1.65g。断面円形で先端が尖る鉄釘状。錐等もしくは刺突具の可能性あり。

S T-7

壺7 甕10 高杯3 鉢14 土製支脚4 器台1 の計39点の土器類が出土した。このうち、床面上部の集石中では鉢(235・236・240・243)が、また床面直上では壺(226) 鉢(239)が出土し、他の土器類は遺構検出面から集石上部にかけての出土である。なお、東辺側のベット状遺構床面から鉄鎌2が、西辺側同遺構上から小鉄片1が出土している。西辺側の鉄片は細片のため形状不明である。

壺(226)は体部の膨らむ小形の壺で、外面はタタキの上をハケ及びナデ調整を加え、内面はハケ+ナデ調整が施されている。(225)は大きく外反する口縁を有し、(227)は複合口縁である。甕(229)は複合口縁で、吉備系の搬入土器である。(256)は砲弾型の器形を呈し、(259・261)は口縁部がく字形に外反する。高杯(230~232)は脚部の破片で、いずれも透孔を有する。短脚である。(231)の透孔は4孔である。器台(233)は受部を欠損するが、短い坏部をもつ器台に復元される。鉢(239)は、丸底でボウル形の器形を呈し、外面にはタタキ痕を残す。(235・236)は平底で体部は内湾する。(240)は平底で体部は直線気味に外反する。土製支脚(248~251)は脚部と角部の破片である。

鉄鎌(I 19)は住居跡南東隅のベット状遺構床面上から検出された。同じく(I 20)も、その東側で検出されている。(I 19)は圭頭鎌で、残存長4.3cm全幅1.8cm全厚0.3cm茎残存長1.1cm幅0.37cm厚さ0.24cm重量2.9g(処理前5.2g)を測る。刃部は三角形で鎌身は両丸造、関は斜関で茎の断面は方形である。(I 20)は鉄鎌茎の先端部片とみられるが、部分破片のため原型不明。残存長2.9cm茎毀損部の断面は方形で0.5×0.82cm重量3.2g(処理前5.6g)を測る。(I 19)とは別個体。

S T-8

埋土及び床面上部から壺15 甕17 高杯1 鉢21 器台2 甌2 土製支脚6 土玉1 の計65点の土器類と鉄鎌3 砥石1が出土した。床面上部(土坑・ピット・溝跡等遺構検出面上部)では壺3(263・264・277) 甕6(273・274・276・282・283・286) 高杯1(293) 鉢7(294~296・301・302・307・312) 土玉1(327)の計18点が出土している。遺物の出土状態としては、鉢(294・307) 甕(276) 土玉1(327)が住居跡南東コーナーのベット状遺構床面上から検出された他は、住居跡南部及び北部の床面上部から検出された。床面では特に遺物の集中地点はなく、土坑・ピット・溝跡等の遺構内から出土遺物はみられなかった。

広口壺(263・264)は頸部外面をハケ調整を施す。(264)は球形状の体部を持ち、内面には縦方向のスリナデが施されている。内面の口縁から頸部にかけては丁寧なハケ調整が行われている。(265)は複合口縁で口縁上部は内傾する。(266)は長頸壺で底面にはタタキ痕が残る。甕類は、長胴砲弾型の器形が多く(272~274)、外面タタキ+ナデ調整で、ハケ調整が行われていない器種もみられる(272・274)。(282)はく字型に外反する口縁を有し口縁内面は横方向のハケ調整が施されている。壺・甕とも外面ナデ調整内面縦方向のスリナデ調整が多用されている。高杯(293)は脚部から裾部にかけての破片で、外面には丁寧なヘラミガキが施され

ている。鉢類は21/65と出土点数も多い。総体的には体部が内湾するタイプよりも直線的に外反し端部が緩やかに内傾するタイプが多い。底部は平底と丸底が混在している。(311)は小形丸底状の器形を呈する。他に、土製支脚(320~325)・器台形の支脚(299・326)甌(291・292)が出土している。(291)は底部外面から、また(292)は底部内面からの穿孔が試みられているがいずれも未貫通である。土玉(327)は算盤形で両面穿孔の1孔が穿たれている。この土玉については、胎土に雲母・角閃石の細粒が含まれ在地外の搬入品であるとみなされる。石器については砥石(488)が出土している。6.6×7.2cmと小形で粒子の細かい砂岩が素材である。使用面は4面で、使用痕が顕著である。鉄製品の使用に際して頻繁に利用されたものと推測される。

鉄鏃は3点出土している(I 21~23)。(I 21)は柳葉鏃で鏃身は両丸造、関は斜関で茎を欠く。残存長6.0cm全幅2.6cm鏃身長3.7cm先端最大幅2.45cm幅0.4cm全厚0.2~0.4cm残存茎長0.8cm幅0.61cm厚さ0.5cm重量10.2g(処理前16.8g)を測る。住居跡南側で出土。(I 22)は(I 21)の東側に接して出土した。鏃茎の破片で残存長3.2cm全幅0.35cm全厚0.3cm重量1.2g(処理前1.5g)を測る。(I 21)の一部である可能性もある。(I 23)は住居跡北西部(A区)の埋土中から出土した。形状はS T-7(I 20)に類似し、鏃茎の基部先端とみなされる。残存長2.4cm全厚0.8cm全厚0.2cm重量0.8g(処理前0.8g)である。

S T-9

壺2甕8高杯2鉢4の16点が出土した。住居跡が部分検出であるため、出土点数は少ない。遺物は埋土中からの出土であり、遺構に伴う土器等はみられなかった。床面上部(遺構検出面)では、壺(335)甕(336~340)が出土した。壺(328)は口縁上部が内傾し、(335)は球形の胴部を持つが底部は平底である。内面は縦方向のスリナデ調整が行われている。甕(336)の底部は丸底状で、外面はタタキ+ナデ調整、内面ハケ+ナデ調整である。(337)は口縁端部に面取りを行う。(338)は長胴砲弾型で、外面は底部から胴部中位までタテハケが施されている。

S T-10

埋土中から壺5甕3高杯2鉢8坏1の19点が出土した。遺構内からの出土遺物はみられない。壺(344)は複合口縁で口縁上端と頸部下を欠く。外面は丁寧なハケ調整が施されている。(345)は広口壺の口縁部片で、内外面には丁寧なヘラミガキが施される。(346)は胴部が張り、丸底状の底部を持つ。甕(349)は小形で内面は頸部までハケ調整が、頸部下は縦方向のスリナデ調整が施されている。また外面はタタキをハケ調整によって消している。高杯(360・361)は脚部片で(360)の外面は丁寧なヘラミガキが施される。鉢(350・351)は口縁端部がわずかに外反し、丸底状の底部を持つ。また、(354)は尖り底状の底部を有する。(356)は器高が低く盤状である。坏(362)は小型手づくね土器である。

S T-11

床面及び埋土中から土器類及び石器が出土した。器種が明確な土器類は壺10甕13鉢5甌1の計29点で、このうち壺5(363・365・368~370)甕1(372)鉢1(386)は床面からの出土で

ある。なお、壺(363・365・368・369)甕(372)は北辺側ベット状遺構下段の床北部からま
とまって出土した。また、壺(370)は床南東隅から、鉢(386)石器(490)は住居跡南東
隅からの出土である。壺(363)は大型の複合口縁壺で、広口壺(369)と共伴出土した。広口
壺(365・368)甕(372)も同じ床北部からの出土で、(365)の口縁端には擬凹線を残す。ま
た甕(372)は外面タタキ+ナデ調整内面口縁から頸部までハケ調整、頸部下縦方向のスリナ
デ調整である。甕類の多くは底部片で、埋土中からの出土である(366)はく字型に外反する
口縁部に3本凹線による水平な端部を持つ甕である。チャートの細粒を含むなど胎土は在地産
であるが、器形は在地と異なり、吉備系等他地域の模倣系土器である可能性もある。

鉢類は(386)など、丸底状の底部を持ち体部が内湾するタイプが多い。甗(390)は逆八字
型に開く体部を持ち、底部には1孔が穿たれている。(391)は小型手づくね土器である。

石器は磨石(490)砥石(491)が出土している。砥石(491)は硬質砂岩製で3面が使用さ
れ、うち1面に顕著な使用痕が認められる。なお(489)は砂岩の自然礫であるが、一部に被
熱赤変化が認められる。

S T-12

鉢3(392~394)が、住居跡南辺の段状部から出土した。埋土中からの土器片は細片で、他に
器種の判明する土器類はみられなかった。また、前記鉢類を除いて、遺構内からの出土遺物は
得られなかった。鉢類は段状部上で東西方向に並列して検出された。出土状態としては西側か
ら(394)・(392)・(393)の順である。いずれも丸底状の底部に体部が内湾するタイプで、(392
・394)は外面に丹念なナデ調整が施され、(393)の外面はタタキ+スリナデ調整+ナデ調整で
ある。(393・394)の内面はナデ調整主体であるが、(392)の内面はハケ+ナデ調整である。

S T-13~15

S T-13からは出土土器等は得られなかった。また、S T-14では遺構検出面上部(包含層下
部)に土器片等が出土したが、遺構内では細片の土器片を除いて器種の明確な土器類及び他の
遺物等は出土しなかった。

S T-15では、関連遺構としてP 29・31が存在するが、ピット等出土遺物のなかで扱うこと
にした。

2. 壺棺墓

壺棺墓1からは壺(395・396)が出土した。先述したごとく(396)の底部を上にして蓋と
し、(395)の開口部と合口にした状態で埋められていた。(396)の胴部上半と(395)の頸部
上半は意図的に打ち欠かれており、土器転用棺である。(396)は胴部中程に最大径を持ち、外
面タタキ+ハケ+ナデ調整で、内面はハケ+スリナデ調整である。外面のハケ調整の範囲は広
い。(395)は外面タタキ+ハケ+スリナデ調整、内面ハケ+スリナデ調整である。外面のハケ
調整は幾度も重複し丁寧である。なお、合口付近には(396)の上胴部の破片が置かれていた。

壺棺墓2は壺(397)が使用されていた。胴部上半は粘土紐接合付近で打ち欠かれ、棺内に
落下していた破片を基に接合復元された。土器片が合口付近ないしは上部に置かれていた可能

性がある。外面は丁寧なハケ調整+スリナデ、内面ハケ+ナデ+指ナデ+指頭による押圧で、ハケ調整+ナデが多用されている。器形・調整等から棺専用土器として製作されたことも考慮される。

3. ピット

P 1・2・6・12・22・25・29・31・34・39・51・58・60・65・71・76・93・101・112・122・128・129・133・141・142・144・153・154・157から土器等が出土した(土器類総数54点)なかでも、P 25(土器類10点・鉄鏃1点)からの出土点数が多い。出土土器類の中で、P 2鉢(404)は内面ヘラケズリの鉢で搬入品である。また、P 71甕(433)は吉備系甕、P 133甕(445)が胎土及び調整技法等から在地外の搬入品と考えられる。

P 25からは、甕6鉢4の10点(410~419)と鉄鏃1点(I 24)が一括出土した。甕(410)はくの字形に外反する口縁と丸底状の底部を持ち、口縁部及び胴部下半から底部にかけての外面はタタキ+タテハケで、内面はハケ+スリナデ調整である。(411)は(410)に比べて外面のハケ調整の範囲が少ないが、底部付近では同様にタテハケを施す。内面はハケ+ナデ調整の他頸部付近では指頭による押圧を施す。(412)は口縁端部に面取りを施し、内面は縦方向のスリナデ調整を行う。鉢類(416~419)は丸底と平底が共伴し、(417)の外面はタタキ+ナデ調整であるが内面は縦方向のヘラミガキが施されている。(418)の外面はナデ調整と指ナデで、内面は細かいハケ調整である。(419)は突出した円盤状の小さな平底を持ち、外面は左上がりのタタキにナデ調整が行われ、内面はハケ+ナデ調整である。鉄鏃(I 24)は圭頭鏃で三角形の刃部を持ち、茎を欠く。残存長3.25cm鏃身長2.8cm全幅1.7cm全厚0.32cm茎残存長0.3cm幅0.3×0.52cm重量2.58gを測る。鏃身は両丸造で茎の断面は方形である。

S T-15に関連するとみられるP 29・31からは甕1(P 29・420)壺3(P 31・421~423)が出土している。(420)は丸底の底部片で、外面は底部近くまでタタキを残す。(421~423)は広口壺口縁部片である。(421)の口縁端部は下方に拡張し、外面には波状文を施文する。

P 65はS X-1と重複するピットで、P 58・60・71・76・93はS X-1の周辺から検出された遺構である。P 71では、吉備甕(433)に在地甕(435)が共伴し、P 58からは古相の広口壺(428)が出土している。また、P 93では坏部口縁外面に波状文を施文した高杯(438)が得られた。

P 51・101・112・122・128・129・133・153・154はS T-6南側のピット群に位置し、またP 141・142・144は調査区東端のピット群に該当する。その他P 157はS T-1北側のピットである。P 51甕(426)は、くの字形に外反する口縁部を有し頸部内面はハケ調整の後、指頭による押圧を加えている。P 101からは坏(439)と広口壺(440)が出土し、P 128では長胴砲弾型の甕(427)と磨石(492)が出土した。なお(492)には煤状の付着物がみられ、一部被熱赤変色していた。またP 133からは内面に縦方向のスリナデ調整を持つ甕(445)が、P 153からは鉢(452・453)が出土している。

東方のピット群では、P 141から鉢(446・447)壺(448)が、P 142から頸部が直立しながら立ち上がり口縁部が外反する壺(449)が、P 144から壺(450・451)が出土した。

4. 溝跡・土坑

溝跡 S D-3・不整形土坑 S X-1・2 から土器類等が出土している。器形が明確で器種判別が可能な資料を抽出し、遺構単位に出土遺物の概要を記すことにする。

S D-3

壺 2 鉢 2 甕 1 が出土した。壺 (398・399) は口縁部片、鉢 (400・401) は体部上半と底部片である。また甕 (402) は底部片である。壺 (398) は口縁端部に擬凹線を残し、(399) の内外面はハケ+ナデ調整である。鉢 (400) は逆ハの字形の体部を有し内外面には丁寧なヘラミガキが施されている。また口縁部は横ナデ調整である。甕 (402) は外面タタキ、内面縦方向のスリナデ調整である。

S X-1

舟形状の不整形土坑 S X-1 は P 65 と重複し、埋土中から土器細片が多数出土した。器形の判明したものは壺 2 (457・458) 甕 3 (459~461) 高杯 1 (462) 鉢 2 (463・464) の 8 点である。壺 (457) は口唇部に波状文が施文された広口壺、(458) は口縁端部が上方に伸びる複合口縁壺である。甕 (459) はくの字形に外反する口縁部を持ち、外面はタタキ+ナデ調整、内面ハケ+縦方向のスリナデ調整である。(460) は長胴形で内外面ともハケ+ナデ調整である。(462) は高杯脚部片で外面はヘラミガキが施される。鉢 (463) の口縁端部は面取りされ、外面タタキ+スリナデ調整、内面はハケ+底部付近を縦方向にスリナデ調整を行う。(464) の体部は内湾し、外面ナデ調整、内面ハケ調整である。

S X-2

不整形土坑 S X-2 からは、甕 1 (465) 鉢 1 (466) が得られた。(465・466) は底部片で、鉢 (466) は円盤状の小さな平底を持つ。

5. その他の遺物

包含層及び試掘調査区から土器及び石器、鉄器等が出土している。土器類 (467~478) ・砥石 (493・494) は包含層から、(479~481) ・鉤 (I 25) は試掘調査区 T-3 からの出土遺物である。(469) は複合口縁の吉備甕で搬入品である。調査区南部で S T-1 から S T-5 にかけての包含層から出土した。内面頸部下をヘラケズリし、さらに指ナデを施している。外面の胴部から口縁部にかけては煤が付着している。(471・472) は土製支脚の角部片で指頭圧痕が顕著である。甗 (474) は尖り底状の底部に 1 孔を穿ち、外面タタキ+ナデ調整、内面は縦方向のスリナデと底面に指ナデが施されている。壺 (475) は口縁端部を下方に拡張し半載竹管による C 形文が二列、口縁外面に施文されている。内外面は細かいハケ調整である。高杯 (478) の体部は内湾し、内外面は丁寧なナデ調整である。(479~481・I 25) は T-3 からで、住居跡等の遺構に伴う遺物である可能性が高い。壺 (481) は胴部上半に最大径を持ち若干長胴である。外面タタキ+ハケ+ナデ調整、内面はハケ+強いスリナデである。鉤 (I 25) は完形で、全長 12.0cm 全幅 0.9cm 全厚 0.1~0.3cm 刃部長 2.7cm 幅 1.1cm 茎全長 8.8cm 茎幅 0.6cm 重量 10.9g (処理前 14.5g) を測る。刃部は笹葉状で鑄を持ち断面 A 形、裏透きである。茎の断面は方形である。

第Ⅵ章 まとめ

県立高知農業高校体育館新館建設工事に伴う緊急発掘調査として実施した東崎遺跡の今次調査において、竪穴住居跡15棟・溝跡5条・土坑2基・壺棺墓2基・柱穴及びピットが検出され、従来「農業高校遺跡」として周知されていた遺跡の実態が明らかにされると共に、新たに長岡台地の縁辺部に立地する弥生時代後期後半～古墳時代初頭の拠点集落跡の様相が知見されることになった。また、多量の土器類・石器に加えて鉄鎌・手鎌・鋤先鋤先・鉋等の鉄器が出土し、当該期の良好な資料を得ることができた。

東崎遺跡は、国道195号線及びJR土讃線を挟んで北側に位置する五軒屋敷遺跡と一連の広範囲な集落跡であると推察される。長岡台地縁辺部では弥生時代後期以降に遺跡数が激増し、土佐山田町・ひびのき遺跡等拠点集落跡と周辺諸遺跡が形成されている。私見ではあるが、この遺跡数増加現象と各遺跡の消長、拠点集落跡の形成など諸遺跡の動向は、長岡台地（高知平野北部）における新たな地域圏の形成と政治集団の成立を予見させるものがあると考えている。弥生時代から古墳時代への胎動のなかで、本遺跡は高知平野北部における過渡期の拠点集落跡であり、古墳時代社会への移行を探るうえで重要な遺跡である。

本報告書では、東崎遺跡と長岡台地縁辺部における諸遺跡との関連などについて十分に咀嚼することはできなかったが、さらに検討作業を進めたいと考える。また土器類を始め出土遺物の分析等についても詳細な検討を行う必要があると考える。

残された課題は多いが、確認された主要遺構・遺物についてふれ、調査成果の概要をまとめることにしたい。

1. 遺構

竪穴住居跡

竪穴住居跡は、S T-1～15の15棟が検出された。このうち一般住居跡と異なり且つ占有面積も小さなS T-13・14については、方形の竪穴状遺構ではあるが、付属棟としての可能性も考慮し、住居跡の範疇に含めて扱うことにした。また、S T-15に関しては、溝跡及びピットの検出状況から住居跡の痕跡を推定し、検出範囲を居住空間として位置づけた。

住居跡の形成範囲は調査区東側を除いて面的な広がりを見せ、集落跡の居住範囲として継続的に利用されていたことが明らかである。昭和58年度の五軒屋敷地区の調査では、検出された住居跡S T-1～3の住居間距離は6～28m前後であるのに対し、今回の調査区では重複又は近接した間隔で検出され、住居跡の集合状況を呈していた。また、平成2年度の東崎遺跡の調査においても、西側隣接地から10棟を数える住居跡が検出され、同様に重複又は近接した住居跡の検出状況が確認されている。住居跡の検出状況からみれば、農業高校体育館建設地及び西側隣接地は集落跡の中心域に、五軒屋敷地区は若干離れた周辺区域に該当することが推察される。なお、西側隣接地では東崎遺跡存続期の方形周溝墓1基が検出されている。方形周溝墓等に代

表される墓域が新たに確認されたことにより、東崎遺跡の集落構成を検討するうえでは、居住地・墓域・集落外周域などの要素に加えて、高床住居・建物跡群などの有無など（一般集落構成員以外の居住域・墓域等）も含めて総合的に検討していくことが必要であると考えられる。

検出された竪穴住居跡のうち7棟に重複関係が認められた。ST-7～12・14の各棟で、ST-7・12・14、ST-8～10、ST-11・12に切合いがみられる。先後関係としては、ST-14→ST-7→ST-12、ST-8・10→ST-9、ST-11→ST-12、ST-15→ST-7及びST-15→ST-5・13の順に捉えられる。遺構の先後関係としては前述のとおりであるが、住居跡の重複関係が遺物等の内容まで端的に示されているわけではない。各住居跡からの出土土器類には明瞭な型式差がなく、ヒビノキⅡ式からヒビノキⅢ式併行期の範疇におさまる物が主体である。ただ、土器類の形態・組成などの諸様相のなかに古相から新相への緩やかな変化が看取され、ST-8からST-12にかけての漸進的な移行をうかがうことができる。竪穴住居跡の先後関係と土器様相からみれば、ST-8→ST-10→ST-9→ST-11→ST-7→ST-12の変遷が考えられる。

次に、竪穴住居跡の構造についてであるが、平面形態としては方形（ST-1・4～6・11・13・14）隅丸方形（ST-2・3・7・8・12）円形又は楕円状（ST-10・15）多角形（ST-9）のプランが認められ、ST-1・2・7～9・11の計6棟にはベット状遺構を持つ。ベット状遺構は全周するもの（ST-7・9）2側面にわたるもの（ST-2・8・11）3側面にわたるもの（ST-1）などがみられ一様ではない。また、ST-4・5・8では屋内区分施設（柱間溝・区画溝など）の存在が確認されている。ST-5の屋内区分施設では、住居跡の東辺及び西辺に平行する柱間溝など東辺及び西辺に側した区分がみられ、ベット状遺構と同様な機能を有した施設が存在していたことが推考される⁸⁹。その他、ST-4・5の南辺側では、壁と直交する区画溝及び方形又は類五角形状の土坑が検出されている。この区画溝と土坑による屋内区分施設は⁹⁰、高知県における該当期の竪穴住居跡例のなかでは初例であり、注目される。遺構の性格としては住居跡の出入口部に関連した施設であると考えられ、中央部の土坑は梯子止の溝である可能性もある。

住居跡の支柱穴としては、総じて4本柱構成が多いが（ST-1・5・7・8・10・11）、2本柱（ST-4）や4本柱以外の構成（ST-13・15）もみられる（ST-2・3・9・12・14は不明）。なお、ST-6及びST-7の床面南東墨では支柱穴の痕跡が確認されなかった。柱穴以外に木製礎板や台石の利用又は直接床面に柱が建てられたことも考慮される。

住居跡の主軸方位であるが、ST-2（N54°E）を除いてST-1・3～5・13が磁北方向又は磁北から4°～9°東の方向でほぼ磁北方向に、ST-6・7がN13°～18°Eの範囲に、ST-11がN21°Eの方向である。また、五軒屋敷地区で検出されている方形竪穴住居跡ST-2・3の長軸方位はほぼ磁北方向である。さらに、東崎遺跡の2次調査（東崎遺跡Ⅱ・西側隣接地）では⁹¹、方形竪穴住居跡ST-1～3・5の長軸方位はN2°～9°で、今回の調査区における検出例に類似する。一律ではないが、東崎遺跡の集落跡の場合、竪穴住居跡のうち特に方形の竪穴

住居では磁北方向（ $N0^{\circ} \sim 9^{\circ} E$ 範囲）が指向されたことがうかがわれる。なかでも、S T-1・(3)・4・5・(12)・13の各住居跡については、建物跡の方向性から時期的に並行して存続していた可能性もたれる。

東崎遺跡における方形竪穴住居跡の建物配置に関しては、上記の如く一定方向への指向性がうかがわれる。各住居跡単位からみれば、必ずしも古代の集落跡にみられるように整然とはしていないが、隣接する同時期住居跡を意識した建物配置が行われていたことが推察される。この住居配置の規範について検証する手掛りは現時点では得られてはいない。このため推論ではあるが次の諸点を掲げたうえ、今後の資料の増加と蓄積を待って再検討を図りたいと考える。

①円形住居跡で構成される集落跡の場合でも、個々人が自由に住居地（竪穴住居跡の位置）を選択できたわけではなく居住域の単位は規制（集落及び集団規制）を受けている。各住居跡の占有地は集落空間のなかで定められ、溝跡・杭列・土塁・周堤などの区画によって竪穴住居跡等における居住者の生活空間が位置づけられる。

②単位住居跡（各住居跡・労働単位とする）及び単位住居跡群（血縁者等の紐帯をもつグループで住居跡数棟・生産単位とする）における建物配置は類似した方向性を共有する。

③②を踏まえて、方形又は隅丸方形の住居跡が採用された段階では、単位住居跡群の建物跡には方向の共通性がある。

④総体として、一集落跡の方形建物配置には一定方向への指向性がみられることになる。

⑤前項に関連して、建物方位の起因としては、日照・風通し・排水性などの居住適正や通行路・溝（水路・排水路）などの既存施設による立地制約等の環境要因に加えて、各時期段階における集落の率先者の居住形態や居住区分（高床住居・高床倉庫等の建物配置、居住域の区分など）、集落全体の社会規制や祭礼儀式、単位住居跡群の構成内容などの社会的要因を反映したものであることが推考される。

⑥①～⑤の諸点から、方形竪穴住居跡の長軸方位と配置は、居住者達が任意に選択したのではなく、集落におけるすぐれて社会規制を受けたものであることを想定したい。

⑦また、方形竪穴住居跡の配置と方向性は、各時期段階における東崎遺跡の特性を表出するものであり、集落論として考察するうえで重要な要素となることを指摘しておきたい。

竪穴住居跡について最後に、S T-15について触れておきたい。当住居跡は遺構検出状況から建物跡の存在を復元したもので、直接竪穴住居跡の存在を示す遺構は検出されていない。住居跡の壁面が既に削平を受け、床面より下部の溝跡・ピット・土坑等が遺存した場合も考慮されるが、検出面では竪穴住居跡につながる壁面の残存部を確認することはできなかった。他に考慮されることは、竪穴以外の構造の建物跡として把握できないか、ということである。この場合、下面は竪穴住居跡に準じて溝跡・土坑・ピット等が形成されるが、上部構造は高床の建物跡であると推測される。主柱穴としては、2本柱によるなど4本柱以外の構造で、北側出入口部を（外側に張り出した溝跡の形状と柱穴列及びS T-7により判然とはしないが北側の東西方向の2個の柱穴列から復元）、南側に張出部（露台など）をもつ構造で（南側のハの字形の柱穴列から復元。占有空間には後にS T-13が形成されている。）、規模・構造等からきわめて特異な建物跡であるということになる。今後の検討素材である。

住居内集石

S T-1・5～8の埋土中から、自然礫による集石が検出されている。この集石は、竪穴住居跡の床面まで達することはなく、いずれも床面から6～20cm上部にとどまり、土混じりの集石である。礫は、地山の灰褐色礫層（基盤層）に含まれる砂岩・珪岩・チャート礫等で、竪穴住居跡等の掘削時に排出される自然礫である。集石の分量・集中範囲等については各住居跡で相違がある。S T-1ではベット状遺構を除く床面凹部に集中し、S T-5では住居跡中央部に、S T-6では三ヶ所の集中部分が、またS T-7では住居跡南辺部に集中し、S T-8では散在していた。集石は自然礫ばかりではなく、数量は少ないが砥石・磨石・敲打痕のある石に加えて表面が被熱赤変化した自然礫（砂岩・珪岩等）が含まれ、集石中では土器片及び鉄器類が伴出した。

集石については、①居住者達の身近にあった生活素材（石器類・被熱赤変化した自然礫等）②壁・周堤・土塁等の竪穴住居周縁に存在していた積土に含まれていたもの（他の自然礫等）。などが類推され、また集石行為については①住居跡廃絶に伴う祭祀行為②窪地の平坦化と不用品の廃棄、等が推察される。集石は、明らかに意図的に投棄されたものであり廃屋の窪地に自然堆積したものではない。集石には土器片・鉄器類が含まれており、自然礫・石器・埋土と共に埋められていた。集石からの出土遺物は、床面からの伴出遺物（竪穴住居跡に共伴）と異なる側面を有することが考えられ、住居跡廃絶時に伴う遺物であるとみられる。上記に関連して、住居跡廃絶に伴う祭祀行為が、建物解体の際に行われていたことが考えられる。具体的には、住居跡廃絶にあたって土器の使用（煮沸行為による共同飲食もしくは供献）と破碎・鉄器の供献を伴う祭礼儀式が行われた可能性が指摘される。なお、集石中から出土した土器片・鉄器類の総てを居住者が保有していたものであるかは疑義の生ずるところであり、他の居住者等から集約されたことも推測される。おそらく集落の共同作業として建物の解体等が行われ、祭礼儀式も集落内の共同祭儀であった可能性が高い。

集石内の出土遺物として、S T-1では銅鏃形鉄鏃（類銅鏃鉄鏃）等が出土し搬入土器がみられた。またS T-5では鉄器類が多かった。私見ではあるが、住居跡廃絶儀礼には集落内における前居住者の社会的性格が投影されていると考えられ、S T-1では外地との交易（居住者が外来者であったことも想定される。）に積極的に関与した人物が、またS T-5では特に鉄製品の搬入・使用にかかわった居住者像が想定される。

溝跡・ピット群

溝跡はS T-15の南側及び調査区東側のピット群周辺、調査区東端から検出された（S D-1～5）。いずれも不整形で、検出範囲も狭く、区画溝や水路等の溝跡はみられなかった。なお、S T-15周辺の弧状の溝跡は、S T-15の構成溝として扱った。

ピット群は、ピットの集中検出範囲としてS T-15周辺と調査区東側で検出された。このうち調査区東側のピット群からは、重複する小規模な掘立柱建物跡（1間×1間・1間×2間等）、高床建物跡等の存在が看取されるが、建物跡を個別に抽出することはできなかった。

壺棺墓・土坑

壺棺墓 1・2 は、調査区東側で先述のピット群の周辺で検出された。壺棺墓 1 の西側に隣接して壺棺墓 2 が検出されたが、両者の先後関係は不明である。また、検出位置周辺にみられるピット群との関係についても明確ではない。ただ、壺棺墓の検出場所では、前後する時期の竪穴住居跡等の遺構は形成されておらず、壺棺墓の北側に接してピット群から復元される建物跡（高床建物など）が存在していたことになり、関連性も考慮される。壺棺は二基とも乳幼児棺であって成人墓ではない。埋納された乳幼児の親族の居住域を、近辺に求めることができるとすれば、周辺で検出された竪穴住居跡等に帰すことも類推される。

土坑としては、調査区から 2 基の不整形土坑が検出されている（SX-1・2）。SX-1 は平面舟底状の土坑で、埋土からは多量の土器片が出土している。遺構北側及び南側のピットにより、建物内の掘り込み遺構であることも想定されるが判然とはしない。遺構の性格については不明である。

2. 遺物

土器

実測可能及び個体識別ができる資料 481 点が出土した。このうち、住居跡内の床面上及び埋土中からは総数 394 点の土器類が得られた。内訳は、壺 81・甕 114・高杯 28・器台 9（脚台 7 含む）・鉢 108・坏（小型手づくね含む）10・土製支脚 32・甌 5・土製円板 1・蓋 1・土玉 5 である。また、ピットから 54 点（壺 12・甕 20・鉢 15・高杯 2・土製支脚 3・蓋 1・坏 1）、溝跡・土坑から 15 点（壺 4・甕 5・高杯 1・鉢 5）、包含層等から 15 点（壺 4・甕 4・高杯 1・鉢 3・甌 1・土製支脚 2）、壺棺 3 点の資料が得られた。土器類の器種別出土点数としては、壺 104（壺棺 3 含む）・甕 143・高杯 32・鉢 131・器台 9・坏 11・土製支脚 37・甌 6・蓋 2・土製円板 1・土玉 5 である。

出土点数は少ないが、在地の搬入土器類が総数 18 点確認されている。器種としては壺 1・甕 13・高杯 1・鉢 2・土玉 1 で、壺（73）高杯（74）が ST-4 から、鉢（37・404）が ST-1・P2 から、土玉（327）が ST-8 から検出されている。高杯（74）は畿内系で大和の可能性がある。甕は、河内 2（36・47）吉備 4（87・229・433・469）播磨 1（16）四国東部 1（8）不明 5（39～41・45・46）で、ST-1 から（8・16・36・39～41・45～47）が出土し、吉備甕は ST-5・7、P71、包含層から出土した。特に、ST-1 からの搬入土器の出土数が注目される。

出土土器類について

前記土器類の所属時期について検討を試みることにしたい。なお、東崎遺跡では今回の調査区と共に西側隣接地でも住居跡等の遺構内から良好な資料が出土している。今後の整理作業の進捗と併せて、東崎遺跡における土器様相について詳細な検討を図りたいと考える。

五軒屋敷地区の調査では、竪穴住居跡 ST 1～3 が検出されヒビノキⅡ～Ⅲ式併行期の良好な一括資料が出土している²⁹。調査では、円形住居跡 ST 1 からヒビノキⅡ式土器が、また方

形住居跡 S T 2 からヒビノキⅢ式土器が出土し、該当期の住居跡として位置づけられている。床面出土遺物としては、S T 1 が鉢 (57・69・72・73) 圭頭鎌 (2) で、S T 2 では壺 (96・104・119・125・126) 甕 (130・131・133・135・141・149・151・156・161・163) 甗 (168) 鉢 (172・173・176・178・181・182・195・199・200・203・205) 高杯 (226) 土製支脚 (229～231・233・234) である²⁹⁾。土器分類としては、S T 1 で壺 5 類 (A～E 類) 甕 4 類 (A～D 類) 鉢 6 類 (A～F 類) 土製支脚 3 類 (A～C 類) に、S T 2 で壺 3 類 甕 5 類 高杯 3 類 鉢 8 類 土製支脚 5 類に分類されている。なお、報告書では S T 1 を庄内式の古段階に、また S T 2 を庄内式甕 (167) の出土と小形丸底壺の祖形と考えられた小型の鉢 (209～211) の存在から、庄内式の新段階に並行する時期に該当することが論じられている³⁰⁾。

ヒビノキ式土器は、土佐山田町百石町二丁目に所在するヒビノキ遺跡から出土した土器で、高知県下の弥生後期土器編年の基準資料として使用され、弥生後期中葉のものをヒビノキⅠ式、後期末をヒビノキⅡ式、古墳時代初頭をヒビノキⅢ式と称されている³¹⁾。なお、ヒビノキ遺跡の調査では、ヒビノキⅢ式を庄内式併行期の土器とし、土師器として扱われている³²⁾。ヒビノキⅢ式の基準資料は、A-I・Ⅱ住居址床面出土の土器群で、二重口縁壺・器台 (脚部四透孔) 胴部球形丸底の甕・体部内湾丸底及び平底の鉢・脚部裾径の短い高杯などが出土している。また、ヒビノキⅠ式については B-I 住居跡、ヒビノキⅡ式は B-II・D-I 住居跡出土土器が基準となっている³³⁾。

近年の調査成果では、ヒビノキ遺跡に近接のヒビノキサウジ遺跡で、ベット状遺構を持つ隅丸長方形の住居跡 S T-8 からヒビノキⅡ式土器の良好な一括資料が、また春野町西分に所在の西分増井遺跡群で方形竪穴住居跡 S T 12 からヒビノキⅡ式が、S T 5・8 からヒビノキⅢ式併行期の良好な資料が得られ、同遺跡の調査ではヒビノキⅡ式を先後 2 時期に分け、ヒビノキⅢ式を古式土師器Ⅰ期に、後続する馬場末式を同Ⅱ期として捉える試論が提唱されている³⁴⁾。さらに高知県下の弥生後期土器を後期 1～7 に細分した出原編年では、後期 6 にヒビノキⅡ式土器の前半を、後期 7 にヒビノキⅡ式土器の後半をあて、ヒビノキⅢ式を古式土師器Ⅰ期に置く編年案が示されている³⁵⁾。加えて、四国四県を含めた瀬戸内地域の弥生後期土器編年について活発な討議が行われるなど³⁶⁾、各地域を結ぶ研究活動の成果が蓄積されつつある。

高知県下の弥生後期土器編年試案では³⁷⁾、ヒビノキⅡ式前半 (後期 6) にヒビノキサウジ遺跡 S T 8 を、ヒビノキⅡ式後半 (後期 7) に西分増井遺跡群 S T 12 を当て、ヒビノキⅢ式については古式土師器Ⅰ期として五軒屋敷地区 S T 2・ヒビノキ遺跡 A 住居跡を当てられている。先の編年試案に、五軒屋敷地区 S T 1・2 及びヒビノキ遺跡出土資料を加えて今回の東崎遺跡における出土資料について比較検討してみることにする。

東崎遺跡の土器類のなかで、基準になるのは住居跡床面及び床面上部・ピット群・土坑からの出土遺物で、他は参考資料として扱うことにする。なお、S T-1・5～7 における集石中からの出土遺物については、検討資料として扱うことにする。

遺構の項でふれたごとく、遺物が出土した住居跡には重複関係が認められるものがあり、① S T-15→S T-7 ② S T-14→S T-7→S T-12 ③ S T-8・10→S T-9 ④ S T-15→S T-5 ⑤ S T-11→S T-12の順に先後関係が捉えられる。また、S T-8→S T-10→S T-9→S T-11→S T-7→S T-12の移行が推察される。

各住居跡及びピットからの出土土器類についてみれば、基準及び検討資料として掲げられるのは次のとおりである。

- S T-15 P 29・甕 (420) P 31・壺 (421~423)
- S T-8 壺 (263・264・277) 甕 (273・274・276・282・283・286) 高杯 (293)
鉢 (294~296・301・302・307・312) 土玉 1 (327)
- S T-6 壺 (142・162・165) 甕 (184) 土製支脚 (207)
高杯 (196) 器台 (212) 土玉 (222)・・・集石中
- S T-10 壺 (344~346) 甕 (349) 高杯 (360・361) 鉢 (350・351・354)
坏 (362)
- S T-9 壺 (335) 甕 (336~340)
- P-25 甕 (410~415) 鉢 (416~419)
- P-71 甕 (433・435)
- S T-11 壺 (363・365・368~370) 甕 (372) 鉢 (386)
- S T-7 壺 (226) 鉢 (239)
鉢 (235・236・240・240)・・・集石中
- S T-5 壺 (88) 甕 (89) 高杯 (104) 鉢 (114・116・117・121・129)
坏 (124・126 130) 土製支脚 (136・138)
甕 (87) 鉢 (119)・・・集石中
- S T-1 壺 (1~3・5・6・11・38・42・43)
甕 (4・7・9・10・12・13・14・17・31・33・44)
高杯 (18~20・28) 鉢 (23~27・29・30) 土製支脚 (22) (すべて集石中)
甕 (8・16・36・39~41・45~47) 鉢 (37)・・・集石中
- S T-4 壺 (69・73) と甕 (70~72) 高杯 (74) 鉢 (84) 器台 (75) 鉢 (76~82)
- S T-12 鉢 (392~394)

上記のとおり、埋土及び集石中からの出土資料に比べて床面及び床面直上・住居内遺構等からの資料は少ない。またピットからの出土遺物についても、遺構の重複関係と土器類の先後関係をもつ明確な資料は得られていない。概観すれば、遺構の切り合いに応じた土器型式の明瞭な差異は個別には見出し難いものの、S T-15からS T-12にかけての土器様相には漸進的な移行がみられ、ヒビノキⅡ式からヒビノキⅢ式にかけての変遷をうかがうことができる。

段階的に整理すれば、以下のとおりである。

I 段階・ヒビノキⅡ式前半(後6期)から同後半(後7期)にかけて S T-15・8・6

Ⅱ段階・ヒビノキⅡ式後半（後7期） S T-10・9・P25・P71・S T-11

Ⅲ段階・ヒビノキⅡ式後半（後7期）からヒビノキⅢ式（古相）にかけて S T-7・5

Ⅳ段階・ヒビノキⅢ式（古相） S T-1・4

Ⅴ段階・ヒビノキⅢ式 S T-12

各段階は、土器類の組成・様相から区分したもので、土器型式自体の変遷を示すものではない。従って前後の各段階には重複部分が含まれている。また、提示した段階によって生じるヒビノキⅡ式後半期とヒビノキⅢ式の細別については、土器型式として成立するのか否か今後の検討課題である。

I段階については、ヒビノキⅡ式前半（後6期）にみられたような長胴砲弾型の甕類と内面縦方向のスリナデを多用した甕類が主体である。甕胴部の最大径は上胴部におかれる。外面はタタキの上にタテハケを施すものも含まれるが、ハケ調整の範囲が減少するなどヒビノキⅡ式後半（後7期）の様相を示す。

Ⅱ段階では、甕類は長胴砲弾型も含まれるが、最大径を胴部中位にもつ甕類が増加する。外面のハケ調整の範囲は胴部下半にとどまり減少する。壺は複合口縁が増加する。S T-10鉢（350・351）は五軒屋敷地区S T 1鉢（72・73）に類似するが新相である。吉備甕などが搬入される。

Ⅲ段階は、坏類の増加や鉢類の器種構成が豊富になり、器台が増える。壺類は胴部横卵形の器形と細かいタタキを持つものが多くなる。甕類は長胴形もみられるが、最大径が胴部中位で横に張るタイプが増加する。タタキの原体幅が細くなり、内面頸部付近に指頭圧痕を加える。高杯は裾の広がった低脚類が、鉢類は小型の椀状が増える。甕・鉢の形態、S T-7出土の吉備甕（229）の存在は、ヒビノキⅢ式に位置づけられている五軒屋敷地区S T 2出土資料に類似する。

Ⅳ段階では、卵形の器形を持つ甕類が主体で、タタキの上をスリナデする。スリナデの範囲が広がる。壺類には広口壺・複合口縁壺がみられる。搬入品が増加している。小型器台がみられるようになるが、セットになる小型丸底壺の実相は現段階では不明。

Ⅴ段階は、資料は断片的。鉢類は椀状で外面スリナデ。小型のものは椀状。

上記段階のなかで、Ⅲ段階を過渡期にしてⅠ・Ⅱ段階とⅣ・Ⅴ段階では様相の相違が認められる。検出遺構である住居跡の内容としては、Ⅰ・Ⅱ段階が円形・隅丸方形・方形の混在期であるのに対して、Ⅲ段階以降は方形住居跡であり、S T-5を境に類似した長軸方向をもつ住居跡群が構成されている。土器様相の相違は、住居跡の形成内容とも重なっており、Ⅲ段階が画期になっている可能性もたれる。

なお、Ⅰ～Ⅴ段階の位置付けとしては、庄内式から布留式への移行期のなかでさらに細かい見方を援用することとし、Ⅰ・Ⅱ段階が纏向2式から3式にかけて、Ⅲ段階を布留0式に、Ⅳ・Ⅴ段階を布留1（纏向4式）併行期に該当するものであると考えることにしたい⁸⁸。

鉄器

住居跡S T-1・4～8、ピットP25から鉄器が出土した。また、確認調査区T-3から鉈が出土している。内容は以下のとおりである。

S T-1	柳葉鍬（銅鍬形鉄鍬・類銅鍬鉄鍬）・圭頭鍬	（I1・2）
S T-4	圭頭鍬・鋤先鍬先・手鎌・鉄鍬茎片	（I3～6）
S T-5	柳葉鍬・圭頭鍬2・鉄鍬茎片・鋤先鍬先・手鎌・鉈	（I7～13）
S T-6	鉄鍬片2・不明鉄製品2・鉄片1	（I14～18）
S T-7	圭頭鍬・鉄鍬茎片	（I19・20）
S T-8	柳葉鍬・圭頭鍬・鉄鍬茎片	（I21～23）
P25	圭頭鍬	（I24）
T-3	鉈	（I25）

S T-2・3・9～15を除いて鉄器類の出土した住居跡が多い。なお、S T-2・3・9～12は部分検出であり、未調査区において出土する可能性を有する。鉄器の種類としては出土住居跡総てに鉄鍬類が含まれていることが留意される。また、S T-4・5では鋤先鍬先・手鎌等の農工具が含まれていた。鉄器類についてはS T-1のごとく集石中から出土した例もあるが、床面直上・一部集石中・埋土中からの出土が大半で、S T-1を除いて本来は出土住居跡に帰属していたものであると考えられる。なお、S T-1等のごとく集石中からの出土例に関しては、先述したように住居廃絶に伴う祭祀行為の存在など、不用品の廃棄以外の性格を考慮することも必要であると考えられる。

鉄鍬の形態については、S T-4（I4）・S T-5（I7・10）・S T-7（I19）など、林田遺跡S T2出土鉄鍬⁽³⁹⁾・五軒屋敷遺跡S T1（2）⁽⁴⁰⁾・ヒビノキ遺跡D-Ⅲ住居址出土鉄鍬^(註41)と類似した鉄鍬の他、S T-1（I2）のように五軒屋敷遺跡S T2（3）⁽⁴²⁾と類似した圭頭鍬が出土している。先の柳葉鍬・圭頭鍬類は弥生系鉄鍬の範疇に含まれると考えられるが、S T-1（I1・2）については弥生以降の系統に属するものとする。特に、S T-1の柳葉鍬（I1）は銅鍬形鉄鍬（類銅鍬鉄鍬）であり、前期古墳の副葬品としてみられる鉄鍬類の範疇に含められると考える。また、ヒビノキ遺跡A-I住居址では同様に、前期古墳に副葬されているような逆刺を持つ長三角状の無茎・短茎鍬（杉山編年A形式第2型式B類）が出土しており⁽⁴³⁾、東崎遺跡S T-1からヒビノキ遺跡A-I住居址にかけての時期には、古墳時代前期の系統におかれる鉄鍬類が流通していたことが明らかである。

鉄器類の組成としては、鉄鍬類を主体にS T-4・5からは鋤先鍬先・手鎌が出土している。S T-4・5については似通った屋内区分施設を持つ住居跡であり、保有鉄器の種類などからも居住者間の類縁関係が想定される。

鉄器出土の住居跡構成をみるかぎり、豊富な鉄器類を入手し得た集落跡であることが推察され、東崎遺跡の性格の一面を物語るものであると考える。また、出土鉄器類の内容からは、前項のⅢ段階～Ⅳ段階の時期には、既に前期古墳時代社会へと移行していたことが類推される。

石器・土製品・絵画土器

ST-6から石鏃1、ST-2・4・6・8・11・包含層から砥石が、ST-5から敲石、ST-11から磨石が出土している。ST-6の石鏃(485)は無茎三角鏃で集石中から出土した。石鏃類は当調査区では(485)のみで、ST-6に属するものかは不明。混入品の可能性もある。なお、ヒビノキ遺跡の調査では、ヒビノキⅠ～Ⅱ式に位置づけられるB-I住居址(大形円形でベット状遺構を持つ)から打製石包丁2・砥石6・小形打製石斧と共に、凹基無茎式石鏃が出土しておりヒビノキⅠ式の時期までは打製石鏃が使用されていたことが報告されている⁴⁰⁾。当遺跡ではST-6出土例を除いて他の石鏃類の存在は確認されていない。Ⅰ段階以降、既に鏃類は鉄鏃が主体を占めるようになっている。

砥石は、砂岩製で2～4面が使用されている。ST-6(487)・ST-8(488)は4面使用で使用痕が顕著である。ST-2(482)・ST-4(483)・ST-6(488)は小形で携帯型である。砥石の用途としては鉄製利器の研磨に供されたと考えられる。

その他の遺物として、ST-1から土製円板(34)が、ST-5から舟形土製品(140)算盤玉(141)が、ST-6から算盤玉(222)土玉(223)が、ST-8から算盤玉(327)が出土している。算盤玉(141)は側面に山形波状の線刻をもち、(223)には目・鼻・口を意図したような人面描写状の刺突が施されている。また(327)は胎土が在地の土器類と異なり、搬入品の可能性を帯びる。算盤玉の形態は林田遺跡ST-3(14)に類似するが、横面菱形状ではなくやや丸味を帯びているものが多い。

ST-1(21)は、外面に弧帯文(又は組帯文)状の線刻が施された壺胴部片で埋土中から出土した。弧帯文土器としては高知県では初例である。断片のため文様構成の全体像は不明であるが、曲線の組み合わせによる単位文様と、文様の一部が観察される「対になる単位文様」との組み合わせにより、壺胴部の外周に帯状に文様が展開されたと考えられる。どのような単位文様が伝わっていたのか、また弧帯文の文様構成の習熟度等については明らかではないが、在胎土の土器外面に線刻された文様からは、特定モチーフを題材にして躊躇することなく土器焼成前に線刻が行われており、一定の文様単位が理解されていたことがうかがわれる。弧帯文状の文様単位が太平洋側の南四国中央平野部にまで伝播していたことと、飾る土器の文様単位として用いられていたことは興味深い。弧帯文状の文様単位がもつ呪術性・祭祀性が当地域でも受けいられ、祭祀行為に使用されていたことが推測される。また同時に、弧帯文状の文様単位がもつ浸透度の強さを認識させられる。類例の増加を望みたい。私見では、弧帯文状の文様に表示される新たな祭祀観念の受容と拡散が、小形丸底壺・小形丸底鉢・器台類・複合口縁・二重口縁壺の製作・使用と増加の背景になっているのではないかと考えたい。

この他、ST-1甕(33)の外面には、ヘラ記号と見られる縦方向2本の刻線が観察される。また、壺(35)の胴部片には外面に図形不明の山形鋸歯文状の線刻が施されている。ST-1の集石中及び埋土からは、類銅鏃鉄鏃を含む鉄鏃類と共に、上記線刻土器類と搬入土器の破片が多く出土していることも留意される事項である。

3. 東崎遺跡小結

前項で取り上げた事項をふまえて調査所見を要約すれば、以下のとおりである。

(1) 東崎遺跡は、五軒屋敷地区を含めて東西600m南北400m以上の範囲を持つ広範囲な集落跡であると考えられる。盛行期はヒビノキⅡ式～Ⅲ式併行期で、調査区では重複した住居跡が検出されるなど、集落の主要区域であったとみられる。

(2) 集落の形成については、ヒビノキⅡ式併行期段階で出現したわけではなく、後期前半に位置づけられる土器類が出土していることから（後3～5期・註45）、住居跡等の遺構は未検出ではあるが、ヒビノキⅠ式併行期以前に前身集落が存在していたことが推察される。なお、包含層中には少量ではあるが中期末とみられる土器細片が含まれていた。同様に五軒屋敷遺跡の調査でも中期末の土器片の存在が確認されている⁴⁶⁾。

(3) 検出された住居跡の重複関係と、出土土器類の組成等から集落跡の変遷を辿れば次の各段階が考えられる。

- 東崎Ⅰ～Ⅱ期 後期前半からヒビノキⅠ式併行期にかけての大幅な時期で、遺構等の様相が明らかになれば細別化される。P93などピット等の遺構が検出されている。
- 東崎Ⅲ期 ST-15・8・6が形成される。Ⅰ段階に該当し、ヒビノキⅡ式前半（後6期）から同後半（後7期）にかけての時期と考える。
- 東崎Ⅳ期 ST-10・9・P25・P71・ST-11が形成される。Ⅱ段階に該当する。ヒビノキⅡ式後半（後7期）の時期をあてる。
- 東崎Ⅴ期 ST-7・5が形成される。Ⅲ段階・ヒビノキⅡ式後半（後7期）からヒビノキⅢ式（古相）にかけての時期とする。
- 東崎Ⅵ期 ST-1・4が形成される。Ⅳ段階・ヒビノキⅢ式（古相）に該当。
- 東崎Ⅶ期 ST-12が形成される。Ⅴ段階・ヒビノキⅢ式に該当。

東崎Ⅲ・Ⅳ期の住居構成については、円形・方形・隅丸住居跡・多角形住居跡などが混在しているが、東崎Ⅴ期以降は方形住居跡が一般的になる。Ⅴ期とⅥ期の区分については在地の土器様相からは明瞭ではないが、共伴する搬入土器のなかで吉備甕に古相・新相関係がみられ型式差の幅の中で捉えられるものとする。また、在地の土器類の中で東崎Ⅴ期までは複合口縁壺が主体で二重口縁壺は少ないが、同Ⅵ期では二重口縁壺が増加しているものとする。

なお、搬入土器類の型式差が判然としているなかで、東崎Ⅳ期～Ⅶ期の在地土器類は内面ヘラケズリを採用することなく、旧態前のままの伝統的な製作・調整技法によって土器作りを行っている。各段階の土器類の変化はきわめて緩やかである。

他遺跡との比較では、東崎Ⅳ期に林田遺跡ST2が、Ⅵ期に五軒屋敷遺跡ST2が、東崎Ⅶ期以降にヒビノキ遺跡A-I住居址が該当するものとする。特に、土器類との共伴遺物である鉄器類の組成としては、林田遺跡ST2出土鉄器類と類銅鍔鉄鍔を含む東崎遺跡ST-1とでは時間幅があるとするし、前期古墳に副葬されている鉄器類の中でヒビノキ遺跡A-I住居址出土の無莖・短莖鍔類を検討すれば、前期古墳の編年上においても後出の鉄鍔類に位置づ

けられよう。

(4) 前記の東崎Ⅴ期から同Ⅵ期にかけての段階で、他地域では前方後円墳等の前期古墳が形成され、古墳時代前期社会を迎えていたことが想定される。該当期における高知平野での前期古墳の様相については、現時点においても不明なままであり、資料的な制約を受けている。

東崎Ⅵ期から同Ⅶ期にかけての段階では、東崎遺跡や西分増井遺跡群での方形周溝墓の存在が明らかではあるが⁴⁷⁾、さらに突出した在地首長墓の存在については今後の課題である。また、高知県西部の四万十川支流中筋川上流域における宿毛市平田町・高岡山古墳群⁴⁸⁾などの前期古墳の形成時期が、東崎Ⅵ期～Ⅶ期又はⅦ期以降のどの段階に該当しているのかについても、検討課題である。

私見では、東崎Ⅶ期の段階では高知県下においても在地首長墓が築造され、古墳時代前期社会の枠組みに組み込まれているものと考えている。また、高岡山1号墳墳頂部出土の壺底部及び墳丘斜面出土の二重口縁壺口縁部片⁴⁹⁾の時期が、東崎Ⅶ期を前後する段階まで遡る可能性を帯び、筒形銅器・舌・鉄刀・勾玉・管玉を副葬し、竪穴式石室系の礫槨を主体部とした高岡山1号墳の築造時期について再検討を講ずる必要があると考える⁵⁰⁾。

(5) S T-1の搬入土器類にみられるように、東崎Ⅵ期の段階では前段階に比較してより活発な地域間交流が行われていたことがうかがわれる。また、類銅鉄器に示されるように弥生系鉄器とは相違する古墳時代前期社会のなかでの副産物（例えば前期古墳に副葬される該当期の鉄製品など）が含まれている。東崎Ⅴ期以降、住居形態は方形住居へと移行し、次のⅥ期には4本柱構成が主流となってくる。また、住居跡の長軸方向が類似した方向性を指向するように、住居配置においても規則性を帯びようになる。

上記諸点から、東崎Ⅴ期の段階をもって古墳時代前期に位置づけることにし、また、東崎Ⅳ期の段階は古墳時代への過渡期・胎動期であると考えてことにしたい。但し、この時代区分については、東崎遺跡における集落構造の変化等による内的素材を論拠としたものではなく、住居跡の構造や前期古墳の編年による搬入土器類・鉄器類等の遺物相の相対的な位置付けに基づくものであり、他地域との比較を前提に段階設定したものである。従って、厳密には東崎遺跡の全体像の中で十分な検討を図るべき問題であると考えている。なお、指標となる土器類には組成の相違はあっても、顕著な変革がみられず、漸進的に移行している状況であるし、住居跡の構成については東崎Ⅴ期にひとつの画期が認められるものの、集落の解体や再編成に繋がる内的変質及び外的要因が存在していたのか、問題点を残している。

(6) 住居跡の構造に関して補足すれば、ベット状遺構の有無・構造、住居跡の床面積・規模等からは竪穴住居間の優劣等の差異はみられない。また、ベット状遺構の構造も間仕切り溝による区分例を含めて多様である。なお、東崎Ⅴ期に出現しているS T-5及び同Ⅵ期に位置づけられるS T-4の床面構造には、南辺中央部の壁際に「特殊ベット」と呼称されている両側に溝をもつピットが認められている⁵¹⁾。他地域からの影響下により形成された住居構造であると考えられるが、山陰では古墳時代前期後葉（青木Ⅶ期）から5c前半～後半にかけての住

居跡例（青木Ⅷ・Ⅸ期）にみられ⁵³、太平洋岸域の高知平野部では一段階早い時期に採用されていたことが明らかとなった。この住居跡構造の系譜や当地域における存続状況等については、今後の類例の増加を待って検討を図りたいと考えるが、東崎遺跡において伝統的な住居形態以外に新たな住居構造が採用されていたことは注目されよう。なお、壁際のピットと両脇の溝の機能についてであるが、既に「特殊ピット」の用途と機能についての諸論の中でふれられているごとく⁵³、住居の出入り口部に関連する施設の痕跡であるとみなしたい。

（7）東崎遺跡の調査を通じて、住居跡等の遺構の重複関係及び出土遺物の様相等について検討を行い弥生時代後期末から古墳時代前期前半にかけての集落跡の変遷について段階的な整理を試みてみた。もとより、表面的な問題をとりあげることに終始し、本質論の検討を行っていないことは十分に認識しているが、東崎遺跡が内包する集落跡としての重要性を掲げることにより、今後さらに出土資料の再検討と他遺跡との資料比較を行い、問題点の深化を図りたいと考える。最後に、東崎遺跡の遺跡像について素描することにし、結びとしたい。

調査では、検出遺構の移行と出土遺物の様相差のなかに、弥生から古墳時代にかけての東崎遺跡の質的变化が具現化されているのか視点を置くことにしてみた。その結果、①住居跡等遺構の重複関係と出土土器類の形態変化や型式差には明瞭な相違はなく、②出土土器類は緩やかに漸進的に移行していること③土器類の器種構成・組成にわずかながら変化が認められること④鉄鏃類に類銅鏃鉄鏃などの新たな鉄鏃類が含まれていたこと⑤検出住居跡の多くがベット状遺構・間仕切り溝などの屋内区分施設を持ち、鉄器類なかでも鉄鏃類を保有していたこと⑥方形住居跡への移行が認められ、一辺の壁際にピットと両脇溝をもつ新たな住居跡も採用されていること。⑦数棟による住居構成のまとまりが認められる。ことなどが検証されたものの、集落跡としての根源的な変革は端的に現われていないことが実感された。また、他遺跡との資料比較としては、林田遺跡ST2・五軒屋敷遺跡のST1とST2の相違・林田遺跡ST2とヒビノキ遺跡A住居址との相違は明確であることが再認識され、東崎遺跡の検出遺構はヒビノキⅡ～Ⅲ式にかけての過渡的様相を有することが明らかとなった。このため、各住居跡からの遺物を段階的に整理し、形式的には未確定ではあるが、遺物の示す様相としてヒビノキⅢ式古相を想定し、東崎Ⅲ～Ⅶ期のうちⅥ期に位置づけた。私見では、東崎Ⅴ期は布留0期に同Ⅵ期は布留1式に同Ⅶ期は布留1～2式に並行するものと考えている。

東崎Ⅴ期を古墳時代に組み入れたのは、他地域では既に前期古墳が築造されているとみなしたことによる。但し、東崎遺跡を含めた当地域が在地首長墓を築造していたかは検討課題であるが、集落跡の住居跡から検出された類銅鏃鉄鏃などに代表される鉄鏃等の武器類の配布の背景には、首長層ないしは地域政治集団の存在が示唆される⁵⁴。なお、仮説ではあるが、長岡台地上に所在した東崎遺跡・ヒビノキ遺跡などの核となる集落によって構成された連合政権が高知平野中央部におけるヒビノキⅡ～Ⅲ式併行期の主要な地域政治集団であり、弥生時代後期以来の紐帯を基盤にしたまま、保守的な同盟関係を維持していたのではないかと推考される。また、鉄鏃等の武器類及び農工具類等の鉄製品の受け口となったのは、前提として地域政治集

団であり、最終的に集団の存立状況に応じて各集落に分与されたと推考される⁵⁹。

註

- (1) 『創立100周年記念』冊子 高知県立高知農業高等学校 平成2年11月
- (2) 調査期間中に高知農業高校事務室で同校校史等の資料閲覧をさせていただいた。
昭和10年の土器発見の記事は、数編の同校校史等に記載されている。
- (3) 「弥生式土器県農業学校庭で発見」 『土佐史談』第74号 土佐史談会
岡本健児編著『高知県史 考古資料編』 高知県 昭和48年 p 361～362
- (4) (後免町県立農業高等学校実習地) が所在地であると記されている。
安岡源一編『高知県縄文式 弥生式 古墳文化遺跡地名表』 昭和27年
註(3)所載 p 1075～1098
- (5) (東崎天神八五農高校果樹園) (東崎農高校校舎下) の2ヶ所として記載。
『高知県遺跡地名表』高知県教育委員会 昭和38年
註(3)所載 p 1100～1183 (p 1120)
- (6) 文化庁編『全国遺跡地図-高知県-』 国土地理協会 昭和51年
- (7) 遺跡の関連文献として下記報文がある。
岩井豊寿「高知平野汀線の研究」『古代文化』第13巻第11号
島田豊寿「高知平野に於ける先史時代海岸汀線の研究」『土佐史談』復刊13号
土佐史談会 昭和32年
註(3)所載 p 109～124
調査前の同遺跡について、ヒビノキⅠ・Ⅱ式併行期の集落の存在が推考されていた。
岡本健児<第四章 弥生後期時代>「第二編 原始」『南国市史』上巻 南国市
昭和54年
- (8) 南国市教育委員会が調査。資料整理中。
- (9) 角谷和男他『五軒屋敷遺跡調査報告書』 高知県教育委員会 昭和59年3月
- (10) 五軒屋敷遺跡の調査によって、高知農業高校果樹園遺跡から五軒屋敷遺跡への改称が行われた。
註(9)文献 下村公彦「Ⅰ調査に至る経過」
- (11) 島田豊寿<第1章 南国市の自然>「第一編 地理」
『南国市史』上巻 南国市 昭和54年
- (12) 註(11) 第三節 古期扇状地 p 12
- (13) 註(11) 第三節 古期扇状地 p 16
- (14) 山本 大 (第三節 野中兼山と用水路の開発・第四節 新田の開発)
<第1章 近世前期>「第五編 近世」『南国市史』下巻 南国市 昭和57年
- (15) 農機製作所建設に伴い、平成2年3月5日～同月31日まで南国市教育委員会が調査。
- (16) 岡本健児・廣田典夫『ひびのき遺跡』 土佐山田町教育委員会 昭和52年

- (17) 註9文献
- (18) 岡本健児(弥生後期)「土佐考古学の諸問題」『高知の研究 1』地質・考古編
清文堂 昭和58年
- (19) 平成3年1月7日～2月2日の間に高知県教育委員会が調査。
『東崎Ⅱ発掘調査概要 記者発表及び現地説明会資料』高知県教育委員会 平成3年
2月
- (20) 註(9)文献
- (21) 石野博信「弥生・古墳時代住居の屋内区分施設」『橿原考古学研究所論集』第10
吉川弘文館 昭和63年
石野博信『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館 平成2年3月
- (22) 註(21)両文献
- (23) 石野博信「第5章第1節 川島・20溝の土師器群」
石野博信・榎本誠一『川島・立岡遺跡』兵庫県太子町教育委員会 昭和46年3月
石野博信「第四章第七節 古式土師器」『古墳文化出現期の研究』学生社
昭和60年3月
- (24) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第8
吉川弘文館 昭和63年
- (25) 間仕切り溝によって区分された範囲は、ベット状遺構における高床部分に相当している。
溝の機能については屋内高床部的な区画と考える。
- (26) S T-4・5の南辺壁際の土坑(ピット)と両脇の溝については、山陰の諸遺跡に類例
が認められる。鳥取県下の調査例では、土坑(ピット)は「特殊ピット」と呼称されて
いる。以下、類例を掲げる。
(鳥取県)
- ① 青木遺跡C地点 4～6・10・12・19号住居跡
清水真一『青木遺跡発掘調査報告書』I～IV 青木遺跡発掘調査団 昭和51～53年
- ② 上種第5遺跡 竪穴住居跡1・2・13・16・17号
馬淵義則・根鈴智津子『上種第5遺跡発掘調査報告』鳥取県東伯郡大栄町教育委員会
1985・2
上種第6遺跡 竪穴住居跡2・4号
馬淵義則・根鈴智津子『上種第6遺跡発掘調査報告』鳥取県東伯郡大栄町教育委員会
1985・3
- ③ 湖山第1遺跡 S 1-05・07
網見安明・森脇廣行・原田雅弘他『湖山第1遺跡』鳥取県教育文化財団 1989・3
上記諸遺跡は、青木Ⅷ～Ⅸ期併行期(5c前半～後半)に位置づけられている(註
21・26 ①)。従って、東崎遺跡のS T-4・5よりは後出である。ただし、床面構造の

類似性は、ピット及び溝の性格及び機能等を復元するうえで重要である。

山陰（伯耆・因幡）の住居跡例では、「特殊ピット」は支柱穴並みに深く、両脇の溝も明瞭な痕跡をとどめている。また、方形二段の「特殊ピット」や蓋の存在が指摘されている（②上種第5遺跡文献）。「特殊ピット」の機能としては、祭祀的色彩を帯びる遺構としての把握や（①文献『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』・③文献）、建築儀礼的なものの痕跡とする推定などがあり、また「特殊ピット」の位置を住居の出入口部に想定されている（②上種第5遺跡文献）。

東崎遺跡S T-4・5の検出例は、先の諸例と比較して、ピットは段掘りではなく深さは浅く且つ遺構内の出土遺物はみられない点や、住居跡中央部には中央ピットが所在することなどの相違点がある。遺構の細部ではただちに山陰例とは結びつかない面もあるが、壁際中央部に付設され両脇に溝を持つ平面形態には共通性が認められる。

なお、壁際中央部に付設される長方形ピットとして、築後では福岡県八女市室岡所在遺跡群の住居跡例での「貯蔵穴様土坑」（④）などがあり、東崎遺跡例でのピットに床面からの深さ・規模・平面形態などが類似する。「貯蔵穴様土坑」は両脇に溝を伴うものではないが、同遺跡群のうち道添第16号住居跡からは「貯蔵穴様土坑」の西側で壁に対して直角方向の間仕切り溝が検出されている（⑤）。また同遺跡群の検出住居に関して、出入口部を周溝が切れている「貯蔵穴様土坑」（方形ピット）側とし、方形ピットに板の橋を掛けて出入りしていたことが提示されている（⑥）。一方で、坊野第2号住居跡の張出部例等から、出入口を妻側よりも平側に捉え、「貯蔵穴様土坑」の反対側に推定する意見も示されている（⑦）。

住居の出入口部としての位置付けには、高床部の開口方向に視点を置くことだけでは説明が難しいと考える。私見ではあるが、長方形ピットと両脇の溝は、竪穴住居跡の屋内区分の構造に関連した遺構であると考えられることから、ベット状遺構をもつ住居跡以外に採用された屋内区分施設で、住居の出入口部にも関連した遺構であると考えことにしたい。

つまり、入母屋状の出入口部から室内へ板梯子により出入りし、出入口部の両側は「囲い」もしくは高床のベット状施設が存在していたものと推定されるのである。

従って、特異な構造の施設を考える必要はなく、「削り出し」ないしは「貼付」による三方向のベット状遺構を想定した場合（註21における屋内高床部の方3L類型）、残る一方向のベット状遺構側面部分が、間仕切り溝とみられる両脇の溝跡に該当するのではないかと考えられるからである。

東崎遺跡S T-4・5の区分施設については、県内外資料を通じて今後の検討課題である。構造の類似した竪穴住居跡が近接した位置から検出されていることにも意義があると考えられる。本書では、入母屋状の出入口部の存在と屋内床への梯子による出入り、屋内高床部の構造により残された施設痕跡であることを指摘しておきたい。なお余論では

あるが、出入口部に扉が付設されていた可能性もあることを加えておきたい。

④酒井仁夫・関晴彦『福岡県八女市室岡所在遺跡群の調査』

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 福岡県教育委員会 1977

⑤註④文献 p134 「第16号住居跡」

⑥土田充義・宮原種生「道添遺跡における住居跡の周溝について」2

註④文献 VII 考察2.

⑦関晴彦「住居跡の構造」

註④文献 VII 考察1.

④～⑦文献には、示唆を得ることが多かった。特に⑦文献には、住居跡の構造を含めて今日でも論議すべき諸点が多く含まれていると考える。この他、因幡・伯耆における竪穴住居跡については下記文献を参考とした。

⑧西岡誠司「古墳時代前期の竪穴住居跡の一例をめぐって-寺内京南遺跡の占める位置-」

米田文孝他・関西大学文学部考古学研究室編『寺内京南遺跡発掘調査報告』

鹿野町教育委員会 1982

(27) 註(19)資料による。

(28) 註(9)文献による。

(29) 註(9)文献 p34～48 土器観察表による。

(30) 註(9)文献 p24

(31) 註(16)文献

(32) 註(16)文献 p15

(33) 註(16)文献 p84

(34) 出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』 春野町教育委員会 1990

(35) 出原恵三「土佐の弥生後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』

古代学協会四国支部第四回大会資料 1990.9

(36) 古代学協会四国支部第四回大会『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』

1990.9.29～9.30（於松山市）

(37) 註(35)発表資料による。

(38) 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』

橿原考古学研究所 昭和61年.3

但し、上記論考で「布留0式」の重要な要素とされる二つの属性①布留形甕とこれに伴う布留形影響甕の出現②小形精製土器（小形器台C形式+小形丸底鉢Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ形式+小形丸底壺）の完備、が土佐において総体的に具現化していることを示すものではない。「併行期」としたのは、既に他地域では二つの属性を満たす条件が成立していると考えた事による。むしろ、「布留0式」における第2の画期（註38文献p369）に意義を見出したいと考える。なお、土佐では「地域における併行期の様相」が実相であったと

考えている。

- (39) 森田尚宏他 『林田遺跡』 土佐山田町教育委員会 1985・3
 (40) 註(9)文献 p 67 第33 図 2 ・ 図版20下段 2
 (41) 註(16)文献 p 26 第 9 図 4 ・ p 111 図版 2-5
 (42) 註(9)文献 p 67 第33 図 3 ・ 図版20下段 3
 (43) 註(16)文献 p 26 第 9 図 5 ・ p 111 図版 2-3

なお、同文献では「無莖で腹扶三角形式のもので、大形である。長さ6.5cm、厚さ0.7cmである。」と報告されている。実測図中にはみられないが、図版 2-3 には逆刺の存在が明瞭である。

- (44) 註(16)文献 p 32
 (45) 註(35)
 (46) 註(9)文献 p 32 土器番号 (90) 高杯脚部 IV 様式併行
 (47) 註(19)・(34)

- (48) 山本哲也『高岡山古墳群発掘調査報告書』 高知県教育委員会 1985
 (49) 布留 2 式併行期に位置づけられる可能性をもつ。

- (50) 高岡山古墳群は中筋川流域の地域政治集団の首長墓として築造された前期古墳であると考える。この地域では、弥生後期後半以降の集団の再編化が比較的容易に達成され、在地弥生首長の系譜をひく集団の統制者が新たな首長として地域統合を図ったのではないかと推考される。高岡山 1 号墳には、筒形銅器・舌・玉類(勾玉・管玉)・鉄刀が副葬され、同 2 号墳には弥生以来の伝世品とみられる前漢鏡(異体字銘帯鏡で昭明鏡)が破砕鏡として、また石釧・玉類(勾玉・管玉)が副葬されていた。

主体部は竪穴式石室を類した礫槨構造であるが、礫と粘土を用いて棺を覆うことに主眼が置かれたと考えられる。弥生以来の伝統的な首長墓の埋葬法に「竪穴式石室」を用いた「首長の葬法」が加味され、融合化した主体部であると推察される。

墳形については、1 号墳を「方墳」とする指摘もあったが(①)、墳丘裾の区画(列石等)が存在しないことなどから、方墳の可能性を有しながらも報告書作成段階では明記しなかった(註48)。

今日では、地形測量による墳丘ラインと南側の直線区画状の溝跡を積極的に評価し、葺石・墳丘列石等は有しないが地形整形と墳丘構築による方墳であると考えている。また、主体部の設置方向は対角線上に位置するものと判断される。

なお、築造時期については、1 号墳が 4 C 中頃を前後する時期まで遡ると考える。

高岡山古墳群については、今後の資料整理のうえ再検討を図りたいと考える。(②)

- ①小林三郎『高岡山古墳群』p 330～331 大塚初重・小林三郎・熊野正也編『日本古墳大辞典』東京堂出版 1989 ②岡本健児編著『日本の古代遺跡 39 高知』保育社 1989 ②では、高岡山古墳群の築造時期を 4 C 後半～末におかれている。

- (51) 註(26)②・③
 (52) 註(21)・(26)①～③なお、註(21)では、青木Ⅷ～Ⅸ期の竪穴住居跡例が取り上げられている。

(53) 註(26)①～③

- (54) 居住者が個別に入手したものとは見なし難い。首長層又は集団が入手し、東崎の集落に配布されたもの考えられる。鉄製品では鉄鏃類の比率が高い。集落内の特定層については、今回の調査区で検出された住居跡等からは抽出することは難しい。

東崎遺跡の集落が、首長層の存在を示す特定居住区域（豪族居館跡等）をもつ集落であるのか、傘下の集落なのか今後の検証課題である。

なお、住居跡から検出された鉄鏃類・農工具類のなかには、S T-1 類銅鏃鉄鏃(I1)・鉄鏃(I2) S T-5 鉄鏃(I7)、鋤先鋏先 S T-4 (I5) S T-5 (I12)、手鏃 S T-4 (I6) S T-5 (I13) などのように前期古墳の副葬品にも加えられるような鉄製品が含まれていた。この他、S T-1 では集石中から鉄鏃が出土しているが、土佐山田町・林田遺跡 S T 2 では床上・ピットから計4点の鉄鏃の他、一括投棄されたとみられる鉄鏃等が出土している（埋土から鉄鏃11・鈍1・不明2・住居址外1の鉄鏃・註(39)文献）。住居廃絶祭祀に伴う遺物である可能性を持つ。

- (55) 長岡台地縁辺部に立地する集落跡については、盛行期は弥生末～古墳時代前期中葉（ヒビノキⅡ～Ⅲ式併行期）で、ヒビノキⅢ式の時期に終焉している。現在のところ、ヒビノキⅢ式以降（古墳時代前期中葉以降）の集落跡の様相は不明である。前代から継続していた集落が一様に途絶し後代に連続していないことは、集落の内的要因よりもむしろ外的な要因に起因する可能性を帯びる。古墳時代前期中葉以降、新たに政治的な編成を受けた可能性も考慮される。

ヒビノキⅡ式後半期の住居跡から、鉄製武器類なかでも鉄鏃の出土率が高くなる。なかには林田遺跡 S T 2 のごとく11点の鉄鏃が出土した住居跡例もあり（註39）、各集落で多数の鉄鏃類が保有されていたことが推測される。

林田遺跡・ヒビノキ遺跡・五軒屋敷遺跡・東崎遺跡における土器様相については、前後関係の時間差はあるものの類似した移行を示し、集落間での顕著な様相差は認められない。上記各集落はヒビノキⅡ～Ⅲ式併行期にかけて存続していた集落であり、集落間の拮抗を想定するよりも相互扶助的な紐帯関係を保持していたと考えられる。ヒビノキⅡ式併行期における鉄鏃類の増加は、保有が必要とされた軍事的な緊張関係等を暗示するが、地域内の結合素因を背景とする同盟関係としての政治的紐帯が継続し、集落の集合体としての地域政治集団を形成していたのではないかと考える。しかし、長岡台地の地域政治集団の実相はどちらかといえば弥生社会の残影を長くとどめるものであり、特定集団による地域支配を実現化したと考えられる中筋川流域の地域政治集団とは相違した性格の集団であったことが推定される。

なお、ヒビノキⅡ～Ⅲ式の段階で他の地域では既に前方後円墳に代表される首長墓の築造と地域勢力の形成が進行していたと考えられる。高知平野では、実質的な古墳時代社会の到来を迎えるのはヒビノキⅢ式併行期以降であると推考される。

前期古墳を築造する地域政治集団の側面として、特定集団における余剰生産物の占有と蓄積が他の集団を凌駕し払拭する中で、特定集団が実質的な地域の支配と集団の統制をもたらしたものであると考えている。前期古墳の被葬者は特定集団を代表する統率者としての首長層であり、集団から輩出された階層であるとする。また他の被葬者像としては、地域政治集団の存続にかかわった集団の上部層が候補に掲げられよう。余剰生産物の蓄積・支配区域の範囲・他地域の支配者層との関係が強大であればあるほど、特定集団の持つ権力は維持され、安定した地域政治集団が営まれたとことが類推される。

高知県西部の中筋川流域の地域政治集団は、他集団を凌駕した特定集団の形成が早い段階で醸成していたとみられ、やがて畿内周辺域の首長層に配布されたと同様な玉類・筒形銅器・石製腕飾類等を入手し首長層の前期古墳が築造されている。

なお、畿内政権（大和政権）との繋がりが認められるのは、他地域からも中筋川流域の地域政治集団の有力性が認識されていたことを傍証するものであると考えられる。（高岡山2号墳には伝世されていたと考えられる前漢鏡（昭明鏡）が破砕鏡として副葬されていた。おそらく、この集団の母体は前漢鏡を入手し得た在地の弥生首長層系譜であると推測される。中筋川水系では、中村市具同中山遺跡群の石丸遺跡・同市山路遺跡（伝山路城跡出土）において中広形銅矛の出土例が知られている。これらの武器形祭器を招来した集団と前述の特定集団との関係については不鮮明な部分が多いが、既に弥生中期後半～後期にかけて青銅祭器を保持することのできた集団の存在と地域勢力の形成が進行していたことを示唆するものと考えられる。同水系では武器形祭器として後出の広形銅矛の出土例は知見されてはいない。前漢鏡を入手した集団の所在が予見されることは、武器形祭器に代わる新たな威信財を導入できた集団の自立性と先進性が暗示される。いずれにしても、中筋川水系は基盤となる集団の存在を含めて対外的な位置を獲得することのできた地域圏であったとみなされる。）

一方、高知平野における前期古墳の様相は不明で、前期古墳を築造した地域政治集団の存在についても漠然としたままである。集落跡の内容から前期古墳所在の可能性を推定するのは粗暴ではあるが、東崎遺跡の位置付けの一環として仮説を提示してみたい。

東崎遺跡では、他地域からの土器類・鉄鏃等搬入品が増加しながらも、土器類の組成や成形技法等が刷新されるような著しい変化や断絶等は認められなかった。また、居住形態についても、住居平面プランは徐々に方形住居へと移行しているが、ヒビノキⅡ～Ⅲ式併行期の段階のなかで突然に集落が途絶したり、住居プランが画一化されたりする変動の様相はうかがえなかった。集落跡全体のなかでは、わずかに東崎Ⅴ期とした段階から方形住居平面プランの主軸方向に指向性が認められることや、数棟の住居跡による

まとまりがうかがわれることにとどまる。

住居跡からの出土遺物類からは、流入する他地域からの文物を淡々として受容しながら、前代からの営みを継続していった集落の様相がうかがわれ、古墳時代類型の鉄製品等（前期古墳に副葬される内容を持つ鉄製武器類（類銅鏃鉄鏃等）・農工具類等）が住居跡から出土する段階になるまで、集落構成の内容は実質的には弥生農村的である。

私見では、ヒビノキⅢ式古段階（東崎Ⅵ期）までに他地域では前期古墳が築造されており、ヒビノキⅢ式新段階（東崎Ⅶ期）では前期古墳を築造する地域がさらに拡散していたと推測している。長岡台地に立地する各集落においては、前代からの紐帯を保持したまま地域勢力の基礎単位となり、広範囲な集落を核としながら高知平野北部における地域連合政権つまり地域政治集団を形成していたのではないかと推考される。紐帯の背景としては、抗争によって他の地域を払拭し領域を確保したのではなく、血縁紐帯を持ち且つ地理的に近接する各集落間での抗争の回避や同一平野部での共有水系の確保など各集落間の自然立地条件の安定性の維持等の諸条件により共存繁栄の道を選択したことが推察される。

この地域政治集団の性格としては、中筋川流域の地域政治集団とは異質な側面を有していたことが類推される。つまり、中筋川流域の地域政治集団では特定集団を基盤とし、特定首長（王）を有するのに対して、長岡台地の地域連合政権では各集団の集合体が地域政治集団の実体であり、核となるべき特定集団を有しない政治集団であったと考えられることである。集団においては、共立された首長層の存在はうかがわれるが、地域政治集団の統率者としての性格を具備するだけで、特定集団が擁立した「王」としての性格を帯びている者ではない。換言すれば「王不在の地域」が存在していたことが想定されることである。

中筋川流域の地域政治集団が、中筋川水系の集団を統合化して形成されていった「統合型」の集団であると考えられるのに対して、長岡台地の地域政治集団は「分散型」の集団であったと推測され、土佐の前期古墳時代社会には二類型の地域政治集団が存在していたことが推察されるのである。

前期古墳の築造について視点を移せば、先の中筋川流域の地域政治集団では上流域において前期古墳を築造しており、特定集団の首長墓が形成されている。高知平野北部の実相については現状では不明確であり、状況を論じることはできない。しかし、東崎遺跡Ⅱの調査では方形周溝墓（方形区画墓）の存在が明らかにされているように集落内においても階層差が生じていることは明瞭で、地域政治集団の上層部に該当する「首長層」の首長墓が形成されている可能性は否定できない。ただ、「分散型」の地域政治集団が形成したと推定される「首長墓」の内容が、中筋川流域の前期古墳と比較してどのような様相を有していたのか、関心をもたれるところであるが、一墳一埋葬の特定首長墓とはではなく、「集団墓」のなかでの有力者として埋葬されている可能性も帯びている。

なお、長岡台地における地域政治集団の他の側面として推量されるのは、「王不在の地域」であるがゆえに直接的に服属する支配層をもたない点と強固な勢力基盤を有していないことである。集団の意志が固まれば、情勢に応じて他地域からの要請による兵員等を供出することも可能であり、その代償として自らの地域の利益につながる交易物や鉄素材・鉄製品、先進の技術等（農工・土木・織物・養蚕など）を得ることができた事も推考される。他地域との交易の機会を待つまでもなく、より積極的な人的移動が行われていたことも推察される。木材・魚介類・草木等を除いて有益な交易物資が産出されない地域では、人力も供給対象となることを視野に置く必要があると考える。東崎遺跡での搬入土器類や類銅鏃鉄鏃・農工具類等の鉄製品、ヒビノキ遺跡A-I住居址の無茎・短茎鏃の出土例の背景には、物の移動に加えてより人的移動の側面も加味されることを推定しておきたい。

ヒビノキⅢ式新段階以降、東崎遺跡を含めて長岡台地上の集落跡は終焉を迎えている。その後、須恵器導入前や古式須恵器段階の新たな集落跡の所在については知見されていない。少なくとも、長岡台地における地域政治集団を構成していたとみられる集落跡については古墳時代前期中葉～後半を境に後続しないようである。

長岡台地の地域政治集団の存在もこの段階には解体したものと考えられる。

一方、中筋川流域の地域政治集団については、その後も具同中山遺跡群に代表される祭祀遺跡群の主体集団として畿内政権との関係を深めており対照的である。勢力基盤をもたない「王不在の地域」としては内部矛盾による瓦解の度合いも早かったものとみられる。

長岡台地の地域政治集団の性格としては、弥生時代以来の集落間の紐帯を基盤にした集落集合体としての発展形態を想定し、「地域勢力」として位置づけたものであることは上述したとおりである。集団の上部構造は、各集落の首長から共立した統率者である「首長層」であり「特定個人」で、権力範囲は集団の意志として地域政治集団を構成する集落領域全体におよぶが、「分散型」の集合集団である以上、「首長層」の勢力基盤は、出自の単位ないしは複数集落にとどまり、本質的に占有・支配した領域は極めて限定された範囲であったと考えている。「地域勢力」の存在形態は対外的には小範囲な「クニ」として映るが、実質的には擬態的な「クニ」であり、存立基盤はきわめて脆弱である。

解体した集団が、新たな編成秩序のなかでどのように組み込まれていったのか、現状の資料面ではきわめて不鮮明ではあるが、「地域勢力」の解体の過程と再編成の動向のなかに「古墳時代社会」におけるこの地域の実像が投影されているように考えられる。東崎遺跡の終焉は、変動を受けた一画期に該当するものと推定される。

長岡台地の地域政治集団を抽出したのは、高知平野部の中で弥生後期以降の集落形成が最も著しい同地域について「地域勢力」としての視点を持ち、今後の検討課題とするためである。前述の試論はもとより仮説にとどまっており、憶測の域をでないが、さら

に検証を深めたい。

出土遺物観察表 1

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.1 1	ST-1	壺	21.0 (3.5)	- -	口縁緩い凹線状	外面叩き+口縁端横ナデ 内面ハケ+スリナデ	小砂粒を含む 内外面とも黄橙色	
2	ST-1	壺	16.0 (3.7)	- -	複合口縁		小砂粒を含む 内外面とも黄橙色	
3	埋土 ST-1 15	壺	- (10.0)	- 2.4	胴部中央部に最大径	外面丁寧なヘラミガキ 内面スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面淡黄橙色	
4	ST-1 1	甕	- (32.2)	- 3.2	胴部形状卵形	外面、叩きの上を縦ハケ 内面ハケ	外面淡黄橙色 内面淡黄色	
5	埋土 ST-1 2・3	壺	12.6 28.6 22.0 3.0		胴部中程に最大径	外面、叩き+ナデ 内面ナデ 口縁部横ナデ 外面口縁下部縦ハケ	0.5~5mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 外面淡黄橙色 内面淡黄色	
6	埋土 ST-1 8	壺	16.0 (13.3)	- -		内外面ハケ 内面頸部下スリナデ 外面叩き+縦ハケ	外面橙色 内面淡褐色	
7	埋土 ST-1	甕	- (10.7)	- 5.6	平底	外面右上がり叩き+細かいハケ 内面ナデ	0.5~5mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 外面淡黄橙色 内面灰黄色	
8	埋土下層 ST-1	甕	25.0 (2.0)	- -		口縁部横ナデ	黒雲母・角閃石の細 粒を含む。胎土精緻 外面暗褐色 内面褐色	搬入品 (阿波か)
9	ST-1	甕	17.0 (8.7)	- -		外面叩き+ナデ+縦ハケ 内面ハケ+縦方向スリナデ 器厚薄い。4mm	内外面とも淡橙色	
10	ST-1	甕	13.7 (14.2)	- -	胴上部に最大径 胴部下半に煤付着 外面器表一部赤変	口縁部まで叩き出し 内面縦方向の強いスリナデ スリナデは削り状(砂粒移動) 器厚6mm	0.5~3mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 内外面とも淡橙色	
Fig.2 11	ST-1 2・3・4	壺	16.0 39.8 30.6 6.0		複合口縁 口縁端部内傾	口縁屈曲部に指ナデ 外面、叩き+ハケ 内面ハケ、底部付近スリナデ	0.5~5mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 外面橙色 内面淡黄橙色	
12	ST-1	甕	12.4 (6.7)	- -			外面橙色 内面褐色	
13	埋土 ST-1 6	甕	- (11.3)	- -	小さな平底 黒斑あり	外面叩き+ナデ 外面底部から放射状の縦ハケ	小砂粒を含む 外面淡黄色 内面淡黄橙色 器肉黒灰色	
14	ST-1	甕	- (8.6)	- -		外面は底面まで叩き 内面ハケ右廻り	砂粒多し 外面橙色 内面淡黄橙色	
15	ST-1	甕	12.4 (3.5)	- -		外面叩き+ナデ、口縁部横ナデ 内面右廻りのヘラナデ(削り状)	小砂粒を含む 内外面とも淡褐色 器肉暗灰色	搬入品か
16 PL.28	埋土 ST-1	甕	6.0 (3.6)		口縁部内面に凹部 糸線2本 幅2~3mm	口縁部横ナデ 外面横ハケに細かい縦ハケ 胴部内面に指頭圧痕	胎土緻密 内外面とも褐色	搬入品 (播磨) 川島遺跡20溝 甕B類に類似

出土遺物観察表 2

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 口径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.2 17	ST-1	甕	- (5.1) -	- 7	平底	外面叩き+スリナデ 内面細かいハケ+丁寧なナデ	砂粒を含む 外面橙色 内面黒灰色	底部片
18	埋土 ST-1 6	高杯	- (7.1) -	- 10.4		外面ハケ 内面ナデ	精製の胎土。僅かに 0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	体部欠損
19	ST-1	高杯	- (4.8) -	-		外面縦ハケ 接合部は絞り 円孔あり	小砂粒を含む 外面橙色 内面淡黄色	脚部片
20	埋土 ST-1	高杯	- -	- -		外面縦方向のヘラミガキ 脚部内面棒状工具による押さえ 接合部は両面からの粘土充填	小砂粒を含む 内外面とも赤褐色	脚部片
21 PL.28	埋土 ST-1	(壺)	- -	- -	外面に弧帯文状の線 刻	外面叩きの上を丁寧にスリナデ さらに細かいハケ 内面棒状工具によるスリナデ 黒斑あり	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	胴部片
22	ST-1	土製支脚	- (4.8) -	-		外面叩き	胎土荒く砂粒多し 砂粒0.5~2mm大 内外面とも灰褐色	脚部片
23	埋土下 ST-1	鉢	22.0 (4.3) -	-		外面叩きの上をナデ 内面ハケ	内外面とも黄橙色	
24	ST-1	鉢	25.0 (7.7) 0 0		丸底	外面叩きの上を丁寧にスリナデ 底部周辺ハケ 外面体部下半に指頭痕、黒斑 あり 内面ハケ	外面橙色 内面黄橙色	
25	ST-1	鉢	13.4 5.3 -	4.0	平底	外面ナデ 内面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
26	埋土 ST-1	鉢	- (5.2) -	- 7.2			1~2mm大の砂粒を 含む。 外面黄橙色 内面暗灰黄色	底部片
27	埋土下 ST-1	鉢	- (2.2) -	- 4.6		外面ハケ 内面ナデ	内外面とも橙色	底部片
28	埋土 ST-1	高杯	- -	-		外面ミガキ	内外面とも橙色	脚部片
29	埋土 ST-1	鉢	- (3.4) -	- 5.4	平底	底部外面に指頭痕	内外面とも黄橙色	底部片
30	埋土 ST-1	鉢	- (3.2) -	- 4.6			外面黄橙色 内面黒褐色	底部片
31	埋土 ST-1	甕	(2.7) -	3.2	平底	外面叩き(右上がり) 底部は突出	外面黄橙色 内面橙色	底部片
32	埋土 ST-1	杯	9.2 (7.2) -	-	手づくね	皿状 内外面とも指頭圧痕顕著	内外面とも黄橙色	

出土遺物観察表 3

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
PL28 33	ST-1	甕	-	-		外面叩き 内面ハケ ヘラ記号と見られる縦方向の 2本の刻線あり	外面暗黄茶色 内面淡黄橙色	胴部片
PL28 34	ST-1	土製円板	-	-	土器片再利用	外面叩き+スリナデ 内面細かいハケ 外面に格子状の刻み	砂粒多し 外面黄茶色 内面暗黄茶色	胴部片
PL28 35	ST-1	(壺)	-	-	図形不明の線刻	外面に黒斑あり	外面淡茶色 内面黄橙色	胴部片
PL28 36	ST-1	甕	-	-		口縁部ナデ	金雲母・角閃石片 内外面とも暗茶色	口縁部片 搬入品 畿内(河内) 庄内
PL28 37	ST-1	鉢	-	-	外反する短い口縁	口縁部ナデ 外面タテハケ 内面横ハケ	内外面とも茶色	搬入品
PL28 38	埋土 ST-1	壺	-	-		外面に細線による波状文	内外面とも明茶色	
PL28 39	ST-1	甕	-	-	口縁端は平坦	口縁部は僅かに内湾 叩き+スリナデ+ナデ	内外面とも暗茶色	搬入品
PL28 40	埋土 ST-1	甕	-	-	複合口縁	口縁外面に弱い凹線状の沈線	内外面とも茶色	口縁部片 搬入品
PL28 41	ST-1	甕	-	-			内外面とも暗茶色	口縁部片 搬入品
PL28 42	ST-1	壺	-	-	複合口縁 内面に鋸歯文	鋸歯文は右上がりの細線	黄橙色	口縁部片
PL28 43	ST-1	壺	-	-		内外面共ナデ	内面黄橙色 内面淡茶色	口縁部片
PL28 44	ST-1	甕	-	-	外面に煤付着	外面叩き+スリナデ+細かい ハケ 内面ナデ 口縁部との境目に指頭圧痕	砂粒含む 外面黄茶色 内面黄橙色	胴部上半
PL28 45	ST-1	甕	-	-	口唇部に縄目状の刻 目	外面縦ハケ 内面横方向のハケ	外面淡茶色 内面淡黄橙色	口縁部片 在地外
PL28 46	ST-1	甕	-	-		外面叩き+細かいハケ 内面削り	外面淡茶色 内面灰白色	胴部片 搬入品
PL28 47	ST-1	甕	-	-		外面細かいハケ 内面削り	金雲母・角閃石片 内外面とも暗褐色	胴部片 搬入品 畿内(河内)
Fig.3 48	Fig.27 ST-2	壺	21.2 (5.0)	-	口縁部擬凹線状	外面細かいハケ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 淡橙色	

出土遺物観察表 4

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.3 49	ST-2	蓋	- (5.0) - 26.0	内面口縁端に煤付着	内外面ハケ、口縁部横ナデ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 淡黄灰色	
50	ST-2	甕	16.4 (6.1) - -	口縁端ハケナデ	外面叩目残、口縁部ナデ 内面ハケ	砂粒多し 淡茶褐色	
51	ST-2	甕	15.0 (6.9) - -	口縁部幅広	外面口縁部叩き出し+ナデ 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 淡茶褐色	
52	ST-2 7	壺	- (7.1) - 4.4	底部小さな平底、叩目痕有	外面叩目の上をナデ、内面ハラナデ	0.5~4mm大の砂粒を含む。 内面明褐灰色 外面淡黄橙色	底部片
53	ST-2	鉢	18.0 (6.0) - -	体部内湾	外面叩目の上をスリナデ、内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒を含む。 淡黄橙色	
54	ST-2	鉢	15.4 6.3 - 3.4	底部叩き仕上げ 外面叩目残	底部外面、叩き+ナデ+叩き 内底面指ナデ、他ハケ ハケ原体幅3.30cm以上	0.5~4mm大の砂粒を含む。 砂粒多し 淡黄橙色	
55	ST-2	土製支脚	- (3.3) - 12.7		外面叩き、ナデ弱	0.5~3mm大の砂粒を含む。 砂粒多し 黄橙色	
56	ST-2	土製支脚	- - - -		外面叩き+ハケ+ナデ 内面、棒状工具による引きナデ 器表一部赤変	小砂粒を含む 暗橙色	
57	ST-2	鉢	- (3.0) - 2.4	底部スリナデ	外面叩き+ハケ+ナデ 内面細かいハケ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 淡橙色	底部片
58	ST-2	土製支脚	- (2.5) - 4.0	小形中空	底面端器表剥離と赤変 内外面ナデ	0.5~2mm大の砂粒を含む。 淡橙色	底部片
59	ST-2	鉢	- (2.2) - 1.1	尖り気味の小さな平底	外面縦ハケ+ナデ 内面ナデ	0.5~2mm大の砂粒を含む。 淡橙色	底部片
60	ST-3	埋土甕	- (11.5) - 5.4	平底	叩目左上がり 内面丁寧なスリナデ	0.5~5mm大の砂粒を含む。 砂粒多し 淡黄橙色 器肉黒灰色	胴部下半
61	ST-3	鉢	18.6 9.1 - 2.0	外面に黒斑あり	外面の叩き、荒太 内面荒いハケ 底部ナデ	0.5~5mm大の砂粒を含む。 淡黄橙色	
62	ST-3	埋土鉢	9.1 5.5 - 2.4	小さな平底	外面右上がり叩き+ナデ 内面ハケ+丁寧なナデ 叩きの方向時計廻り 底面スリナデ	0.5~4mm大の砂粒を含む。 砂粒多し 淡黄橙色 器肉黒灰色	
63	ST-3	鉢	- (4.4) - 3.0	突起状の平底	外面叩き+ナデ 内面細かいハケ+ナデ 底面ナデ 内底面棒状工具先端による押さえ痕	0.5~4mm大の砂粒を含む。 砂粒多し 暗橙色 器肉黒灰色	底部片
64	ST-3	台付鉢	- (3.3) - -		内外面ハケ 内底面指頭によるナデ	0.5~5mm大の砂粒を含む。 淡黄色 器肉黒灰色	

出土遺物観察表 5

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.3 65	埋土 ST-3	高杯	- - - -		内外面ナデ	小砂粒を含む 黄橙色	脚部片
66	埋土 ST-3	土製支脚	(2.0) 8.4		底面端器表剥離と赤変 脚部との接合部は指頭による 押さえ 底面内側はスリナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 淡黄橙色	底部片 脚部欠損
67	埋土 ST-4	壺	11.8 (6.8) - -	複合口縁 口縁端内傾	口縁部貼付により拡張 内外面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
68	ST-4	壺	7.2 (5.7) - -	口縁端わずかに外反	口縁端部外面横ナデ、内面ハケ 外面叩目の上をスリナデ、頸 部下 さらに縦ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
Fig.4 69	ST-4 中央ビット	壺	- (23.0) 27.6 2.0	胴部外形横位の卵形 丸底状	外面丁寧なスリナデ 内面ハケ	0.5~6mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
70	ST-4 7	甕	- (20.5) 19.6 4.0	胴部最大径はやや上 半	底部まで叩目痕、内面縦方向 のハケ 外面に煤付着 器表の一部赤変	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 淡黄橙色	口縁部欠損
71 PL.30	ST-4 中央ビット	甕	- (19.6) 17.8 4.2	胴部中央に最大幅 体部外形は卵形	叩目右上がり、外面胴部上半 をナデ 頸部は指頭による押圧	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも黄橙色	
72	ST-4 3	甕	11.6 20.7 17.4 3.3		底部まで叩目痕 口縁部叩き上げ 外面に煤付着・器表一部赤変	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
73	ST-4 8	壺	10.6 10.7 12.8 4.8	外面体部上面に煤付 着	体部内外面共、ナデ 口縁部横ナデ 底部平底で、分割成形	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄色	搬入品か
74 PL.29・30	ST-4 14	高杯	12.4 (6.2) - -	低脚で裾部の開き大 体部は碗状	内外面丁寧なヘラミガキ、光 沢あり 内面のヘラミガキによる細線 は暗文風	小砂粒を含む 内外面とも淡褐色	搬入品 畿内系 (大和か)
75	ST-4 18	器台	8.6 7.5 - 9.4	口唇部丸みを持ち内 湾	外面丁寧なヘラミガキ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも黄橙色	
76	ST-4 1	鉢	13.2 6.8 - 4.4	底部は平底 口縁端は内湾	外面、叩きの上を丁寧にスリ ナデ 内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
77	ST-4 10	鉢	15.0 5.9 - 4.6	口縁端部丸味を持つ	底部に木葉痕	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
78	ST-4 4	鉢	15.8 6.4 - 3.2	底部は小さな平底		0.5~3mm大の砂粒 を含む。	
79	ST-4 15	鉢	13.2 6.6 - 3.0	底部は小さな平底	内外面とも丁寧なナデ	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
80	ST-4 9	鉢	10.8 7.5 - -	体部上半は内湾 丸底 口縁端部は丸味を持 つ	内外面とも丁寧なナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	

出土遺物観察表 6

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.4 81	ST-4 16	鉢	12.6 6.2 - 3.8	平底	内面ハケメ	0.5~2mm大の砂粒を含む。 内外面とも橙色	
82	ST-4 11	鉢	10.7 5.4 9.8 5.6	底部は丸底状 内面口唇部に指ナデによる段	口縁部は内外面共にナデ 外面、叩目の上をナデした後ヘラミガキ	0.5~4mm大の砂粒を含む。 内外面とも黄橙色	
83	C区 埋土 ST-4	鉢	10.8 4.3 - 4.0	平底	外面叩目残す	0.5~4mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡黄橙色	
84	ST-4 5	杯	10.0 2.8 - -	体部上半、指頭による作り出し	外面ナデ、内面ミガキの上ナデ	小砂粒を含む 内外面とも橙色	
85	C区 埋土 ST-4	杯	- (3.1) - 2.6	小形手づくね・ 体部上半を欠損 平底	内外面とも丁寧なナデ	砂粒少なし 内外面とも淡黄橙色 器内黒灰色	
Fig.5 86	D区 ST-5	壺	17.6 (4.4) - -	複合口縁 口縁端内傾	外面ハケ+口縁端横ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 内外面とも黄橙色	防長系
87	B区 ST-5	甕	17.2 (4.0) - -	複合口縁 口縁部外反	外面細かいタテハケ 内面、胴部上半横方向のヘラ ケズリ 口縁部横ナデ	小砂粒を含む 内外面とも淡黄色	口縁部片 搬入品(吉備)
88	ST-5 5	壺	15.6 (18.5) - -	胴部中央部に最大径	外面細かい叩きの上をハケ 口縁部内外面ハケ 胴部内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 内外面とも橙色 内面淡黄橙色	
89	ST-5 4	甕	- (32.2) - 3.2	胴部形状卵形 平底	外面、叩きの上をタテハケ 内面ハケ+棒状工具によるナデ	0.5~5mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡黄色	
90	ST-5	甕	14.8 (6.2) - -		外面叩き+タテハケ 内面ナデ	内外面とも橙色	
91	ST-5	甕	14.4 (6.0) - -		外面叩き+タテハケ	0.5~2mm大の砂粒を含む。 内外面とも橙色	
92	A区 ST-5	甕	- (11.0) - -		外面右上がり叩き+細かいハケ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒を含む。砂粒多し 内外面とも橙色	
93	A・B区 ST-5	甕	- (6.5) - 4.4		外面叩き	0.5~4mm大の砂粒を含む。砂粒多し 内外面とも橙色	底部片
94	C区 ST-5	甕	- (5.5) - 2.1		外面叩き 内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒を含む。砂粒多し 外面橙色 内面赤灰色	底部片
95	ST-5	甕	14.4 (10.0) - -	胴上部に最大径	口縁部叩き出し 内面細かいハケ+スリナデ	0.5~5mm大の砂粒を含む。 外面褐灰色 内面淡黄橙色	
96	D区 ST-5	甕	13.0 (7.8) - -		外面叩き 内面ハケ	0.5~6mm大の砂粒を含む。砂粒多し 内外面とも淡橙色	

出土遺物観察表 7

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig5 97	ST-5	甕	12.4 (7.7) - -		外面叩き、口縁部ハケ 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
98	ST-5	鉢	14.3 (5.3) - -		外面叩き+ナデ 内面ヘラミガキ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
99	C区 ST-5	鉢	11.4 (4.8) - -		外面ナデ 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
100	D区 ST-5	高杯	21.0 (5.0) - -		内外面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄色	
101	C区 ST-5	高杯	- (6.8) - 12.4	裾部は直線的に開く	内外面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
102	C区 ST-5	鉢	- (3.6) - 3.1		外面ナデ 内面細かいハケ 底部に指頭痕	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	底部片
Fig6 103	C区 ST-5	瓶	- - - -	底部底面に径1.0cm 大の小孔	底部穿孔は未貫通	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	底部片
104	ST-5 9	高杯	10.2 (6.3) - -	体部内湾	外面ミガキ 内面ナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面淡黄橙色	
105	ST-5	高杯	- (7.5) - -		外面ミガキ 脚部絞り 裾内面ハケ 透かし2孔残・3~4孔か	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
106	D区 下層 ST-5	高杯	- 5.5 - -		外面ミガキ 内面ハケ 透かし3孔残・4孔か	内外面とも橙色	
107	A区 ST-5	高杯	- (6.0) - -		外面ナデ+ハケ 内面ハケ 透かし1孔残・孔径1.4cm	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	脚部片
108	A区 ST-5	高杯	- (7.5) - -		外面ハケ+ミガキ 脚部絞り 透かし2孔残・4孔か 孔径0.4cm	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	脚部片
109	C区 ST-5	高杯	- (4.8) - -		外面ミガキ 内面連続ハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 内外面とも橙色	
110	C区 ST-5	高杯	- (4.3) - -		外面ミガキ 透かし4孔・1孔未貫通	0.5~2mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 内外面とも橙色	脚部片
111	ST-5	鉢	22.6 (5.8) - -		外面叩き+ハケ 内面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 内外面とも橙色	
112	ST-5	鉢	19.9 9.8 - 4.0		外面横方向の叩き+ハケ+ナデ 内面ハケ 底部内面スリナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 チャート多し 内外面とも淡黄橙色	

出土遺物観察表 8

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.6 113	C区 ST-5	鉢	21.0 6.8 - 3.7		外面叩き 内面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
114	ST-5 1	鉢	12.0 7.2 - 4.0		外面ナデ、体部下半に指頭圧痕 内面ハケ 底面に木葉痕	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
115	C区 ST-5	鉢	- (3.4) - 3.3	平底	外面ハケ 内面ナデ 底面に板状圧痕	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
116	ST-5 2	鉢	13.4 7.2 - 2.4	体部は直線的に外反 口縁部僅かに内湾	外面叩き+ナデ 内面ナデ、指頭圧痕	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
117	ST-5 8	鉢	9.5 8.0 - 1.4	小さな平底	外面ナデ 内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。軟質 内外面とも橙色	
118	A区 ST-5	鉢	- (4.1) - 4.0	平底	外面叩き 内面ハケ	内外面とも橙色	底部片
119	ST-5 13	鉢	11.5 5.8 - -		外面ナデ 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
120	C区 ST-5	杯	11.4 (4.1) - -			0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄色	
121	ST-5 1	鉢	9.6 7.5 - -	体部内湾 口縁部外反	外面叩き 内面ナデ、指頭圧痕残	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色 軟質	
122	A区 ST-5	杯	10.2 (4.5) - -		内外面ナデ 口縁部内面指頭圧痕	内外面とも橙色	
123	D区 ST-5	杯	10.2 3.7 - 4.0		内外面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
124	ST-5 3	杯	5.8 (3.1) - -		内外面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
125	ST-5	鉢	9.8 6.8 - 3.5	平底 口縁端外反	外面ナデ 内面ハケ	内外面とも橙色	
Fig.7 126	ST-5 6	杯	11.4 2.5 - 3.6		内外面ナデ	0.5~7mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 内外面とも橙色	
127	A区 ST-5	杯	9.0 2.8 - -		内外面ナデ 内面指頭圧痕顕著	0.5~5mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 内外面とも橙色	
128	C区 ST-5	(鉢)	- (1.6) - -		外面ヘラミガキ 内面ハケ+棒状工具による スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 外面橙色 内面暗青灰色	底部片

出土遺物観察表 9

挿入番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土 ・ 色調	備考
Fig.7 129	ST-5 9	鉢	10.0 5.7 - 3.1	平底	外面叩き+ナデ 内面ナデ	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
130	ST-5 11	杯	11.0 2.6 - 5.6		外面叩き 内面ハケ	0.5~5mm大の砂粒 を含む。軟質 内外面とも橙色	
131	ST-5	鉢	12.4 (3.3) - -		外面ハケ 内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
132	C区 ST-5	鉢	- (3.5) - 3.0		外面ナデ	砂粒を含む 内外面とも橙色	
133	ST-5	土製支脚	- (4.8) - 7.4		外面叩き	内外面とも淡黄橙色	
134	B区 ST-5	土製支脚	- 5.3 - -		外面叩き	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
135	ST-5	土製支脚	- (12.5) - -		内外面ナデ 指頭圧痕顕著	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも暗橙色	
136	ST-5 10	器台	6.0 4.2 - 7.9		内外面細かいハケ 中空	内外面とも橙色	
137	D区 ST-5	土製支脚	- - - -	角部		0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	角部片
138	B区 ST-5 1	土製支脚	- - - -	角部		砂粒を含む 内外面とも暗橙色	角部片
139	C区 ST-5	土製支脚	- - - -	角部		内外面とも橙色	角部先端片
140 PL.32	D区 ST-5	土製品 舟形	- - - -	手づくね 底面平坦	内外面ナデ 先端部は指頭によるつまみ出し 黒斑あり 側面の形状は舟の軸先状	小砂粒を含む 内外面とも淡橙色	破片
141 PL.32	ST-5	土製品 算盤玉	- 2.3 -	側面に山形波状の線 刻	ナデ 両面穿孔 重さ8.15g	淡黄橙色	
Fig.8 142	ST-6 16・18	壺	13.5 (17.9) - -	胴部中央部に最大径	外面叩きの上をタテハケ 内面ハケ、胴部は棒状工具に よるスリナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 淡黄橙色	
143	床 ST-6 6	壺	12.0 (8.0) - -		外面叩きの上をタテハケ 口縁内面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 内外面とも橙色	
144	床 ST-6	壺	16.2 5.7 - -	口縁ク字形に外反	内面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも黄橙色	

出土遺物観察表10

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig8 145	D区 ST-6	壺	14.0 (5.4)	- -	口縁端部上方に延び る 複合口縁		内外面とも橙色	
146	D区 ST-6	壺	8.0 (6.5)	- -		外面タテハケ 内面細かいハケ+スリナデ	内外面とも黄橙色	
147	床 ST-6	壺	- (9.7) 14.6 5.2		胴部中央部に最大径 平底 胴部が張る	外面ヘラミガキ 内面ハケ+ナデ	外面橙色 内面黒褐色	
148	床 ST-6	壺	17.8 (5.5)	- -	口縁端部内傾	口縁部横ナデ 内外面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面黄橙色 内面褐灰色	
149	B区 ST-6	壺	15.6 (5.5)	- -	複合口縁	外面ミガキ 内面スリナデ	外面淡黄橙色	
150	床 ST-6	壺	17.2 (26.0)	- -	複合口縁 大型 胴部張る	外面叩きの上をハケ 内面ハケ+ナデ 口唇部に刻目	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも黄橙色	
151	ST-6	壺	22.0 (4.8)	- -		口縁部に3列の櫛描き波状文	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	口縁部片
152	ST-6	壺	17.6 (6.5)	- -	複合口縁	内外面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	口縁部片
153	床 ST-6	鉢	13.0 (4.5)	- -	複合口縁	外面ナデ 内面細かいハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	口縁部片
154	B区 ST-6	壺	- -	- -	頸部に粘土帯貼付	頸部に波状文	内外面とも淡黄色	頸部片
155	ST-6	壺	- -	- -		口縁部外面に櫛描き波状文	内外面とも橙色	口縁部片
156	床 ST-6	壺	- -	- -		口縁部櫛描き波状文	内外面とも橙色	口縁部片
157	ST-6	壺	- -	- -		口縁部櫛描き波状文	内外面とも橙色	口縁部片
Fig9 158	ST-6	壺	26.8 (5.4)	- -	複合口縁	外面ハケ 内面ハケ+ナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 外面橙色 内面灰白色	口縁部片
159	A区 ST-6	壺	26.1 (4.5)	- -	口縁開く	外面ハケ 内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも明黄橙色	口縁部片
160	床 ST-6	壺	28.2 (3.5)	- -		口縁部に波状文 外面ハケ 内面ハケ+スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 内外面とも淡黄橙色	口縁部片

出土遺物観察表11

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.9 161	ST-6 6	壺	20.6 (2.8) - -		口唇部に列点文 内外面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。軟質 内外面とも橙色	口縁部片
Fig.11 162	床 ST-6 22	壺	20.2 (27.0) - -	口唇部に擬凹線 胴中央部に最大径	外面ハケ+ナデ 内面ハケ+スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
163	C・D区 ST-6	壺	18.3 (5.8) - -		内外面細かいハケ+スリナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面橙色	口縁部片
Fig.9 164	C区 ST-6	甕	- (6.4) - 1.0		外面タタキ 内面スリナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
165	C区 ST-6 20	壺	- (18.0) - 8.4		外面叩き+ハケ 内面ハケ	0.5~6mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面灰白色	
166	床 ST-6	壺	- (9.4) - (6.0)		内外面ナデ	1~3mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄橙色	
167	床 ST-6	甕	- (18.3) - 5.5		外面左上がりの叩き+ハケ 内面ハケ+スリナデ 底部周辺までタタキ痕	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
168	床 ST-6	甕	- (8.0) - -		外面タタキ+ハケ 内面スリナデ	1~3mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄橙色	
169	床 ST-6	甕	- (8.2) - -	丸底	外面ハケ 内面ナデ	1~2mm大の砂粒を 含む。 外面橙色 内面淡黄橙色	底部片
170	ST-6	甕	- (9.7) - -	尖り気味の丸底 底部に1孔穿孔	外面タタキ 内面スリナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	底部片
Fig.10 171	ST-6	甕	15.0 24.7 17.4 4.8	円盤状の平底 口縁く字形	外面左上がりの叩き+ナデ 内面ハケ+スリナデ 底部周辺指頭圧痕	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
172	床 ST-6	甕	- (21.0) - 3.8		外面叩き+ハケ 内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 外面淡橙色 内面赤橙色	
173	床 ST-6	甕	14.4 - 19.4 4.3	胴上部に最大径	外面タタキ 内面ハケ 内面頸部に指頭圧痕	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
174	B区 ST-6	甕	13.0 - 23.6 4.3	胴上部に最大径	口縁部ハケ・胴部外面タタキ 内面ハケ・頸部指頭圧痕 底部内面スリナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄色	
175	床 ST-6	甕	18.8 (21.0) 22.4 -	胴部中程に最大径 口縁く字形	外面右上がりの叩き+ナデ 内面ハケ 内面頸部に指頭圧痕	0.5~3mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 内外面とも淡橙色	
176	D区 床 ST-6	甕	16.6 (15.7) - -	口縁く字形	外面、叩き+ナデ 内面ハケ・頸部下スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む 内外面とも淡橙色	

出土遺物観察表12

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土 ・ 色調	備考
Fig.11 177	床 ST-6	甕	17.6 (12.6)	- -		外面叩き+ハケ 内面ハケ	1~3mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡橙色	
178	D区 ST-6	甕	16.6 (12.0)	- -	口縁く字形に外反	外面叩き 内面ハケ	内外面とも淡橙色	
179	床 ST-6	甕	16.6 (9.3)	- -		上胴部左上がりの叩き 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡橙色	
180	ST-6 5	甕	16.0 (10.5)	- -	口縁く字形に外反 外面器表一部赤変	胴部平行叩き・口縁部ハケ 内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄橙色	
181	床 ST-6	甕	13.0 (12.2)	- -	口縁く字形に外反	外面叩き 内面ハケ+スリナデ	0.5~2mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄橙色	
182	床 ST-6	甕	15.5 (10.7)	- -		上胴部右上がりの叩き 内面ハケ+縦方向のスリナデ	0.5~2mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄橙色	
183	D区 ST-6	甕	12.6 11.5	- -	胴部張る	外面叩き+ナデ・口縁部ナデ 内面ハケ+スリナデ	0.5~2mm大の砂粒を 含む。 外面淡橙色 内面淡黄橙色	
Fig.9 184	ST-6 20	甕	- 10.7 4.4	- -	平底 胴部下半張る	外面は叩き+ハケ 内面ハケ+スリナデ	0.5~7mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄橙色	
Fig.11 185	床 ST-6	甕	15.2 (9.2)	- -		外面叩き+ナデ 内面ハケ+縦方向のスリナデ 器厚薄い	0.5~4mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄橙色	
186	床 ST-6	甕	14.5 (8.5)	- -		口縁部ハケ 外面叩き+ハケ 内面ハケ+縦方向のスリナデ	0.5~3mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡橙色	
187	床 ST-6	甕	15.4 (8.0)	- -	口縁く字形に外反	外面叩き+ナデ 内面ハケ+縦方向のスリナデ	0.5~3mm大の砂粒を 含む。 内外面とも橙色	
188	床 ST-6	甕	13.6 (9.6)	- -	口縁く字形	外面叩き+ナデ 内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡橙色	
189	床 ST-6	甕	15.0 (6.0)	- -		外面叩き 内面ハケ 器厚薄い	0.5~3mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡橙色	
Fig.9 190	床 ST-6	甕	- (12.5) 4.0	- -	平底	外面叩き 内面ハケ+縦方向のスリナデ 底部外面タテハケ	0.5~4mm大の砂粒を 含む。 外面淡黄橙色 内面橙色	
191	床 ST-6	甕	- (6.4) 3.0	- -	平底	外面叩き+ハケ 底部内面スリナデ	0.5~2.5mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄橙色	底部片
192	B区 ST-6	甕	- (4.3) -	- (4.2)	平底	外面叩き 内面スリナデ	外面黄橙色 内面淡橙色	底部片

出土遺物観察表13

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土 ・ 色調	備考
Fig.12 193	D区 ST-6	高杯	26.6 (5.9)	- -	段部有稜	外面ナデ+ミガキ 内面ナデ+ミガキ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄色	杯部片
194	床 ST-6	高杯	- (4.5)	- -		外面ナデ	内外面とも橙色	脚部片
195	ST-6	高杯	- (6.5)	- -		内面絞り痕	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	脚部片
196	ST-6 1	高杯	- (8.4)	- -		内外面ヘラミガキ 透孔2残	内外面とも灰白色	
197	床 ST-6	高杯	- (5.0)	- -	杯部碗状	内外面ヘラミガキ	内外面とも淡黄橙色	
198	D区 ST-6	鉢	- (3.0)	- 4.0		外面ナデ 内面ハケ+スリナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面灰褐色	底部片
199	C区 ST-6	鉢	18.4 (7.0)	- -		外面ナデ 内面ハケ	内外面とも淡黄橙色	
200	床 ST-6	鉢	- 16.7 (5.8)	- -		外面ナデ 内面ハケ	内外面とも淡黄橙色	
201	床 ST-6	鉢	13.4 5.7	- -	丸底	外面ハケ 内面ハケ	1~2mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄橙色	
202	床 ST-6	鉢	12.6 (5.8)	- -	体内内湾	内面ハケ	内外面とも淡黄橙色	
203	B区 ST-6	鉢	10.6 6.1	- 1.8	体内内湾	外面ハケ 内面ハケ	内外面とも明赤褐色	
204	C区 ST-6	鉢	11.2 (4.9)	- -		外面ナデ 内面細かいハケ+ナデ	2~3mm大の砂粒を 含む。 内外面とも橙色	
205	床 ST-6	鉢	- (3.8)	- -		外面ナデ 内面ハケ+スリナデ	小砂粒を含む 内外面とも橙色	底部片
206	ST-6 21	土製支脚	- -	- -	角部(二又)		小砂粒を含む 内外面とも淡橙色	
207	埋土 ST-6 21	土製支脚	- -	- -	角部		内外面とも淡橙色	
208	ST-6	土製支脚	- (6.8)	- 6.8		外面叩き	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	

出土遺物観察表14

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.12 209	A区 ST-6	土製支脚	- (9.5) - 6.0		外面ナデ	0.5~4mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡橙色	
210	C区 ST-6	土製支脚	- (10.6) - -		外面ナデ・内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 外面淡黄橙色 内面明褐色	
211	床 ST-6	器台	- (6.2) - 7.8	土製支脚	外面叩き+ナデ 内面ハケ+スリナデ 中空	0.5~4mm大の砂粒を含む。 内外面とも橙色	
212	ST-6 2	器台	- - - -	土製支脚 手づくね	外面ナデ 中空	0.5~3mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡橙色	
213	ST-6	器台	6.4 3.0 - 4.4	土製支脚 手づくね	外面ナデ	内外面とも淡黄橙色	
214	B区 ST-6	土製支脚	- (5.0) - 9.6		外面ナデ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡黄橙色	
215	B区 ST-6	土製支脚	- (5.0) - 9.6		外面ナデ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡黄橙色	
216	床 ST-6	土製支脚	- (4.5) - 8.1		外面ナデ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 内外面とも橙色	
217	ST-6	土製支脚	- (3.5) - 8.0		内外面ナデ	0.5~4mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡黄橙色	
218	D区 ST-6	土製支脚	- (5.0) - 7.1		外面叩き 内面ナデ	内外面淡橙色	
219	D区 ST-6	土製支脚	- (4.5) - 7.8		外面叩き+ナデ	0.5~2mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡黄橙色	
220	B区 ST-6	器台	- (2.7) - 9.8	土製支脚	内外面ナデ 中空	0.5~2mm大の砂粒を含む。 内外面淡橙色	
221	床 ST-6	杯	2.8 3.6 - 3.6	小形手づくね	外面叩き+ナデ 内面ナデ 42.63g	0.5~2mm大の砂粒を含む。 内外面橙色	完形
222	床 ST-6	土玉	全幅2.6 全厚2.7 孔径0.2 -	中央部に1孔 算盤玉		黄橙色	1/2破片
223 PL.35	D区 ST-6	土玉	全幅2.9 全厚2.4 孔径0.4 -	中央部に1孔 丸玉	側面に目・鼻・口を表現したと みられる描写状の刺突痕あり。 16.38g	黄橙色	完形
Fig.13 224	ST-7	壺	22.2 (3.5) - -	口縁端内傾	内外面ハケ	0.5~4mm大の砂粒を含む。 外面淡黄橙色 内面淡黄色	

出土遺物観察表15

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.13 225	B区 ST-7	壺	20.0 (7.0)	-	口縁大きく外反	外面縦ハケ 内面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面橙色	
226	ST-7 3	壺	- (8.6) 12.0	-	胴部中程に最大径 胴部球形状	外面叩き+ハケ+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面淡黄橙色 内面橙色	
227	B区 ST-7	壺	12.0 (7.1)	-	複合口縁 口縁内傾	内外面ハケ 内面頸部下スリナデ	内外面橙色	
228	ST-7	壺	9.4 (8.7)	-		外面叩き 内面スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面淡黄橙色	
229	B区 ST-7	甕	14.2 (4.3)	-	複合口縁	口縁部横ナデ 外面ハケ・内面頸部下ヘラ割り 口縁部煤付着	黒雲母・角閃石の細 粒を含む。胎土精緻 外面茶褐色 内面明褐色	搬入品 (吉備)
230	C区 ST-7	高杯	- (6.5)	-		外面ハケ 内面スリナデ 透孔 5孔残 (5孔)	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面黄灰色	
231	A区 ST-7	高杯	- (6.6)	-		外面ハケ 内面ナデ 透孔 4孔	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
232	C区 ST-7	高杯	- (4.0)	-		内外面ナデ 透孔1孔残	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも灰白色	
233	ST-7	器台	- (2.7)	-		内外面ナデ 透孔 2孔残	内外面橙色	
234	ST-7 3	鉢	- (7.0)	-		外面叩き+ナデ 内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面橙色	
235	ST-7 4	鉢	16.4 (7.5)	- 5.0	底部平坦	外面は底部周辺まで叩き 内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面橙色	
236	ST-7 5	鉢	12.6 (7.7)	-	底径小	外面ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面橙色	
237	B区 ST-7	鉢	- (4.2)	- 1.0	底部丸底状	外面叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面淡橙色	
238	C区 ST-7	鉢	- (4.1)	- 2.0	小さな平底	外面叩き+ハケ 内面スリナデ	砂粒を含む 外面淡黄色 内面淡黄橙色	底部片
239	ST-7 2	鉢	15.2 6.9	- 4.2		外面叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ	小砂粒を含む 内外面とも淡橙色	
240	ST-7 1	鉢	12.4 6.5	- 4.0	平底	外面叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ	小砂粒を含む 内外面とも黄橙色	

出土遺物観察表16

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土 ・ 色調	備考
Fig.13 241	床 ST-7	鉢	14.0 6.0 - 3.4	円盤状の平底	外面ナデ 内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
242	ST-7 5	鉢	12.0 6.9 - 2.4		外面ナデ 内面スリナデ (削り状)	内外面褐灰色	
243	ST-7 3	鉢	- (2.8) - 3.2	平底	外面叩き+ナデ 内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面淡黄色	
244	床 ST-7	鉢	9.8 5.6 - -		外面叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面淡黄橙色	
245	D区 ST-7	鉢	9.0 4.6 - 3.0	平底	外面ナデ 内面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面淡黄色	
246	ST-7	鉢	10.4 5.4 - 4.4	体部内湾 平底	外面ナデ 内面ハケ	内外面とも淡橙色	
247	ST-7	鉢	7.2 3.3 - 2.0	小形 (杯状)	外面叩き+ナデ+縦ハケ 内面ハケ+スリナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面淡黄色	
248	B区 ST-7	土製支脚	- (5.5) - 9.7		外面叩き 内面ナデ	外面明褐灰色 内面淡橙色	
249	ST-7	土製支脚	- - -	角部		橙色	
Fig.14 250	ST-7	土製支脚	- - -	角部		黄橙色	
251	ST-7	土製支脚	- - -	角部		淡黄橙色	
252	C区 ST-7	壺	- - -		口縁部波状文	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面淡黄橙色	口縁部片
253	ST-7	壺	- - -		口縁部ハケによる刺突	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面橙色	口縁部片
254	ST-7	甕	- (9.0) 3.0	平底	外面叩き+ハケ 内面ハケ+スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面淡橙色	底部片
255	ST-7	甕	- (7.0) - 1.4	平底	外面叩き+タテハケ 内面スリナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 外面淡黄橙色 内面淡橙色	底部片
256	ST-7	甕	13.7 27.8 - 3.2	平底 口縁く字形	外面右上がり叩き+口縁ハケ 内面ハケ+スリナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	

出土遺物観察表17

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土 ・ 色調	備考
Fig.14 257	ST-7	甕	- (18.7) 18.8 -		外面叩き+ナデ 内面タテハケ+スリナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
258	ST-7	甕	12.8 (12.6) - -	上胴部に最大径	外面叩き+ナデ 内面ハケ+スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
259	ST-7	甕	15.0 (13.6) - -		外面叩き+ハケ+ナデ 内面ハケ+ナデ	内外面とも淡橙色	
260	ST-7	甕	- (19.5) - 2.8	上胴部に最大径	外面叩き+タテハケ 内面ハケ+ナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 外面暗茶褐色 内面橙色	
261	ST-7	甕	16.6 (7.2) - -	口縁く字形	外面右上がり叩き+ハケ+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 外面淡橙色 内面橙色	
262	D区 ST-7	甕	14.0 (7.8) - -	口唇部に刻み	外面叩き(口縁まで) 内面ハケ+ナデ 内面口縁部ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 外面灰褐色 内面淡黄橙色	
Fig.15 263	ST-8 8	壺	15.2 (6.3) - -		外面ハケ 内面スリナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
264	ST-8 2	壺	16.0 (16.3) - -		外面叩き+ハケ 内面ハケ+縦方向スリナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
Fig.16 265	B区 ST-8	壺	13.6 (7.8) - -	複合口縁 口縁上部内傾	口縁上部に波状文 外面ハケ+ヘラミガキ 内面ハケ+ヘラミガキ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
266	ST-8	壺	- (9.5) - 2.8	口縁部直立 胴部張る 底部平坦	外面叩き+ナデ 内面スリナデ 底面に叩き痕	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
267	B区 ST-8	壺	9.8 (8.7) - -		外面叩き+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
268	B区 ST-8	壺	7.0 (4.0) - -	口縁端部外反	外面ナデ 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
269	A区 ST-8	鉢	16.2 (7.1) - -		外面ナデ 内面ハケ+スリナデ	砂粒多し 外面淡黄橙色 内面橙色	
270	ST-8	甕	10.0 12.9 - 2.4		外面右上がりの叩き+ナデ 内面ハケ+スリナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
271	A区 ST-8	甕	12.0 (12.0) - -		外面叩き+ハケ 内面細かいハケ+ナデ 器厚薄い	外面淡橙色 内面淡黄橙色	
272	ST-8	甕	13.0 (22.1) - -	長胴	外面左上がり叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 外面淡橙色 内面橙色	

出土遺物観察表18

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.16 273	ST-8 14	甕	10.5 20.6 3.0		平底 長胴	外面叩き+タテハケ 内面ハケ+スリナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
274	ST-8 16	甕	- (18.5) - -			外面叩き 内面ハケ+スリナデ	小砂粒を含む 外面淡黄橙色 内面淡橙色	
275	B区 ST-8	甕	15.0 (7.2) - -			外面右上がりの叩き 内面ハケ+ナデ 頸部に指頭圧痕	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
276	ST-8 7	甕	- (13.0) - 2.2		底部平坦	外面、叩きの上を縦ハケ+ナデ 内面ハケ	内外面とも淡橙色	
277	ST-8 11	(壺)	- (16.8) - 6.4		胴部中程に最大径 底面丸底状	外面叩き+タテハケ+ナデ 内面ハケ+スリナデ	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
278	ST-8	(壺)	- (7.3) - 8.0			外面叩き+タテハケ+ナデ 内面ハケ+スリナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
Fig.15 279	A・B区 ST-8	甕	30.6 (23.0) - -		平底	外面叩き+ハケ(口縁部) 内面ハケ+スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
280	D区 ST-8	甕	23.0 (6.0) - -			外面左上がり叩き+ハケ+ナデ 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
281	D区 ST-8	甕	15.0 (9.5) - -		胴部中程に最大径	外面叩き+ナデ 内面ハケ+縦方向スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
282	ST-8 3	甕	16.8 (17.8) - -		胴上部に最大径	外面叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ	内外面とも橙色	
283	D区 ST-8 2	甕	- (12.8) - 7.2		底部丸底状	外面叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面灰白色	
284	A区 ST-8	甕	- (22.2) - -			外面叩き+タテハケ 内面ハケ+スリナデ	外面淡橙色 内面黒褐色	
Fig.17 285	ST-8	甕	- (4.7) - 4.4		小さな平底で突出	外面叩き 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	底部片
286	ST-8 4	甕	- (6.4) - (2.5)		底部叩き残	外面叩き+タテハケ 内面スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面黄橙色 内面淡橙色	底部片
287	A区 ST-8	甕	- (4.1) - -			外面叩き+ナデ 内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	底部片
288	ST-8	甕	- (7.5) - 4.0			口縁部横ナデ 外面横ハケに細かい縦ハケ 胴部内面に指頭圧痕	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	底部片

出土遺物観察表19

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.17 289	D区 ST-8	鉢	- (6.6) - 2.6	平底	外面叩き+ナデ 内面細かいハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 外面淡黄橙色 内面淡橙色	底部片
290	ST-8	鉢	- (5.3) - 3.1	突出した小さな平底	外面叩き+タテハケ 内面細かいハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
291	C・D区 ST-8	甔	10.4 13.0 - 2.6		外面叩き+ナデ 内面ナデ 外面穿孔の円孔あるも未貫通	小砂粒を含む 外面橙色 内面淡黄色	
292	D区 ST-8	甔	- (9.8) - 3.4		外面叩き+ナデ 内面スリナデ 内面穿孔の円孔あるも未貫通	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
293	ST-8 8	高杯	- - - -		外面ヘラミガキ 内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	脚部片
294	A区 ST-8 6	鉢	13.4 8.3 - 3.9		外面ナデ 内面細かいハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
295	ST-8 9	鉢	14.4 5.9 - 4.0	平底	内外面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
296	ST-8 5	鉢	10.6 6.6 - 9.5	台付鉢	外面スリナデ 底部周辺指頭圧痕 内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも黄橙色	
297	A区 ST-8	鉢	13.0 (6.0) - -		外面ナデ 内面スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
298	ST-8	鉢	18.0 5.0 - 6.4		外面スリナデ 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面淡黄橙色 内面橙色	
299	B区 ST-8	器台	- (3.5) - 5.7		内外面ナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
300	ST-8	鉢	13.8 6.4 - 2.7		外面ナデ 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
301	ST-8 15	鉢	11.7 7.2 - -		外面叩き 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面淡橙色 内面淡黄橙色	
302	ST-8 16	鉢	11.5 6.7 - 4.9	台付鉢	内外面スリナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
303	A区 ST-8	鉢	13.5 7.6 - 4.8		外面叩き 内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面灰黄色	
304	B区 ST-8	鉢	14.4 5.9 - 2.1		外面ナデ 内面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	

出土遺物観察表20

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 口径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.17 305	A区 ST-8	鉢	- (4.8) - 1.8		外面右上がりの叩き 内面ハケ+スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも黄橙色	
306	ST-8	鉢	12.4 5.4 - 0.8	丸底状	外面ナデ+タテハケ 内面細かいハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも灰白色	
307	ST-8 6	鉢	12.3 5.3 - -	丸底状	外面ナデ 内面細かいハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
308	A区 ST-8	鉢	10.2 5.8 - 2.2	小さな平底	外面ナデ 内面細かいハケ+スリナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面淡橙色	
Fig.18 309	A区 ST-8	鉢	14.0 (4.0) - -	台付鉢	外面タテハケ 内面スリナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
310	ST-8	鉢	14.3 6.9 - 4.0	不整形	外面ナデ 内面細かいハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
311	B・C区 ST-8	鉢	12.0 5.3 - 1.8	小形丸底状	外面ハケ+ナデ 内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
312	ST-8 5	鉢	10.0 5.6 - -		外面ナデ 内面ハケ (かきとり・土器左 回転)	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
313	B区 ST-8	壺	- - - -		外面ハケ 内面ナデ 口縁部横ナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	口縁部片
314	ST-8	壺	- - - -	複合口縁 外面に櫛描波状文	口縁部横ナデ	内外面とも橙色 器肉暗灰褐色	口縁部片
315	D区 ST-8	壺	- - - -	口縁部に櫛描波状文	内外面共ナデ	内外面とも黄橙色	口縁部片
316	ST-8	壺	- - - -			砂粒含む 外面黄茶色 内面黄橙色	口縁部片
317	D区 ST-8	壺	- - - -	口縁部擬凹線	外面ハケ 内面ハケ+ナデ 口縁部横ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面淡黄橙色	口縁部片
318	C区 ST-8	壺	- - - -	口縁部に櫛描波状文 (2列)	外面ハケ 内面ハケ+横ナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	口縁部片
319	D区 ST-8	壺	- - - -	口縁部にヘラ先による 刺突		内外面とも淡橙色	口縁部片
320	ST-8	土製支脚	- - - -	角部	ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 橙色	

出土遺物観察表21

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土 ・ 色調	備考
Fig.18 321	C区 ST-8	土製支脚	- (4.6) -	- 7.4		外面叩き	0.5~3mm大の砂粒を含む。 淡黄橙色	
322	A・B区 ST-8	土製支脚	- (4.4) -	- 7.6		外面叩目残、口縁部ナデ 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 淡黄橙色	
323	ST-8	土製支脚	- (6.0) -	-		外面指頭圧痕	淡黄橙色	
324	A区 ST-8	土製支脚	- (3.9) -	- 5.0		外面指頭圧痕	0.5~3mm大の砂粒を含む。 淡黄橙色	
325	D区 ST-8	土製支脚	- (2.8) -	- 6.4		外面指頭圧痕	0.5~4mm大の砂粒を含む。 淡黄橙色	
326	A区 ST-8	器台	- (1.7) -	- 2.8	土製支脚	底部外面、叩き+ナデ+叩き 内底面指ナデ、他ハケ ハケ原体幅3.30cm以上	淡橙色	
327	ST-8	土玉	全幅3.0 全厚2.3 孔径0.55 -		算盤玉	両面穿孔による1孔 16.66 g	雲母・角閃石片の細粒を含む。 暗灰褐色 一部灰白色	搬入品
Fig.19 328	ST-9	壺	12.4 (5.0) -	-	口縁上部内傾	外面ハケ+ナデ 内面横方向の細かいハケ	0.5~4mm大の砂粒を含む。 淡黄橙色	口縁部片
329	ST-9	高杯	- (4.2) -	-		外面タテハケ+ナデ	0.5~2mm大の砂粒を含む。 外面橙色 内面褐灰色	脚部片
330	ST-9	高杯	- (5.3) -	-		内外面ナデ	0.5~2mm大の砂粒を含む。 内外面橙色	脚部片
331	ST-9	鉢	20.5 (8.7) -	-	円盤状の平底	外面ナデ 内面ハケ	0.5~4mm大の砂粒を含む。 内外面橙色	
332	ST-9	鉢	17.6 (6.8) -	-		外面ナデ 内面ハケ+ナデ	内外面淡橙色	
333	ST-9	鉢	- - -	4.6	平底	外面ナデ 内面強いスリナデ	1~2mm大の砂粒を含む。 内外面淡黄橙色	
334	ST-9	鉢	15.2 8.7 -	3.0	平底状	外面ナデ 内面細かいハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 内外面橙色	
Fig.20 335	ST-9 2・6	壺	- (29.2) 27.5 6.2		胴部横卵形 胴部中程に最大径 平底	外面叩き+タテハケ+ナデ 内面細かいハケ+縦方向のスリナデ 胴部下位に指頭圧痕 黒斑あり	0.5~4mm大の砂粒を含む。 内外面淡黄橙色	
336	ST-9 3・7	甕	13.8 27.3 -	8.2		外面左上がりの叩き 口縁部指ナデ 内面タテハケ+ナデ	0.5~5mm大の砂粒を含む。 内外面淡黄橙色	

出土遺物観察表22

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.20 337	ST-9 8	甕	15.4 (23.7) - -		外面左上がりの叩き 内面ハケ+ナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面淡黄橙色	
338	ST-9 5	甕	- (24.7) 18.0 2.4	長胴 小さな平底 底面叩き痕	外面叩き+タテハケ+ナデ 内面タテハケ+ナデ 外面のタテハケは底部から胴 部中位まで	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 内外面淡橙色	
339	ST-9 1・3	甕	- (15.8) 14.6 -	長胴であるが胴部張 る	外面叩き+タテハケ+ナデ 内面ハケ+スリナデ 底部外面周囲を入念にタテハケ 器表一部赤変	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
340	ST-9 6	甕	- (12.8) - -	丸底	外面叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ	内外面とも淡褐色	
341	ST-9	甕	13.0 (5.9) - -		叩目左上がり・頸部指ナデ 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄色	口縁部片
342	ST-9	甕	- (6.9) - 3.6	丸底状	叩目右上がり・スリナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 淡黄橙色	
343	ST-9	甕	- (6.3) - 2.2	小さな平底	外面叩き+ナデ+タテハケ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
Fig.21 344	C区 ST-10	壺	16.6 (4.7) - -		外面ハケ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	口縁部片
345	C区 ST-10	壺	11.0 (4.2) - -	口縁端に緩い1条の 沈線	口縁外面縦方向のヘラミガキ 内面横方向のスリナデ	外面淡茶褐色 内面茶褐色	搬入品か
346	A・D区 ST-10	壺	- (5.4) - 1.4	胴部張る	外面丁寧なナデ 内面ハケ+スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面淡黄色	
347	A区 ST-10	甕	16.4 (8.5) - -		外面叩き+ハケ 内面ハケ	内外面とも淡橙色	
348	床 ST-10	甕	11.8 (5.6) - -		外面叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ 内面頸部に指頭圧痕	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
349	C・D区 ST-10	甕	9.5 (11.4) - -	口縁端部丸味を持つ	外面叩き+タテハケ+ナデ 内面ハケ+スリナデ 内面頸部に指頭圧痕 内面胴部下半縦方向のスリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
350	A・C・D区 ST-10	鉢	10.4 9.5 - -	底部は尖り気味	外面スリナデ+ハケ 内面スリナデ	内外面とも橙色	
351	C区 ST-10	鉢	9.4 9.6 - 1.8	底部は小さな平底	外面タテハケ 口縁部指ナデ 内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
352	床 ST-10	壺	- (4.4) - 3.3		外面ナデ 内面細かいハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	

出土遺物観察表23

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig21 353	A区 ST-10	鉢	- (4.3) -	突出した小さな平底	外面叩き・底部ハケ 内面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
354	C区 ST-10	鉢	- (5.2) -	突起底	外面ナデ 内面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
355	ST-10	鉢	13.4 5.1 -		外面叩目残す 内面ナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄色	
356	A区 ST-10	鉢	19.4 (3.6) -	体部器高低く浅い	内外面ハケ	1~2mm大の砂粒を 含む。 内外面とも橙色	
357	D区 ST-10	鉢	11.4 (6.8) -	底部は小さな平底	外面叩き+スリナデ 内面ハケ+ナデ	内外面とも淡橙色	
358	D区 ST-10	鉢	17.0 6.0 -	平底	外面ナデ 内面細かいハケ+ナデ	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
359	C区 ST-10	壺	- - -	頸部粘土帯に格子目		内外面とも淡黄色	頸部片
360	D区 ST-10	高杯	- (6.3) -		外面丁寧なヘラミガキ 内面に絞り痕	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面淡黄橙色	脚部片
361	D区 ST-10	高杯	- (2.8) -		外面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	脚部片
362	床 ST-10	杯	- (2.8) -	小形手づくね	外面タテハケ 内面ナデ	外面黄橙色 内面明褐灰色	ミニチュア土器
Fig22 363	ST-11 7・9	壺	15.8 48.8 34.8 6.2	複合口縁 大型 平底	外面叩き+タテハケ+ナデ 内面ハケ 頸部指頭圧痕	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 外面とも橙色 内面黄橙色	
364	埋土 ST-11	壺	27.0 (2.6) -	口縁部に櫛描波状文	外面ハケ 内面ハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。軟質 内外面とも橙色	口縁部片
365	ST-11 8	壺	22.4 (7.0) -	口縁部擬凹線	外面叩き+ハケ 内面ハケ	内外面とも淡黄色	口縁部片
366	埋土 ST-11	甕	16.4 (4.0) -	口縁部3本凹線	外面ナデ 内面ハケ 口縁部横ナデ	小砂粒を含む 外面橙色 内面淡橙色	搬入品か吉備系 土器胎土は在地 土器に類似
367	ST-11	甕	10.6 (4.1) -		外面右上がりの叩き 内面ナデ	内外面とも橙色	口縁部片
368	ST-11 7	壺	15.0 (5.5) -		外面ハケ 口縁部指ナデ 内面細かいハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面黄橙色 内面褐灰色	口縁部片

出土遺物観察表24

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土 ・ 色調	備考
Fig22 369	ST-11 7・9	壺	20.6 (13.0) - -		外面ハケ 内面ハケ 口縁部横ナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	口縁部片
370	ST-11 3	壺	- (12.3) - -	平底	外面タテハケ 内面スリナデ	1~2mm大の砂粒を 含む。 外面黄橙色 内面淡黄橙色	底部片
371	ST-11	壺	- (21.0) - 8.0	大型 平底	外面叩き+細かいタテハケ 内面ハケ+スリナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面淡黄橙色	
372	ST-11 8	甕	15.4 (11.0) - -		口縁部まで叩き 叩き右上がり 内面ハケ+縦方向のスリナデ	1~3mm大の砂粒を 含む。 内外面とも橙色	
Fig23 373	ST-11	甕	- (6.7) - 4.6	平底	外面叩き+ナデ+タテハケ 内面タテハケ+ナデ	内外面とも淡橙色	底部片
374	埋土 ST-11	甕	- (3.7) - 6.6	底部平坦	外面叩き+ナデ+ハケ 内面ハケ+スリナデ	内外面とも淡黄色	底部片
375	ST-11	甕	- (3.7) - 6.6	平底	外面タテハケ 内面ハケ	1~2mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄橙色	底部片
376	埋土 ST-11	甕	- (4.3) - 4.0	平底	外面叩き+タテハケ 内面ハケ+ナデ	内外面とも淡橙色	底部片
377	ST-11	甕	- (3.8) - (4.0)	平底	外面叩き+タテハケ 内面ナデ	1~2mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄橙色	底部片
378	ST-11	甕	- (2.2) - 8.6	平底	外面ナデ+ハケ 内面ナデ	1~2mm大の砂粒を 含む。 外面淡黄橙色 内面褐色	底部片
379	ST-11	甕	- (1.5) - 6.1	平底状	外面ナデ+ハケ 内面ハケ+ナデ 底部貼付	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面淡橙色 内面橙色	底部片
380	埋土 ST-11	甕	- (2.2) - 2.0	平底	外面叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	底部片
381	ST-11	甕	- (2.5) - 4.4	平底	外面叩き+タテハケ 内面ナデ 底面に叩き痕	外面灰褐色 内面淡橙色	底部片
382	埋土 ST-11	甕	- (3.0) - -	平底	外面ナデ 内面ハケ	内外面とも黒褐色	底部片
383	ST-11	壺	- - - -	頸部粘土帯にハケ先 による刺突文	外面ハケ+ナデ 内面ナデ	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面淡黄橙色	頸部片
384	ST-11	壺	- - - -	口縁部櫛描き波状文	口縁部横ナデ 内面ナデ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	口縁部片

出土遺物観察表25

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.23 385	ST-11	鉢	14.4 6.4 - -	丸底状	外面丁寧なナデ 内面ハケ（土器右回転）	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
386	ST-11 4	鉢	10.4 7.1 - 1.5	体部内湾 口縁端部つまむ 小さい平底	外面ナデ+タテハケ 内面細かいハケ（連続） 底面スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
387	ST-11	鉢	9.0 (4.7) - -		外面ナデ 内面ハケ+ナデ 口縁部横ナデ	外面淡黄橙色 内面褐色	
388	ST-11	鉢	- (4.1) - -	丸底状	外面叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ 底面スリナデ	外面淡黄橙色 内面橙色	底部片
389	埋土 ST-11	鉢	- (2.3) - 1.4	突出した小さな平底	外面叩き+ナデ 内面スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	底部片
390	埋土 ST-11	甔	4.5 (4.8) - 1.7	杯状 平底	外面右上がりの叩き 内面ハケ+ナデ 底部を穿孔	内外面とも淡黄橙色	
391	埋土 ST-11	壺	- (5.6) - 1.5	小形手づくね	外面指ナデ・頸部細かいハケ 内面ナデ 指頭圧痕残る	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄色	
392	ST-12 2	鉢	18.8 8.8 - 2.6	丸底状	外面ナデ 内面ハケ+ナデ	内外面とも淡黄橙色	
393	ST-12 1	鉢	17.5 7.2 - 2.0	丸底	外面叩き+スリナデ+底面ハケ 内面ナデ	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
394	ST-12 3	鉢	10.0 6.8 - -	体部内湾	内外面ナデ 口縁部横ナデ	内外面とも橙色	
Fig.24 395	壺箱1	壺	- (29.8) - 4.2	壺箱 口縁部を打ち欠く 396と合口	外面叩き+ハケ+スリナデ 内面ハケ+スリナデ 底面縦方向のスリナデ 内面頸部下指頭圧痕	内外面とも黄橙色	土坑埋納
396	壺箱1	壺	- (19.6) - 3.4	壺箱 上胴部より上を打ち 欠く 395と合口	外面叩き+ハケ+スリナデ 内面ハケ+スリナデ 底面縦方向のスリナデ	内外面とも橙色	土坑埋納
397	壺箱2	壺	12.8 35.3 26.9 4.8	壺箱	外面タテハケ+スリナデ 内面ハケ+ナデ 内面頸部下に指頭圧痕	0.5~5mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面淡黄橙色	土坑埋納 完形
Fig.25 398	SD-3	壺	15.0 (1.7) - -	口縁端凹線	口縁部横ナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	口縁部片
399	SD-3	壺	14.4 (2.7) - -		内外面ハケ+ナデ	内外面とも橙色	口縁部片
400	SD-3	鉢	- (1.6) - -		口縁部横ナデ 内外面ヘラミガキ 内面ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。砂粒多し 内外面とも橙色	

出土遺物観察表26

挿入番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.25 401	SD-3	(鉢)	- (2.6) -	6.0	平底	内外面ナデ	1~2mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡黄橙色 内面灰黄橙色	底部片
402	SD-3	甕	- (2.5) -	2.8		外面叩き 内面スリナデ	0.5~5mm大の砂粒を含む。 外面淡橙色 内面淡黄橙色	底部片
403	P-1	高杯	- (6.7) -	-		外面ヘラミガキ 内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡橙色	脚部片
404	P-2	鉢	11.4 (5.1) -	-		外面ナデ 内面ヘラケズリ	外面淡黄橙色 内面橙色	搬入品
405	P-2	土製支脚	7.6 4.6 -	6.1		外面ナデ	0.5~2mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡橙色	
406	P-6	壺	15.6 (10.3) -	-		外面叩き 口縁部ハケ+指ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~4mm大の砂粒を含む。 内外面とも淡黄橙色	
407	P-12	壺	17.4 (4.0) -	-		外面ハケ+ナデ 内面ハケ	内外面とも橙色	
408	P-22	鉢	14.0 (6.0) -	-		外面ハケ+ナデ 内面ナデ	0.5~2mm大の砂粒を含む。 内外面とも橙色	
409	P-22	鉢	10.4 (7.1) -	-	体部内湾	外面叩き+ナデ 内面ハケ	外面淡黄橙色 内面灰黄色	
410	P-25	甕	17.0 31.6 -	-	丸底状	外面叩き+ハケ 内面ハケ+スリナデ 外面底部タテハケ+スリナデ	内外面とも淡褐色	
411	P-25	甕	14.0 26.0 -	4.0	平底 底部近くまで叩き	外面叩き+ハケ 内面ハケ+ナデ+指ナデ 外面底部タテハケ+スリナデ 内面頸部下指頭圧痕	0.5~3mm大の砂粒を含む。 外面淡橙色 内面橙色	
412	P-25	甕	15.0 (11.9) -	-	口縁部まで叩き	外面叩きの上をハケ 内面ハケ+スリナデ	0.5~2mm大の砂粒を含む。 内外面とも橙色	
413	P-25	甕	- (12.7) -	-	平底	外面叩きの上をタテハケ 内面スリナデ 底面指頭圧痕	1~2mm大の砂粒を含む。 内外面淡橙色	
414	P-25	甕	- (8.4) -	2.2	小さな平底	外面叩きの上をタテハケ 内面スリナデ	0.5~4mm大の砂粒を含む。 内外面淡橙色	
Fig.26 415	P-25	甕	18.4 5.8 -	-	口縁内面に突帯	外面ハケ+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒を含む。 内外面とも橙色	
416	P-25	鉢	17.2 4.3 -	-		外面ハケ+ナデ 内面ハケ	内外面とも橙色	

出土遺物観察表27

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.26 417	P-25	鉢	16.4 (5.1) - -		外面叩き+ナデ 内面縦方向のヘラミガキ	内外面とも橙色	
418	P-25	鉢	13.0 6.0 - 2.0	丸底	外面ナデ+指ナデ 内面細かいハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
419	P-25	鉢	12.6 7.4 - 3.4	円盤状の平底	外面左上がりの叩き+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面橙色	
420	P-29	甕	- (1.9) - 1.6		外面叩き 内面ナデ	内外面淡黄橙色	底部片
421	P-31	壺	24.8 (1.9) - -	口縁部拡張 波状文(細線5本)	内外面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面橙色	口縁部片
422	P-31	壺	20.0 (3.2) - -		内外面ナデ	内外面橙色	口縁部片
423	P-31	壺	22.4 (2.0) - -		外面口縁部ハケ 口縁部に襷描き波状文 内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面橙色	口縁部片
424	P-34	土製支脚	- - -	角部	外面ナデ	黄橙色	
425	P-39	甕	11.0 (4.0) - -	口縁部まで叩き 口縁外反	外面右上がりの叩き 内面ナデ	外面橙色 内面淡黄橙色	口縁部片
426	P-51	甕	15.4 (5.9) - -		外面タテハケ 内面横ハケ+ナデ 頸部下に指頭圧痕	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	口縁部片
427	P-51	甕	13.4 (2.7) - -		外面叩き+タテハケ 内面ハケ	外面橙色 内面淡褐色	口縁部片
428	P-58	壺	25.0 (6.2) - -	口縁部拡張	外面ハケ 口縁部襷描き波状文 (細線5~6本) 内面ハケ+ヘラミガキ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	口縁部片
429	P-60	壺	16.0 (4.0) - -	口縁上部内傾	外面ナデ 内面ハケ	内外面とも橙色	口縁部片
430	P-60	鉢	- (4.2) - 4.4	平底	外面タテハケ 内面スリナデ	内外面とも淡黄橙色	底部片
431	P-65	甕	17.0 (4.0) - -		外面ハケ+指ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 外面淡黄橙色 内面淡橙色	口縁部片
432	P-65	鉢	14.0 (5.3) - -		内外面ハケ	内外面とも橙色	

出土遺物観察表28

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.26 433	P-71	甕	18.0 (2.9)	-		口縁部横ナデ 内面細かい横ハケ	外面淡赤褐色 内面淡褐色	搬入品 口縁部片 (吉備)
434	P-71	甕	- (5.4)	-	平底	外面タテハケ+ナデ 内面スリナデ	内外面とも灰黄褐色	底部
435	P-71	甕	- (5.8)	- 2.0	小さな平底	外面右上がりのタタキ+ナデ 内面ハケ	内外面橙色	底部
436	P-76	甕	- (6.3)	- 2.1	小さな平底	外面タタキ 内面スリナデ	外面淡橙色 内面淡黄色	底部
437	P-76	甕	- (3.3)	- 7.2	丸底状	外面叩き+ハケ 内面ハケ+スリナデ	0.5~6mm大の砂粒 を含む。 外面淡橙色 内面淡黄褐色	底部
438	P-93	高杯	- (9.4)	- (6.0)	口縁部に櫛描波状文	内外面ナデ	1~3mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄褐色	杯部
439	P-101	杯	7.7 3.8	- 4.4	平底	外面ハケ+スリナデ 内面ハケ+ナデ 底部外面指頭圧痕	内外面とも黄褐色	
Fig.27 440	P-101	壺	20.8 10.2	-	口縁部に波状文	外面ハケ+ヘラミガキ 内面ナデ+ヘラミガキ 胴部内面スリナデ	内外面とも橙色	
441	P-112	甕	- (1.8)	- 2.0		内外面ナデ	外面淡黄褐色 内面灰白色	底部片
442	P-122	甕	24.0 (4.3)	-		外面ハケ+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面淡褐色 内面淡黄褐色	口縁部片
443	P-128	甕	- (20.3)	- 2.6		外面左上がりの叩き+ナデ 内面ハケ+スリナデ 胴部下半タテハケ	外面淡褐色 内面赤褐色	
444	P-129	鉢	16.8 (2.6)	-		外面スリナデ 内面ハケ+ナデ	外面橙色 内面黄褐色	
445	P-133	甕	16.5 (4.5)	-	口縁部まで叩き痕	外面タタキ+細いタテハケ 口縁内面細かい横ハケ 頸部下ヘラケズリ+スリナデ 煤付着	0.5~3mm大の砂粒 を含む 内外面とも淡褐色	搬入品
446	P-141	鉢	24.6 (8.9)	-		外面タタキ+ナデ 体部下半タテハケ 内面ナデ	2~3mm大の砂粒を 含む。 内外面とも淡黄褐色	
447	P-141	鉢	18.0 (3.4)	-	胴部中程に最大径 口縁く字形	外面丁寧なヘラミガキ 内面ハケ+スリナデ	内外面とも淡黄色	
448	P-141	壺	- (5.1)	- 5.0	平底	外面タテハケ+ナデ 内面スリナデ	内外面とも淡褐色	底部片

出土遺物観察表29

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.27 449	P-142	壺	12.8 (10.0) - -	口縁部外反	外面ハケ 内面ハケ+指ナデ 頸部外面に横方向のスリナデ 口縁部内面横ハケ	0.5~2mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡橙色	
450	P-144	壺	- (5.4) - 5.0		外面叩き+タテハケ 内面ナデ	外面淡黄橙色 内面灰黄褐色	底部片
451	P-144	壺	20.4 (2.1) - -		外面ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面橙色 内面淡黄橙色	口縁部片
452	P-153	鉢	12.9 8.2 - 3.0	平底	叩き+ナデ 内面スリナデ	内外面とも淡褐色	
453	P-153	鉢	14.2 7.0 - 1.2	口縁く字形に外反	外面叩き(右上がり)+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面淡橙色 内面淡黄橙色	
454	P-154	蓋	- - - -		内外面ナデ	黄橙色	
455	P-157	土製支脚	- (5.0) - -		外面叩き+ナデ 内面ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	脚部片
456	P-122	鉢	- (3.7) - 4.0	平底	外面指ナデ	黄橙色	底部片
Fig.28 457	埋土 SX-1	壺	16.6 (4.6) - -	口唇部に波状文	外面ヘラミガキ+ナデ 内面横ハケ	内外面とも橙色	
458	埋土 SX-1	壺	16.0 (5.7) - -	複合口縁	口縁部外面ハケ+ナデ 内面横ハケ+指ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	
459	埋土 SX-1	甕	14.4 (12.0) - -	口縁く字形に外反	外面叩き+ナデ 内面ハケ+縦方向のスリナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
460	埋土 SX-1	甕	17.6 (15.6) - -	口縁く字形	外面タテハケ+ナデ 内面ハケ+ナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む 内外面とも淡赤褐色	
461	埋土 SX-1	甕	- (4.8) - 4.2		外面叩き+タテハケ 内面スリナデ	外面淡黄橙色 内面黒褐色	底部片
462	埋土 SX-1	高杯	- 3.4 -		外面ヘラミガキ 内面ハケ・絞り痕	内外面とも黄橙色	脚部片
463	埋土 SX-1	鉢	22.4 (9.6) - -		外面叩き+スリナデ 内面ハケ+ナデ 底部内面スリナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄色	
464	埋土 SX-1	鉢	11.0 7.2 - 2.6	平底	外面ナデ 内面横ハケ	0.5~4mm大の砂粒 を含む 内外面とも橙色	

出土遺物観察表30

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	形態・特徴	文様・成形・調整手法	胎土・ 色調	備考
Fig.28 465	SX-2	甕	- (3.3) -	- 2.8		外面叩き+ナデ 内面ナデ	外面淡黄橙色 内面橙色	底部片
466	SX-2	鉢	- (2.2) -	- 2.4		内面ナデ	外面ナデ 内面スリナデ 外面淡黄色 内面淡黄橙色	底部片
467	南北トレンチ 包含層	壺	20.8 3.7 -	-		外面タテハケ+ナデ 内面ヘラミガキ+ナデ	内外面とも淡黄橙色	
468	東西トレンチ 包含層	壺	27.2 (3.3) -	-	口縁部櫛描波状文	外面タテハケ 内面ヘラミガキ+ナデ	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
469	東西トレンチ 包含層	甕	14.0 (15.9) -	-	複合口縁	外面タテハケ・口縁部横ナデ 外面ナデ・内面頸部指ナデ 内面頸部下ヘラケズリ 胴部から口縁部にかけて煤付着	小砂粒を含む 内外面とも淡橙色	搬入品 (吉備)
470	東西トレンチ 包含層	甕	14.2 11.2 -	-		外面叩き+ナデ+口縁部タテハケ 内面ハケ+スリナデ	内外面とも橙色	
471	東西トレンチ 包含層	土製支脚	- - -	-	角部	外面ナデ 指頭圧痕	内外面とも淡橙色	
472	南北トレンチ 包含層	土製支脚	- - (6.0) -	-	角部	外面ナデ 指頭圧痕	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
Fig.29 473	包含層	甕	- (16.1) -	- 6.0	底面平坦	外面叩き+ナデ+タテハケ 内面ハケ+ナデ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 外面淡黄橙色 内面灰白色	
474	包含層	甕	13.7 12.7 14.1 -	-		外面叩き+ナデ 内面スリナデ・底面指ナデ 底部穿孔	0.5~4mm大の砂粒 を含む。 内外面とも淡黄橙色	
475	包含層	壺	21.0 (7.5) -	-	口縁部C字形半載竹 管文(2列)	外面ハケ 内外面細かいハケ	0.5~5mm大の砂粒 を含む。軟質 内外面とも明赤褐色	
476	南北トレンチ 包含層	鉢	12.1 5.9 -	3.2	底面平坦	外面叩き+ハケ+ナデ 内面細かいハケ+ナデ	内外面とも橙色	
477	包含層	鉢	9.5 6.7 -	3.0		外面右上がりの叩き+ナデ 内面スリナデ	内外面とも淡黄橙色	
478	包含層	高杯	14.4 10.5 -	10.0		内外面ナデ	内外面とも橙色	
479	T-3	鉢	9.5 4.6 -	3.8		内外面ナデ	1~2mm大の砂粒を 含む。 内外面とも橙色	
480 PL.43	T-3 P1	甕	27.0 31.2 30.6 5.8	-	丸底状の平底	外面叩き+タテハケ 底部周辺縦方向のケズリ+ナデ 内面横ハケ+スリナデ+指ナデ	砂粒を含む 内外面とも淡黄橙色	
481	T-3	壺	11.2 35.7 28.8 -	-	胴部中位に最大径 長胴形	外面叩き+タテハケ+ナデ 内面ハケ+スリナデ 口縁部細かいタテハケ 内面細かいハケ	0.5~3mm大の砂粒 を含む。 内外面とも橙色	

出土遺物観察表・石器

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	器種	全長 全幅 全厚 重量 (cm)	形態・特徴	文様・成形・調整手法	石質・ 色調	備考
Fig.30 482	ST-2	砥石	6.4 4.0 1.2 60 g	両面使用	扁平な円礫の両面を使用 礫縁辺に擦痕 内側の破断面に研磨痕 長軸方向の側面は破損面	砂岩 灰オリーブ色	古期扇状地堆積 の自然礫
483	ST-4 S-1	砥石	5.3 1.8 3.5 55 g	使用面は左図の両側 面 右図使用面	片側使用面に摩耗痕 破断面の形状から廃棄時に意 図的に打ち欠いた可能性あり	砂岩 灰オリーブ色	古期扇状地堆積 の自然礫
484	ST-5 S-3	敲石	9.2 8.9 6.8 720 g	側面に敲打痕	側面の打痕により平面円形状	砂岩（粒子荒い） 灰黄色	古期扇状地堆積 の自然礫
485 PL.35	集石中 ST-6	石鏃	4.7 2.4 0.4 4.2 g	無茎三角鏃	横長剥片を素材に両面から押 圧剥離 中央部は横長剥片の剥離面を 残す。断面扁平	頁岩 暗青灰色	鉄鏃模倣形の可 能性あり
486	ST-6	砥石	4.9 5.8 3.4 155 g		磨石を転用 一面に擦痕 二面は破損面	砂岩（粒子やや荒い） 灰オリーブ色	古期扇状地堆積 の自然礫
487	ST-6	砥石	9.4 3.0 2.5 12.8 g	4面使用 使用痕顕著	端面は破損面 使用面は滑らか	硬質砂岩（細粒） 打損部は粉状灰白色 淡黄茶色	携帯型
488	ST-8	砥石	6.6 7.2 5.0 36.5 g	4面使用 使用痕顕著	左図の上下両側面は破損面 使用面は滑らか	砂岩（粒子細かい） 灰オリーブ色	古期扇状地堆積 の自然礫
489	ST-11 6周辺	自然礫	11.8 10.6 5.9 985 g	一部に被熱赤変化	打撃痕、敲打痕等なし	砂岩（粒子細かい） 灰オリーブ色	古期扇状地堆積 の自然礫
490	ST-11 5	磨石	10.2 9.8 4.7 670 g	縁辺部に敲打痕と擦 痕	縁辺部のみ使用 他面は自然面	砂岩（粒子荒い） 淡灰オリーブ色	古期扇状地堆積 の自然礫
491	ST-11	砥石	10.5 6.0 5.8 540 g	3面使用 他1面にノミ状工具 による調整剥離痕と 擦痕あるも未使用	端面は破損面 1面に顕著な使用痕 使用面は滑らか	硬質砂岩（細粒） やや軟質 乳白色	破損面に年輪状 の縞斑
492	P-128	磨石	15.5 8.0 5.3 775 g	縁辺部に敲打痕と擦 痕	一部被熱赤変化 煤状の付着物 1面の平坦面中央に敲打痕と 擦痕	砂岩 灰オリーブ色	古期扇状地堆積 の自然礫
493	東西トレンチ 包含層	砥石	11.5 7.8 1.9 260 g	2面使用（図表面と 裏面） 1面に使用痕 他面は破損面	使用面は滑らか	砂岩（粒子細かい） 灰オリーブ色	古期扇状地堆積 の自然礫
494	包含層	砥石	16.1 10.3 1.7 335 g	3面使用（図表面と裏 面の一部、上側側面） 上側側面は平坦	一部被熱赤変化 煤状の付着物 使用面は滑らか	砂岩（粒子細かい） 暗灰オリーブ色	古期扇状地堆積 の自然礫

出土遺物観察表・鉄器 1

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	種類	全長 全幅 全厚 重量 (cm)	形態・特徴	成形・調整手法	色調	備考
Fig.31 I-1	集石中 ST-1 8	鉄鎌	6.80 1.73 0.387 7.2g	柳葉鎌 両鑄造 鎌身長4.7cm	刃先は三角形状 側刃は直線的 角間 茎断面は隈丸方形	暗褐色	銅鎌模倣形 類銅鎌鉄鎌
I-2	集石中 ST-1 11	鉄鎌	(4.9) 2.4 0.25~0.4 9.4g	圭頭鎌 両丸造 鎌身長4.0cm 茎の大半欠損	刃部は三角形状で幅広 身中央部に最大幅 茎断面は方形	暗褐色	錆の進行度強く劣化 鎌身長7cm前後に復元か
I-3	北辺溝中 ST-4 2	鉄鎌	(4.6) 0.7 0.4 1.8g	身欠損 鎌茎片 基部断面は方形		暗褐色	
I-4	埋土中 ST-4	鉄鎌	4.9 1.6 0.2 4.1g	圭頭鎌 鎌身平造り状 無間 茎断面は方形	刃部長2.7cm 茎長2.2cm	暗褐色	
I-5	ST-4 1	(鋤・鎌先)	4.5 2.5 0.3 10.3g	基部は直線的 刃部摩耗	折返部の平面U字形 折返部の長さ2.6cm 幅0.2~0.75cm 刃部長4.3cm幅2.5cm	暗褐色	小型の方形板刃先 摘み鎌の可能性も有る 厚さ3mm前後とやや厚い
I-6	B区 ST-4	鉄鎌	5.5 3.2 0.4 16.0g	刃部の大半欠損	基部の折り返しは鈍角 刃部の厚み1.6mm 刃部残存長3.2cm幅3.0cm 折返部の厚み0.25cm	暗褐色	
I-7	南辺床面 床面直上 ST-5	鉄鎌	(9.8) 3.0 0.4 14.2g	柳葉鎌 両丸造で無間 鎌身長4.7cm 茎の一部を欠損	大型の柳葉鎌 刃部長2.9cm 茎幅0.5cm厚さ0.37cm 茎断面は隈丸方形	暗褐色	
I-8	ST-5	鉄鎌	3.9 1.1 0.2 0.9g	圭頭鎌 鎌身平造り 無間 茎断面は方形	刃部は三角形状 茎幅0.24cm厚さ0.15cm	暗褐色	
I-9	ST-5	鉄鎌	(4.5) 0.61 0.4 2.2g	鎌茎片		暗褐色	
I-10	ST-5	鉄鎌	(2.7) 1.3 0.5 2.4g	圭頭鎌 両丸造で無間 鎌身長1.5cm 茎断面は方形		暗褐色	
I-11	ST-5	鉤	(3.6) 0.73~0.9 0.15~0.3 2.3g	先端部片 先端幅0.73cm 刃先・身欠損	裏透き	褐色	
I-12	ST-5	鋤・鎌先	6.6 4.07 0.3~0.4 45.6g	基部僅かに内湾 刃部外湾 刃部摩耗	折返部の平面U字形 厚さ0.24~0.3cm 刃部厚み0.36~0.43cm	褐色	鍛造方形板刃先
I-13	ST-5	鉄鎌	6.0 3.14 0.4~0.51 11.8g	基部は直線的 刃部の大半欠損	基部の折り返しは鈍角 刃部の厚み1.6mm 折返端部と側面の間隔6mm 折返部の厚み0.2cm	褐色	
I-14	埋土中 ST-6	(鉄鎌)	(3.5) 0.8 0.2 2.6g	片刃	外湾する側面部に刃先状の 研ぎだし。 刃部幅0.74cm	褐色	全体の形状不明。 鎌以外の可能性有り。
I-15	集石中 ST-6	不明	- - 3.41g		用途不明。 側面し字形。	褐色	
I-16	集石中 ST-6	不明	- - 10.65g		板状の素材を折り返す。 端部側刃は直線的	褐色	鋤・鎌先の片側折返部の 可能性もあるが、形状不明。

出土遺物観察表・鉄器 2

挿図番号	出土地点 層位 遺構番号 遺物番号	種類	全長 全幅 全厚 重量 (cm)	形態・特徴	成形・調整手法	色調	備考
Fig.31 I-17	集石中 ST-6	鉄鎌	(5.2) 0.64×0.92 0.3 7.70g	茎断面方形	鎌身と茎の破片か 茎の厚み0.55～0.7cm	褐色	
I-18	集石中 ST-6	不明鉄製品	(5.80) 0.3～0.4 0.4 1.65g	形状は釘状 先端部尖り錐状 端部僅かに膨らむ 身断面円形	側縁は直線的で丸味をもつ。 鎌茎や錆劣化による釘等の鉄芯 部の残体とは異なる。	暗褐色	後世の混入品ではない。 端部は刺突に適している。 錐等工具の一種か。
I-19	C区 床面上 ST-7	鉄鎌	(4.3) 1.8 0.25～0.30 2.9g	圭頭鎌 両丸造で間は斜間。 鎌身長2.8cm	刃部は三角形状。 身中央部に最大幅。1.80cm 厚さ3mm。 茎残存長1.1cm。断面は方形	暗褐色	
I-20	ST-7	鉄鎌	(2.9) 0.82 0.5 3.2g	鎌茎先端部片 基部断面は方形		暗褐色	
I-21	埋土中 ST-8 1	鉄鎌	6.0 2.6 0.2～0.4 10.2g	柳葉鎌 両丸造で間は斜間。 鎌身長3.7cm 茎を欠損	刃部断面レンズ状。 茎残存長0.8cm 幅0.61cm厚さ0.5cm 鎌身最大幅2.45cm	暗褐色	
I-22	ST-8	鉄鎌	(3.2) 0.35 0.3 1.2g	茎断面方形。 鎌茎部片。		暗褐色	
I-23	a区 ST-8	鉄鎌	(2.40) 0.8 0.2 0.8g	鎌茎先端部片		暗褐色	
I-24	埋土中 P-25	鉄鎌	(3.25) 1.7 0.3～0.52 2.58g	圭頭鎌 両丸造 鎌身長2.80cm 茎の大半を欠損	刃部は正三角形状 身の最大幅は刃部寄り 茎残存長0.3cm厚さ0.3cm 茎断面は方形	暗褐色	
I-25	T-3	鉈	12.0 0.9 0.1～0.3 10.9g	完形 茎全長8.80cm 身断面は長方形	笹葉状の刃部表面には錆。 裏透き。刃部断面く字状。 刃部長2.7cm幅1.1cm 先端部の厚み2mm	暗褐色	

圖 版



図 1 東崎遺跡周辺の主要な弥生遺跡

- | | | |
|---------|--------------|-----------|
| 1. 東崎遺跡 | 5. 原遺跡 | 9. ひびのき遺跡 |
| 2. 小籠遺跡 | 6. 稻荷前遺跡 | 10. 林田遺跡 |
| 3. 金地遺跡 | 7. 楠目遺跡 | 11. 深淵北遺跡 |
| 4. 三島遺跡 | 8. ひびのきサウジ遺跡 | 12. 深淵遺跡 |

図 2

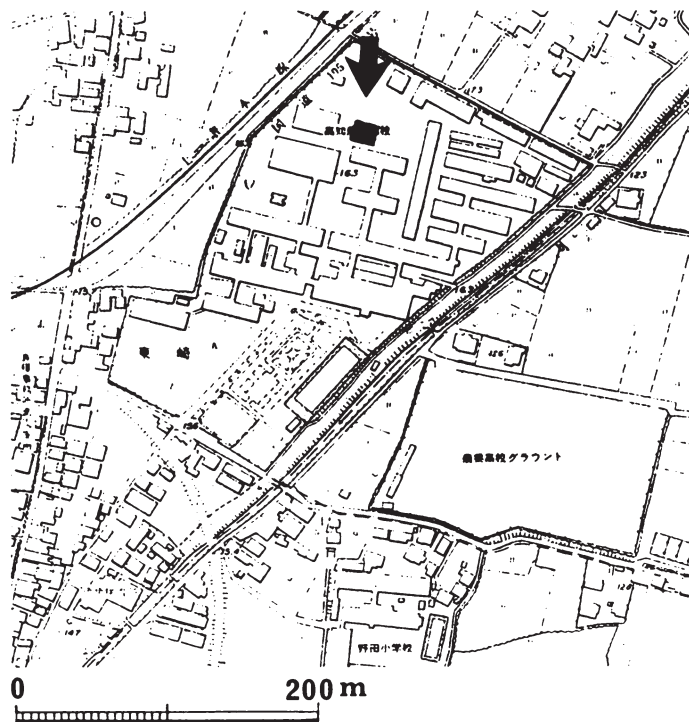
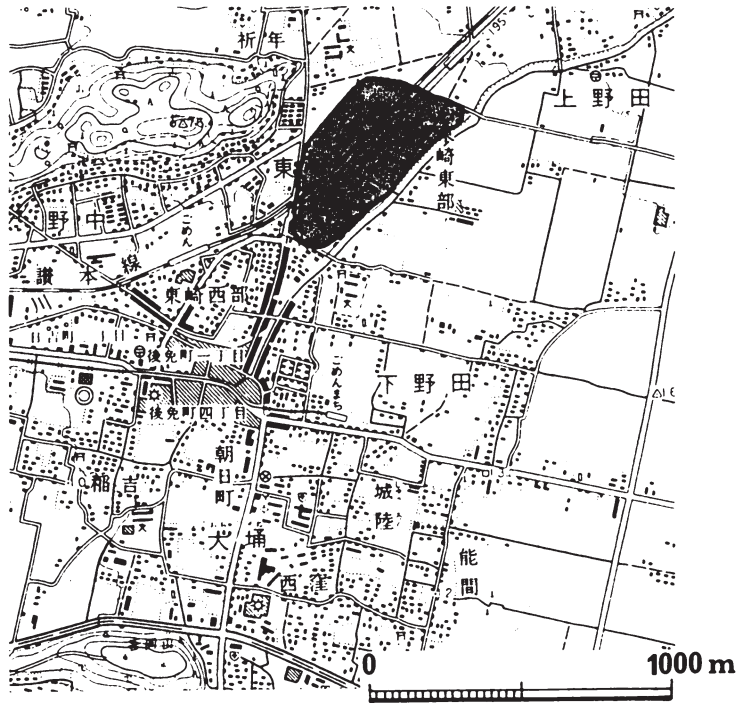


図 2 東崎遺跡の範囲及び発掘区域の位置

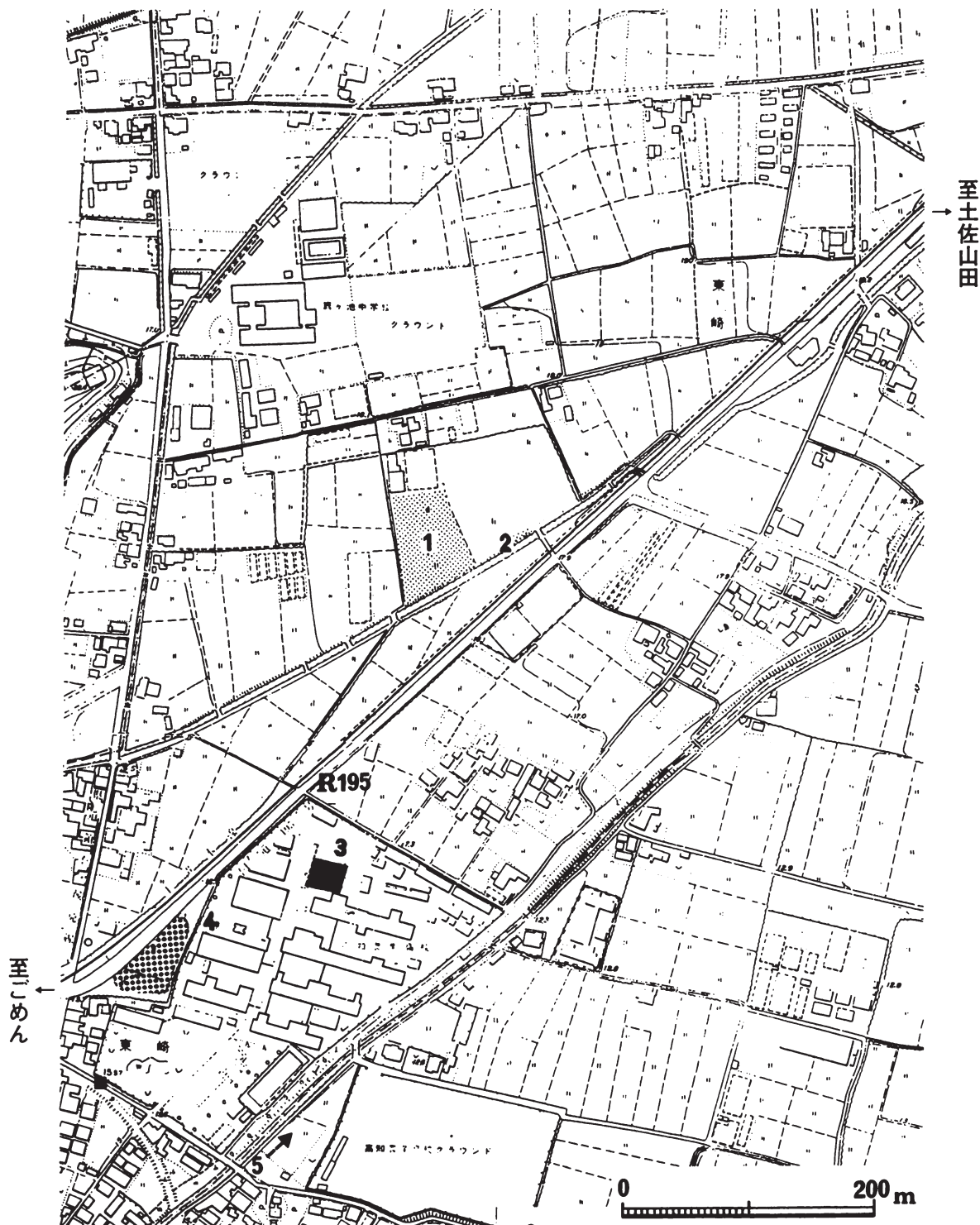


図 3 東崎遺跡 調査地位置図

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1. 五軒屋敷遺跡調査地 | 4. 東崎遺跡Ⅱ (店舗建設地) |
| 2. 昭和57年度調査地 (壺棺出土地) | 5. 長岡台地縁辺の急崖地形 |
| 3. 東崎遺跡Ⅰ (対象地・体育館建設地) | |

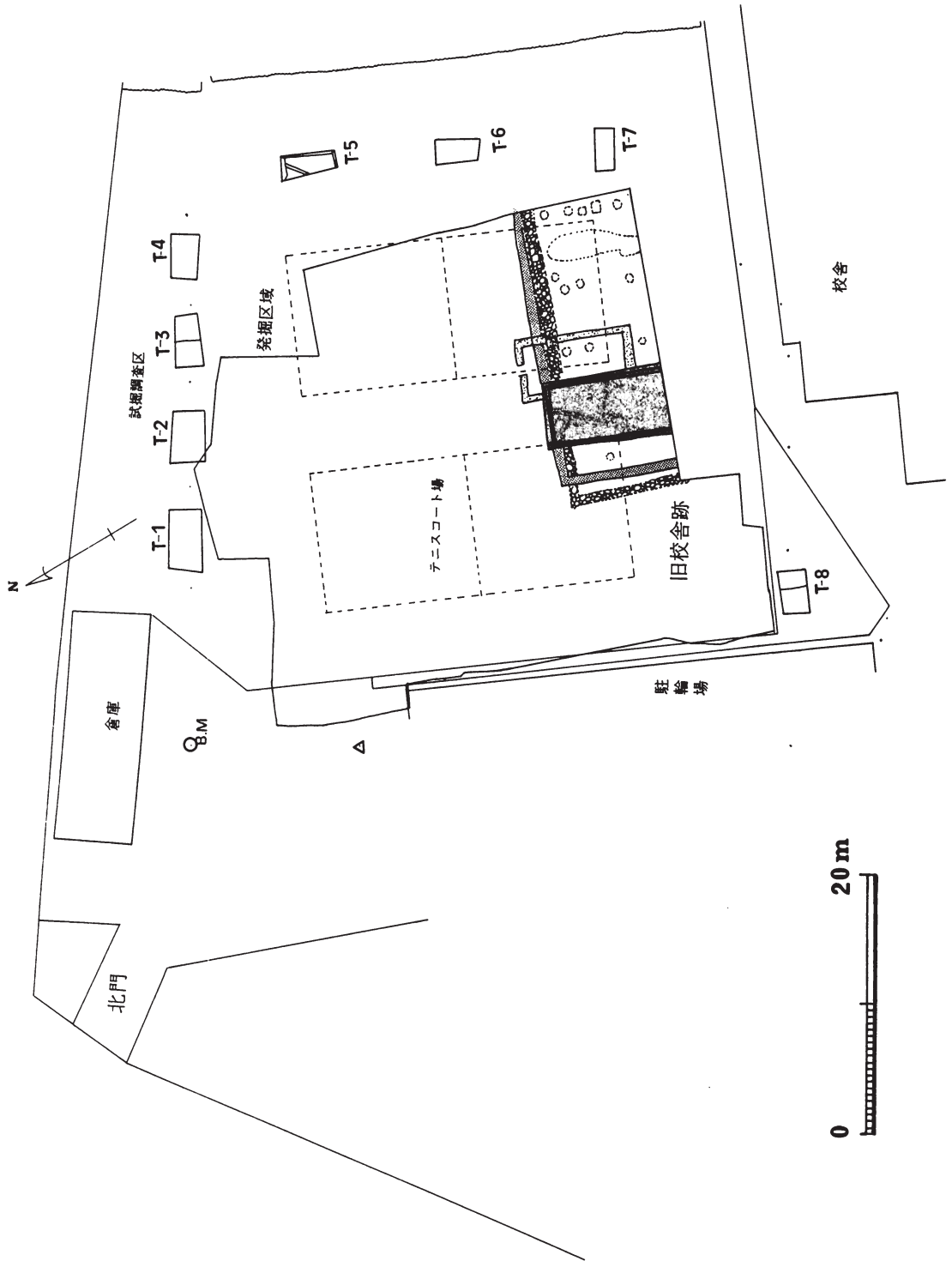


図 4 試掘調査区配置図及び旧校舍跡検出位置

図 5

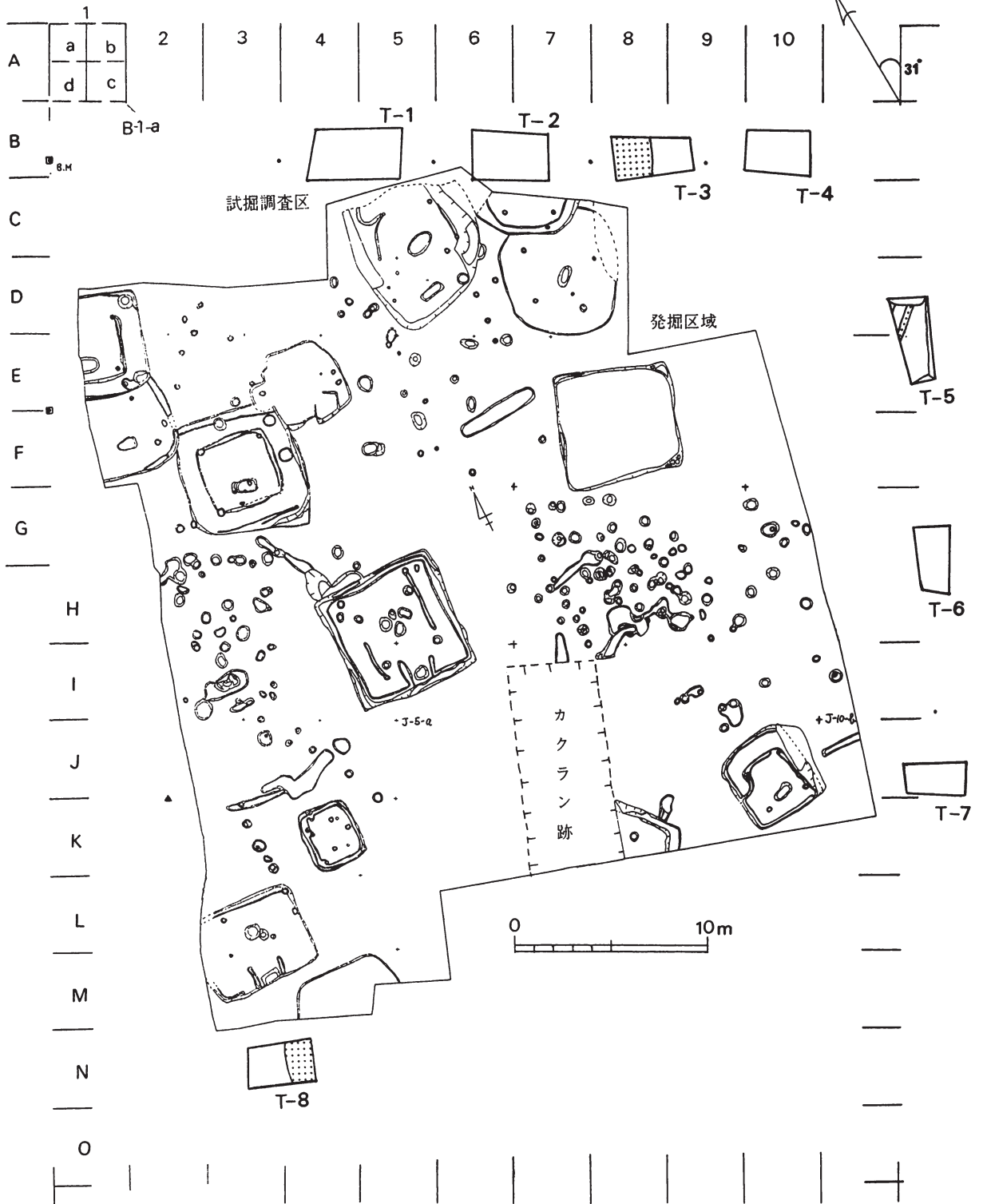
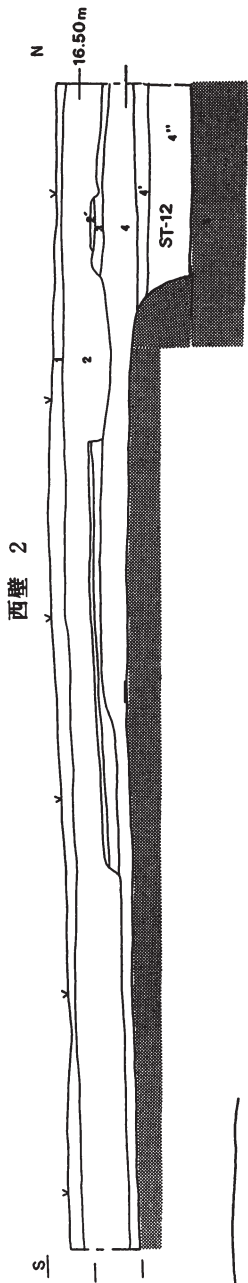
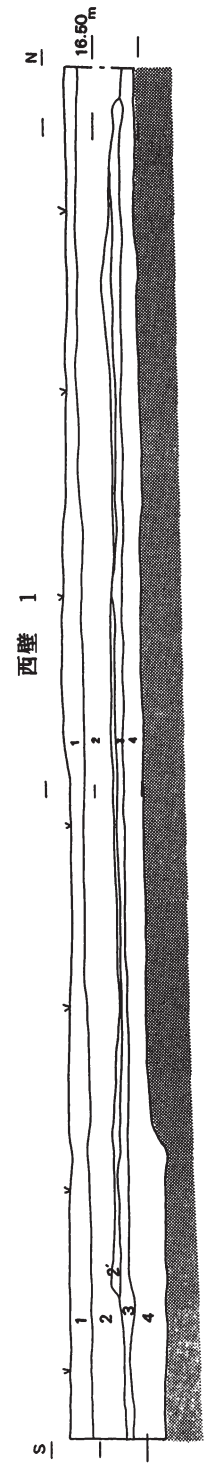
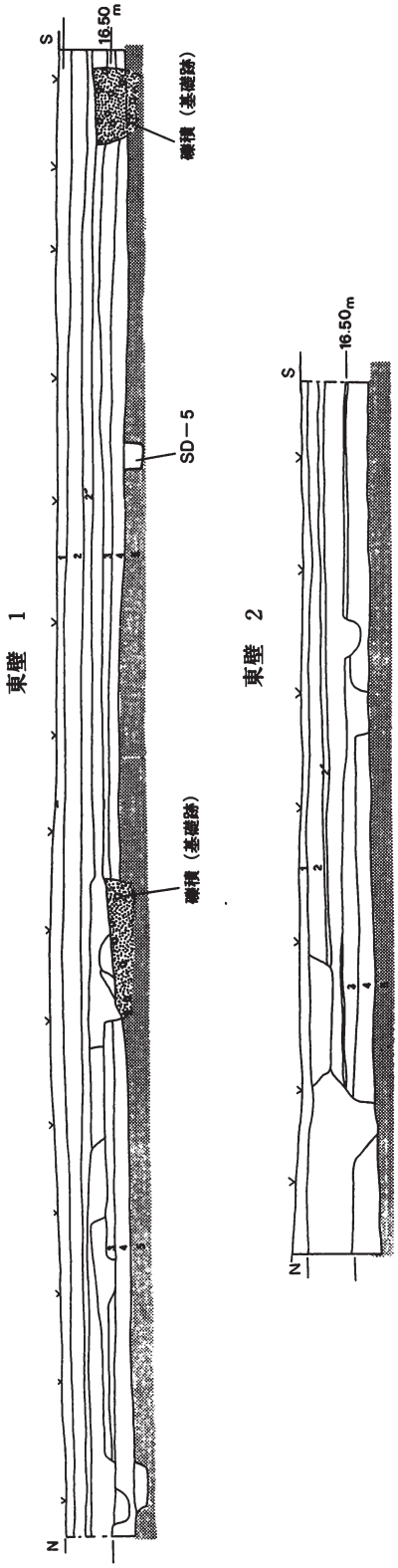
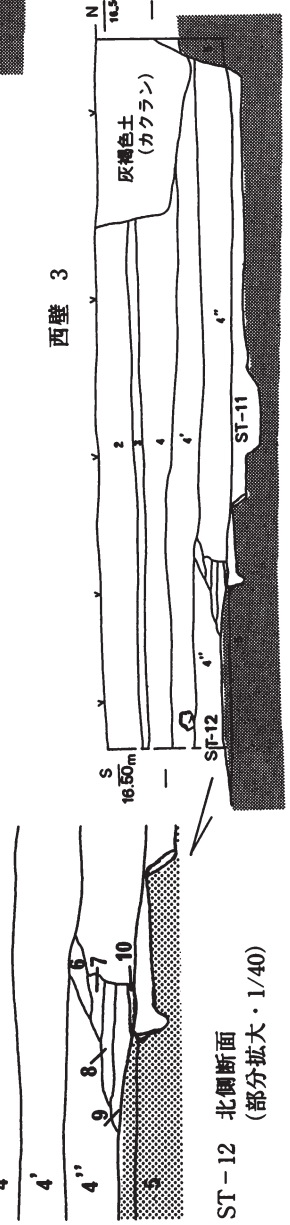


図 5 発掘区域及び検出遺構



- 1 土 (盛土・グラウンド)
- 2 質土 (カク乱土)
- 3 灰黄色粘土 (旧アグラランド)
- 4 灰黒暗褐色粘土 (旧耕作土)
- 4' 灰黒暗褐色粘土 (包含層)
- 5 質土 (地山)
- 6 質土
- 7 質土
- 8 質土
- 9 質土
- 10 質土 (暗)



ST-12 北側断面
(部分拡大・1/40)



図 6 土層序



图 7 検出遺構全体図 (1/200)

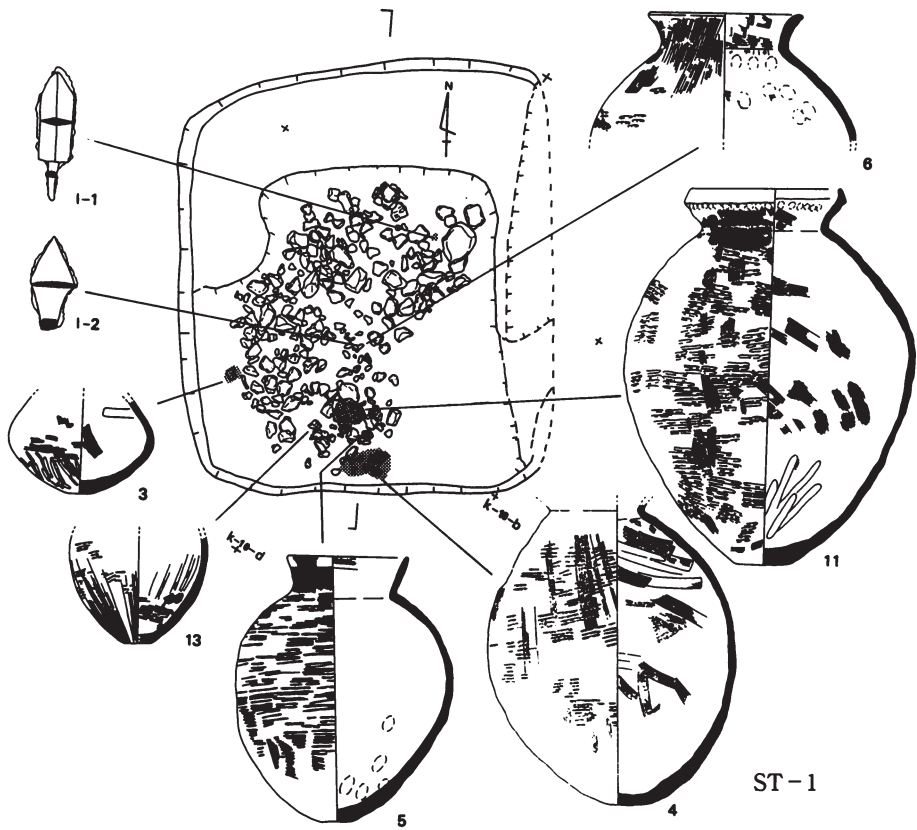
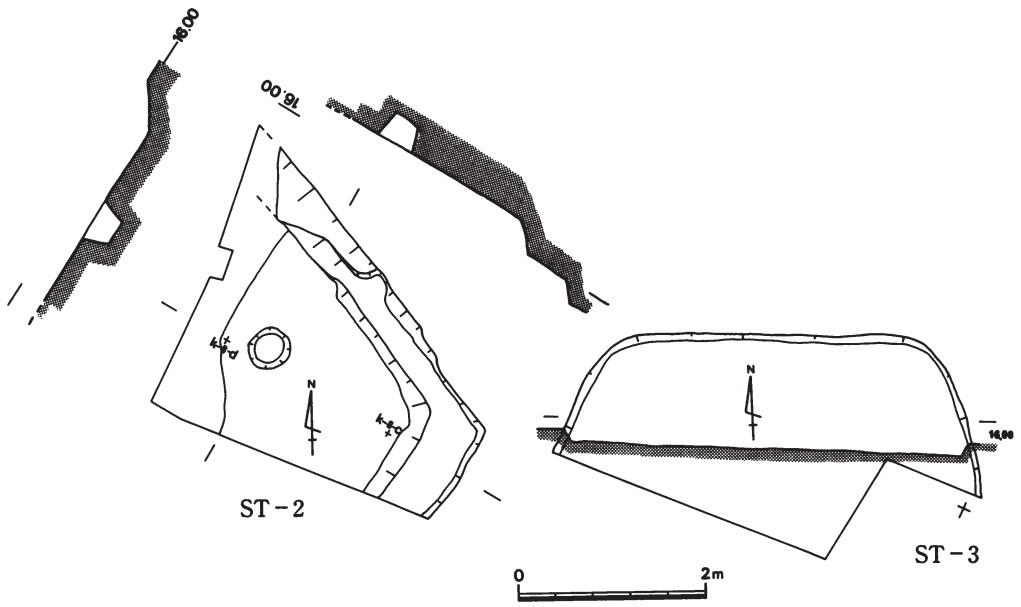


图8 ST-1 遺物出土状況 ST-2・3

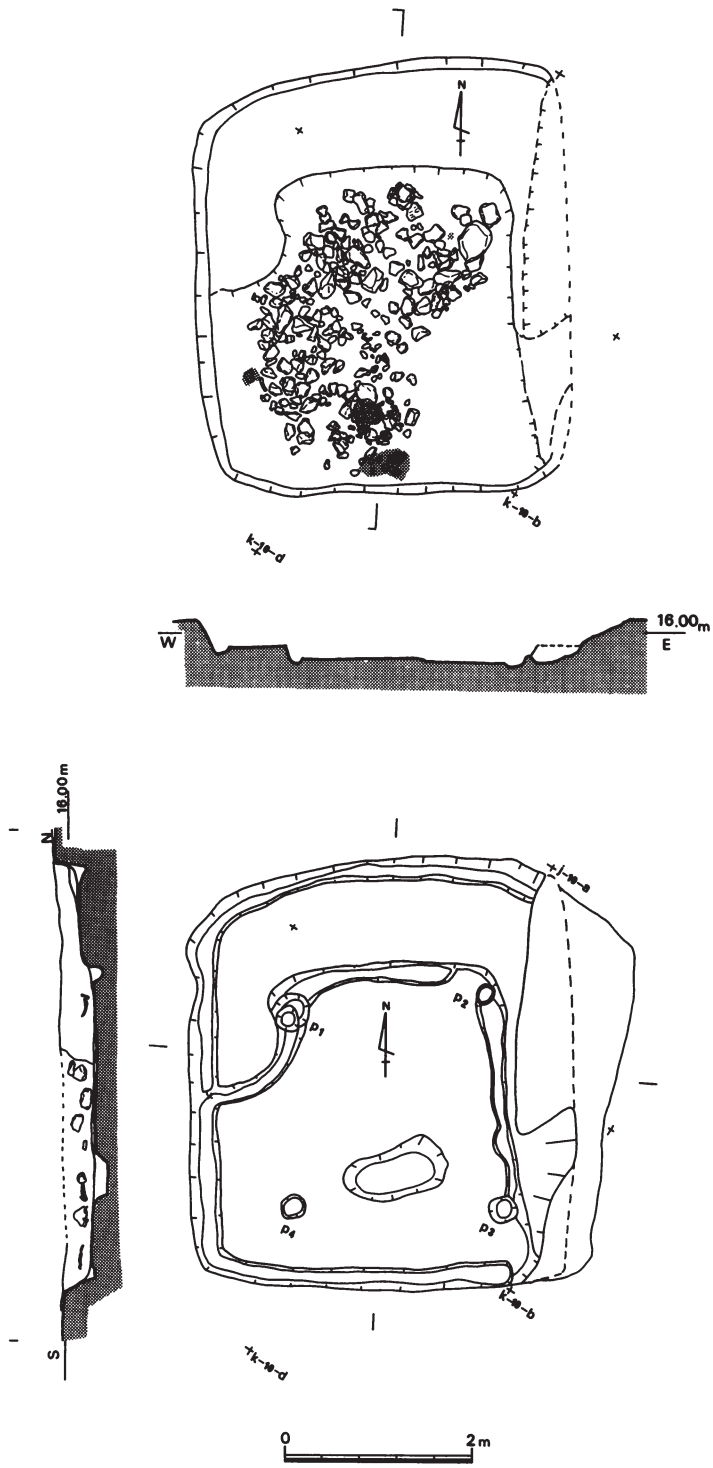


图 9 ST-1 集石状态 (上) ST-1 (下)

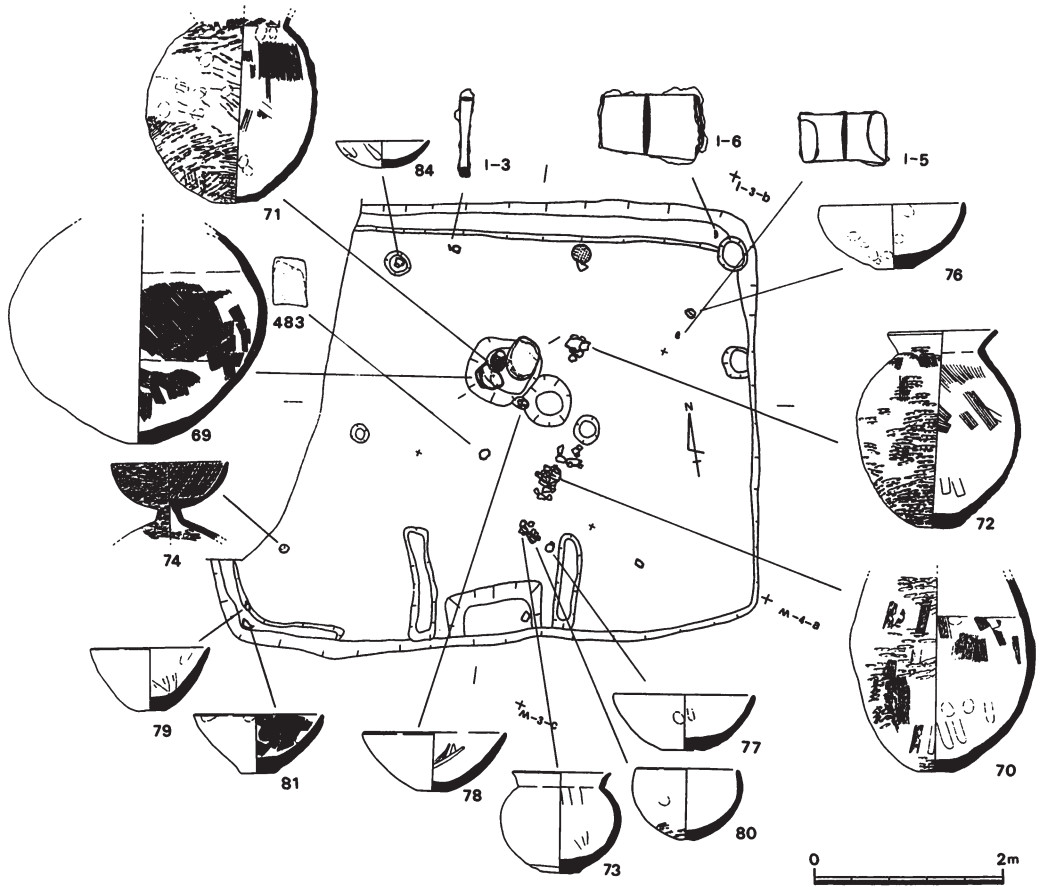


图10 ST-4 遺物出土狀況

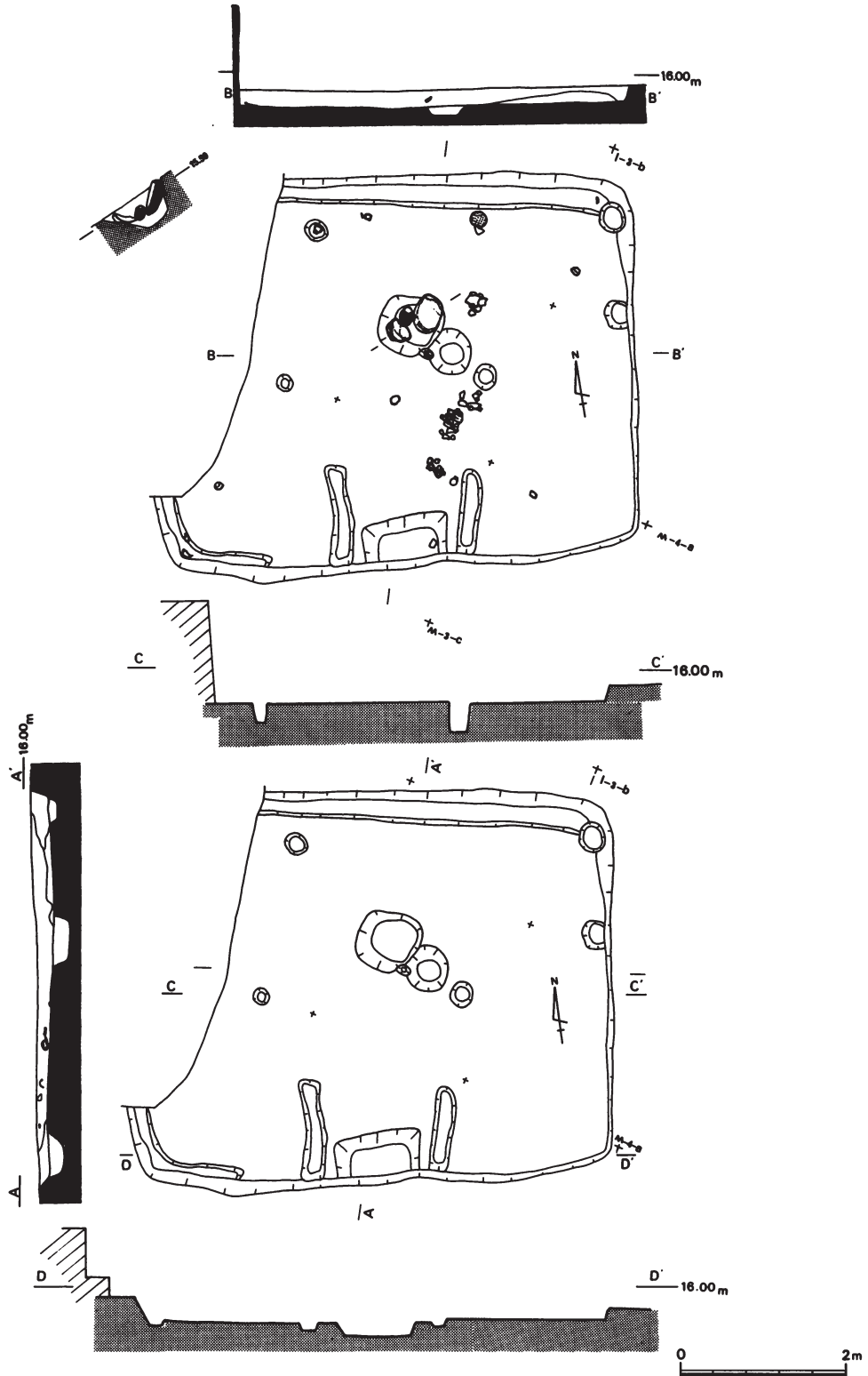


图11 ST-4

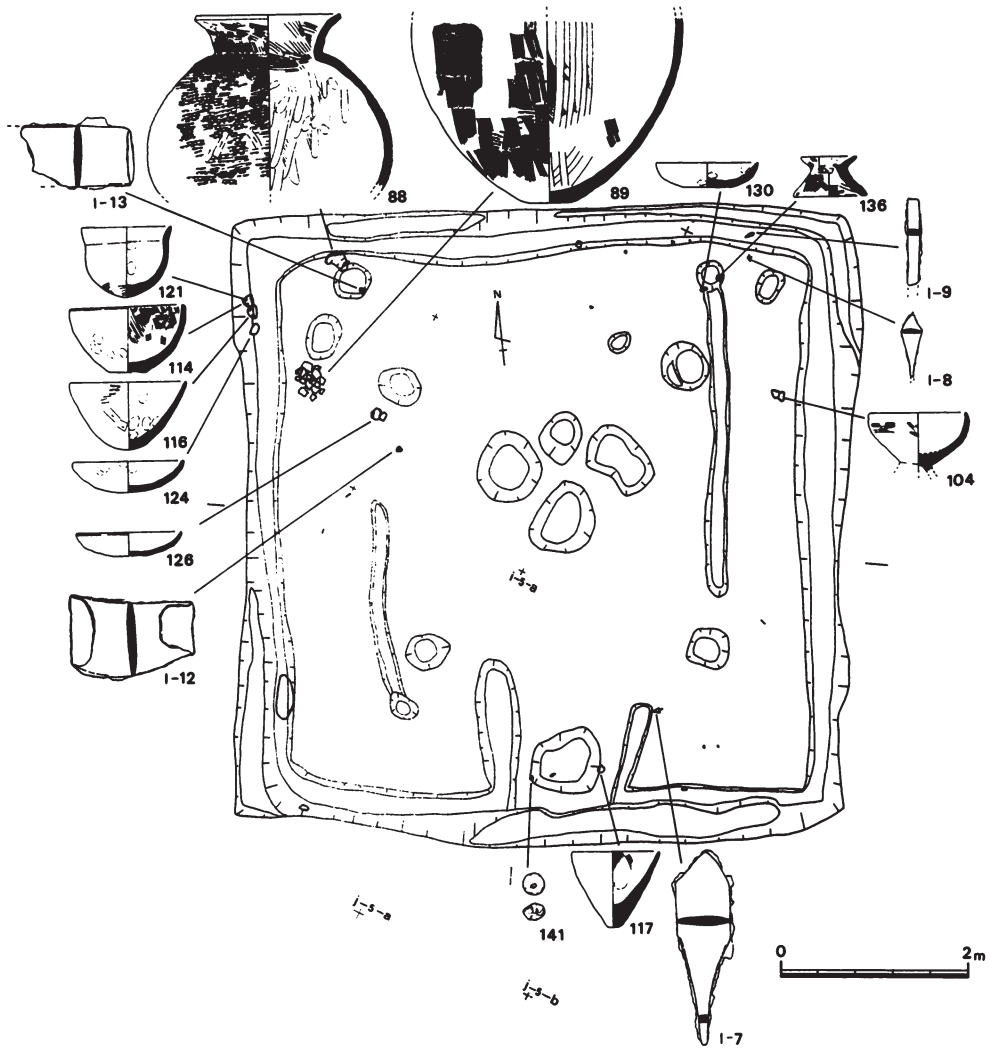


图12 ST-5 遺物出土狀況

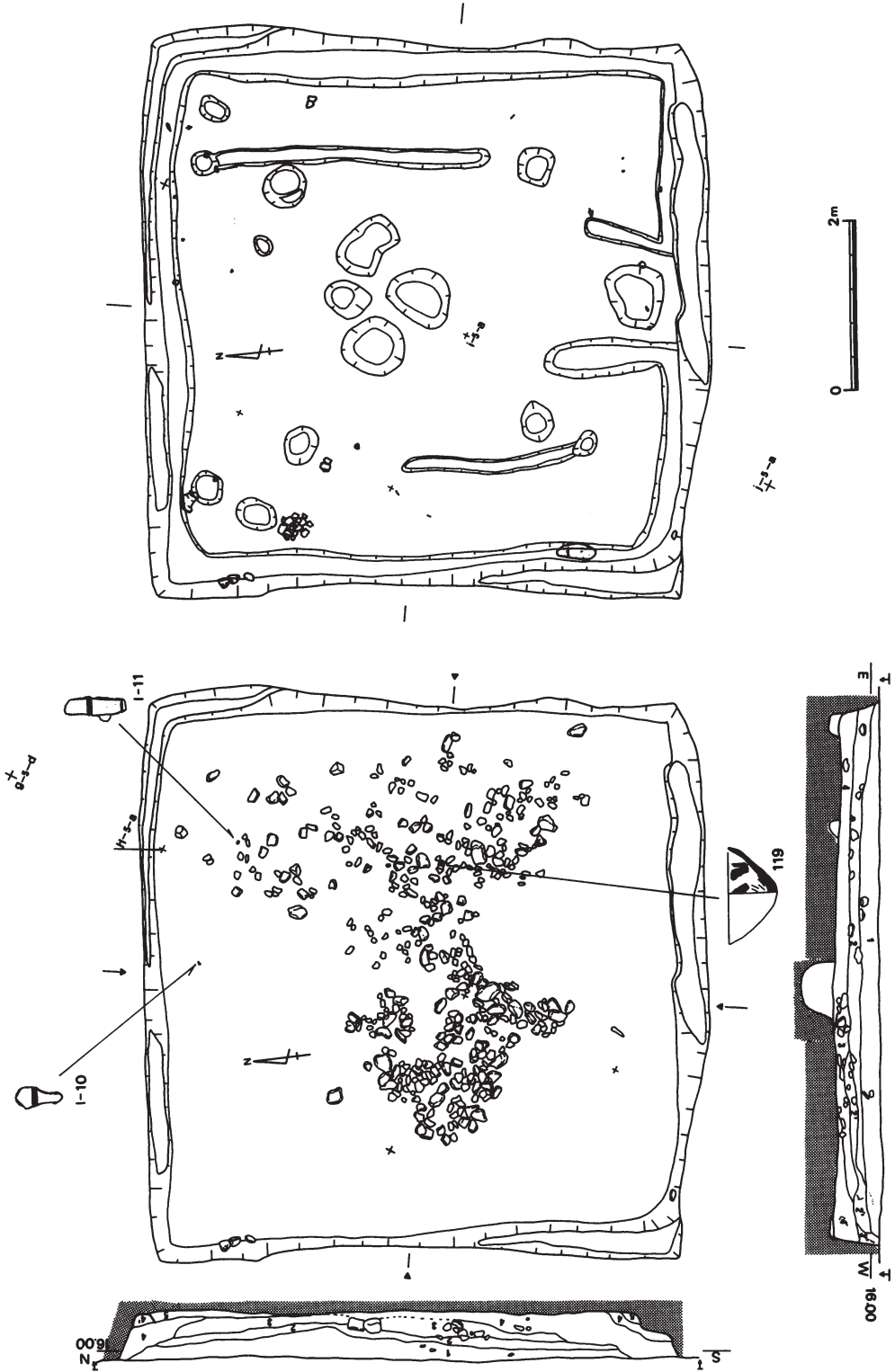


図13 ST-5 検出遺構・集石状態 (下)

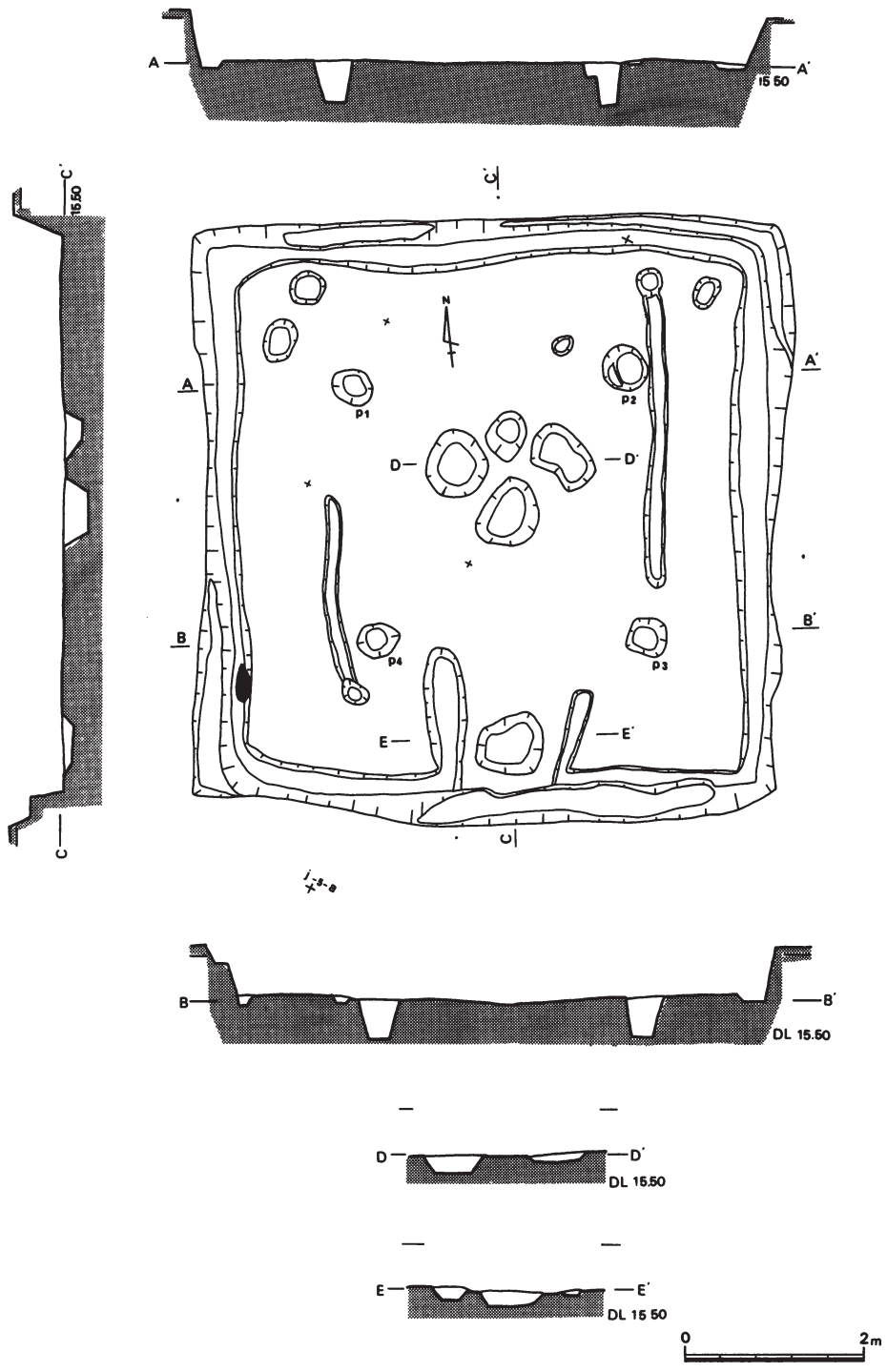


图14 ST-5

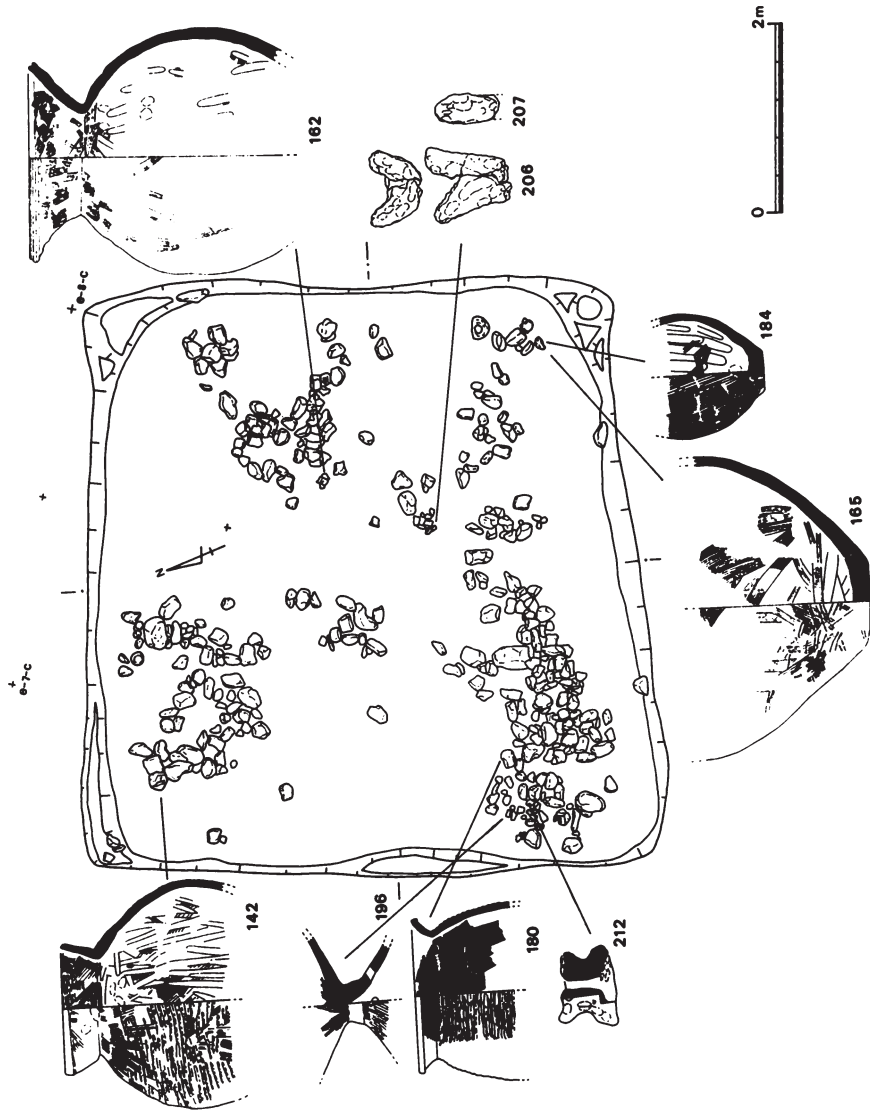


图15 ST-6 遺物出土狀況

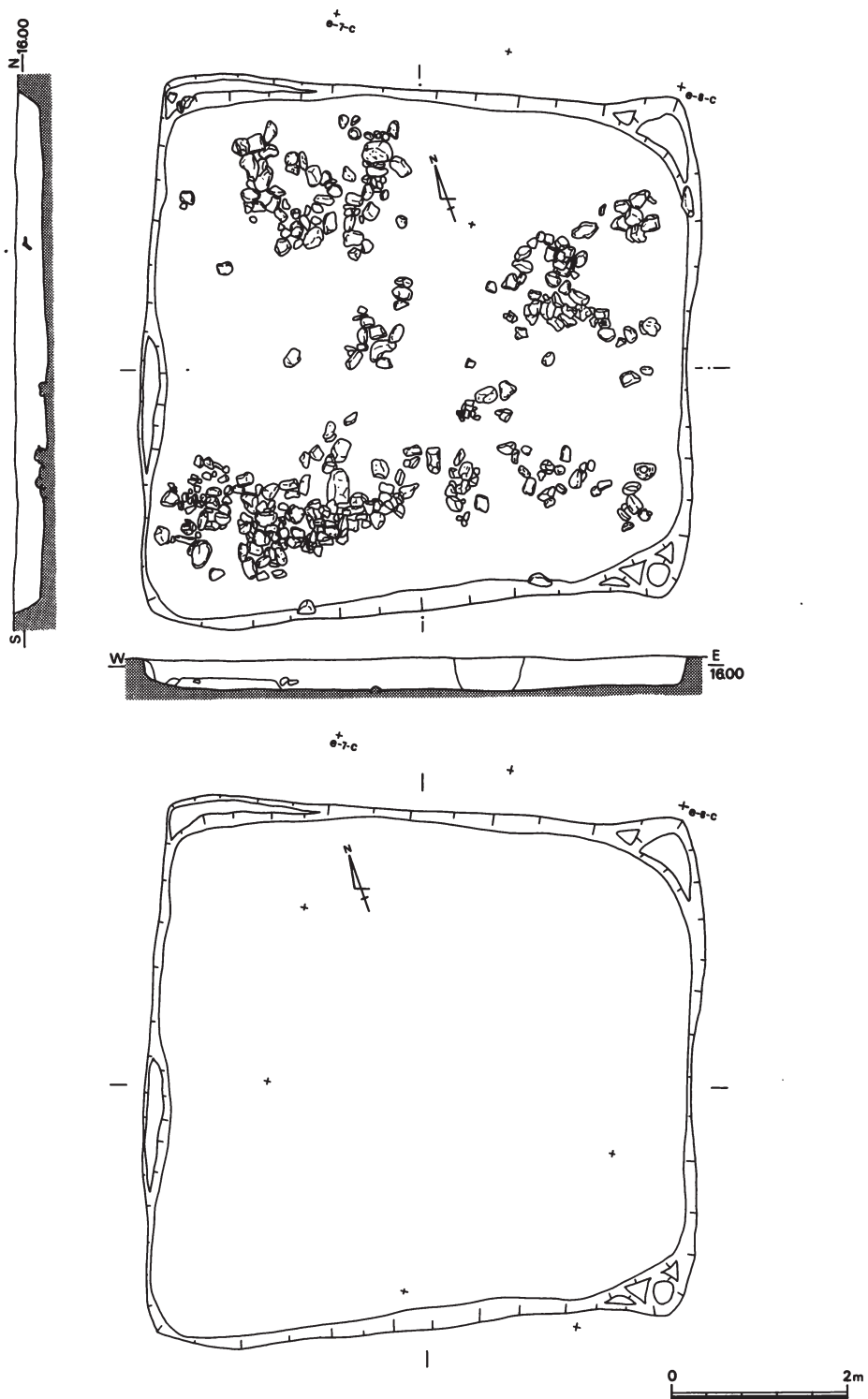


图16 ST-6 集石状态 ST-6 完掘状况

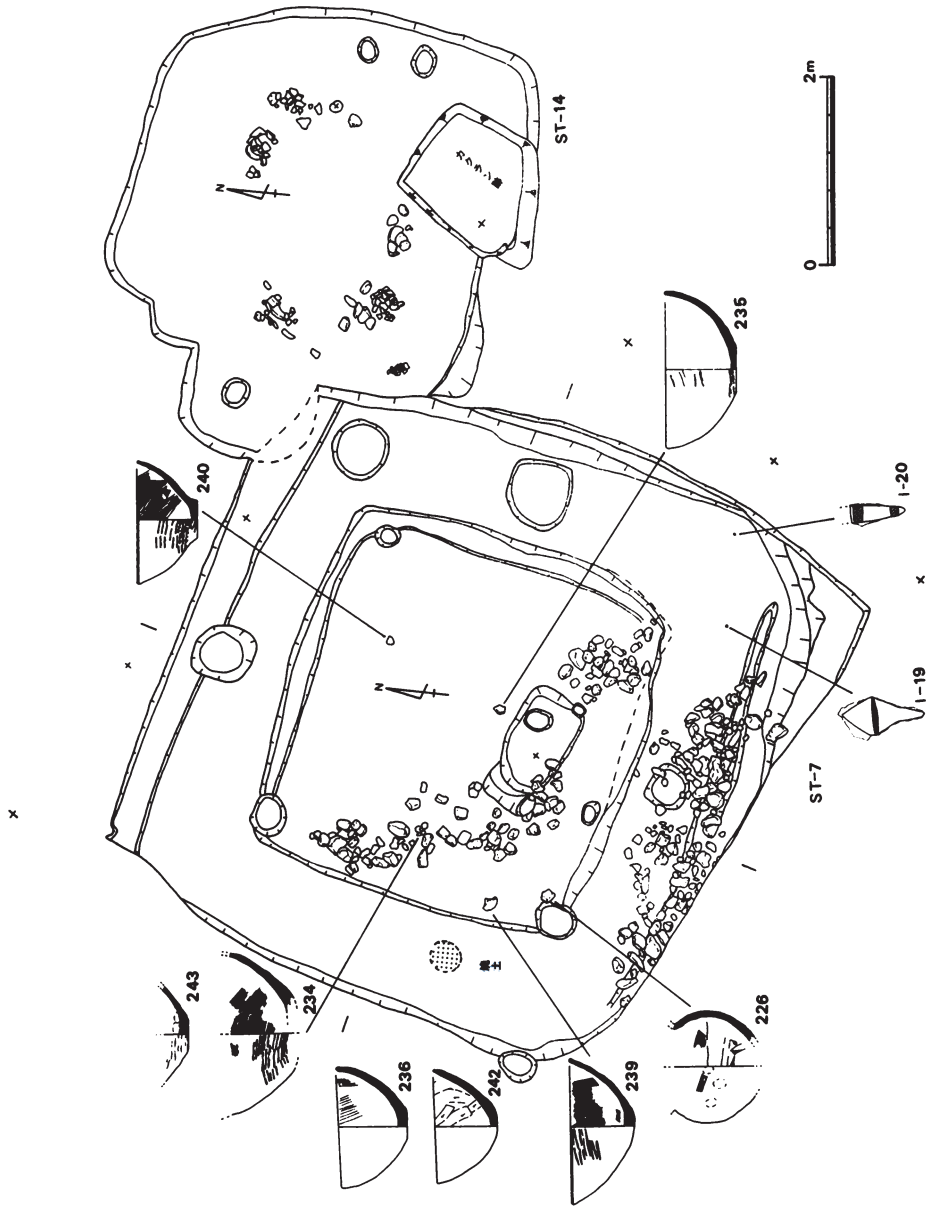
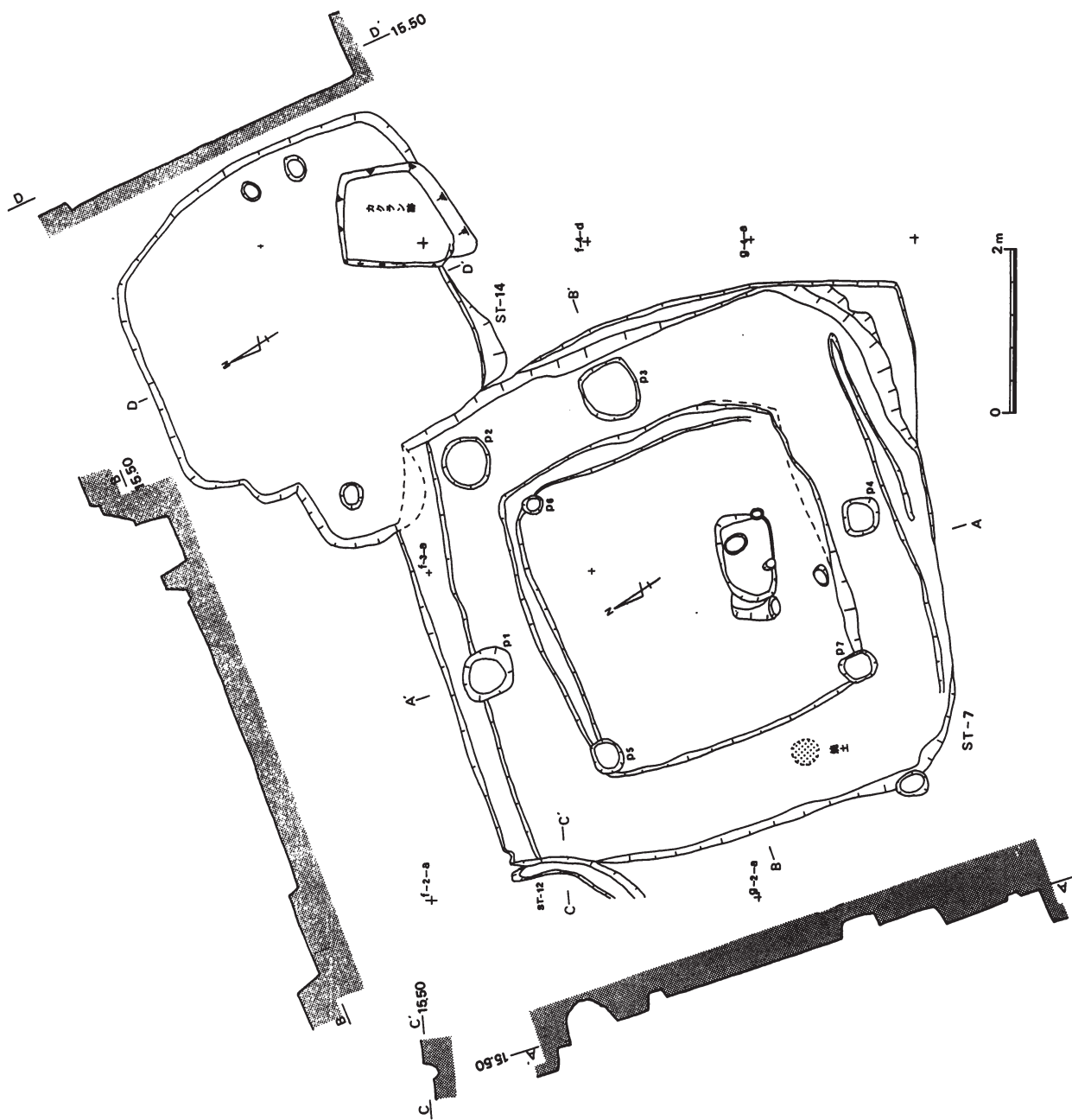


图17 ST-7·14遺物出土狀況



18 ST-7 · 12 · 14

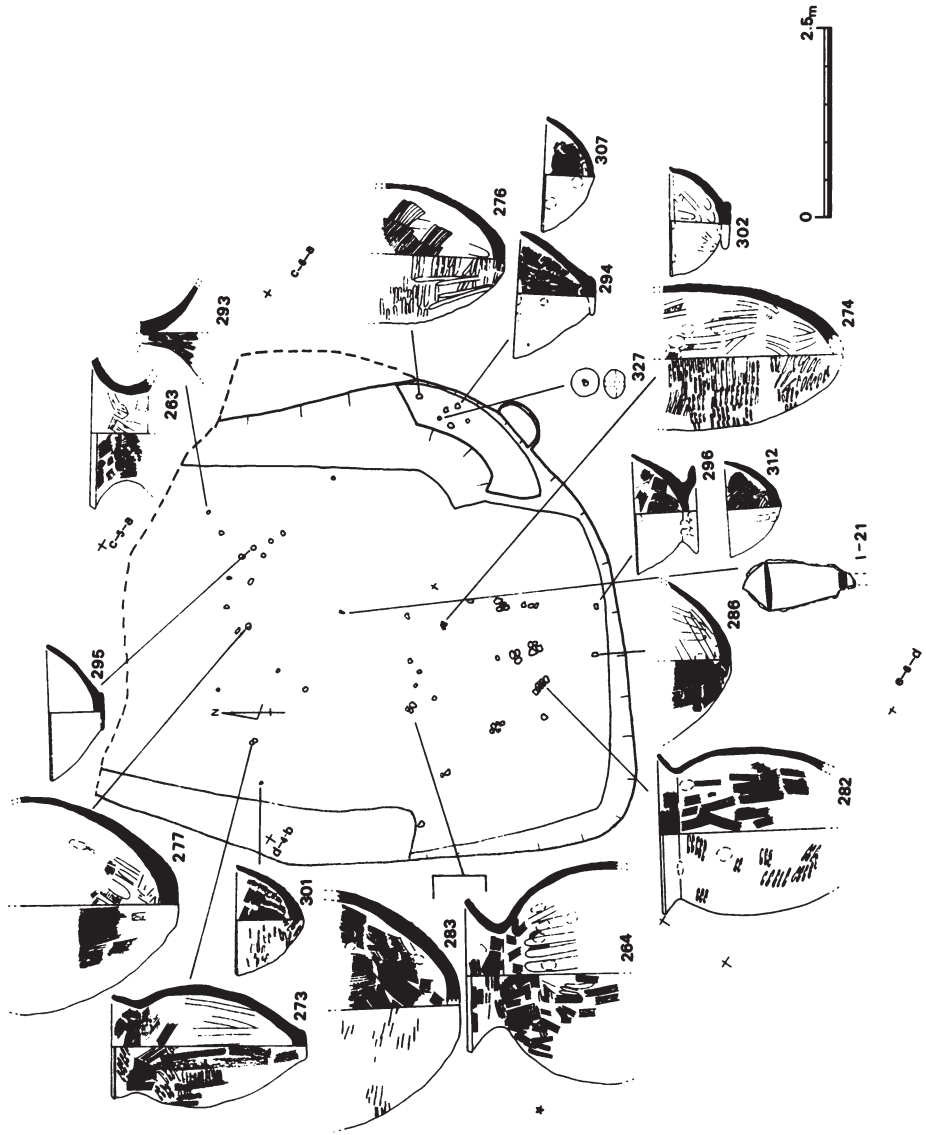
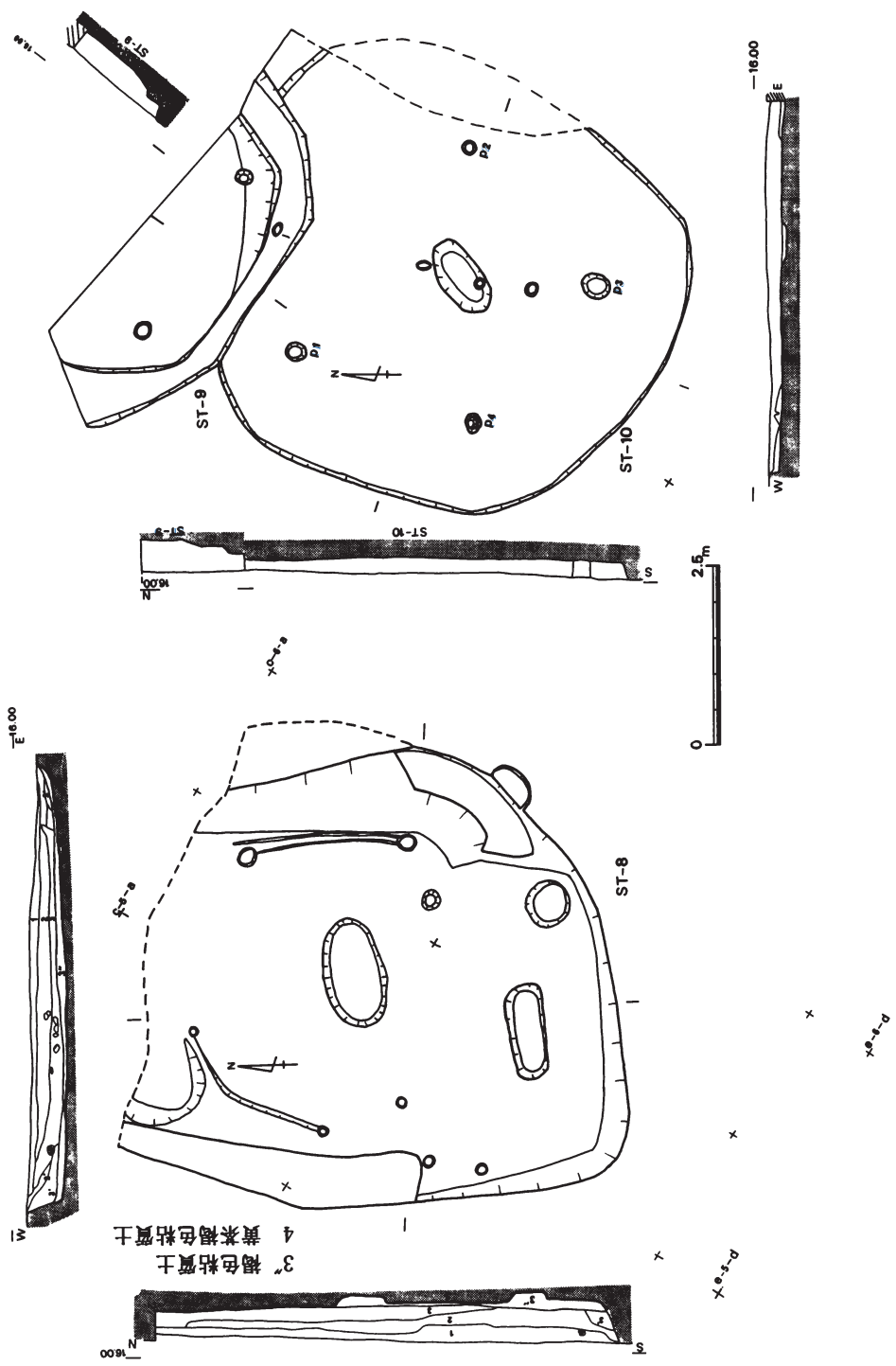


图19 ST-8 遺物出土狀況



4 黄茶褐色粘质土
3 褐色粘质土

图 20 ST-8·9·10

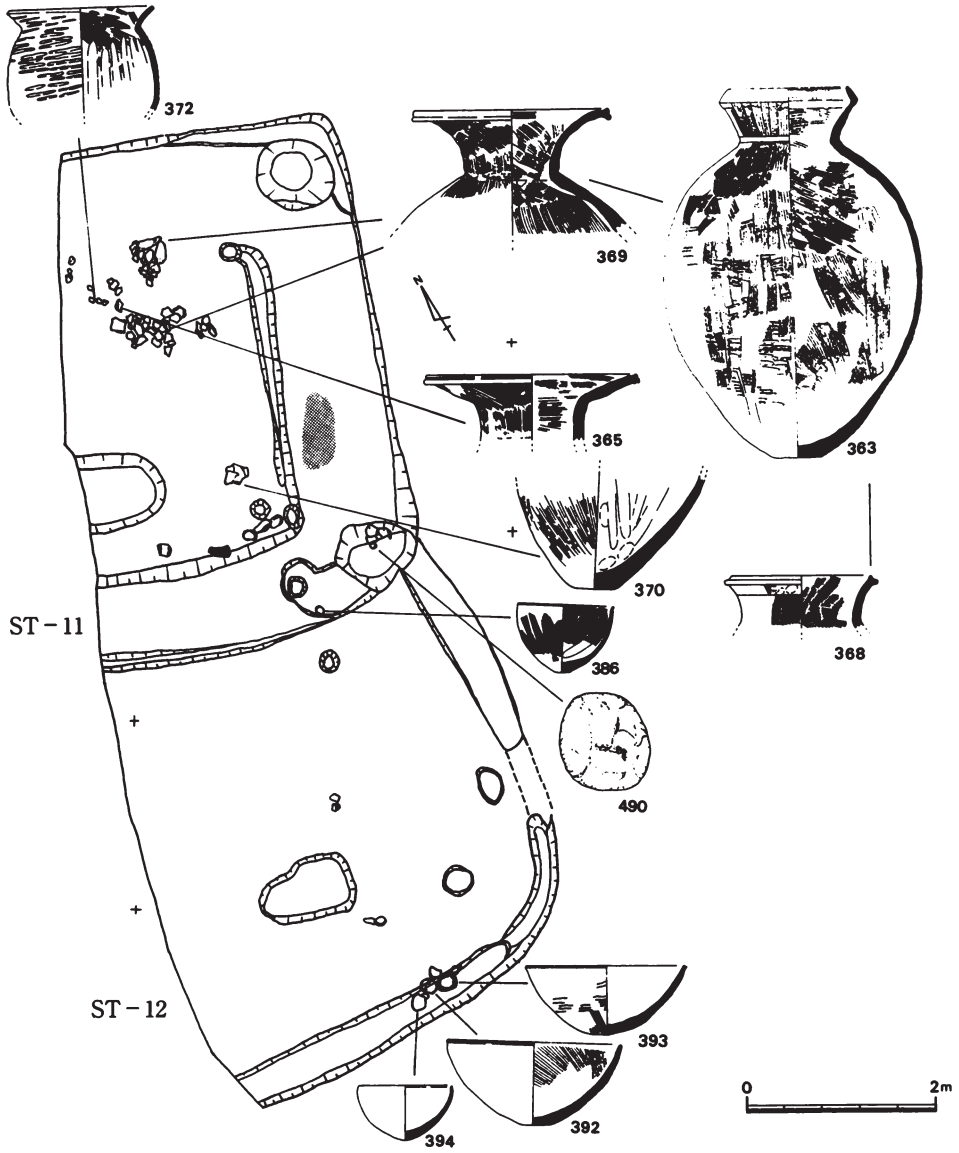


图21 S T - 11 · 12遺物出土狀況

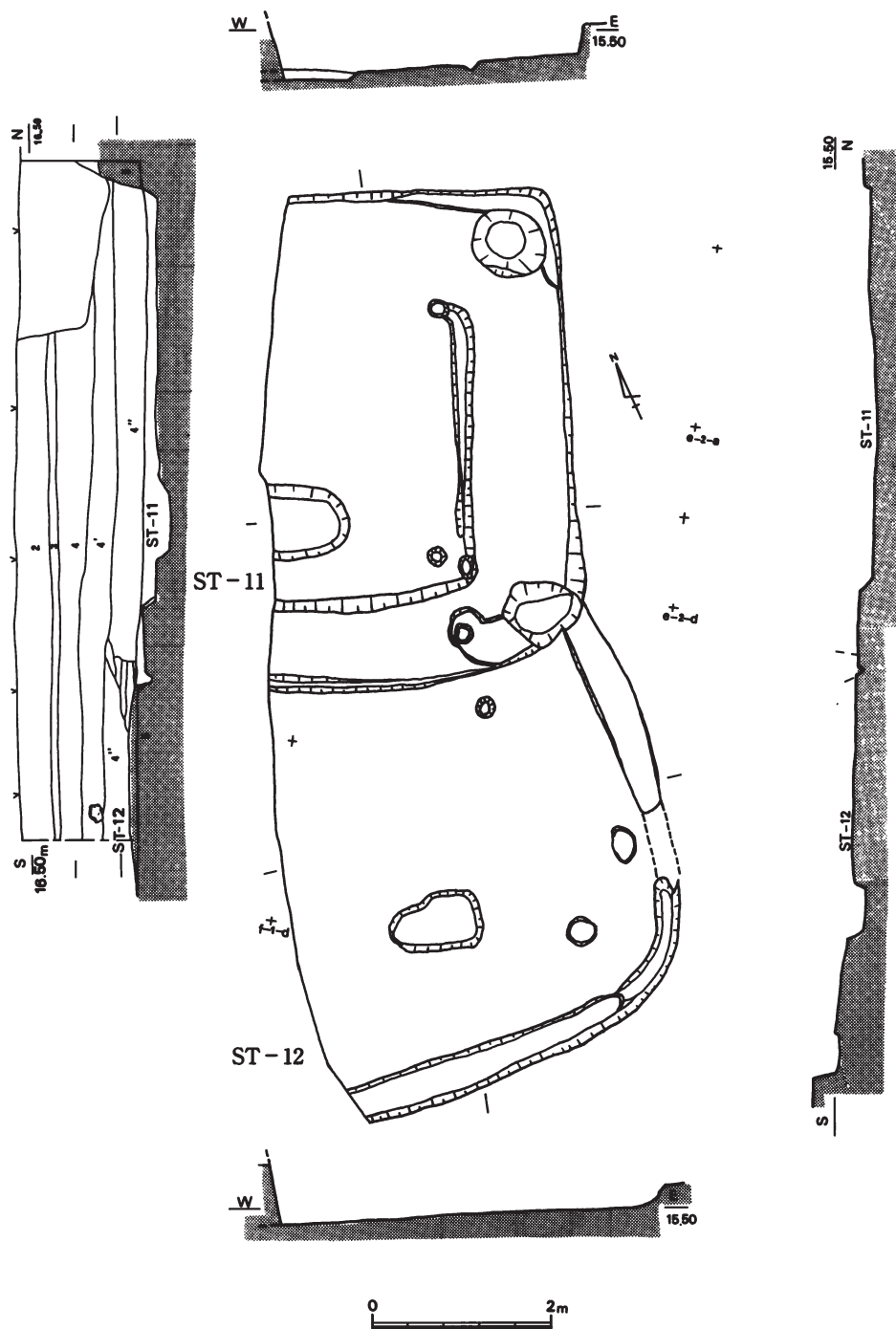
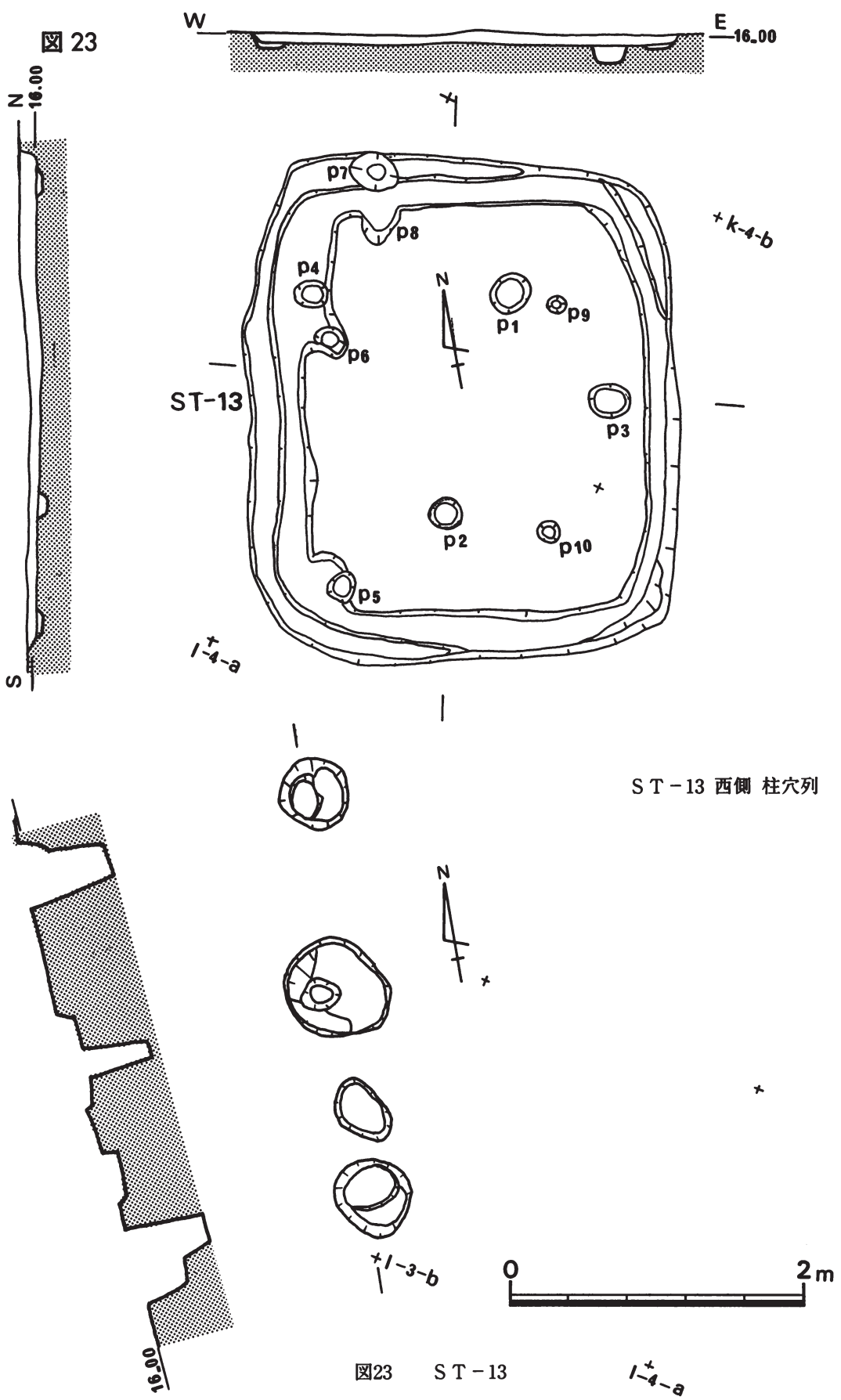


图22 ST-11·12



ST-13 西侧 柱穴列

图23 ST-13

1-4-a

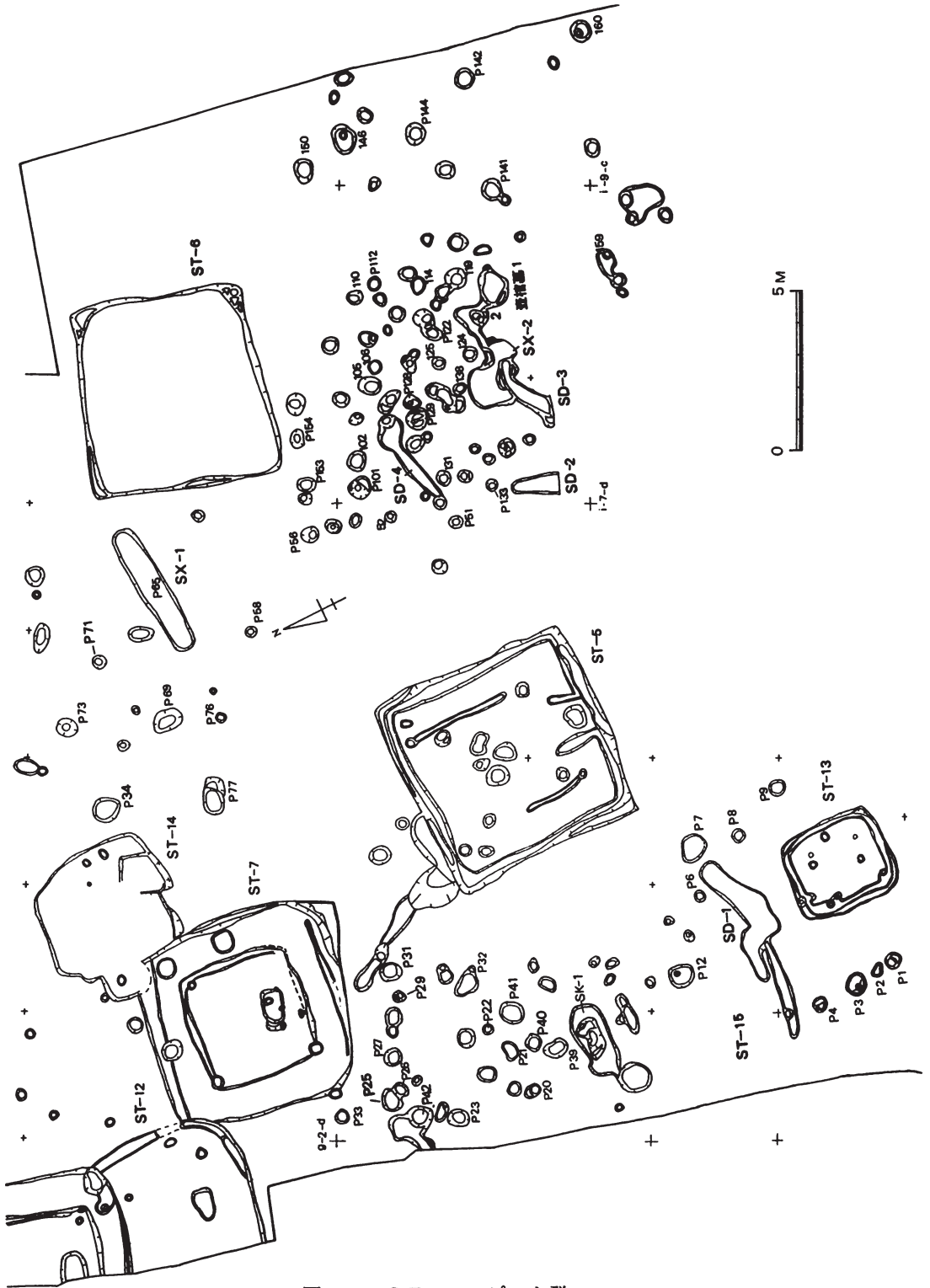


図24 ST-15・ピット群

图 25

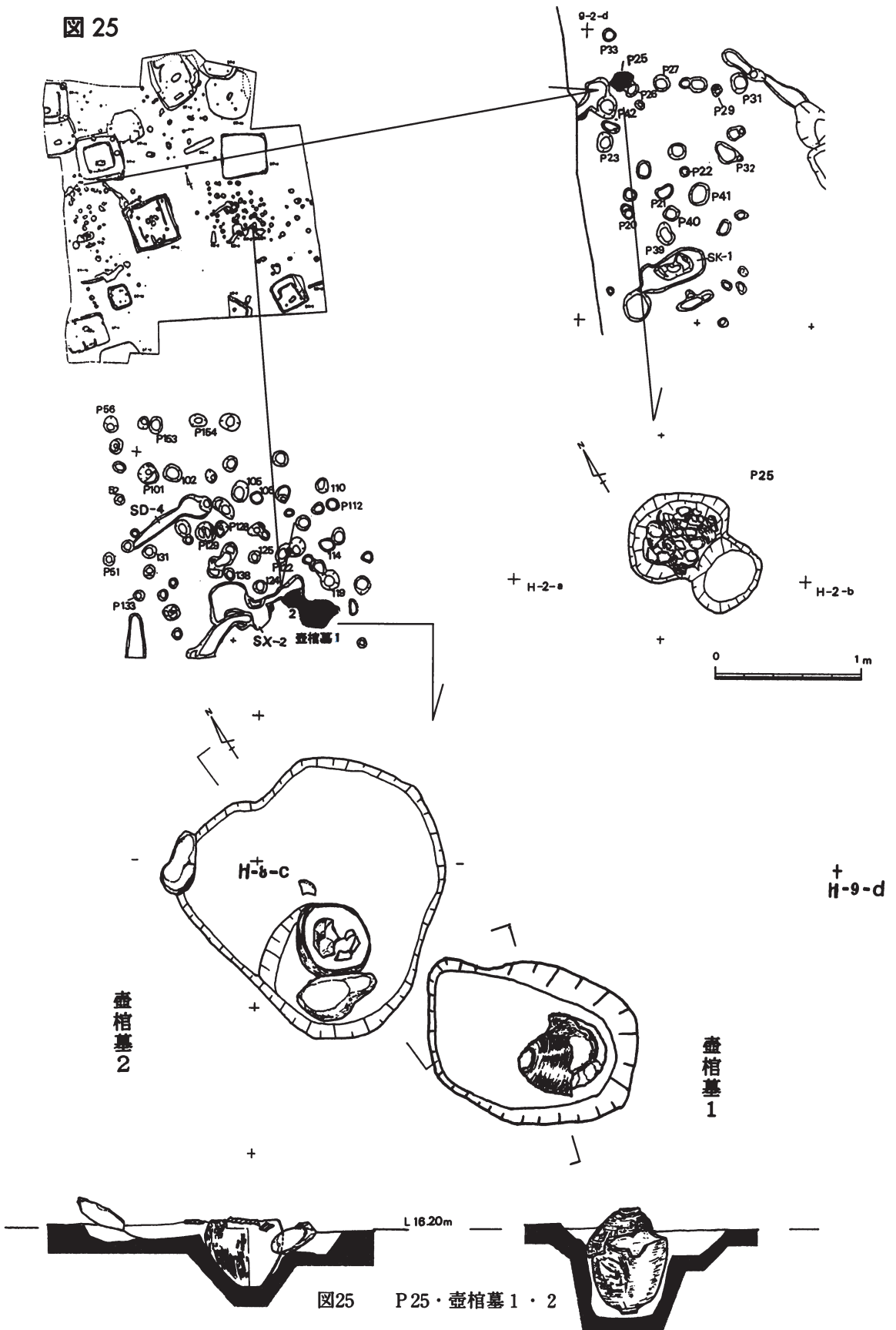


图25 P25·壺棺墓1·2

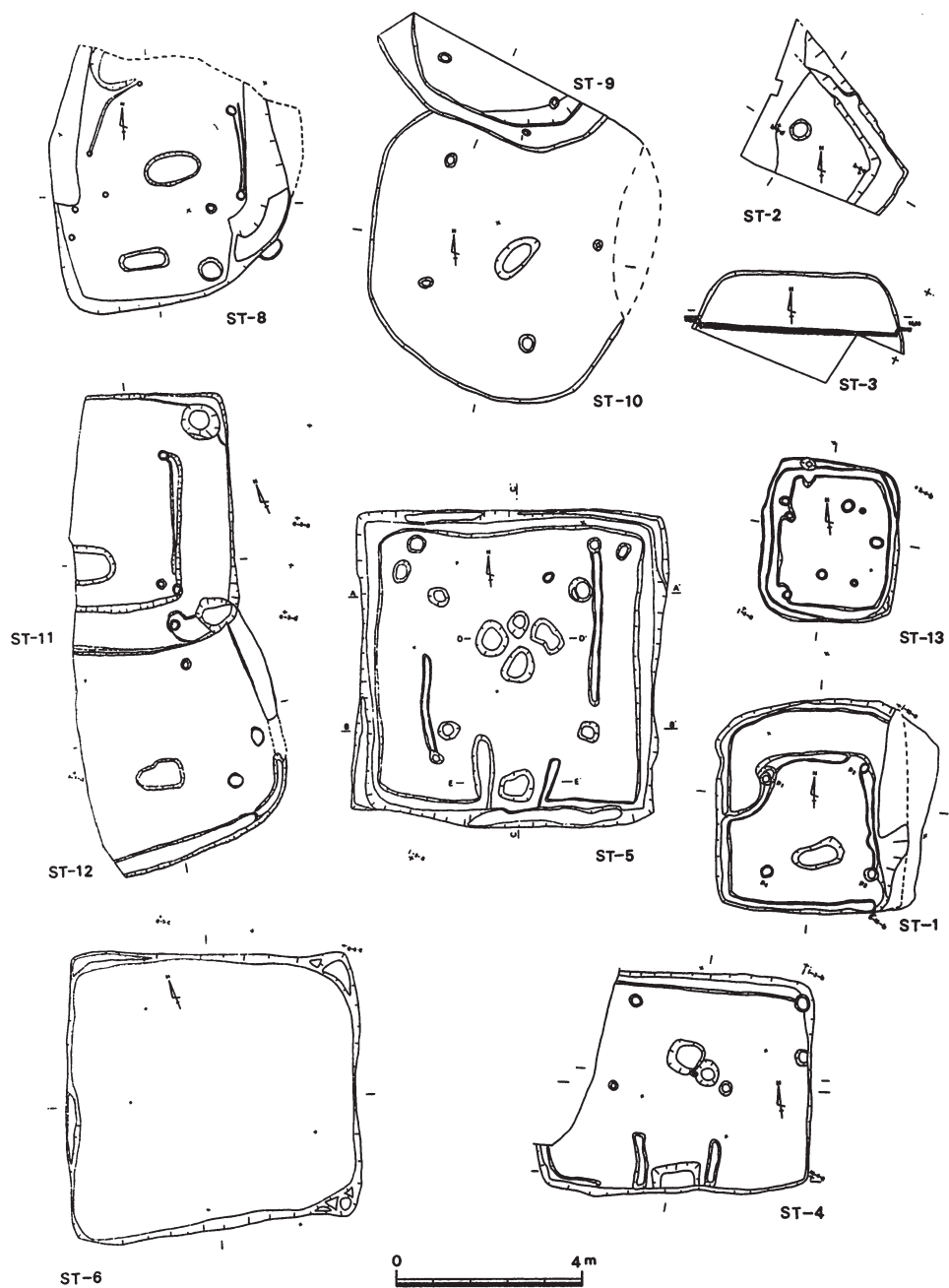


图26 竖穴住居集成图

Fig. 1

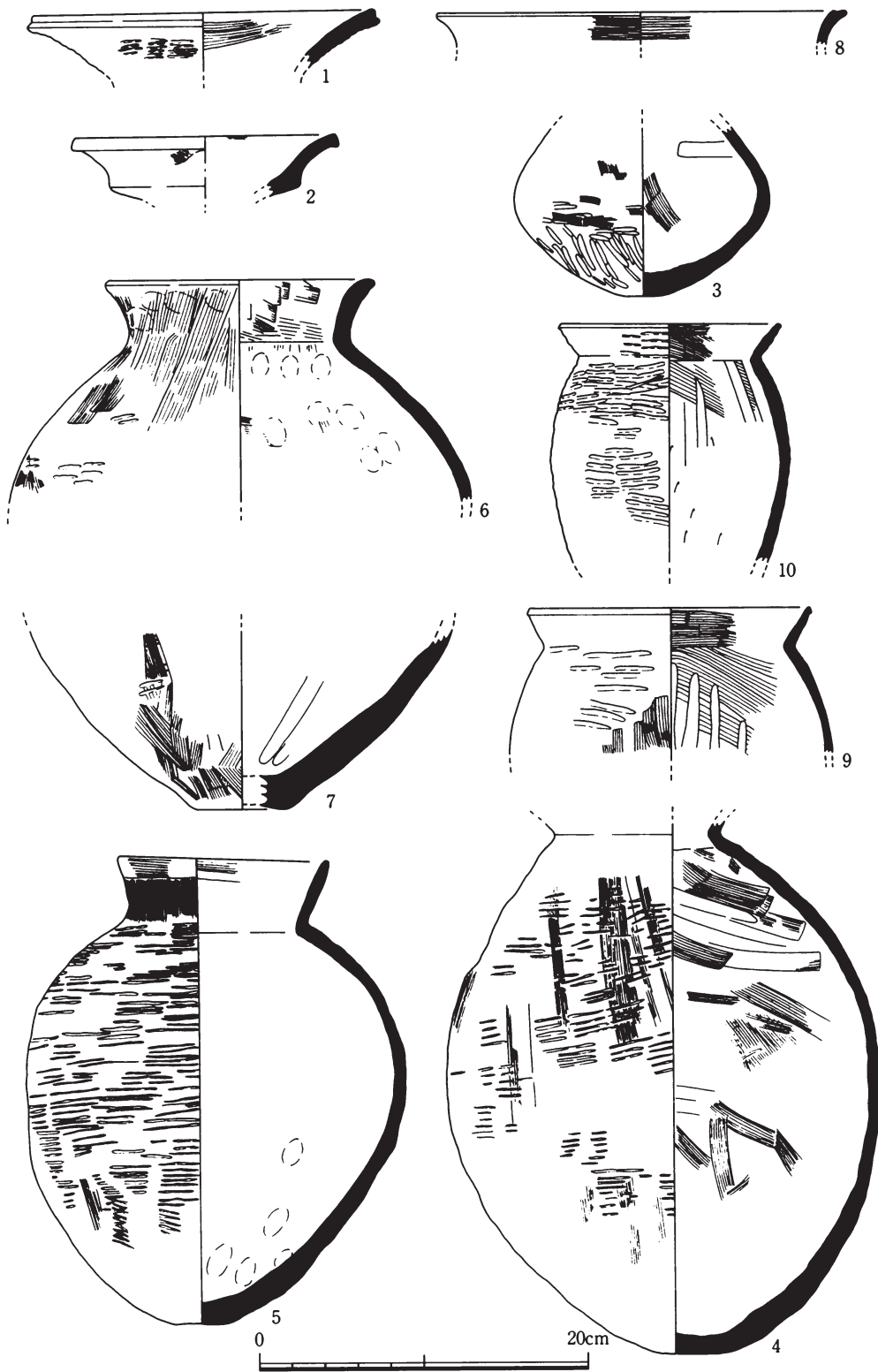


Fig. 1 ST-1 出土土器

Fig. 2

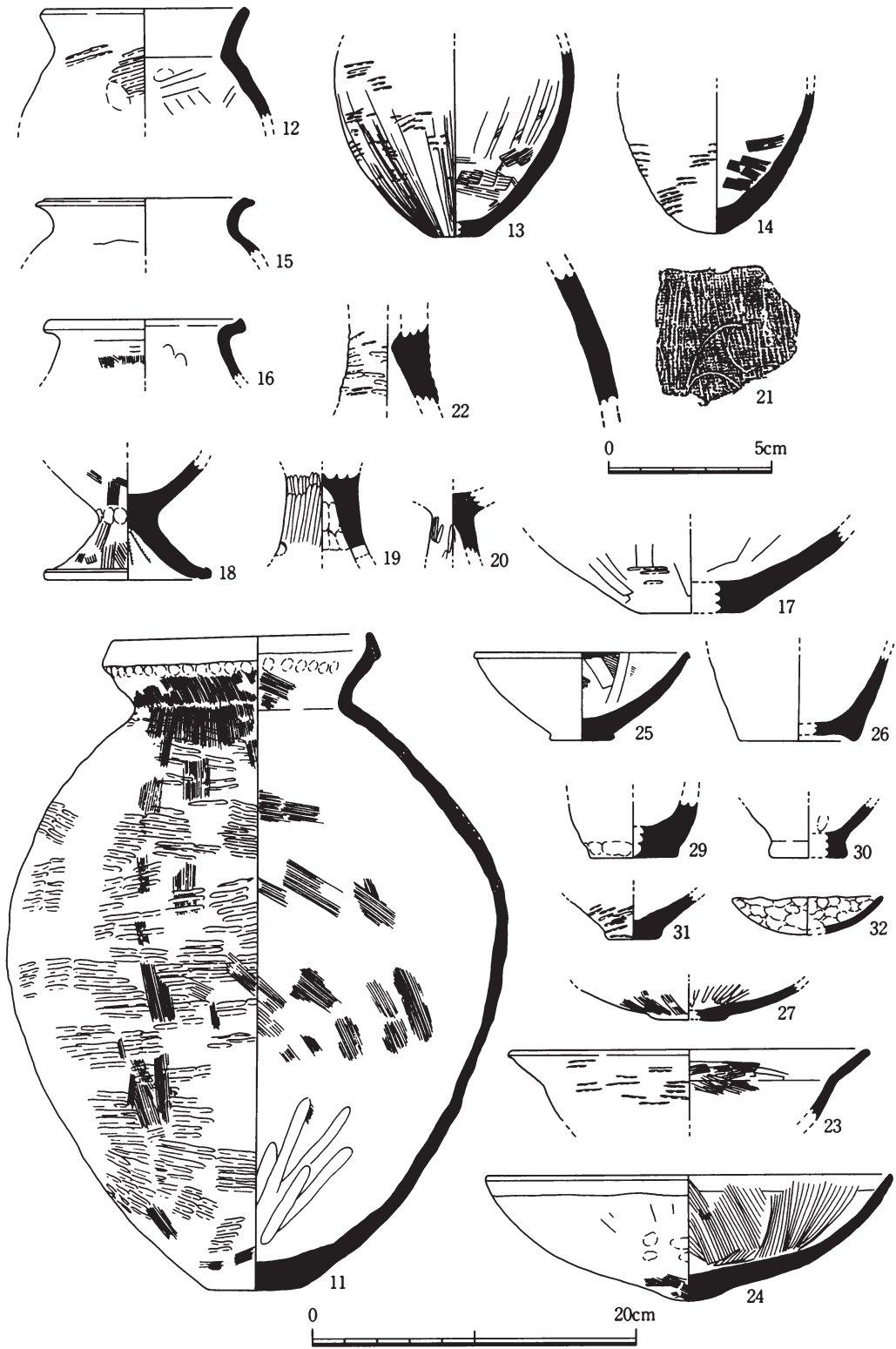


Fig. 2 ST-1 出土土器

Fig. 3

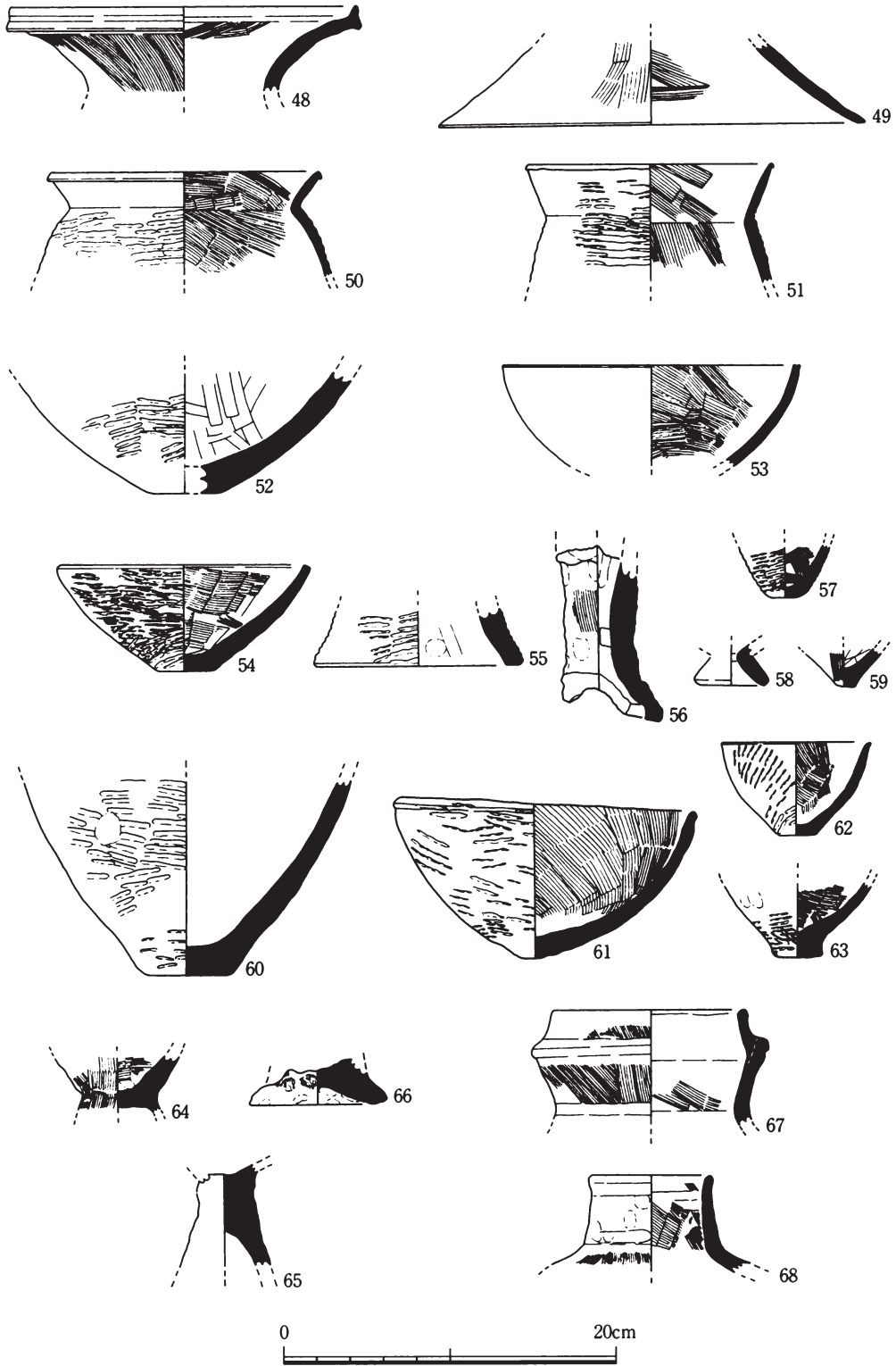


Fig. 3 ST-2~4 出土土器

Fig. 4

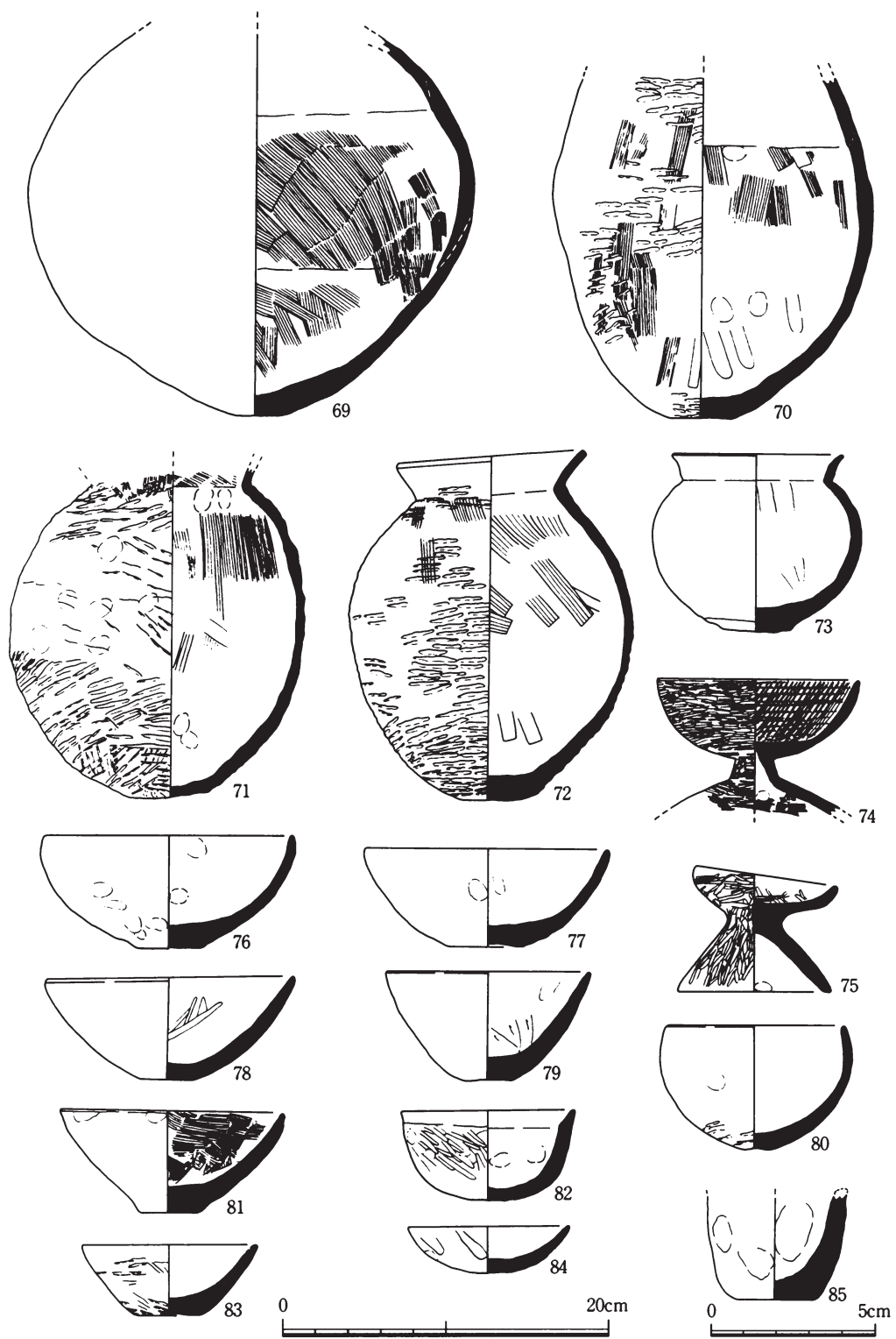


Fig. 4 ST - 4 出土土器

Fig. 5

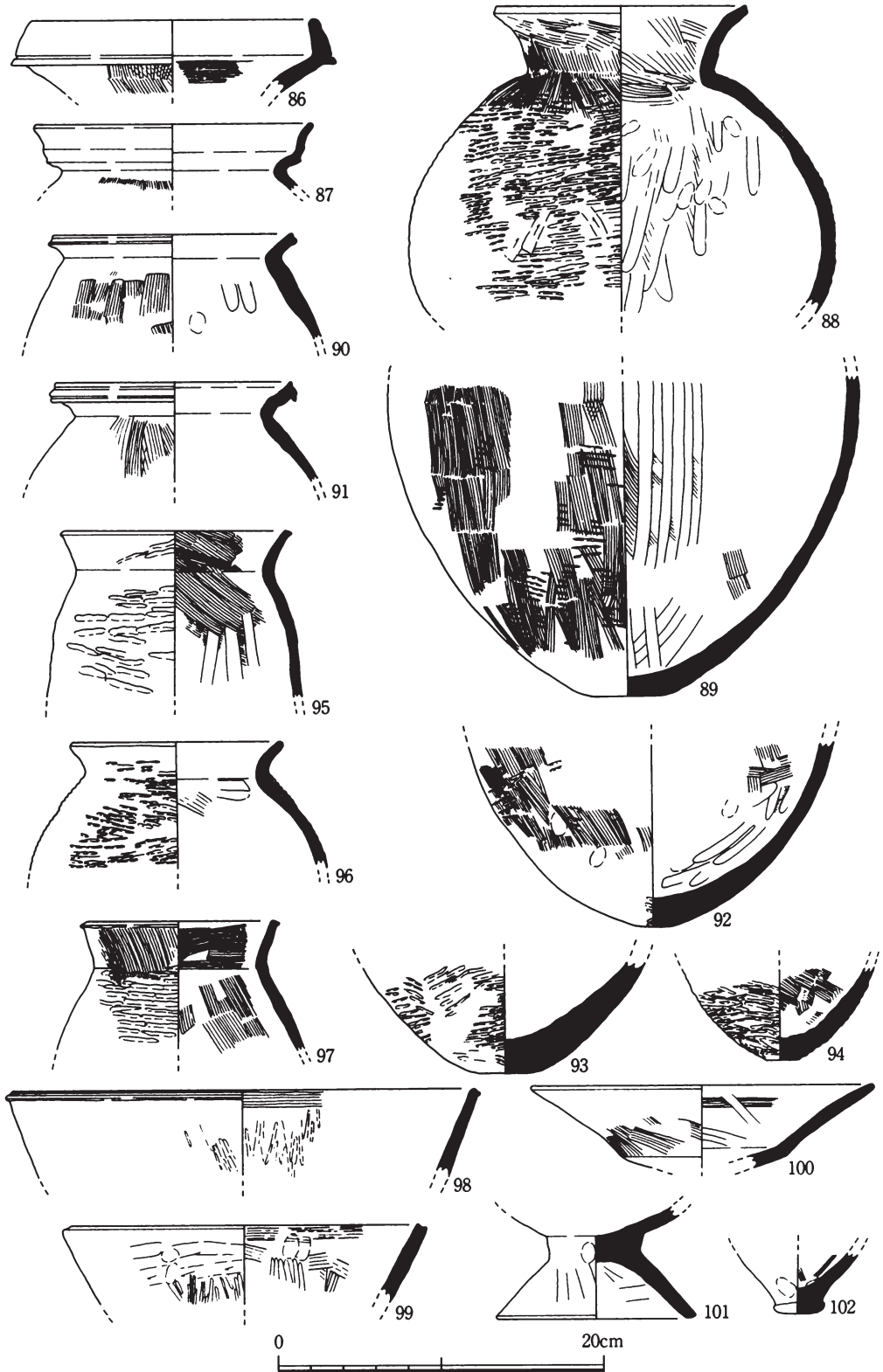
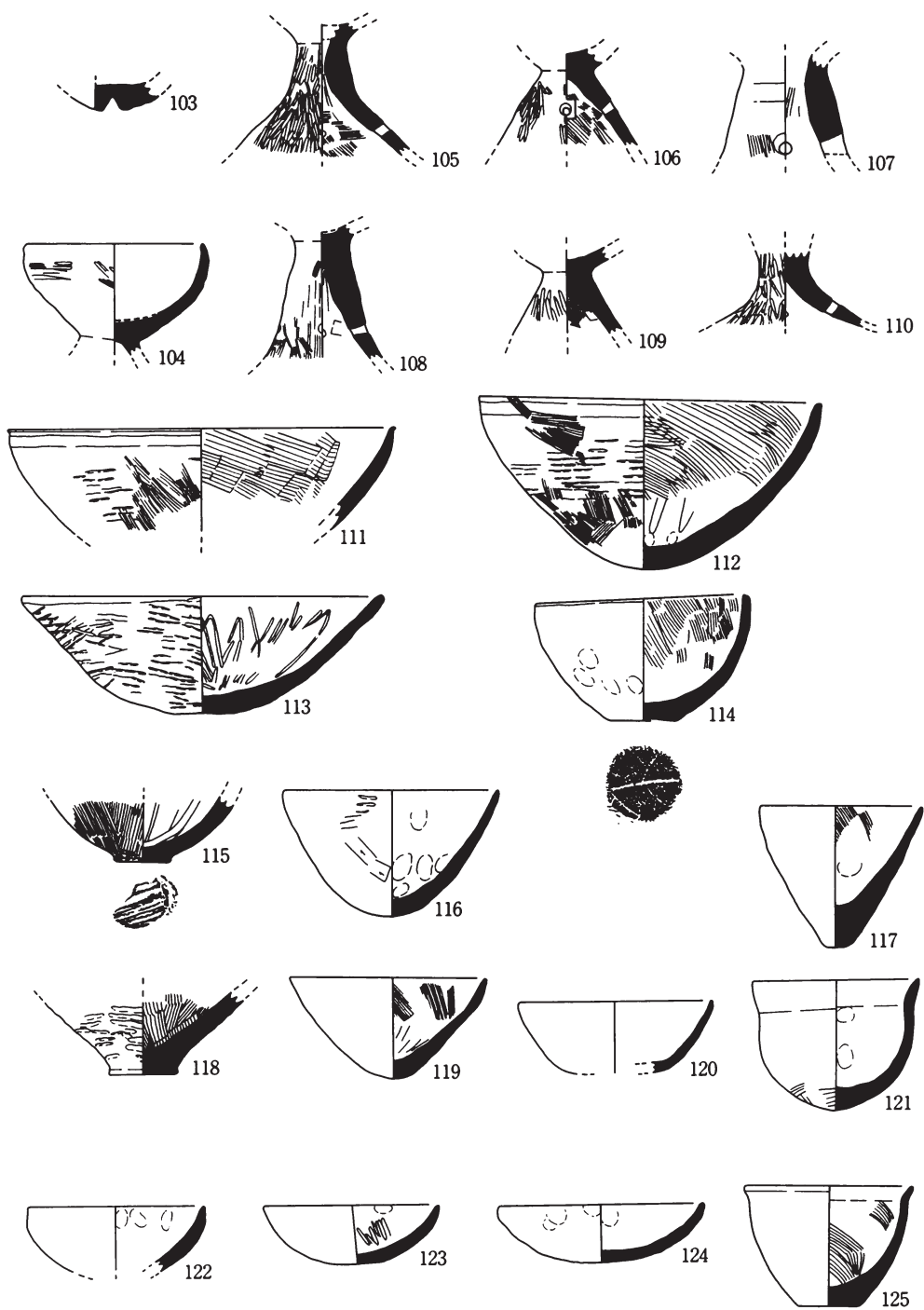


Fig. 5 ST - 5 出土土器

Fig. 6



0 20cm

Fig. 6 S T - 5 出土土器

Fig. 7

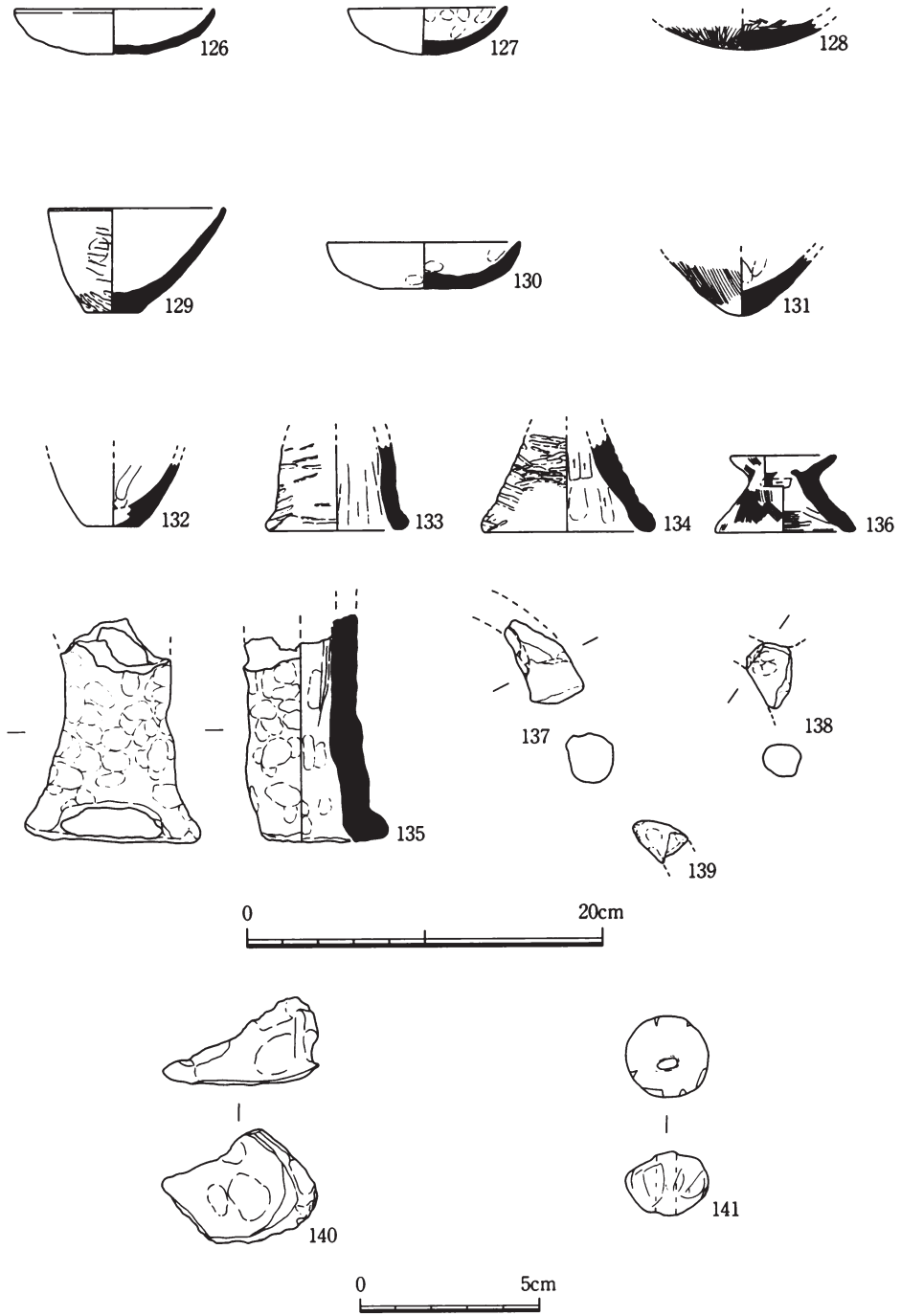


Fig. 7 ST-5 出土遺物

Fig. 8

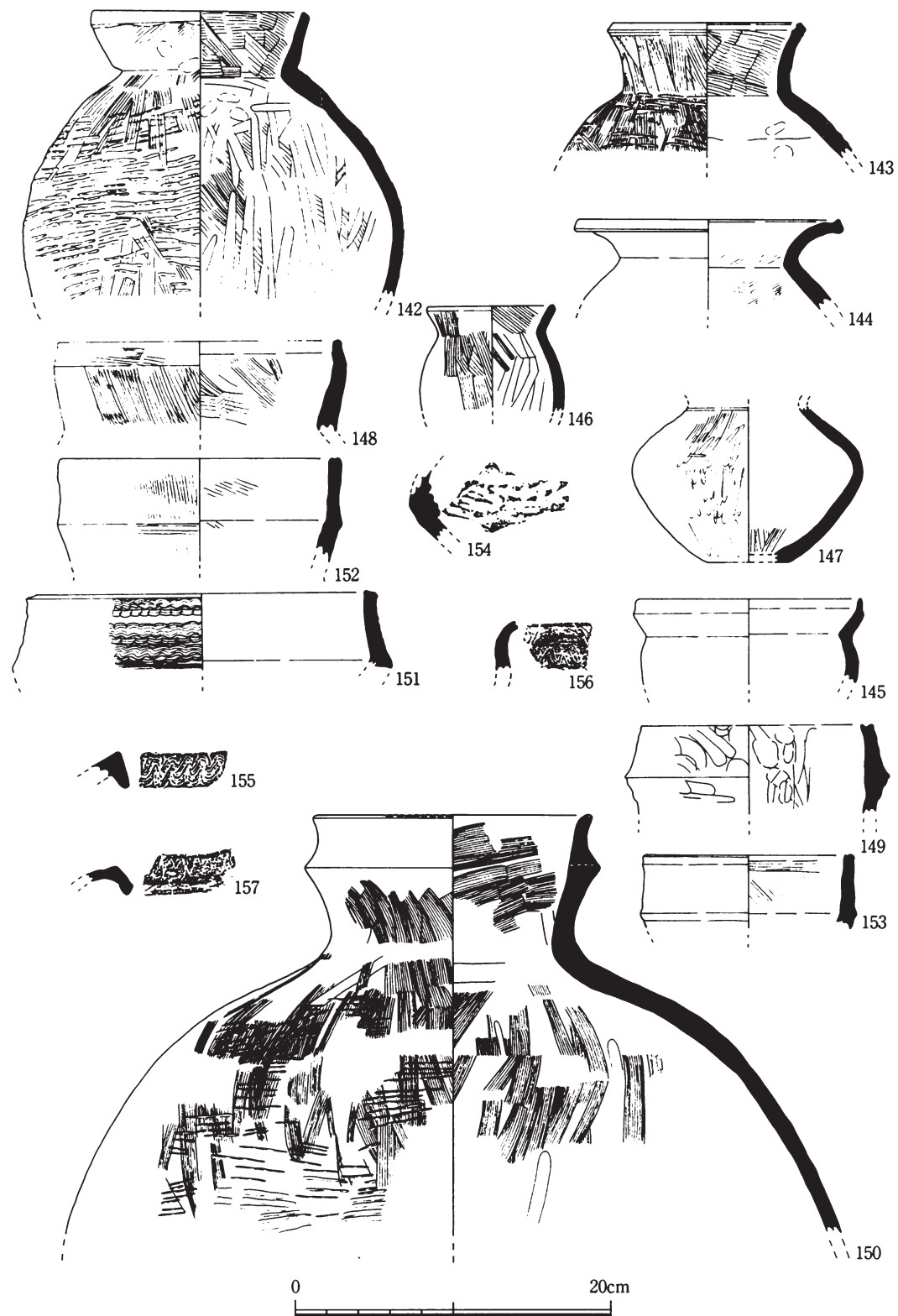


Fig. 8 ST-6 出土土器

Fig. 9

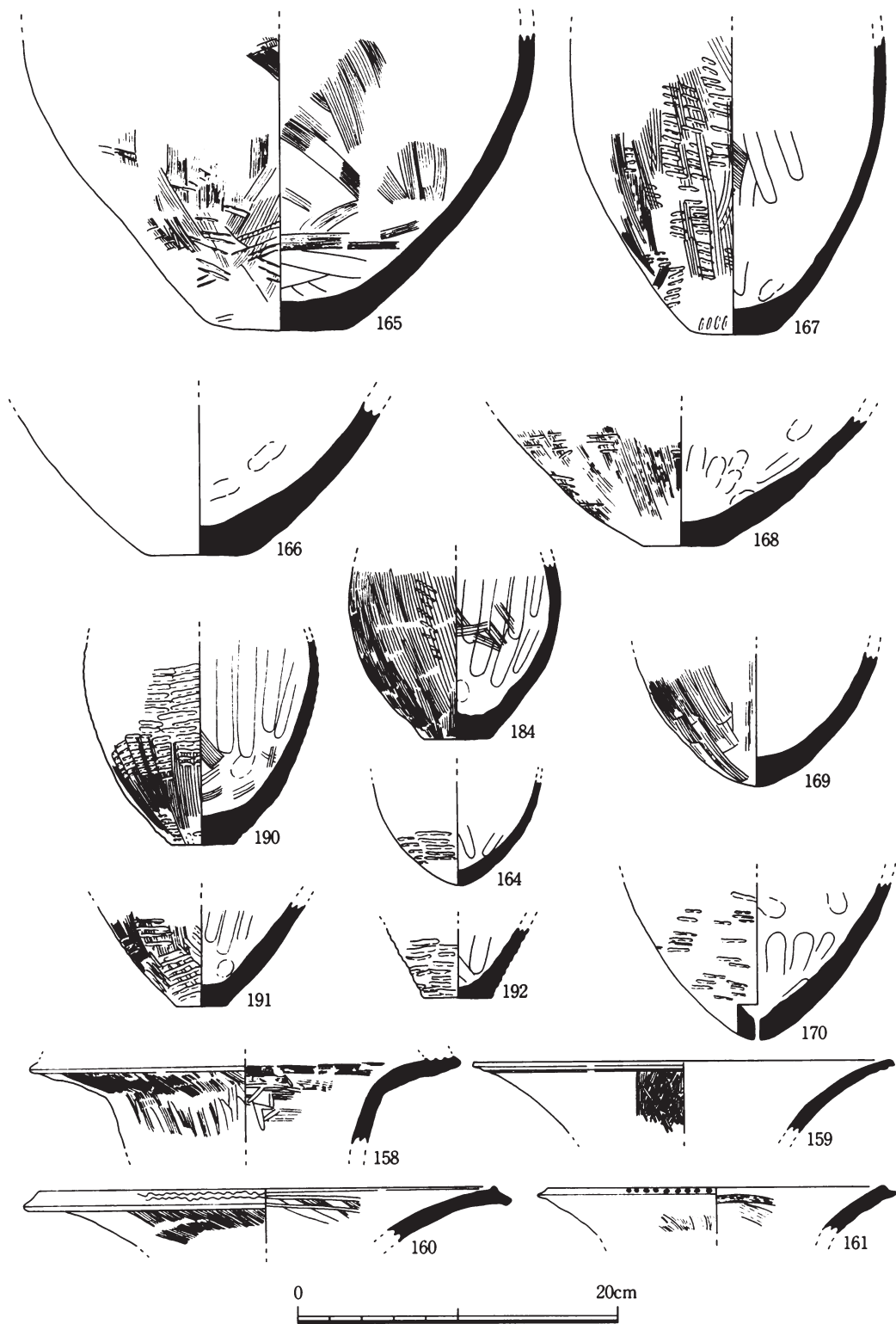


Fig. 9 ST-6 出土土器

Fig. 10

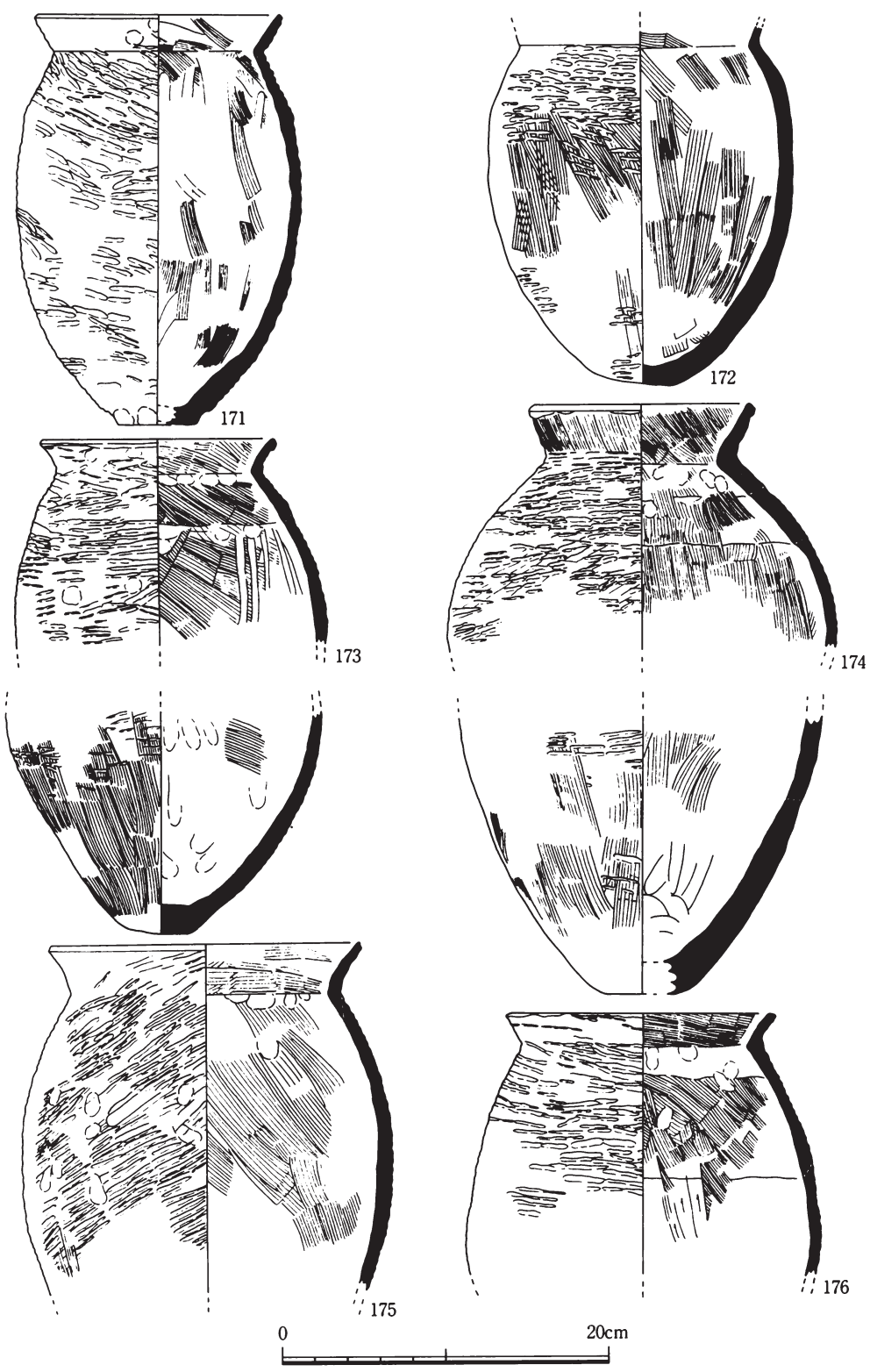


Fig.10 S T - 6 出土土器

Fig. 11

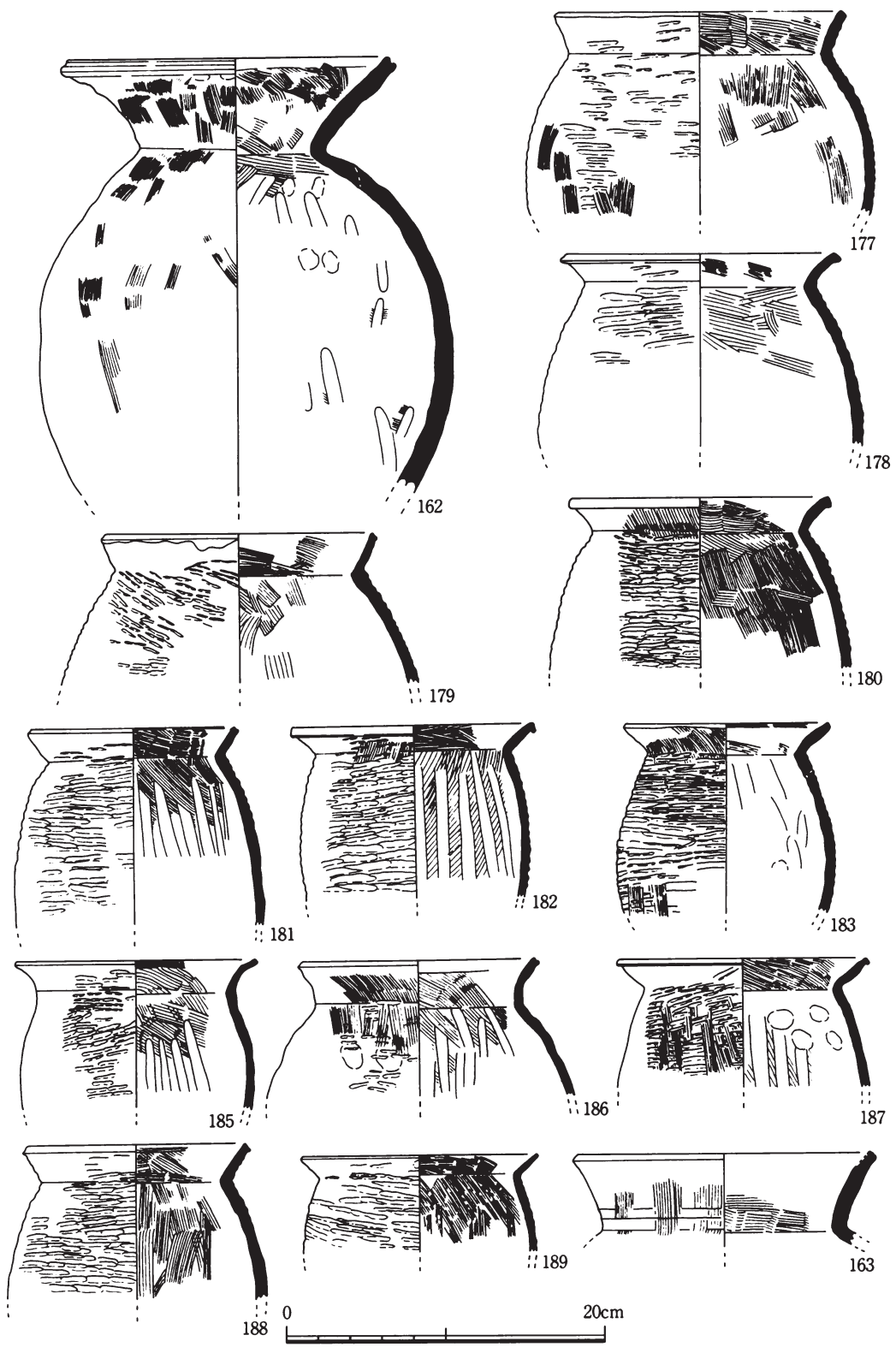


Fig.11 S T - 6 出土土器

Fig. 12

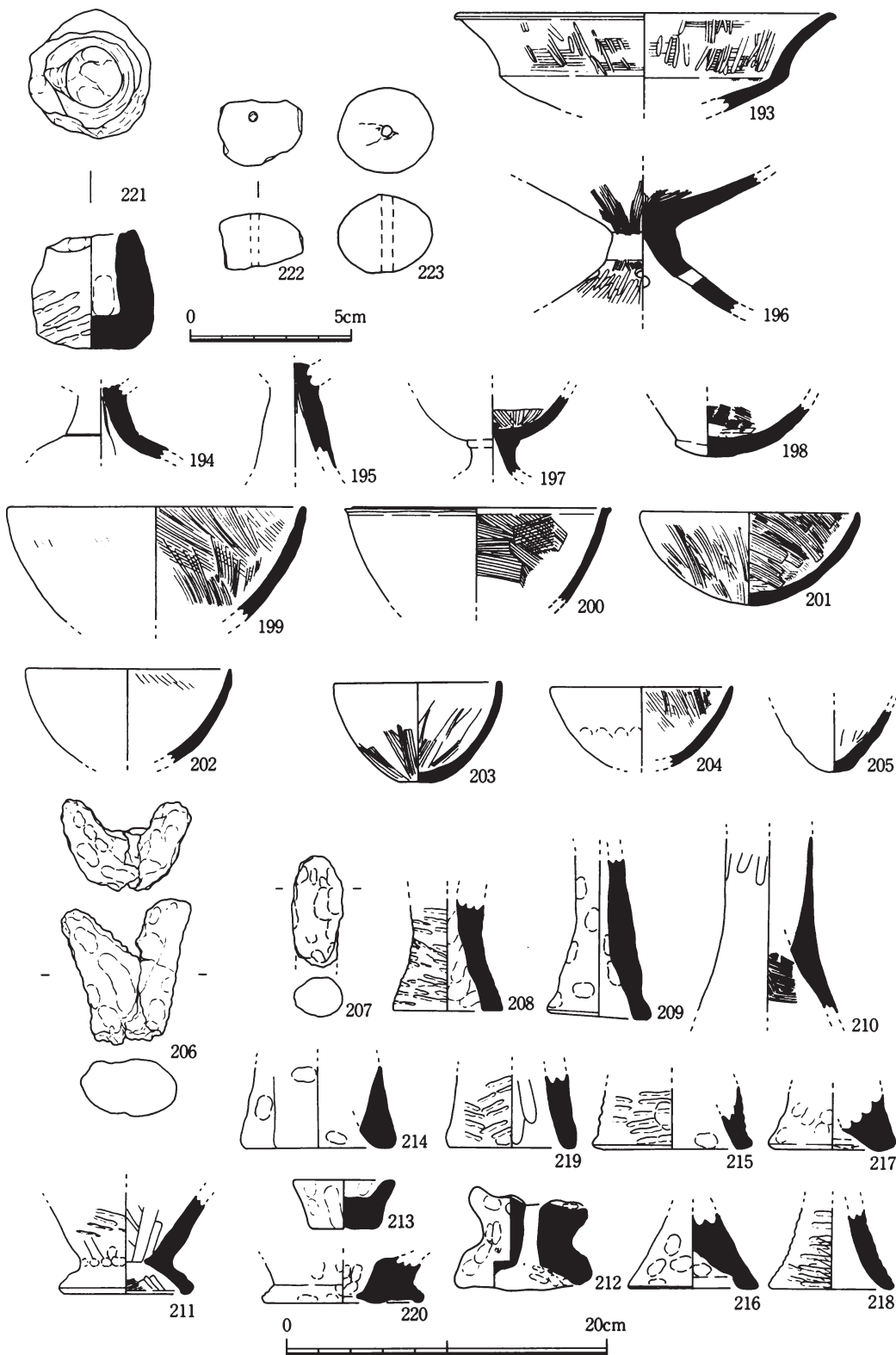


Fig.12 S T - 6 出土遺物

Fig. 13

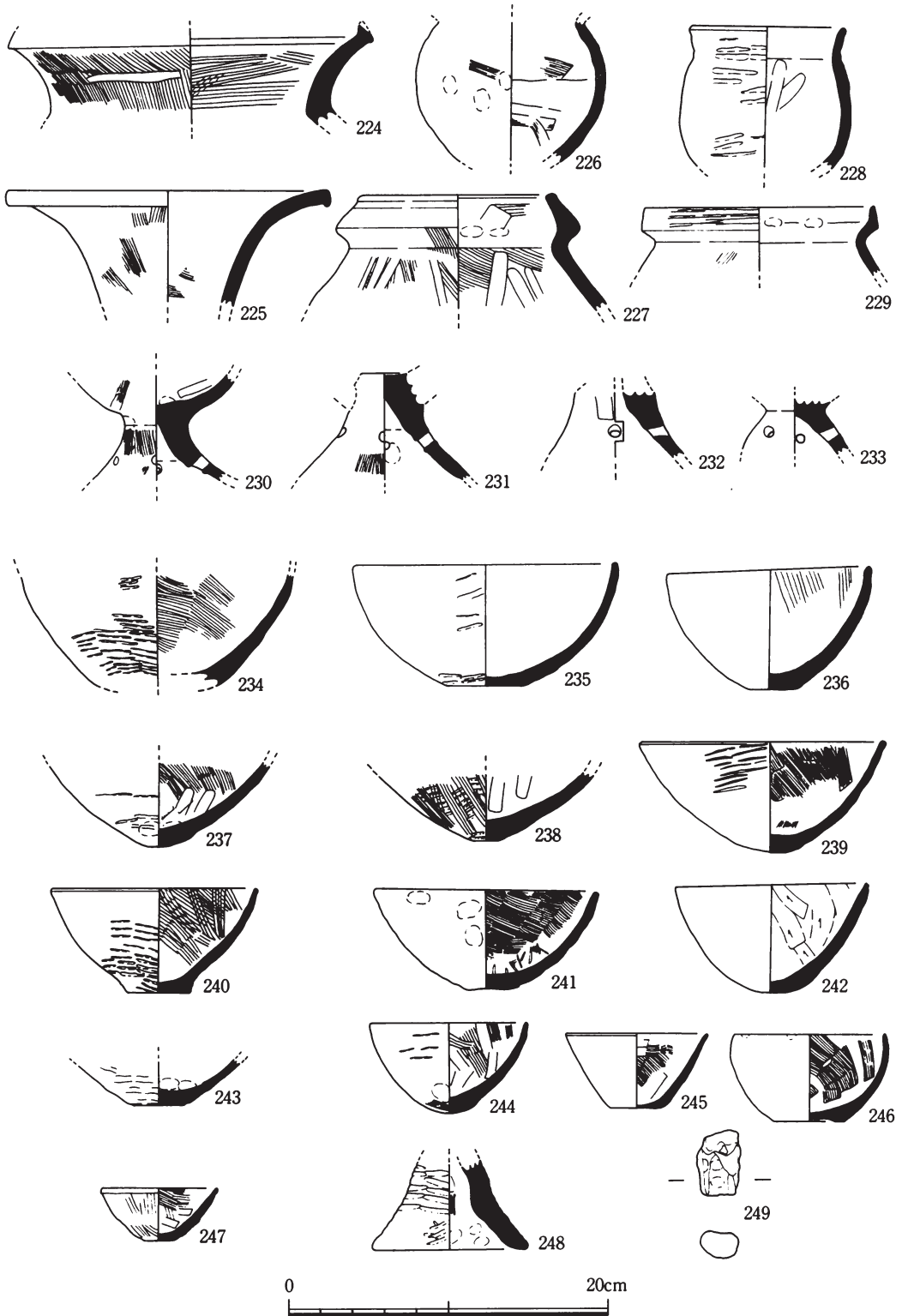


Fig.13 S T - 7 出土土器

Fig. 14

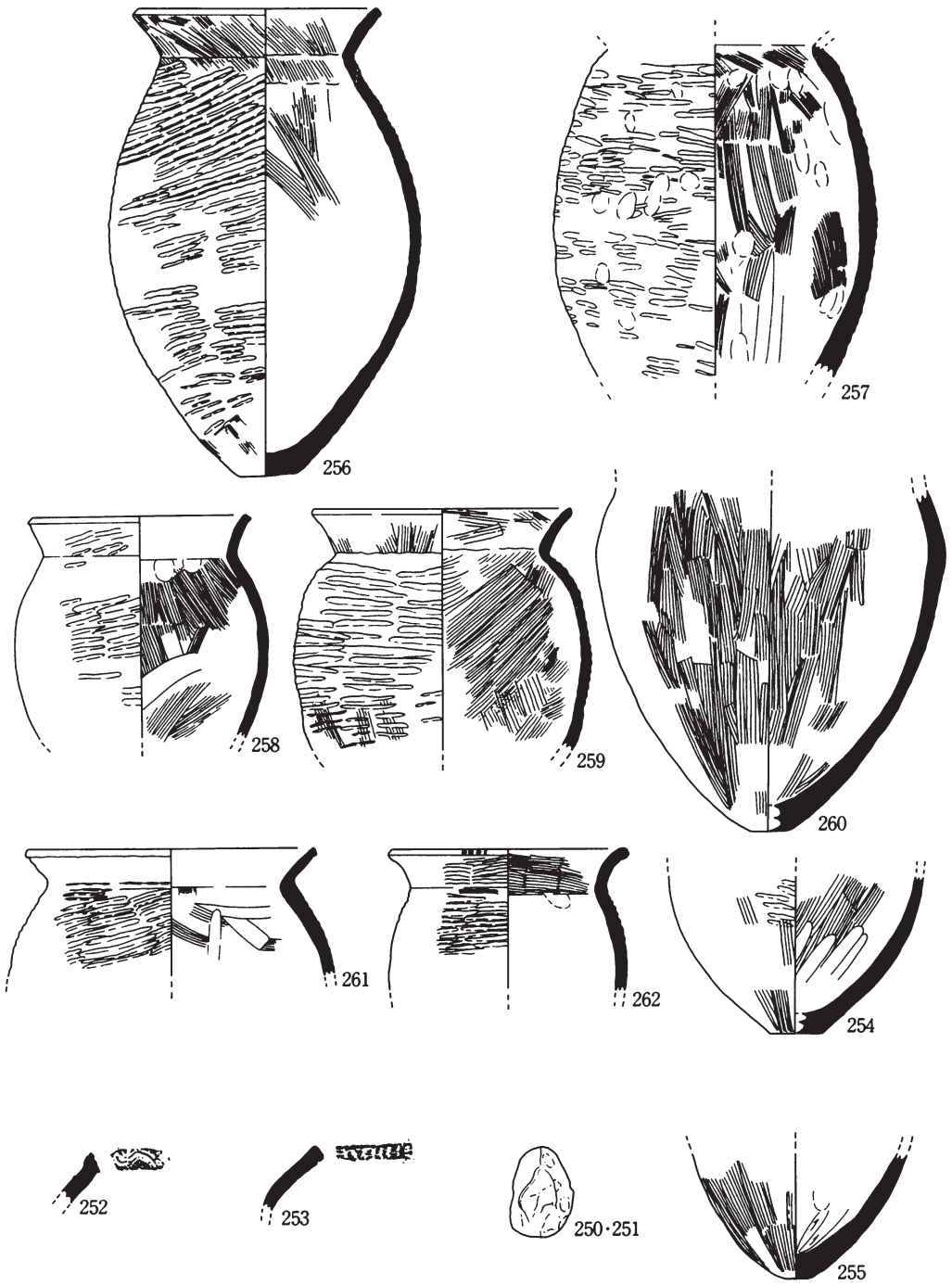


Fig.14 S T - 7 出土土器

Fig. 15

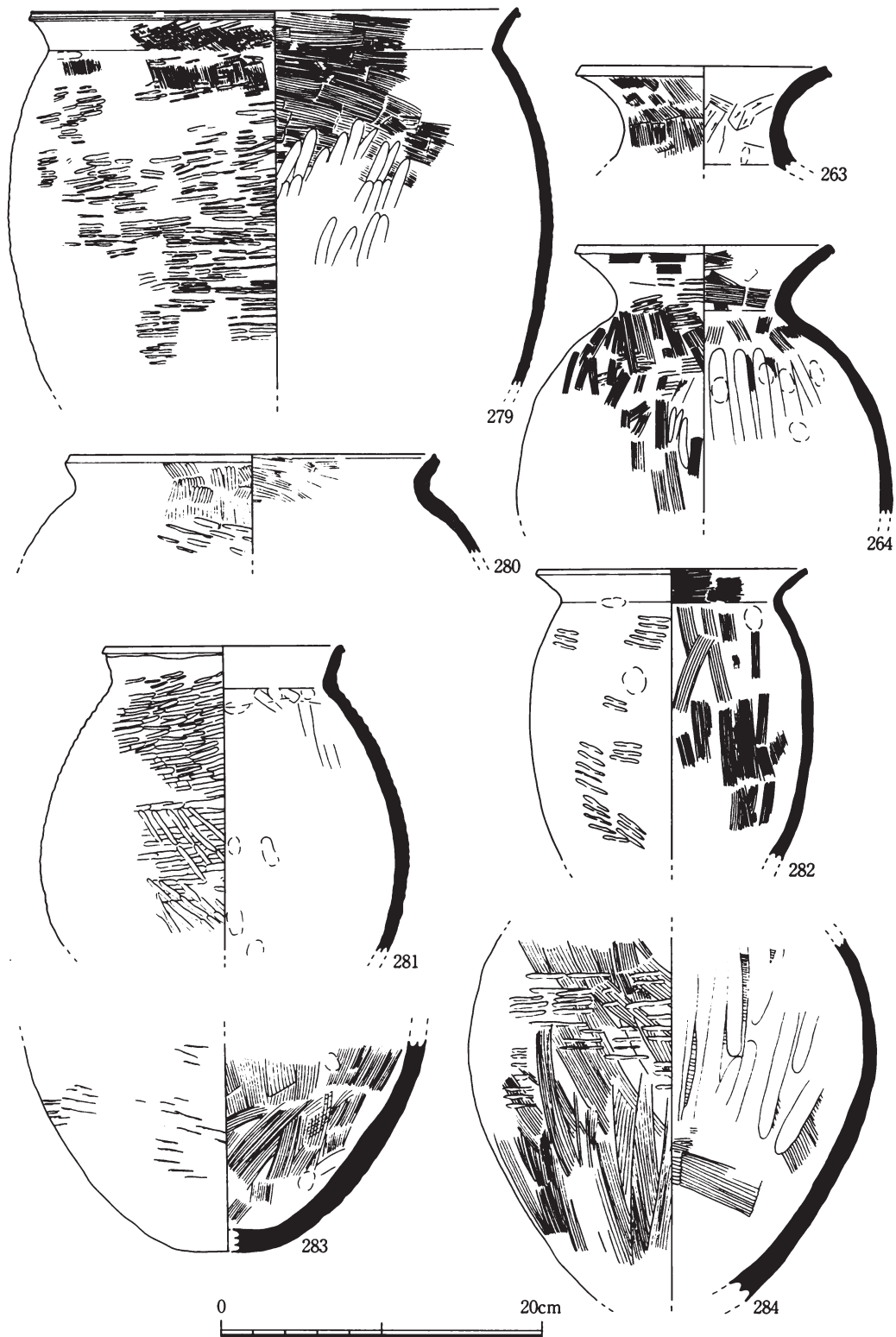


Fig.15 S T - 8 出土土器

Fig. 16

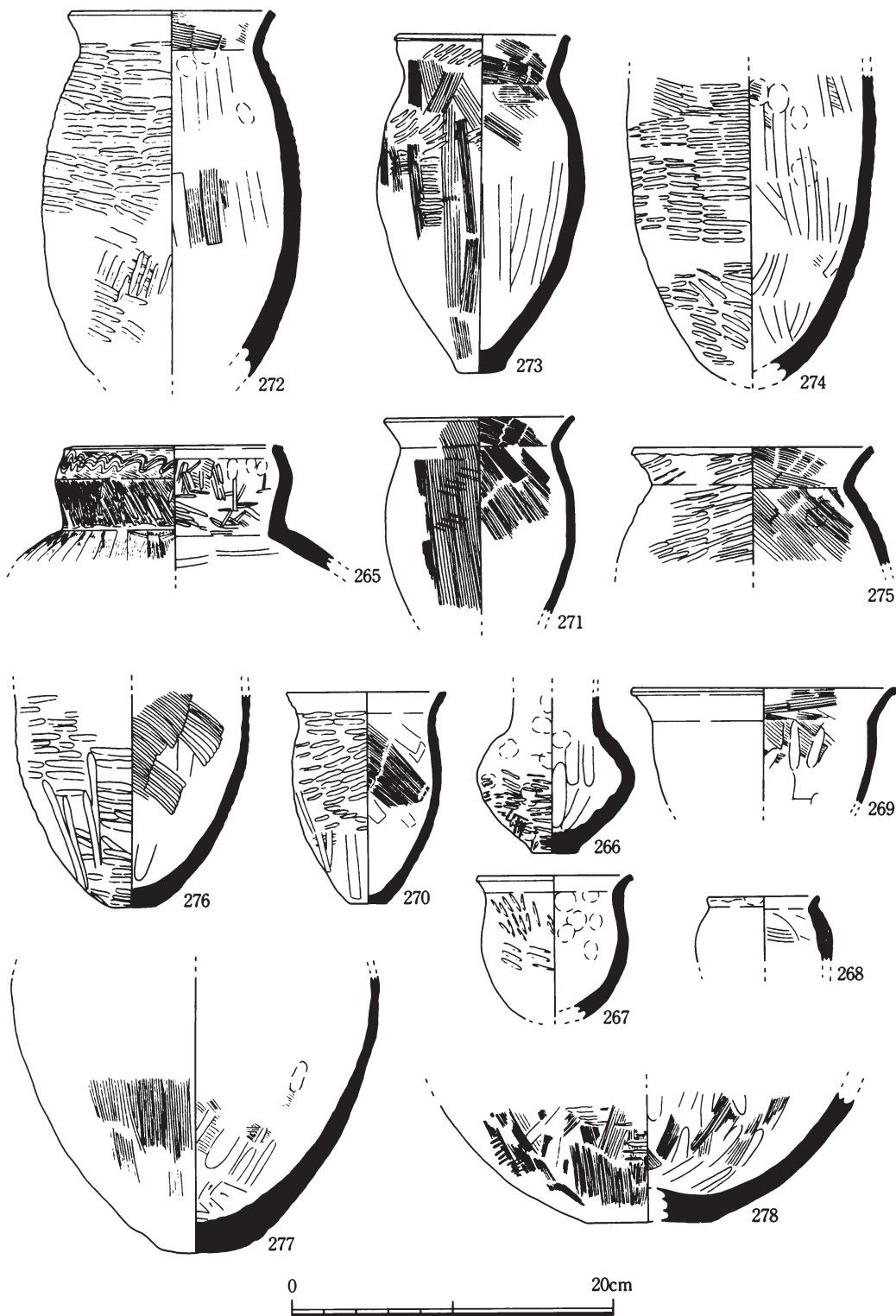


Fig.16 S T - 8 出土土器

Fig. 17

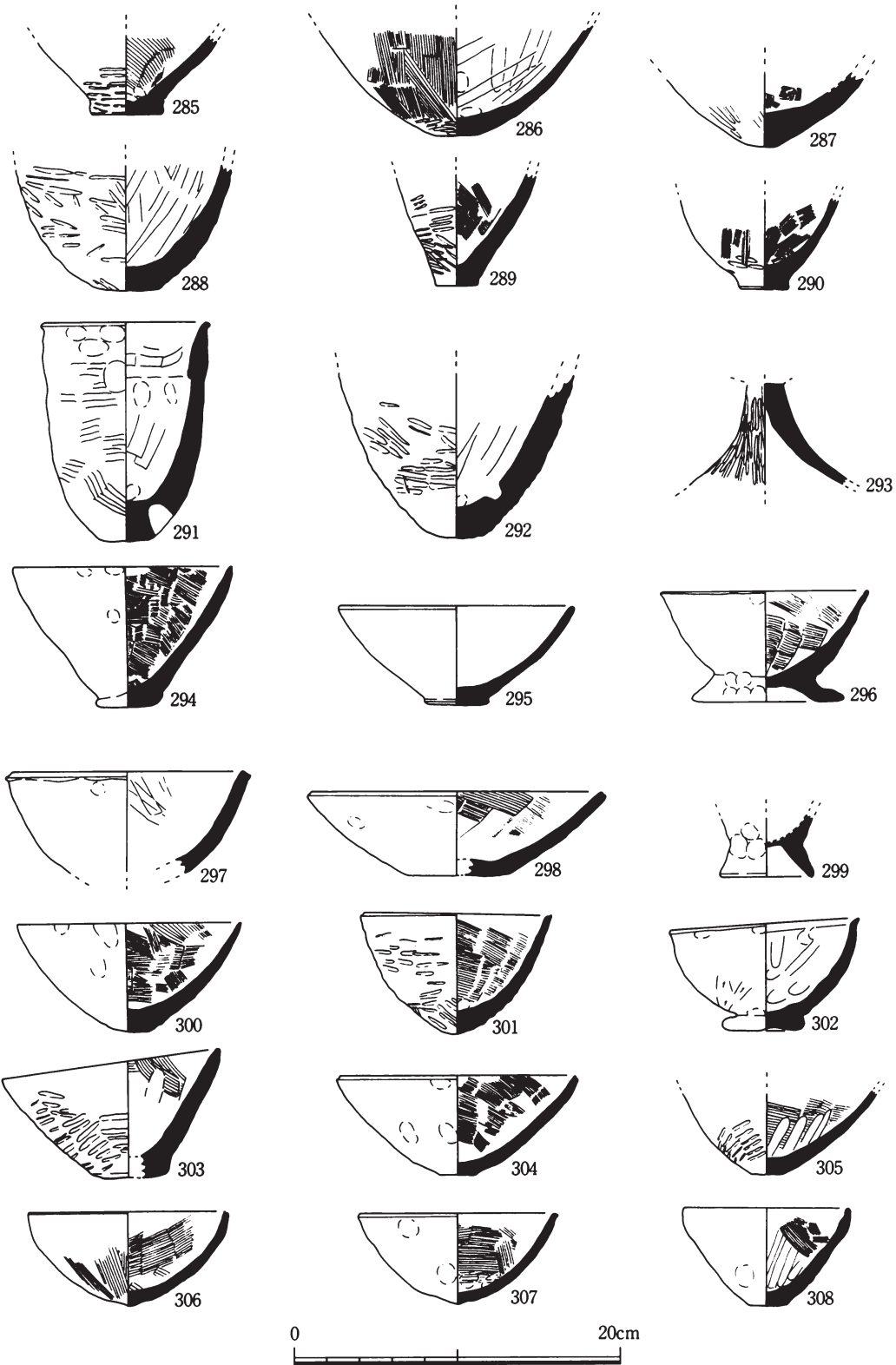


Fig.17 S T - 8 出土土器

Fig. 18 · 19

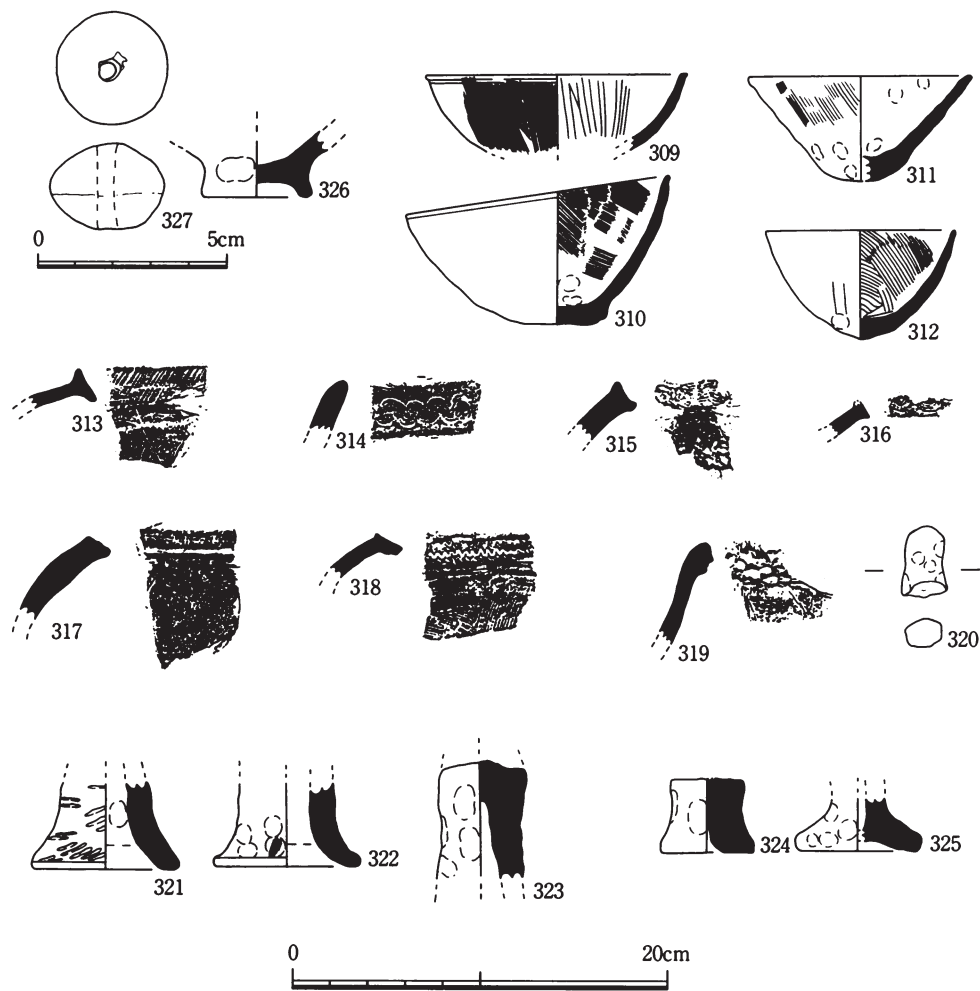


Fig.18 S T - 8 出土土器

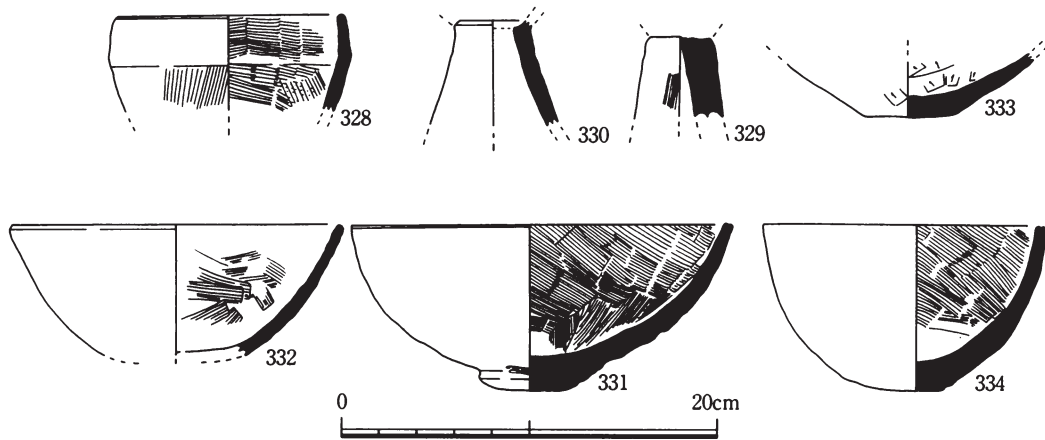


Fig.19 S T - 9 出土土器

Fig. 20

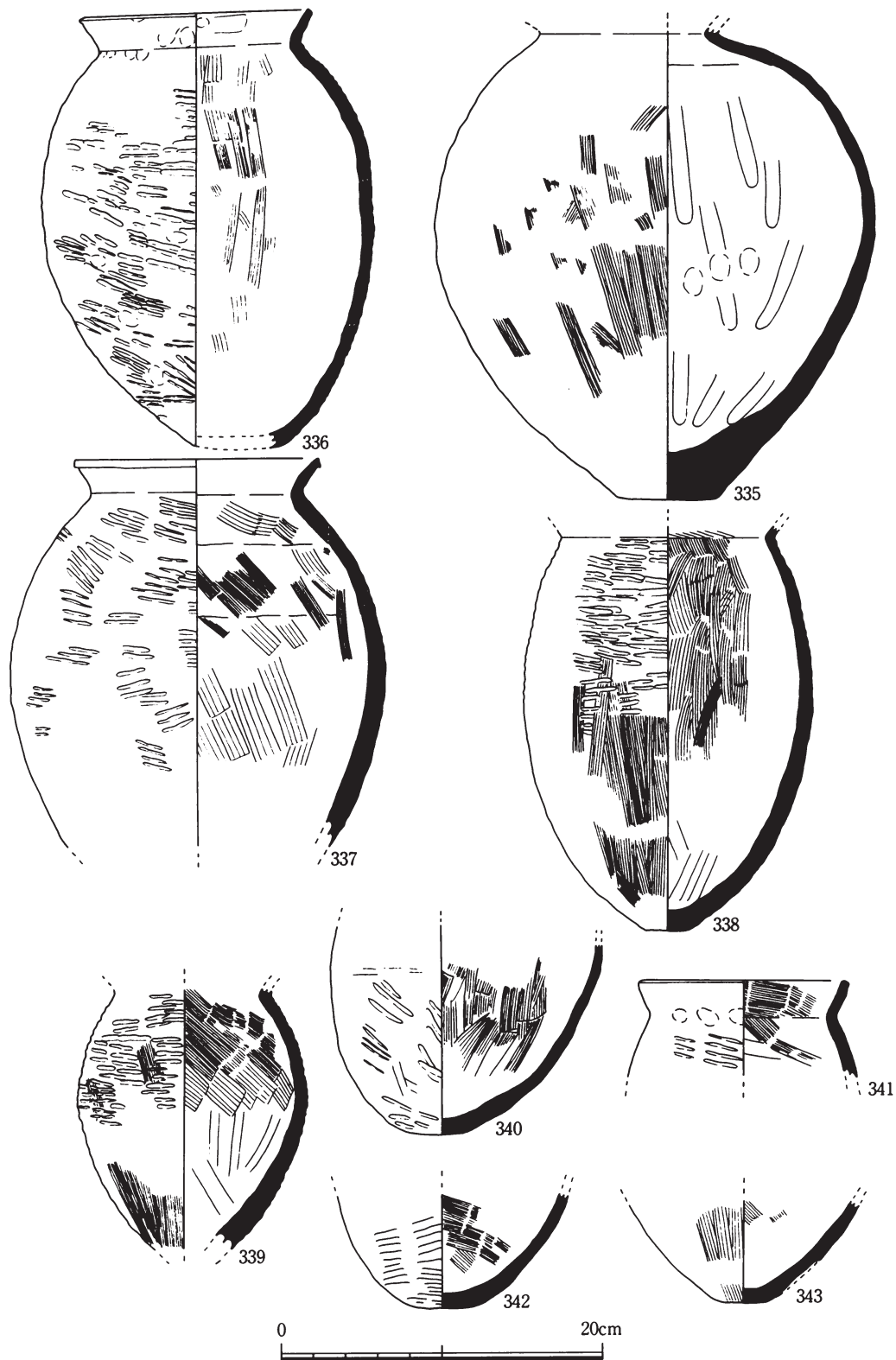


Fig.20 S T - 9 出土土器

Fig. 21

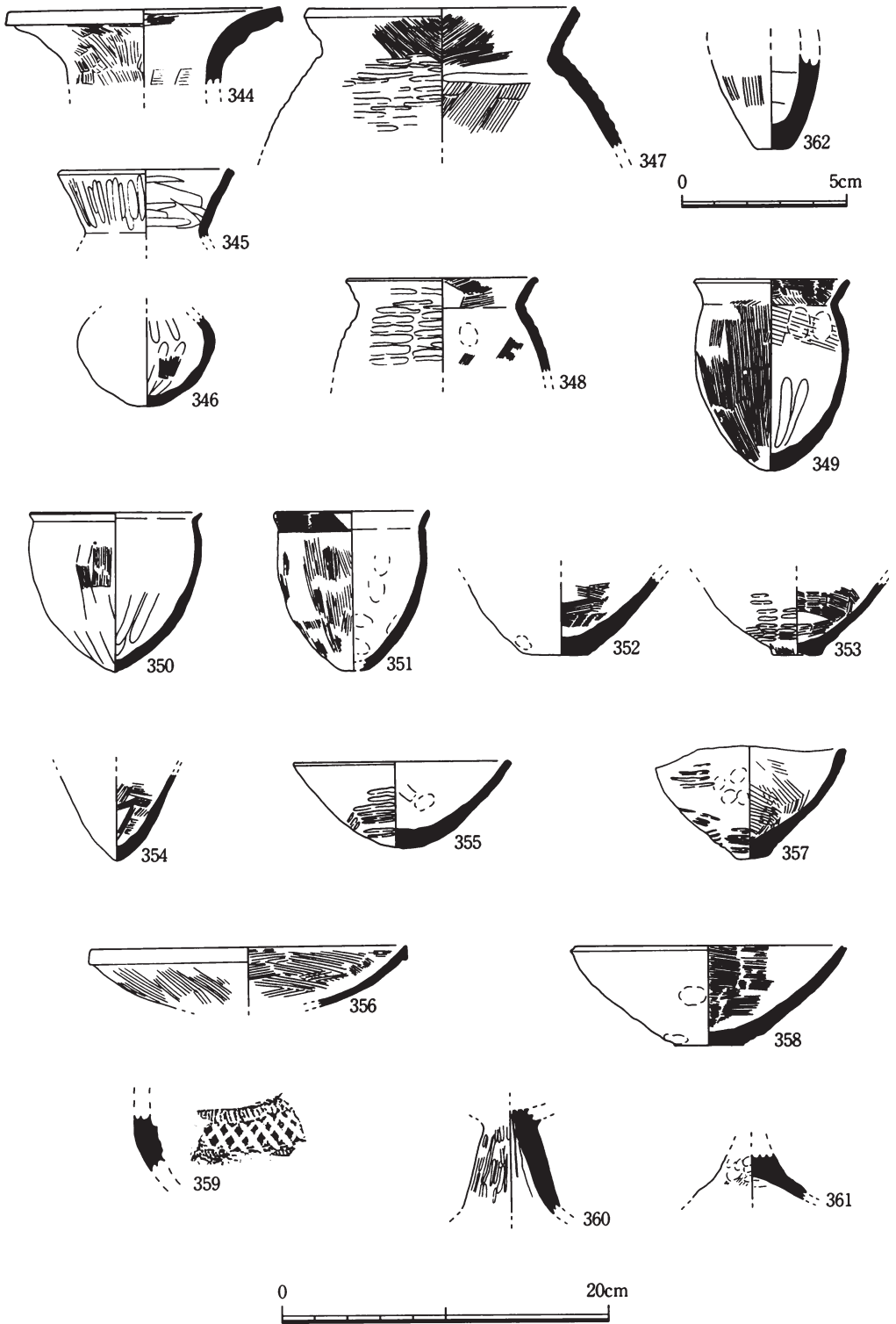


Fig.21 S T - 10出土土器

Fig. 22

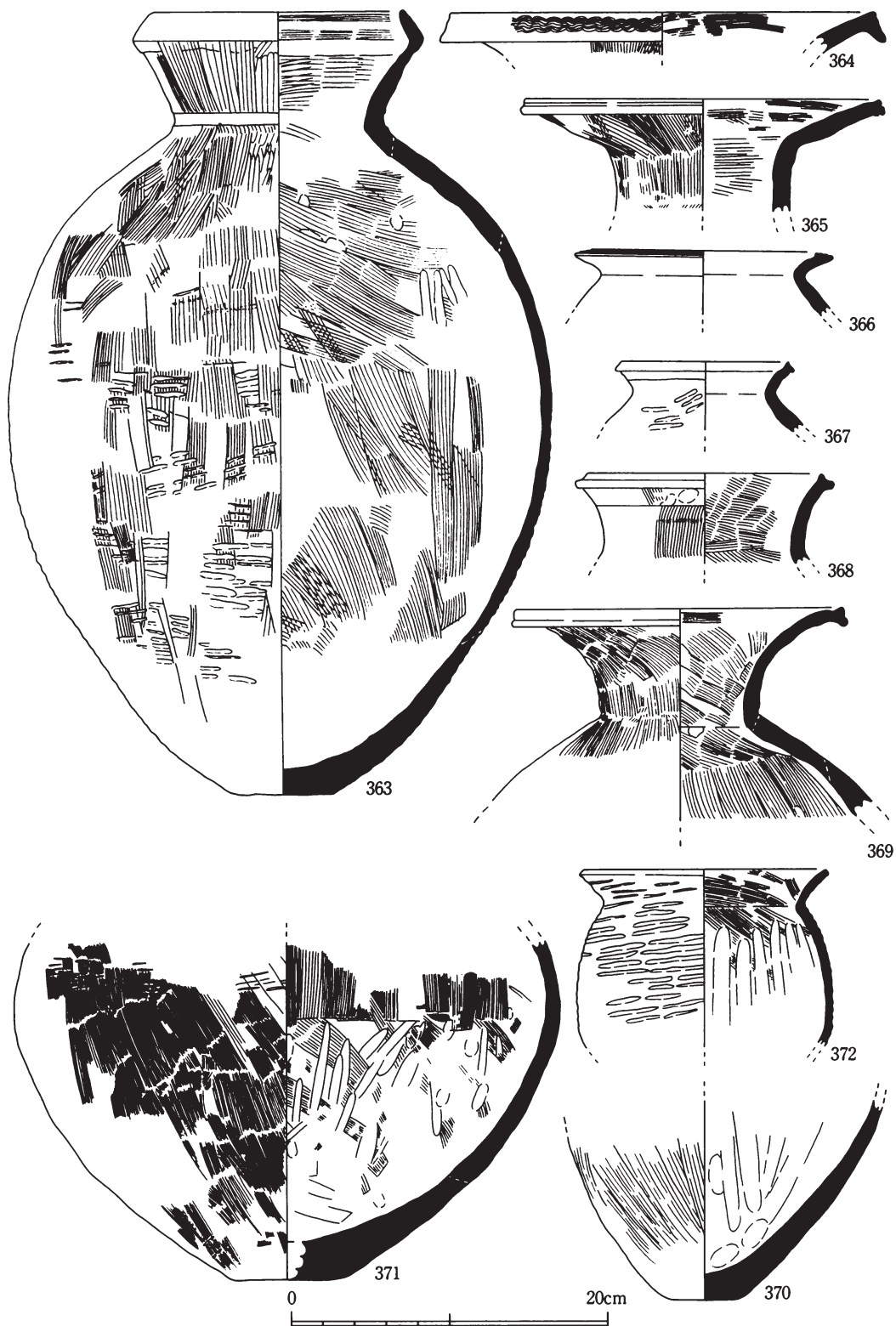


Fig.22 S T - 11出土土器

Fig. 23

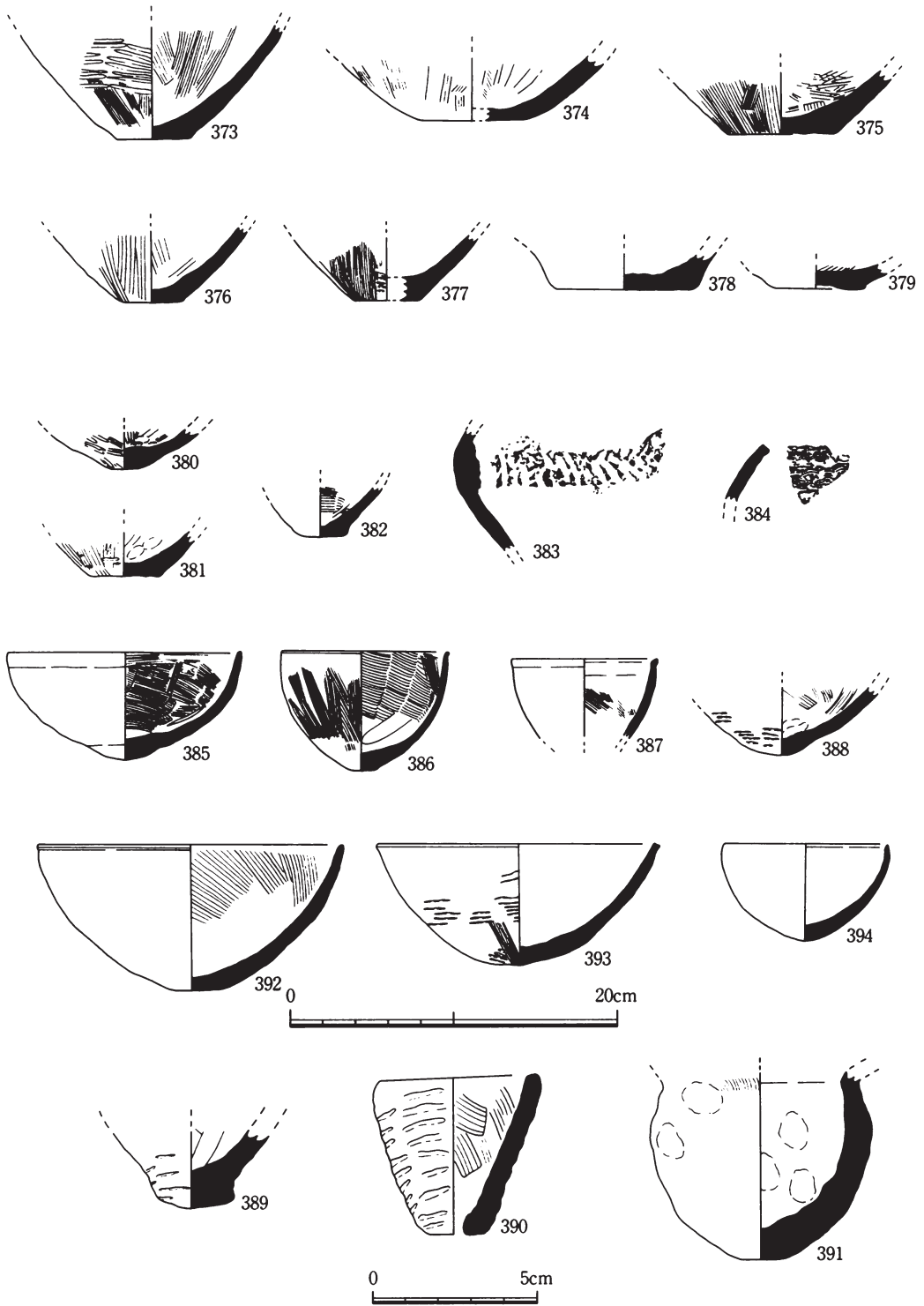


Fig.23 S T - 11 · 12 (392~394) 出土土器

Fig. 24



Fig.24 壺棺 1 · 2

Fig. 25

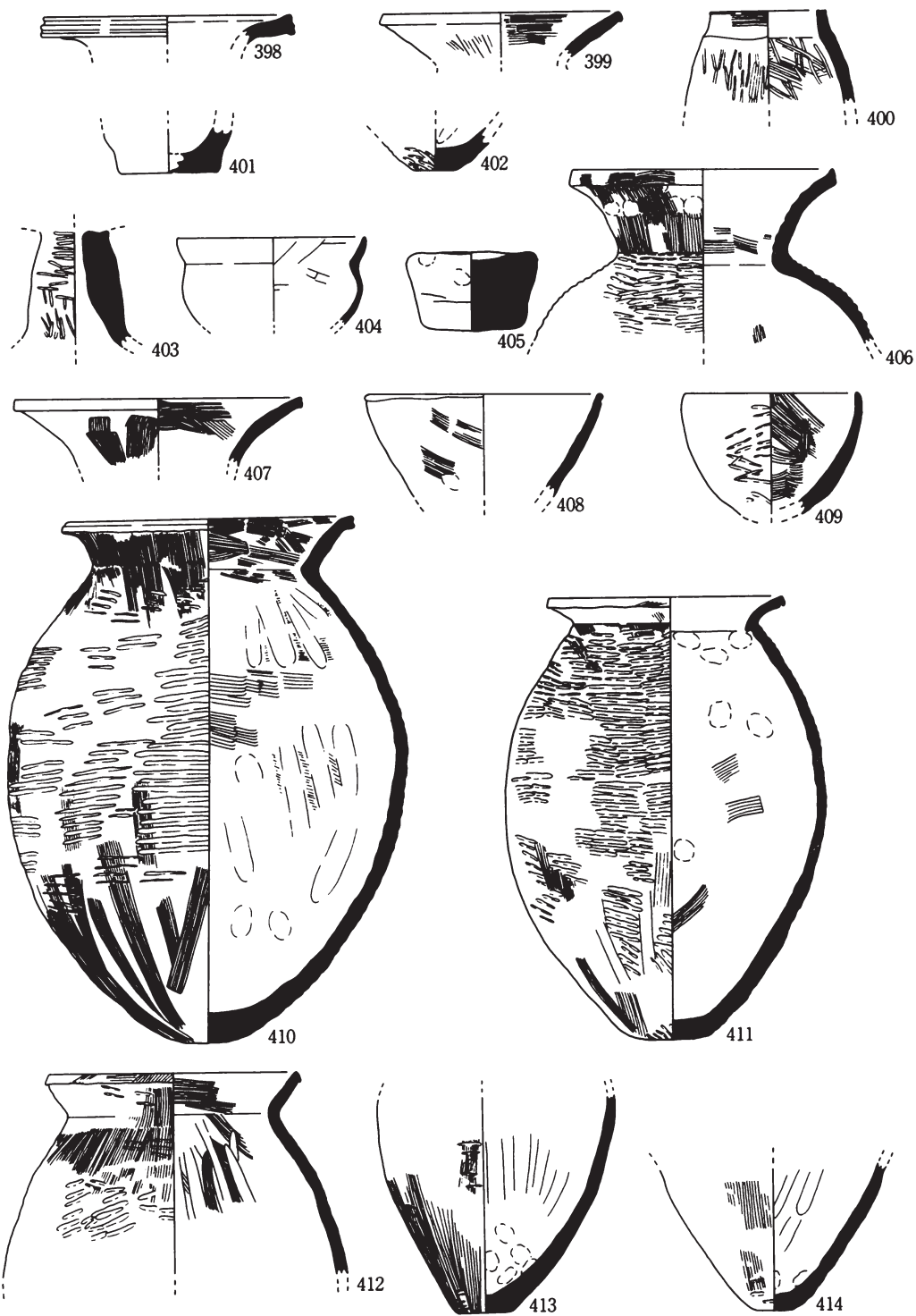


Fig.25 S D - 3 ・ピット出土土器

P1・2・6・12・22・25

Fig. 26

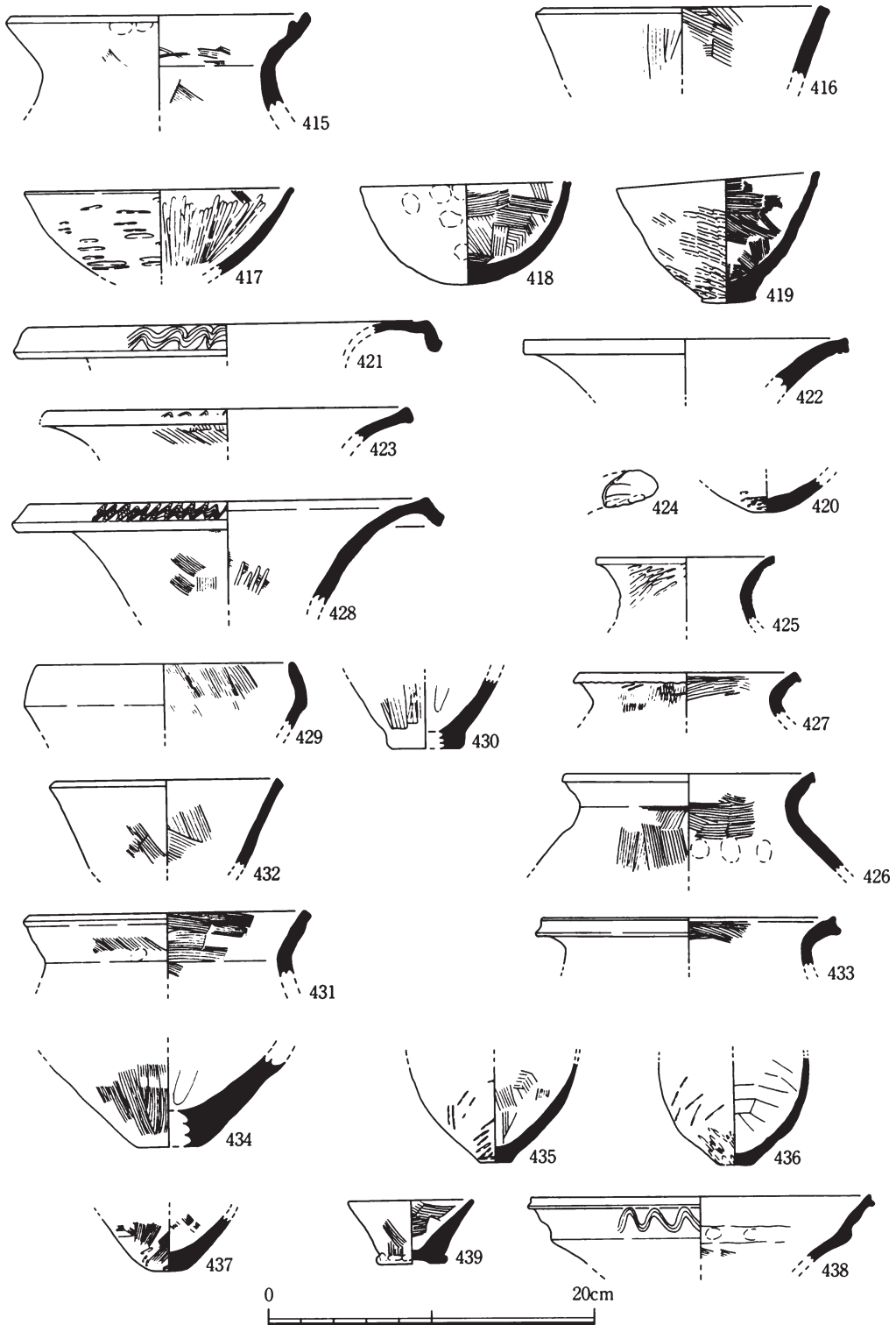


Fig.26 ピット出土土器

P 25・29・31・34・39・51・58・60
65・71・76・93・101

Fig. 27

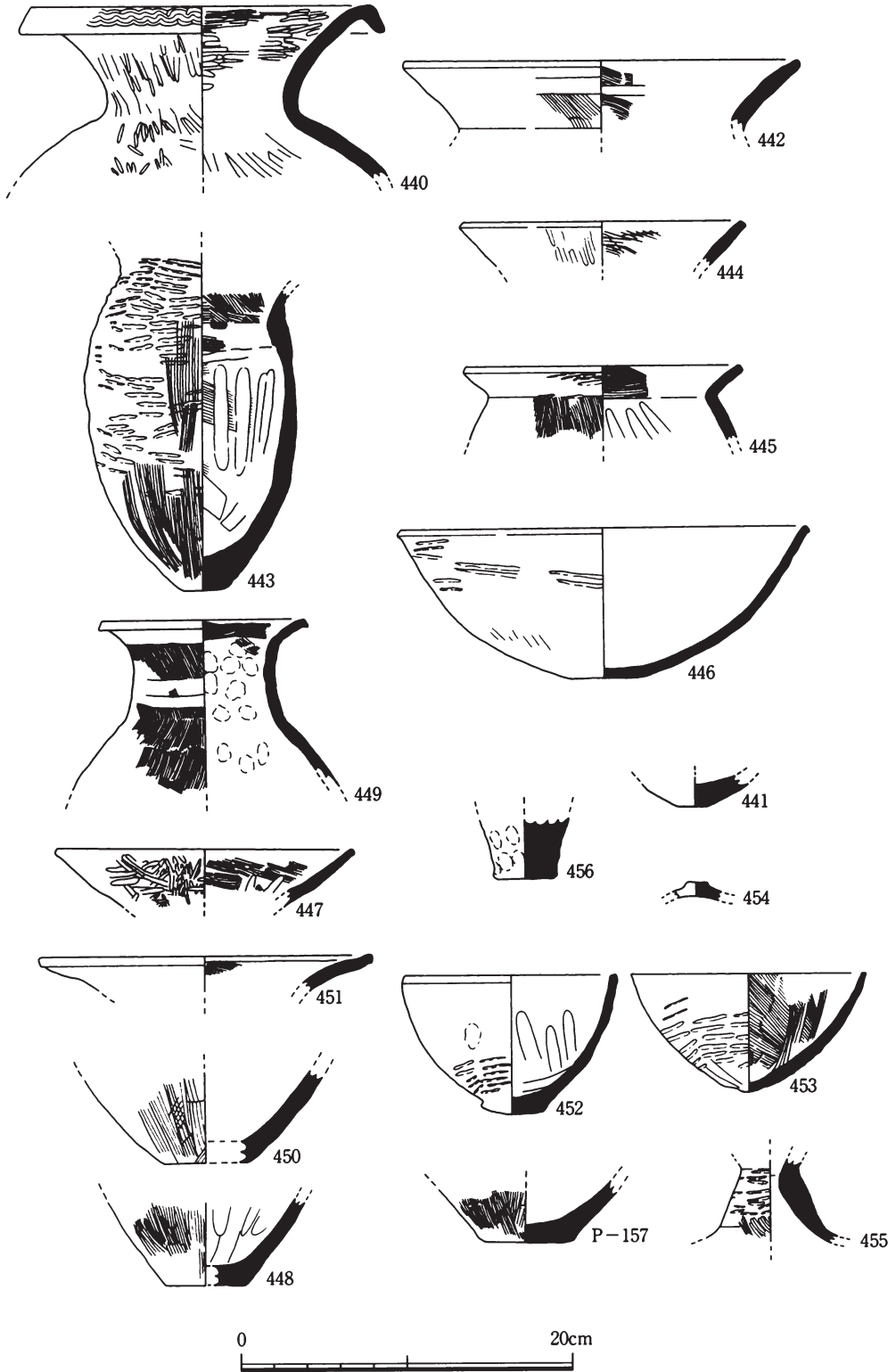


Fig.27 ピット出土土器

P 101 · 112 · 122 · 128 · 129 · 133
141 · 142 · 144 · 153 · 154 · 157

Fig. 28

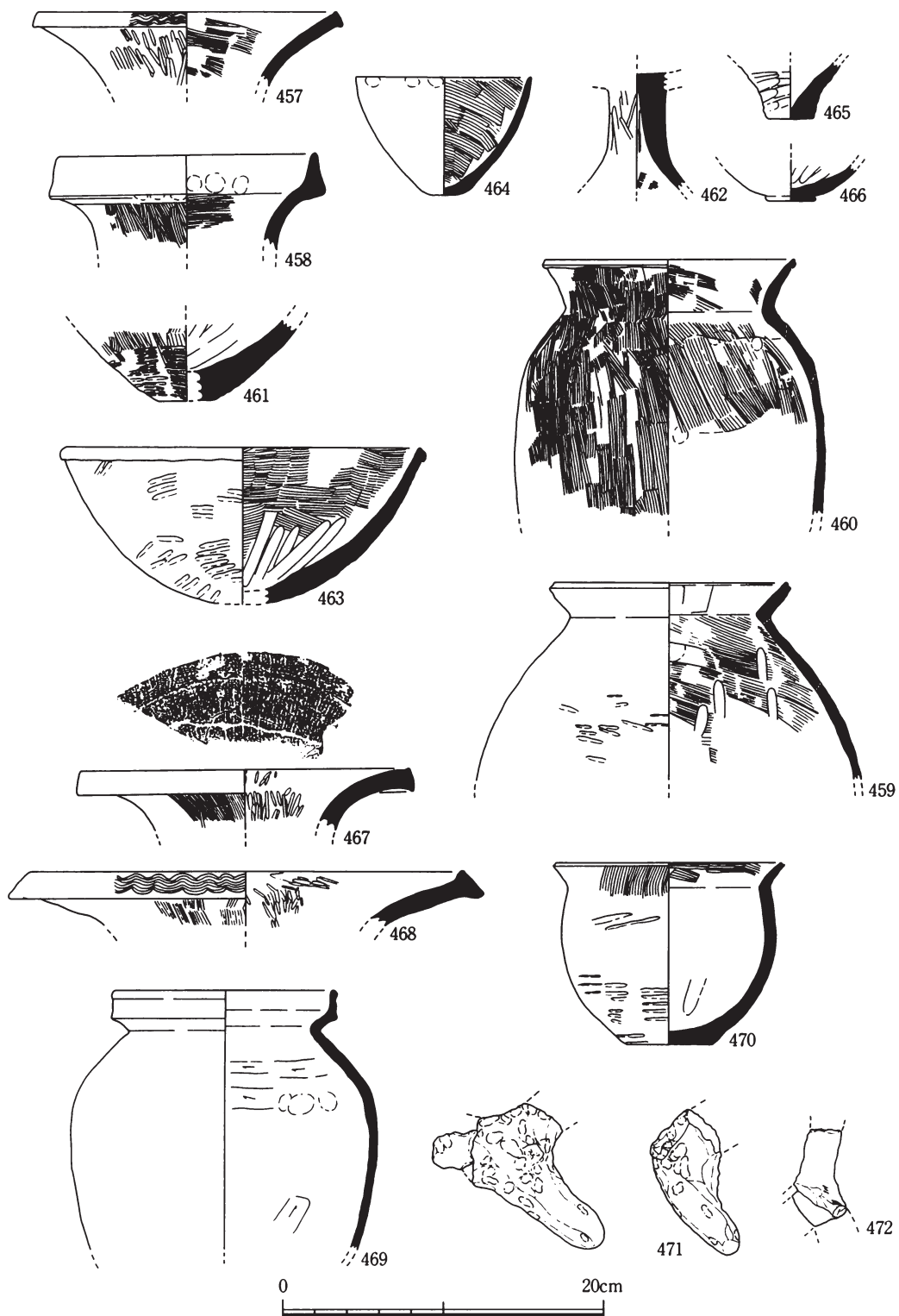


Fig.28 SX-1・2及び包含層出土土器

Fig. 29

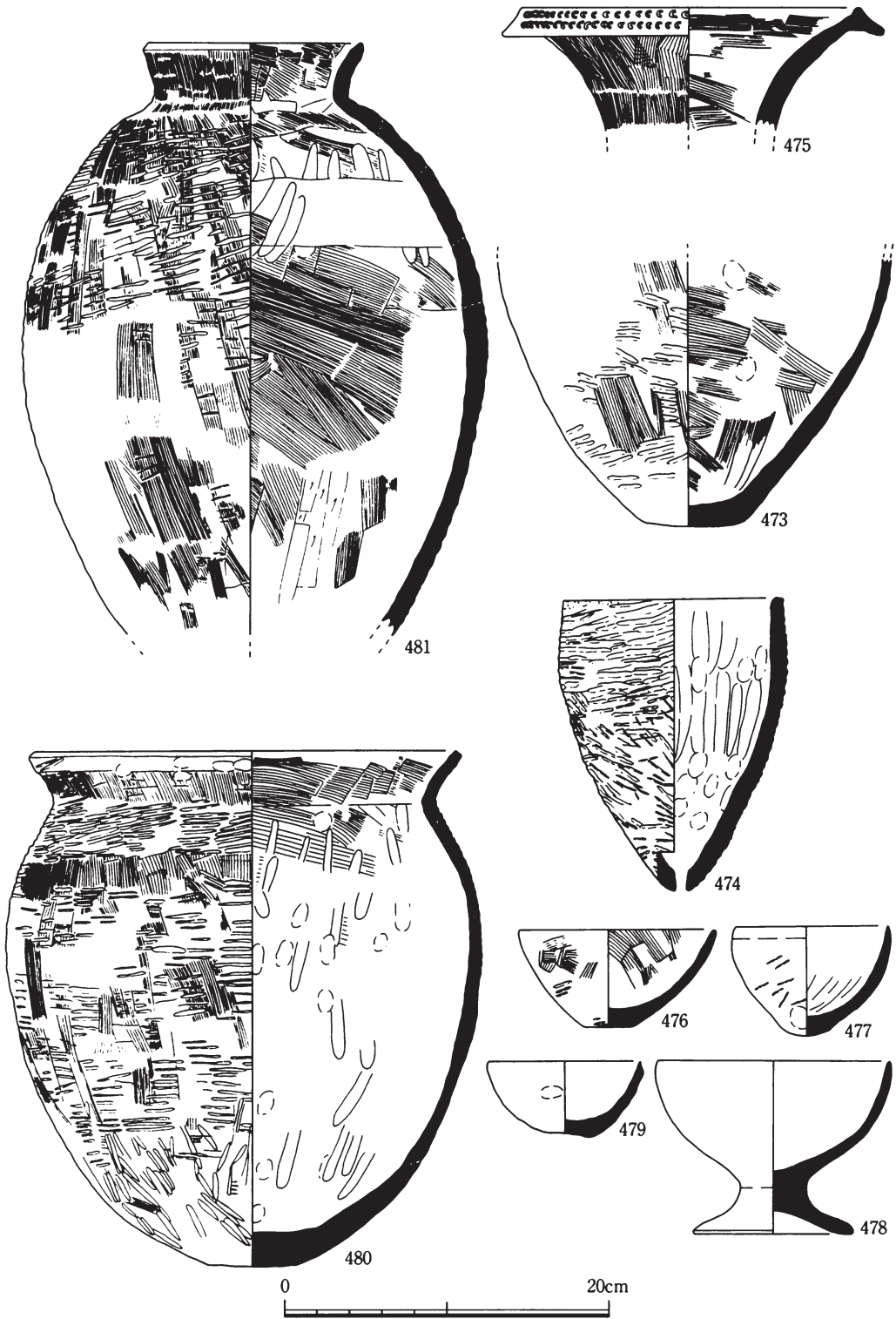


Fig.29 包含層及びT-3 (479~481) 出土土器

Fig. 30

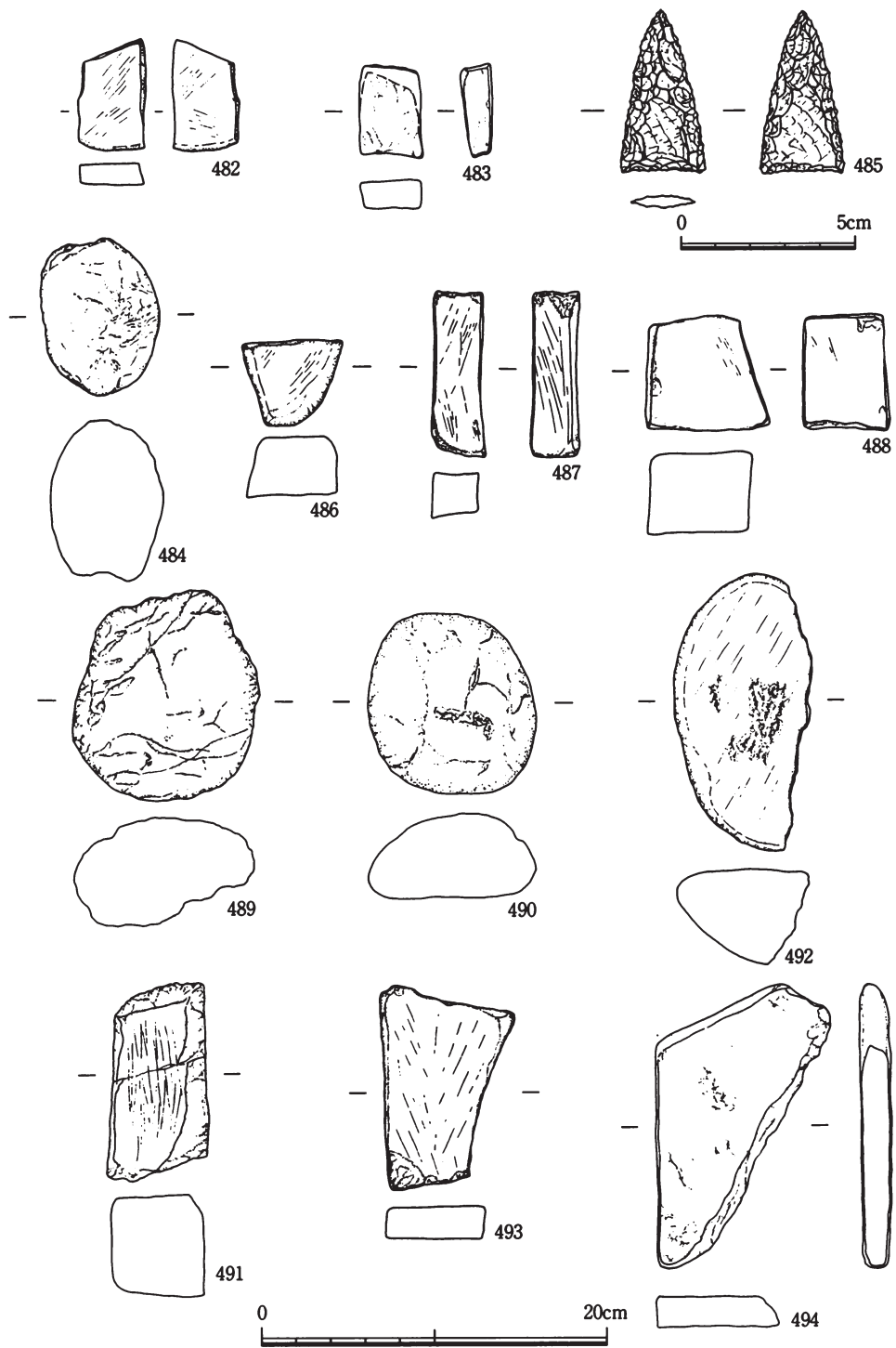


Fig.30 東崎遺跡出土石器 (1/2)

Fig. 31

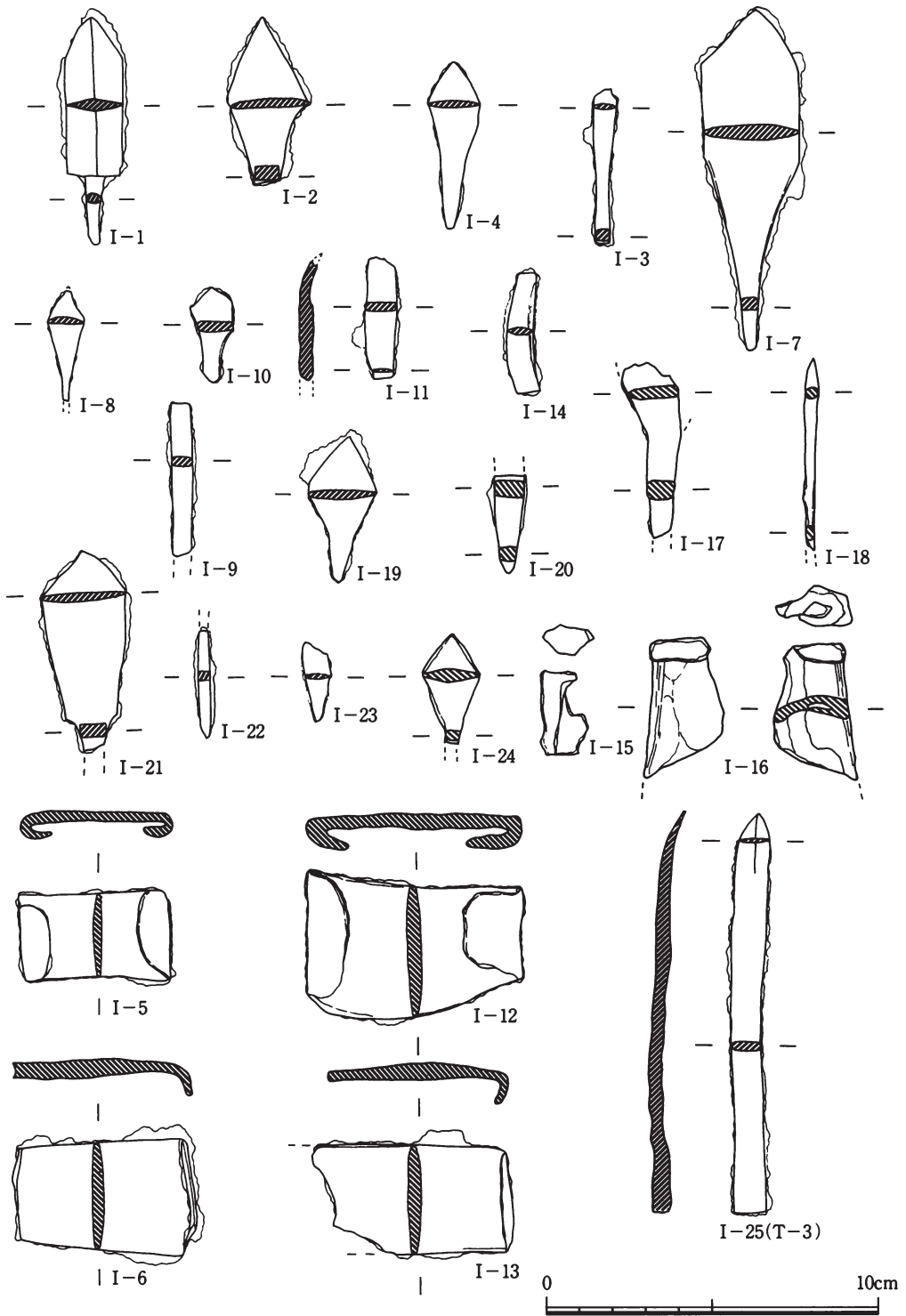


Fig.31 東崎遺跡出土鉄器 (1/2)

ST-1・I-1・2	ST-6・I-14~18	P-25・I-24
ST-4・I-3~6	ST-7・I-19・20	
ST-5・I-7~13	ST-8・I-21~23	

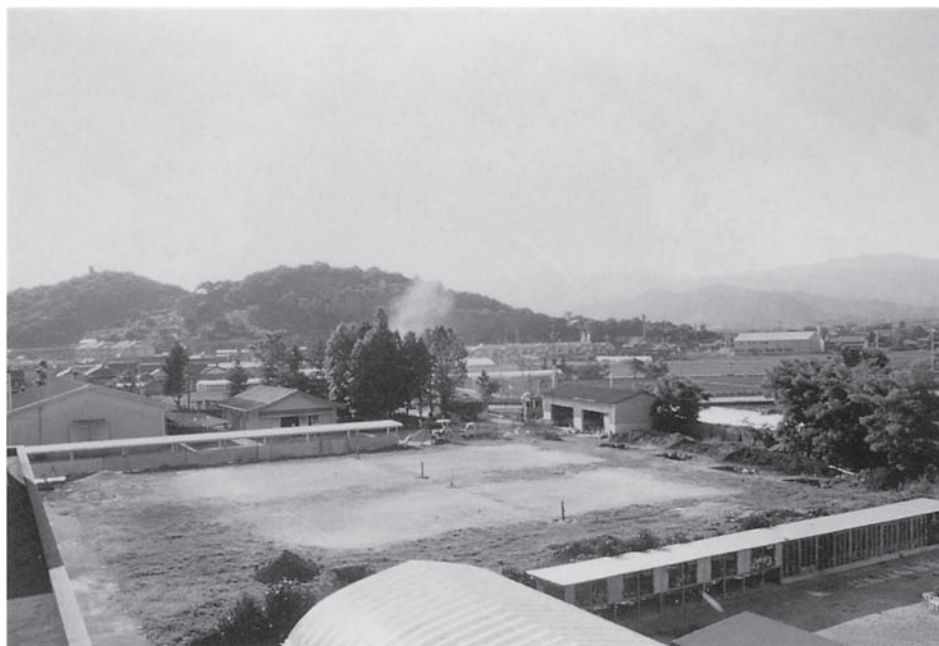
写真図版



再び還りて
また眠り往く
先人の遠き足跡
風見鶏は静かに
風と時の足音を刻む

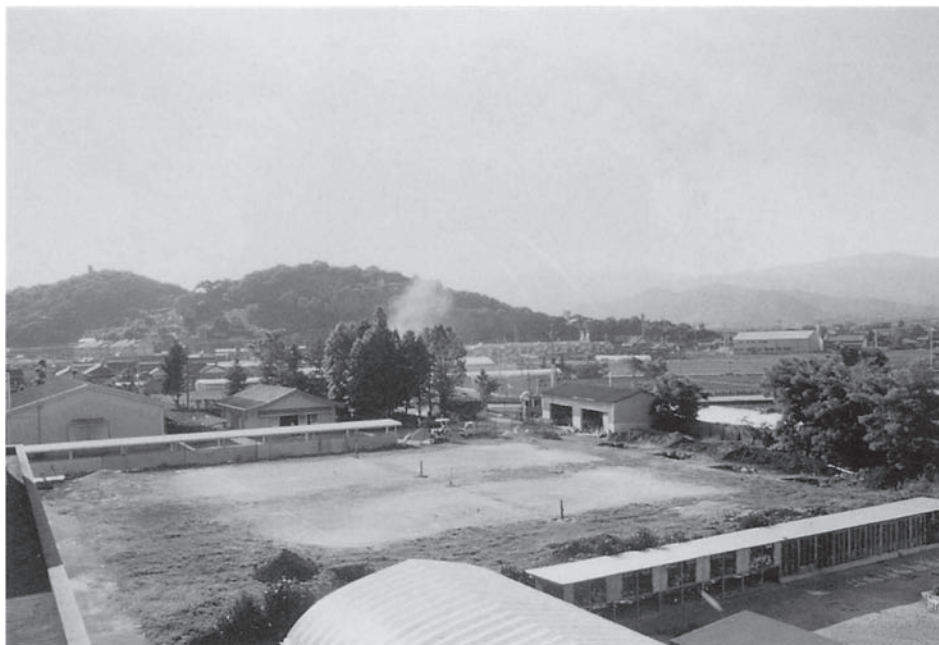


調査地遠景（矢印・北西山側より）

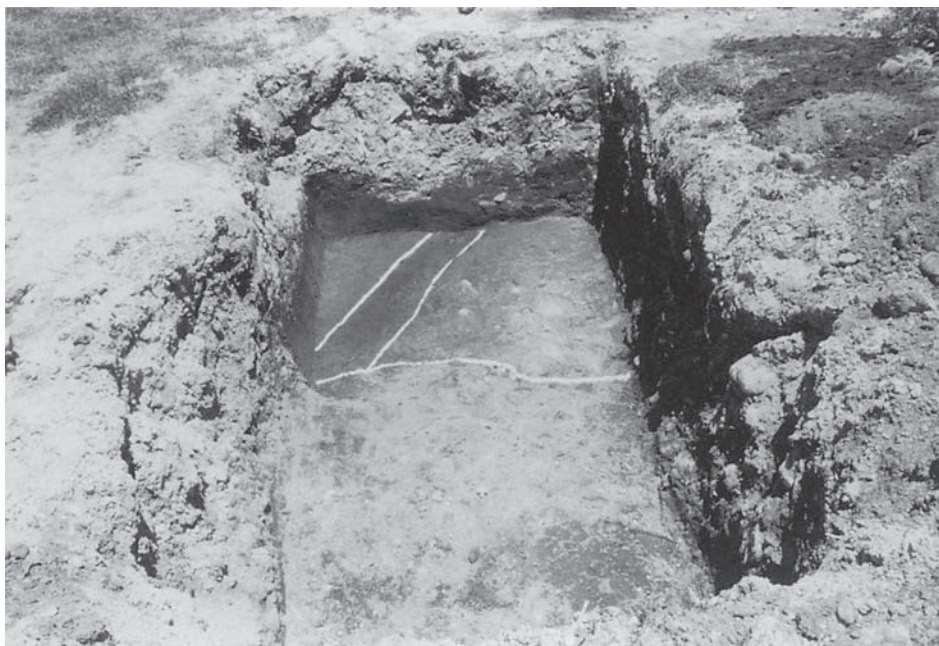


調査対象地近景（南東から）

PL 2



試掘調査時風景（南東から）



T-5 検出された溝跡（南から）



試掘調査風景（T-3・東から）

PL 4



調査区南側旧校舎跡（東から）



同上（西から）



調査区遺構検出状況（北東から）



同上 調査区北側（東から）

PL 6



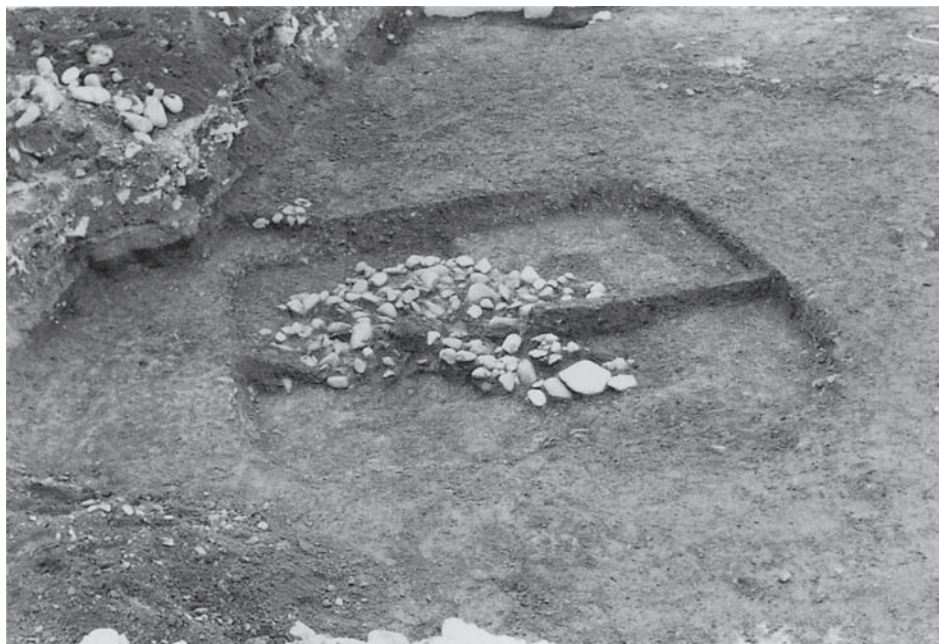
住居跡検出状況（北から）



同上 調査区西側（北から）



ST-1 検出状況（東から）



ST-1 住居跡内集石（東から）

PL 8



ST-1 床面（南から）



ST-1 完掘状況（南から）



ST-1 (東から)



ST-1・2 (西から)

PL 10



ST-2 (西から)



ST-3 (東から)



ST-4 検出状態（東から）



ST-4 遺物出土状態（南から）

PL 12



ST-4・ST-13・ST-15 (南から)



ST-4 完掘状況 (北東から)



ST-4 中央ピット土器出土状態（北西から）



P-25 土器出土状態（北東から）



ST-5 検出状態（東から）



ST-5 埋土（南西から）



ST-5 集石（南から・H-5-C）



ST-5 床面遺構検出状態（南西から）



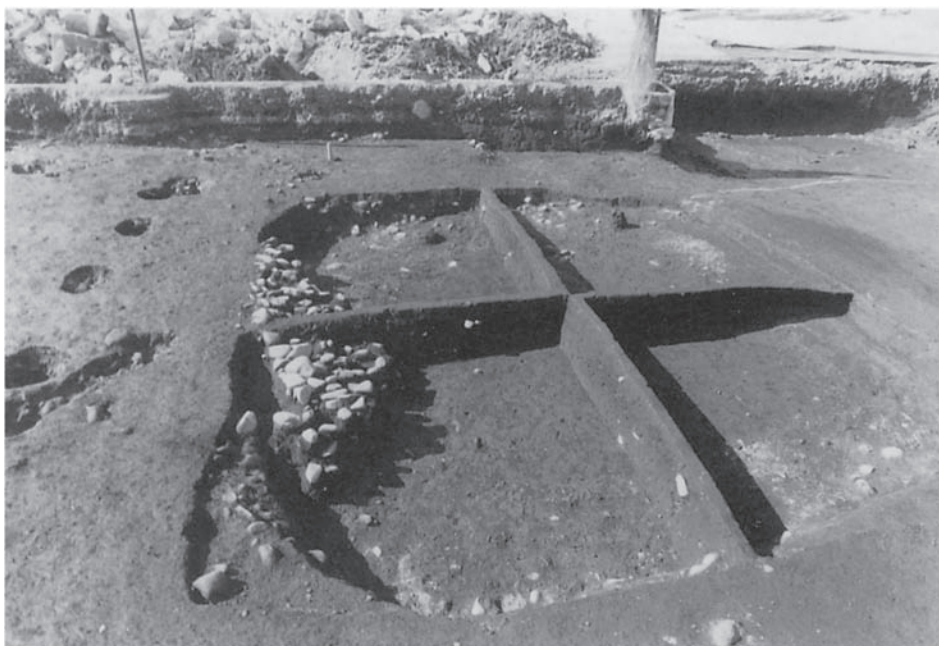
ST-5 (南から)



ST-5 (北東から)



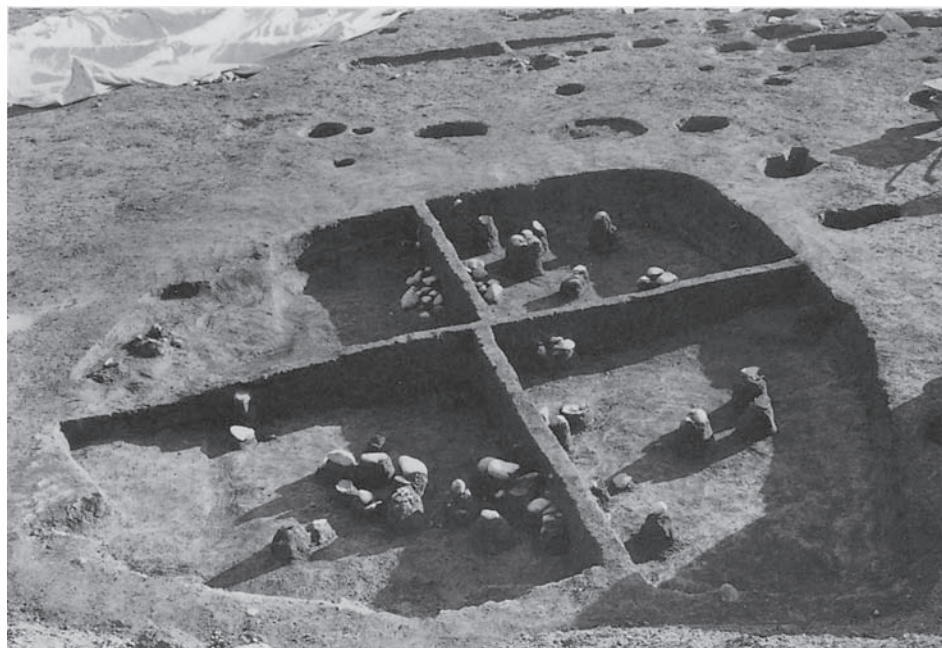
ST-6 (東から)



ST-7 検出状態 (東から)



ST-7 周辺 (北東から)



ST-8 遺物出土状態 (北から)



ST-6・ST-8~10 (北から)



同上 (北西から)

PL 20



調査区西側（北東から）



ST-10（北から）



ST-11・12 検出状況（北東から）



ST-11（手前）・ST-12（奥側）（北から）

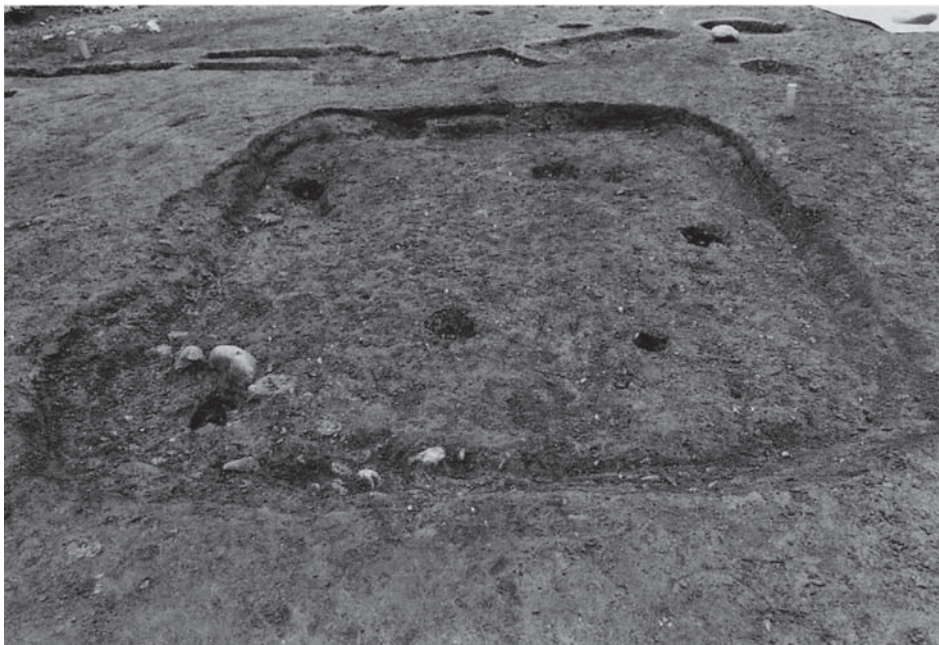
PL 22



ST-11・12 層序（東から）



ST-12 北側壁体断面（東から）



ST-13 (南から)



ST-13 (東から)

PL 24



ST-14・ST-7 (北から)



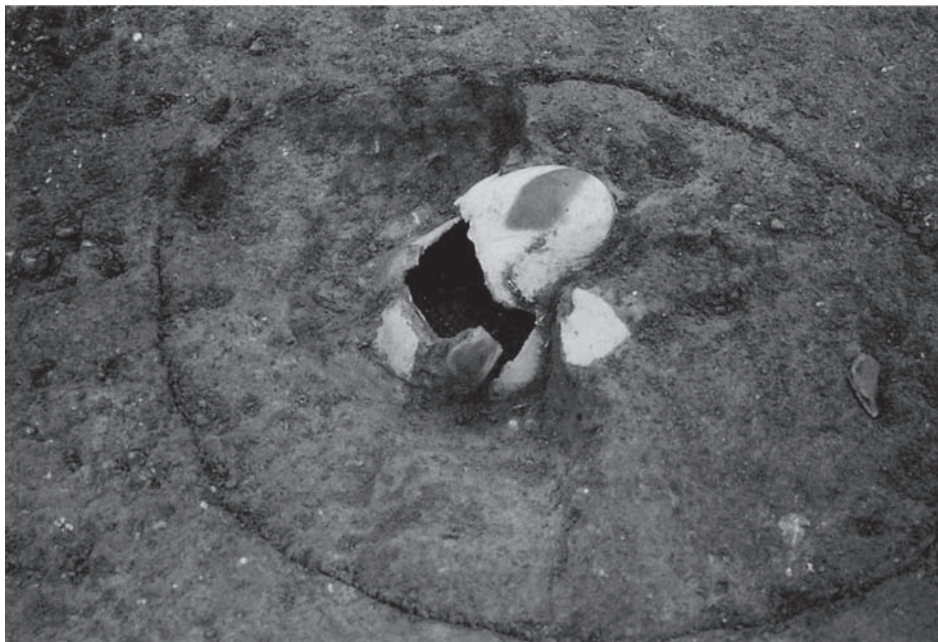
ST-7・ST-12 (北から)



調査区東側ピット群検出状態（東から）



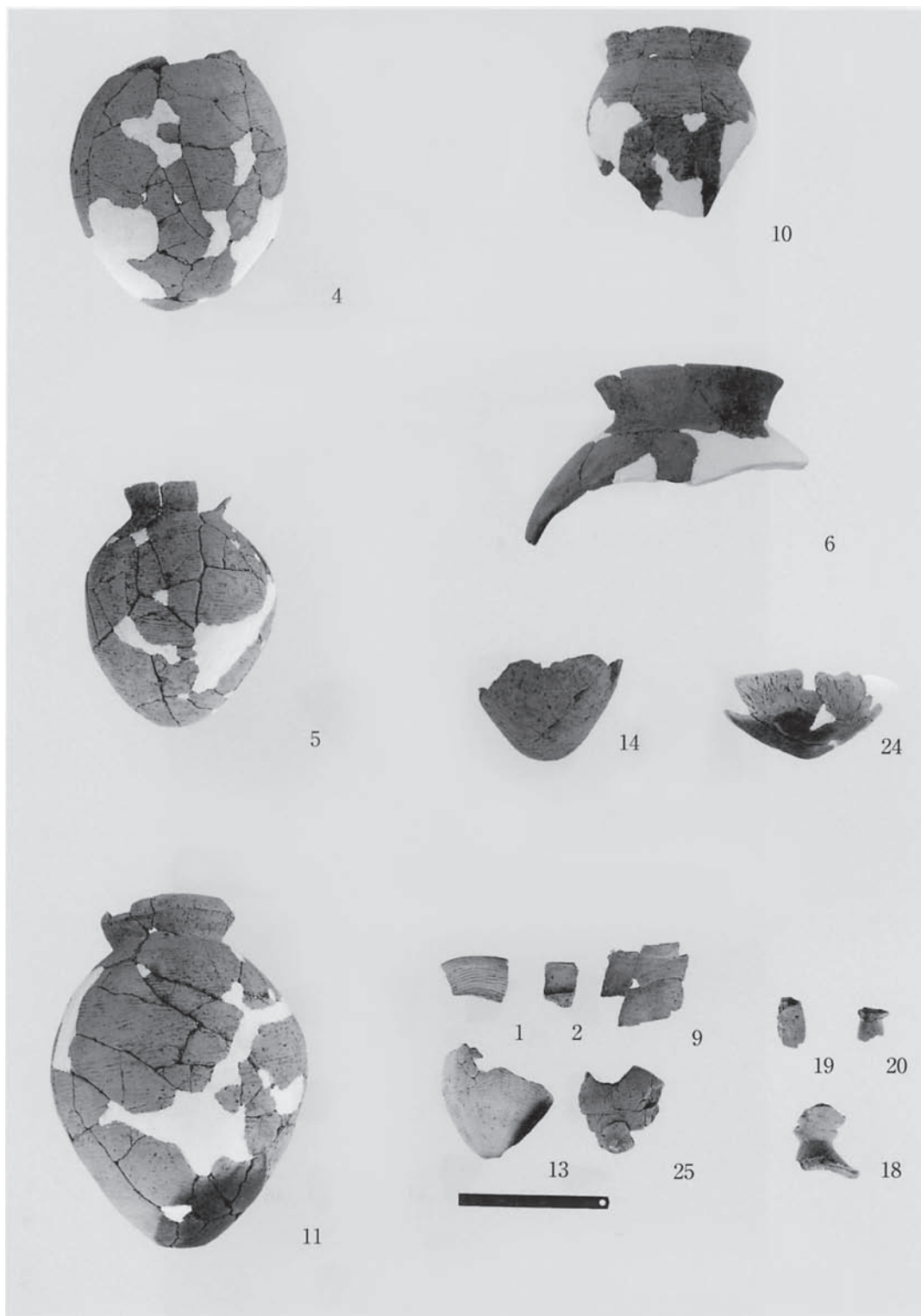
調査区東側（北西から）



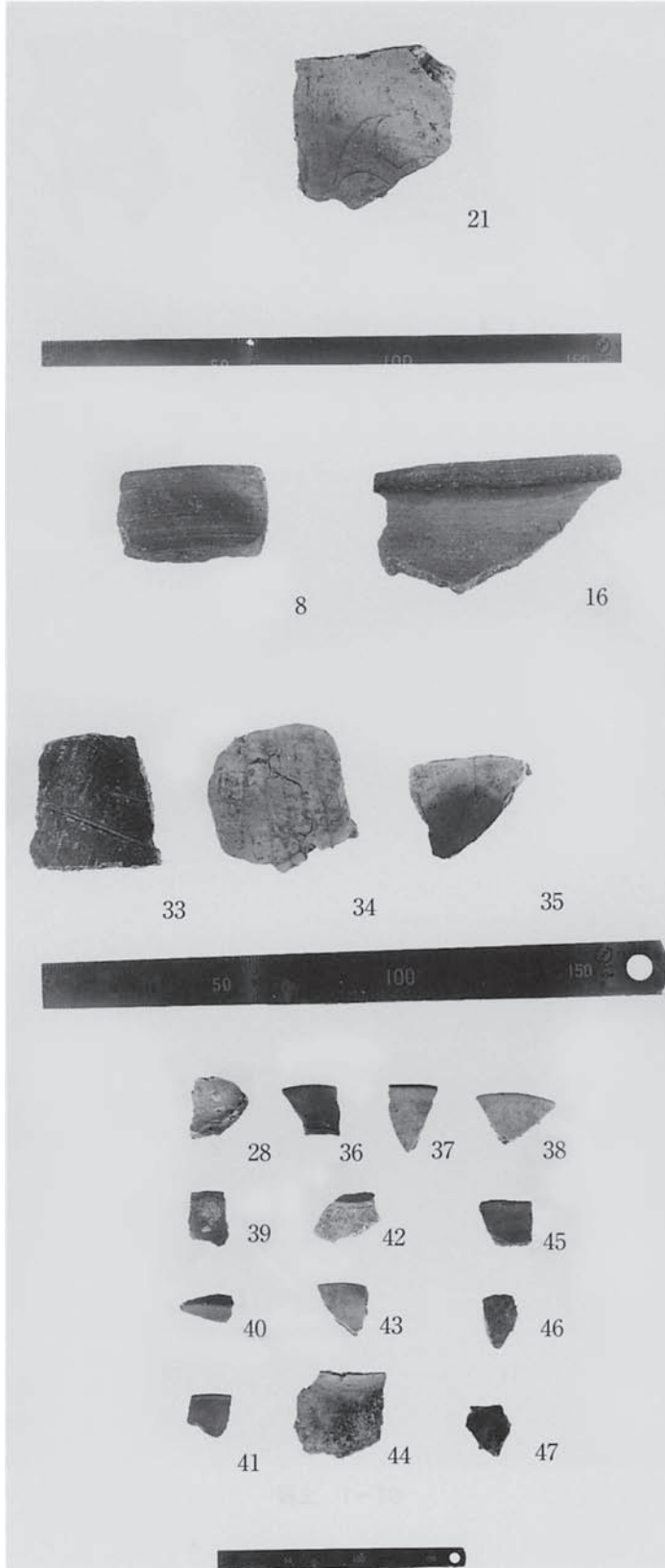
壺棺墓1 (北から)



壺棺墓1 埋設状況 (南から)



ST-1 土器



ST-1 土器

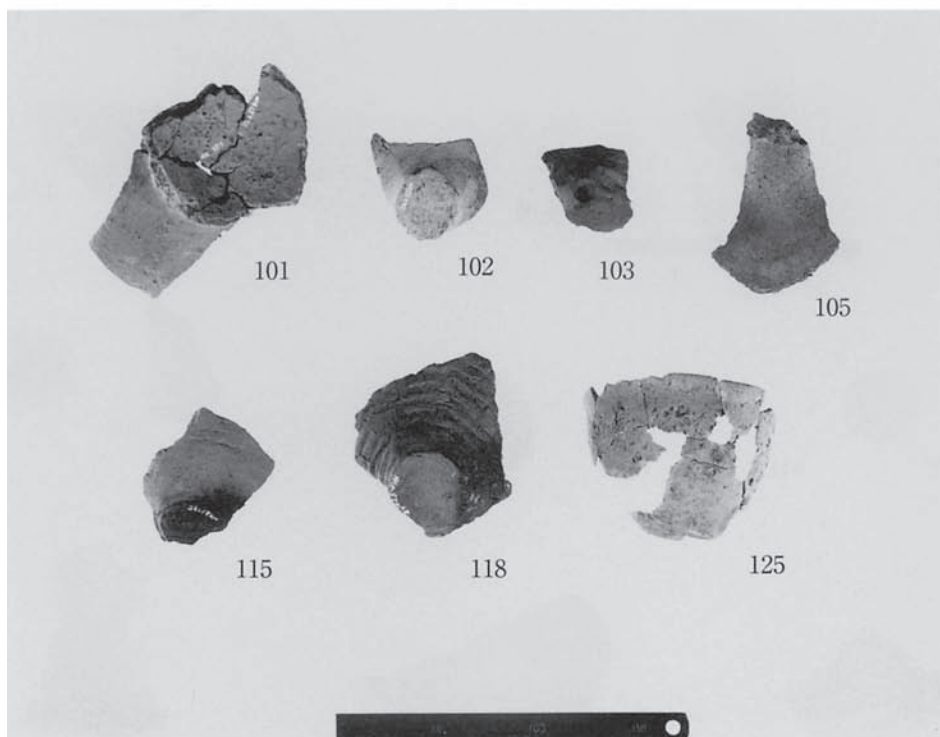
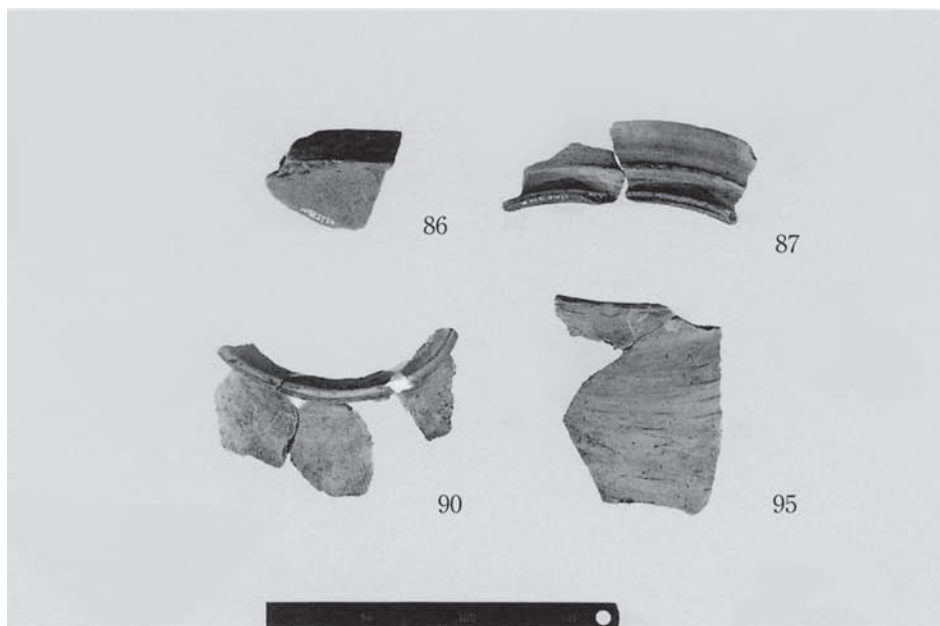


ST-2

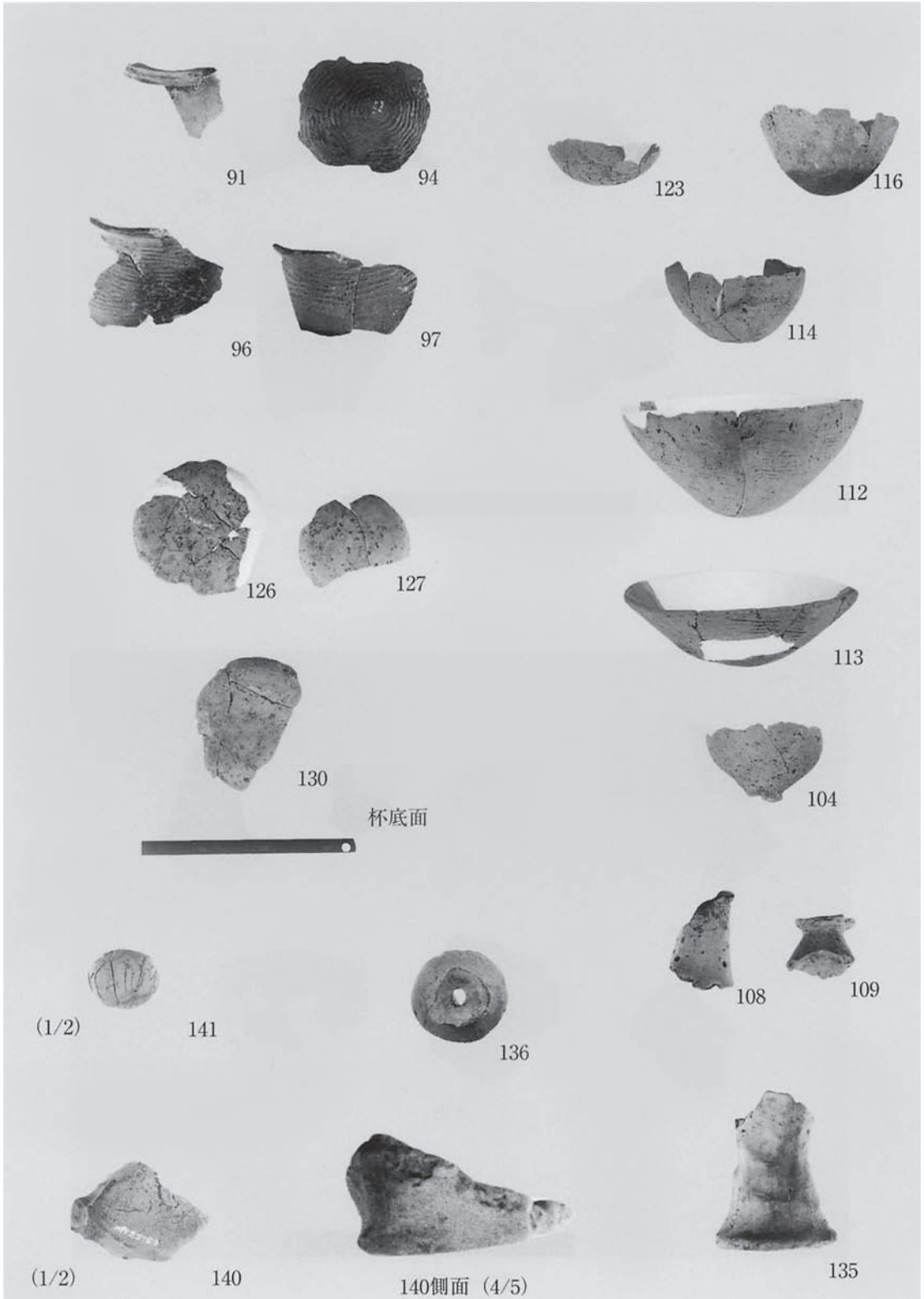
ST-3

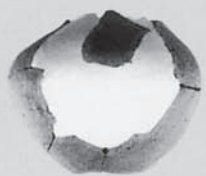
ST-2~4 土器 ST-4・74 内面





ST-5 土器





147



174



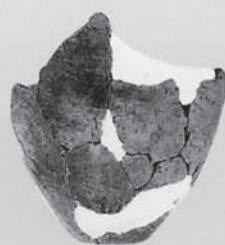
143



176



162



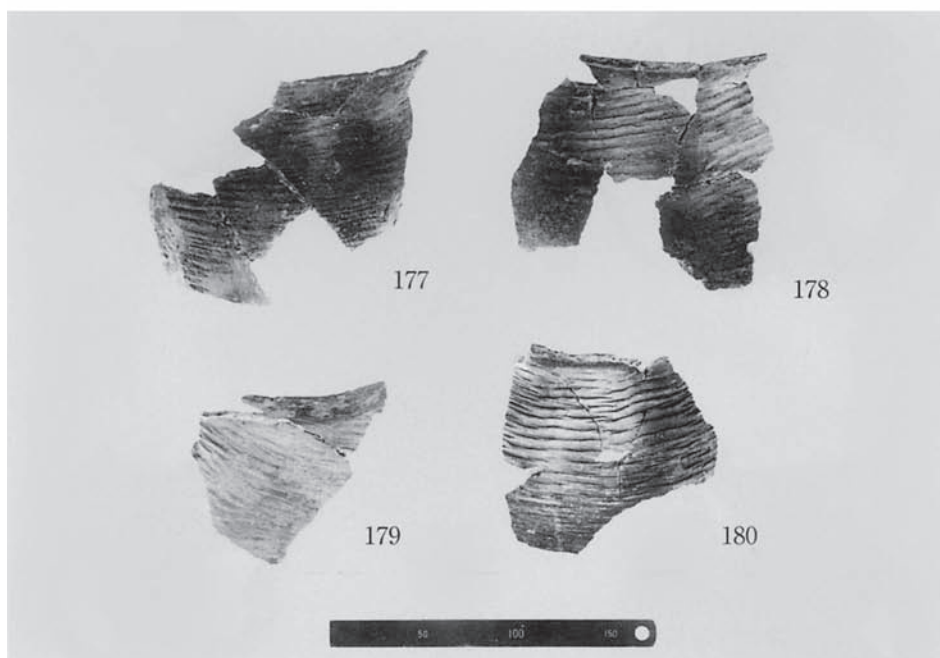
167



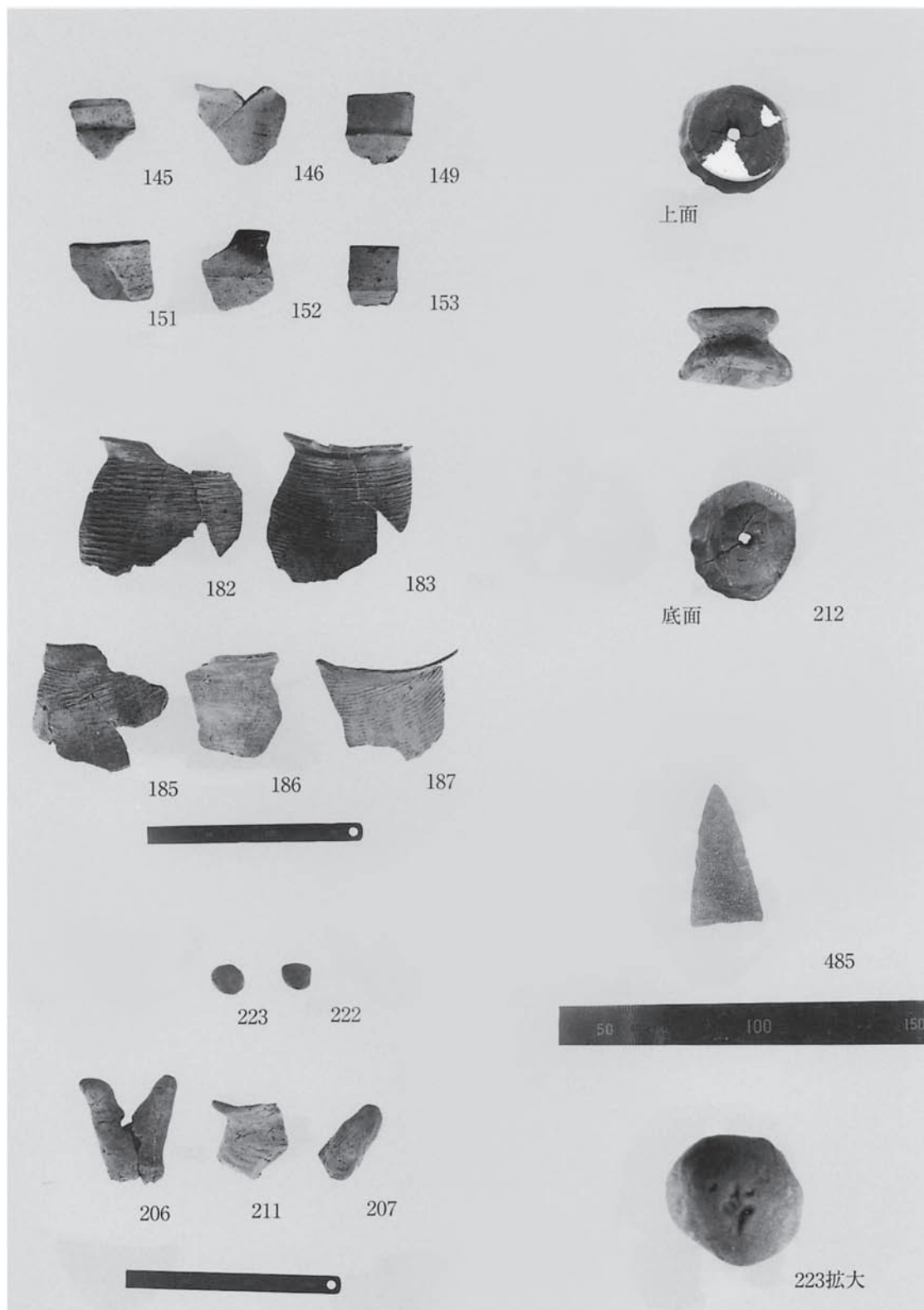
142

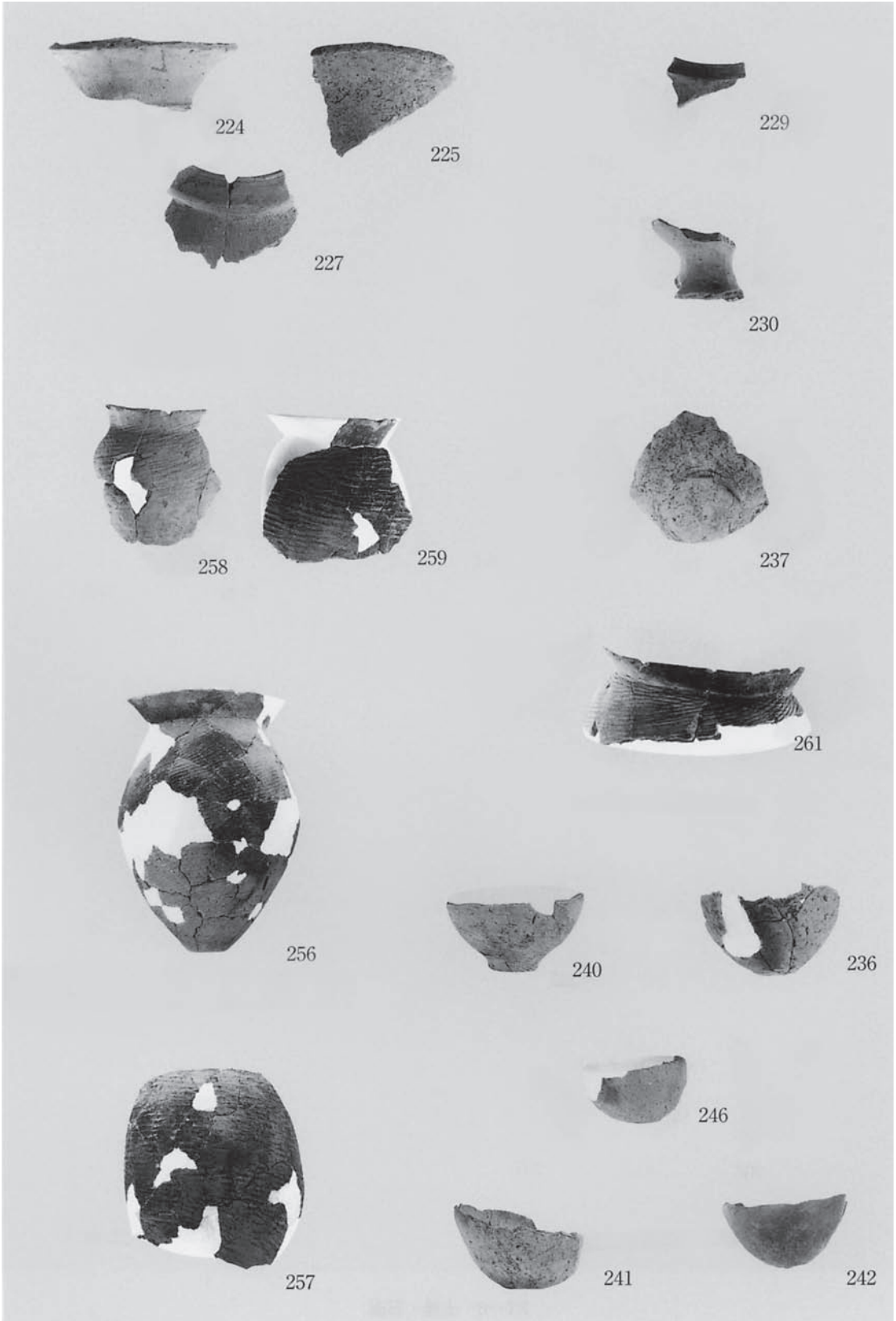


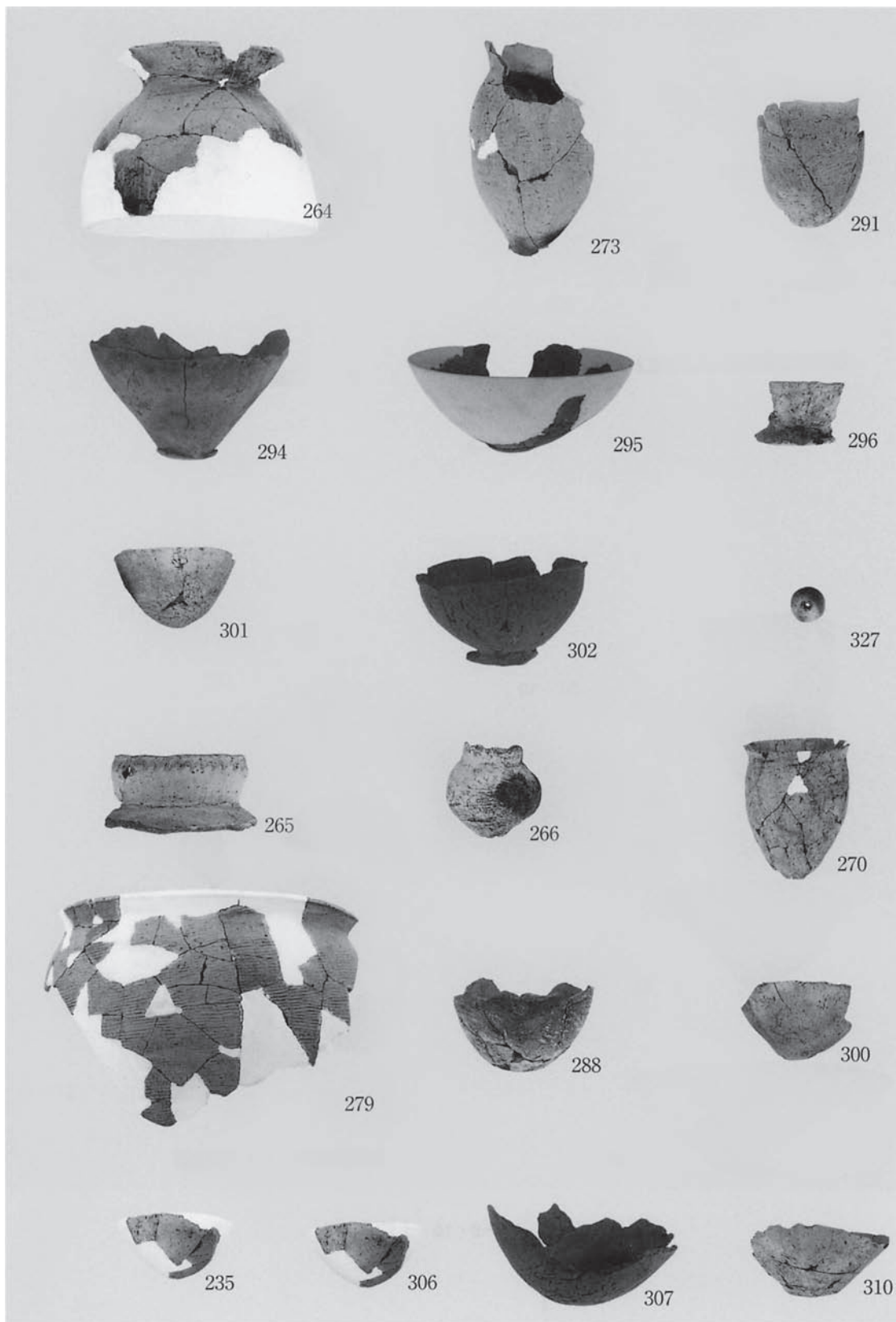
172

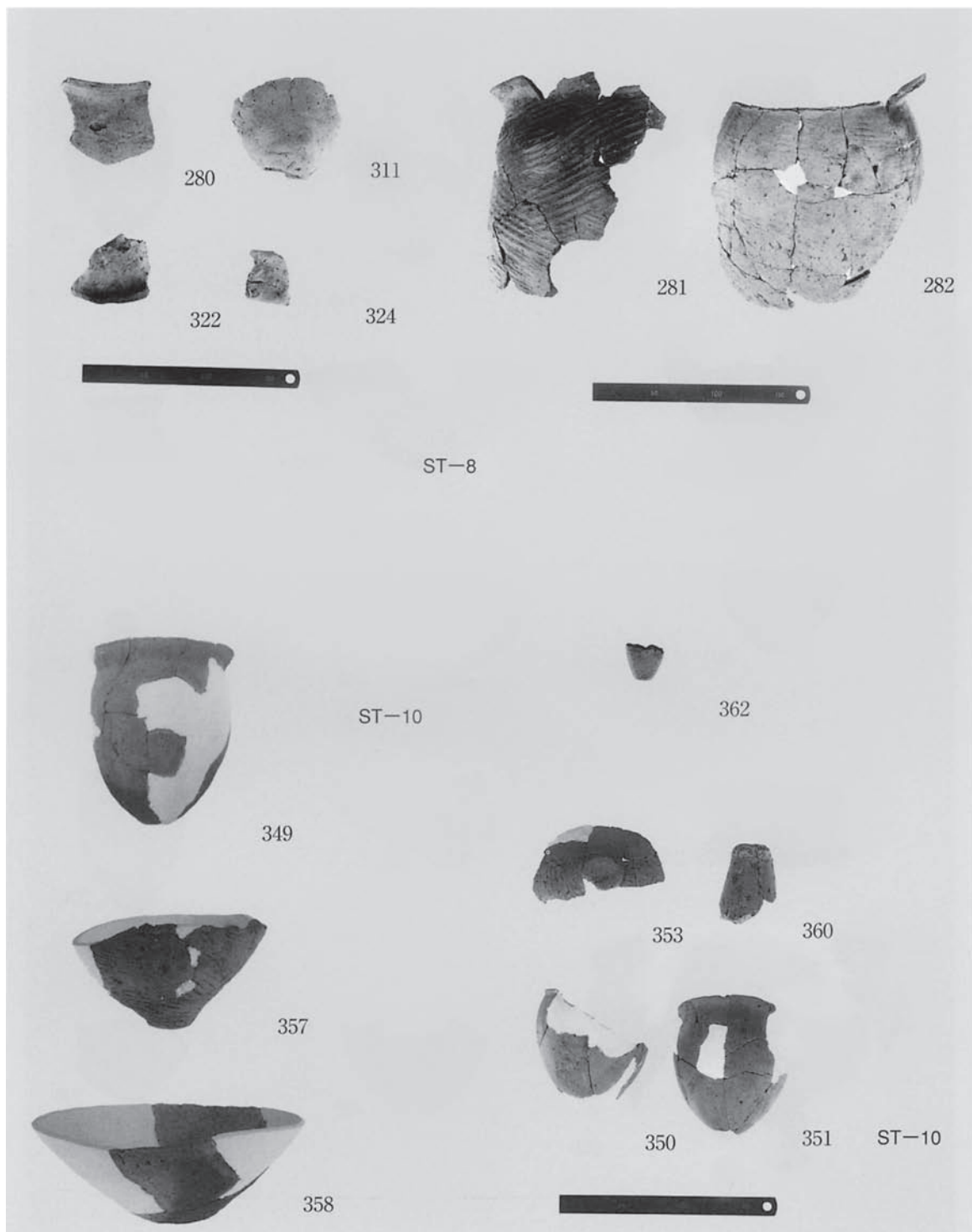


ST-6 土器









ST-8・10 土器



335



336



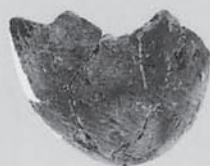
337



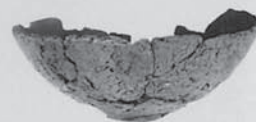
338



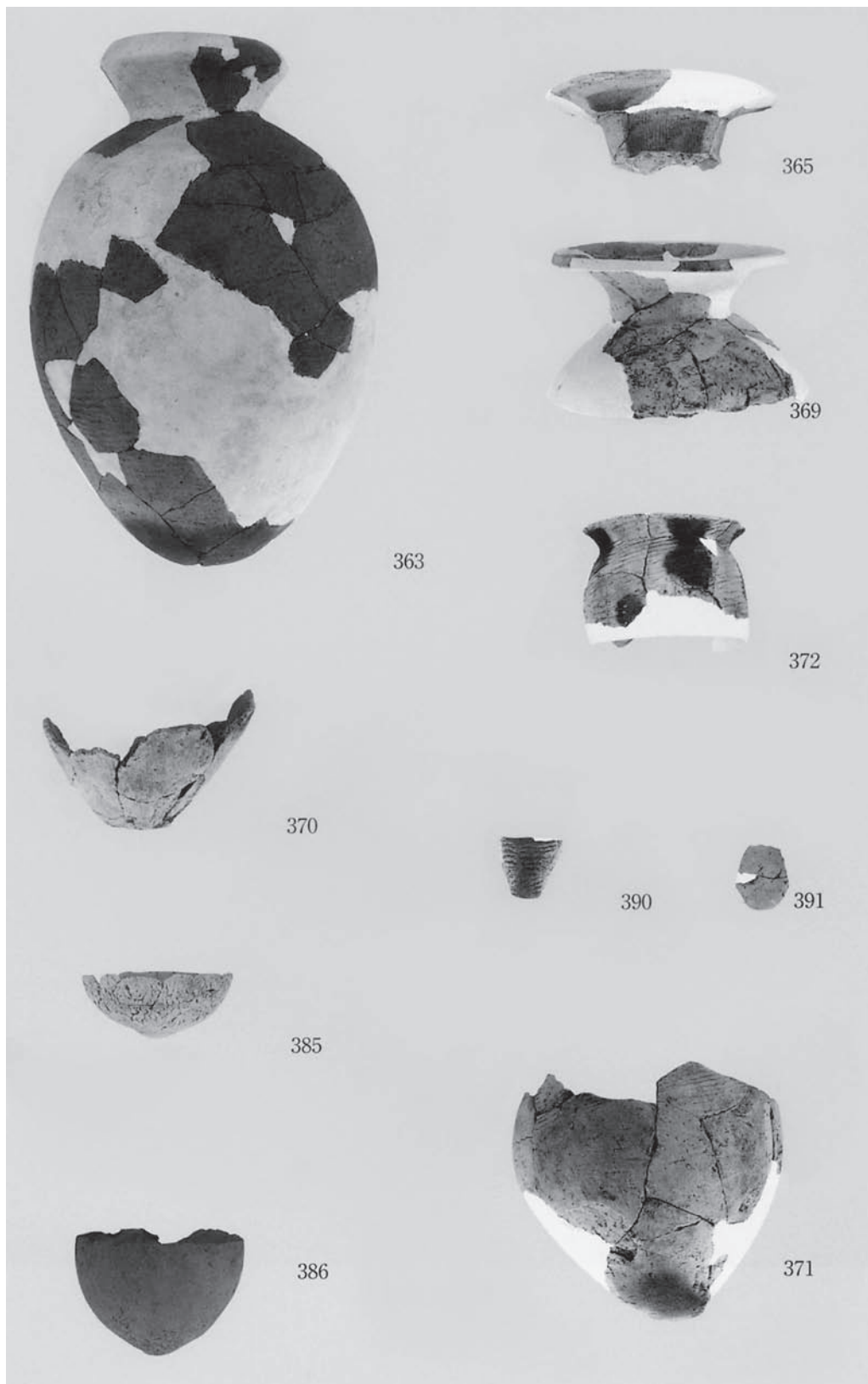
339

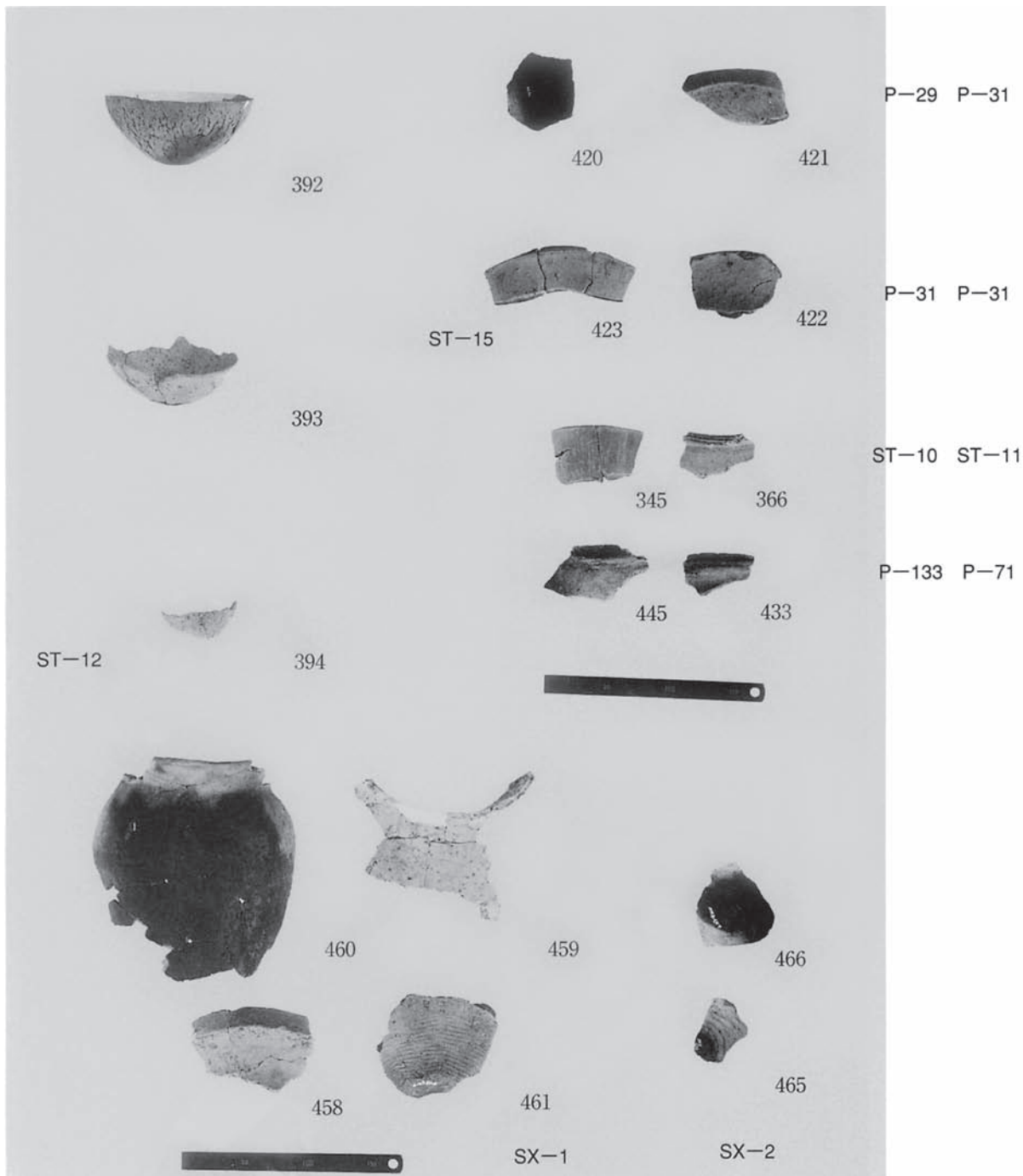


340

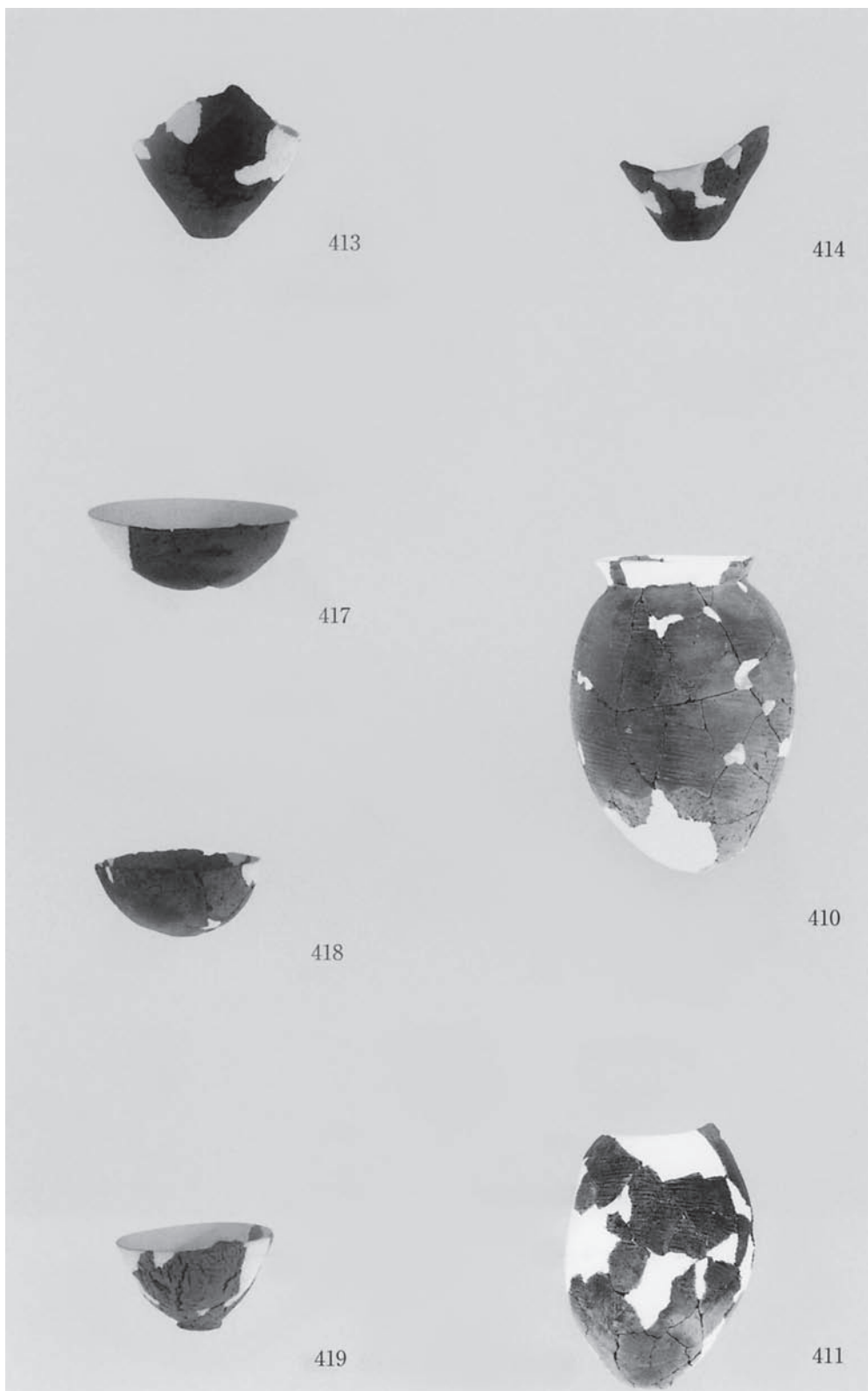


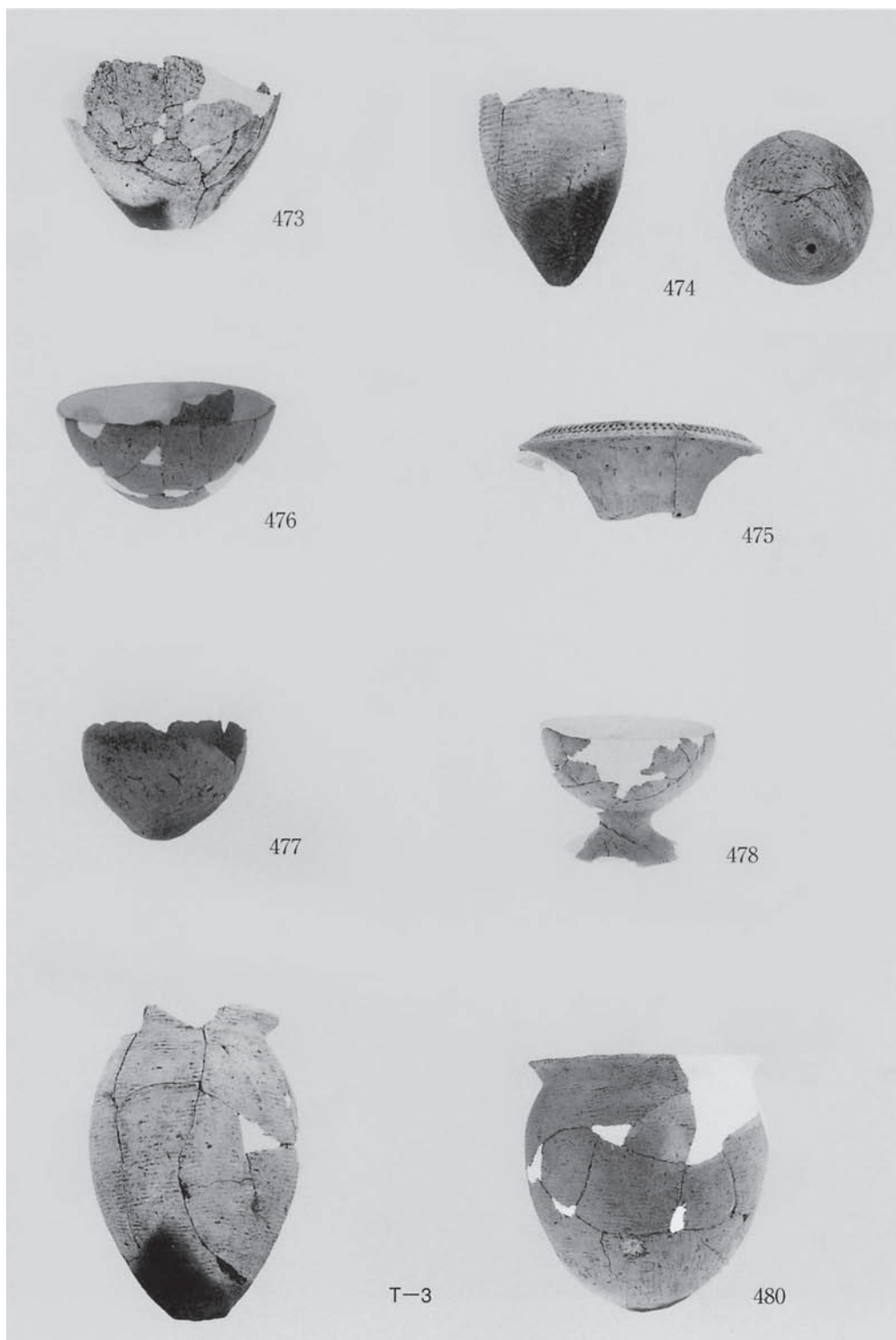
331



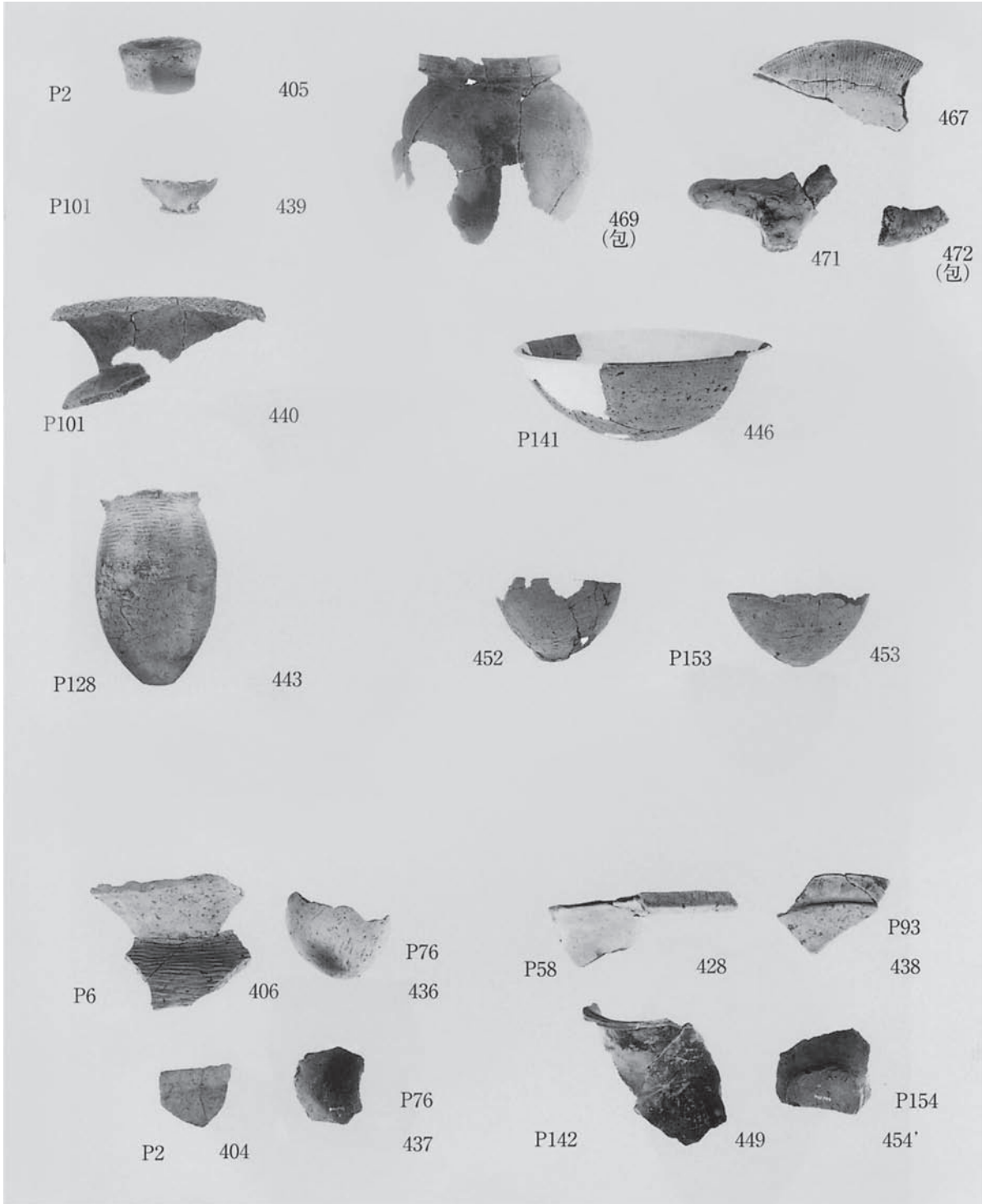


ST-12・15 SX-1・2 土器

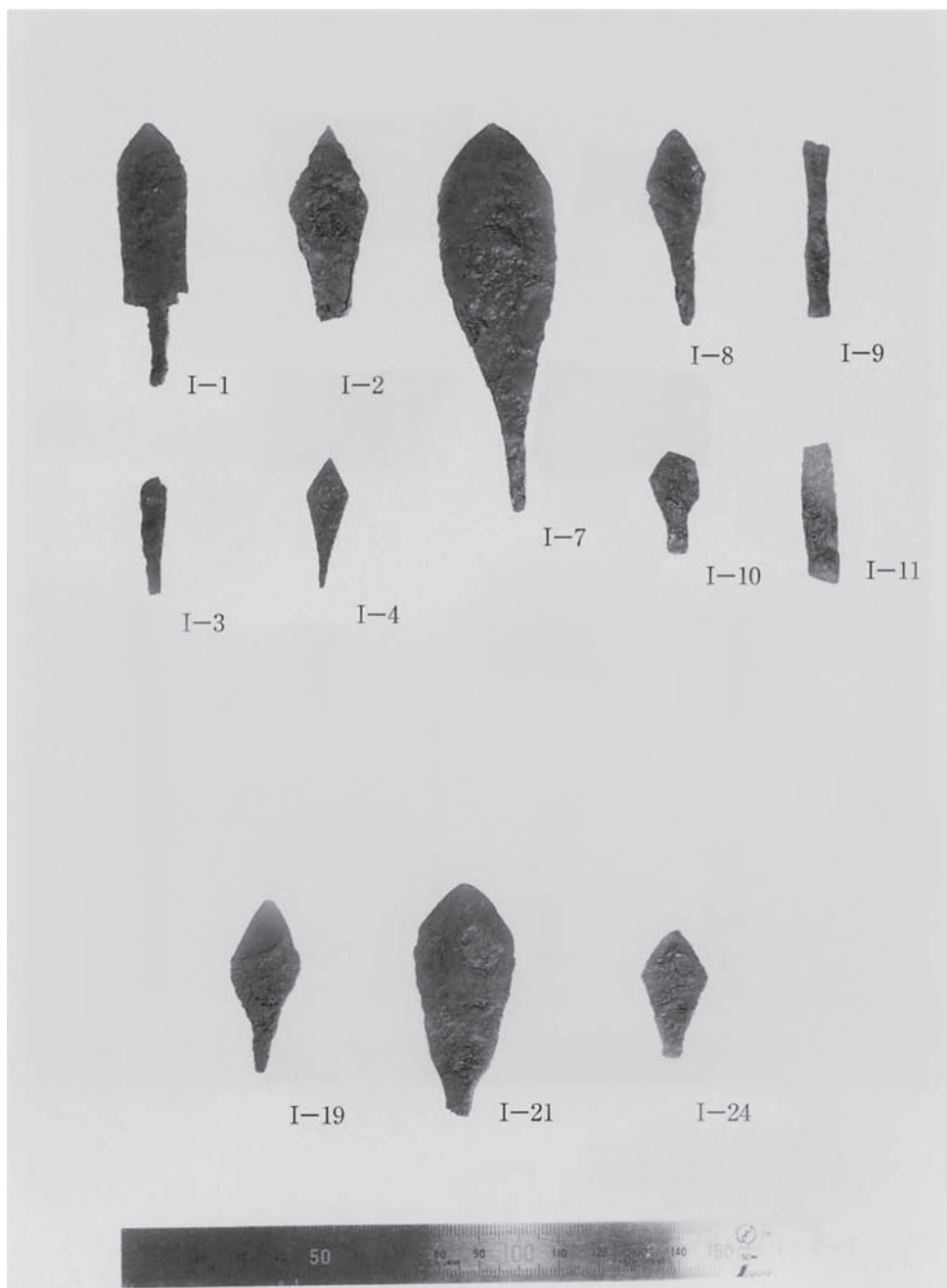




包含層及びT-3 出土土器

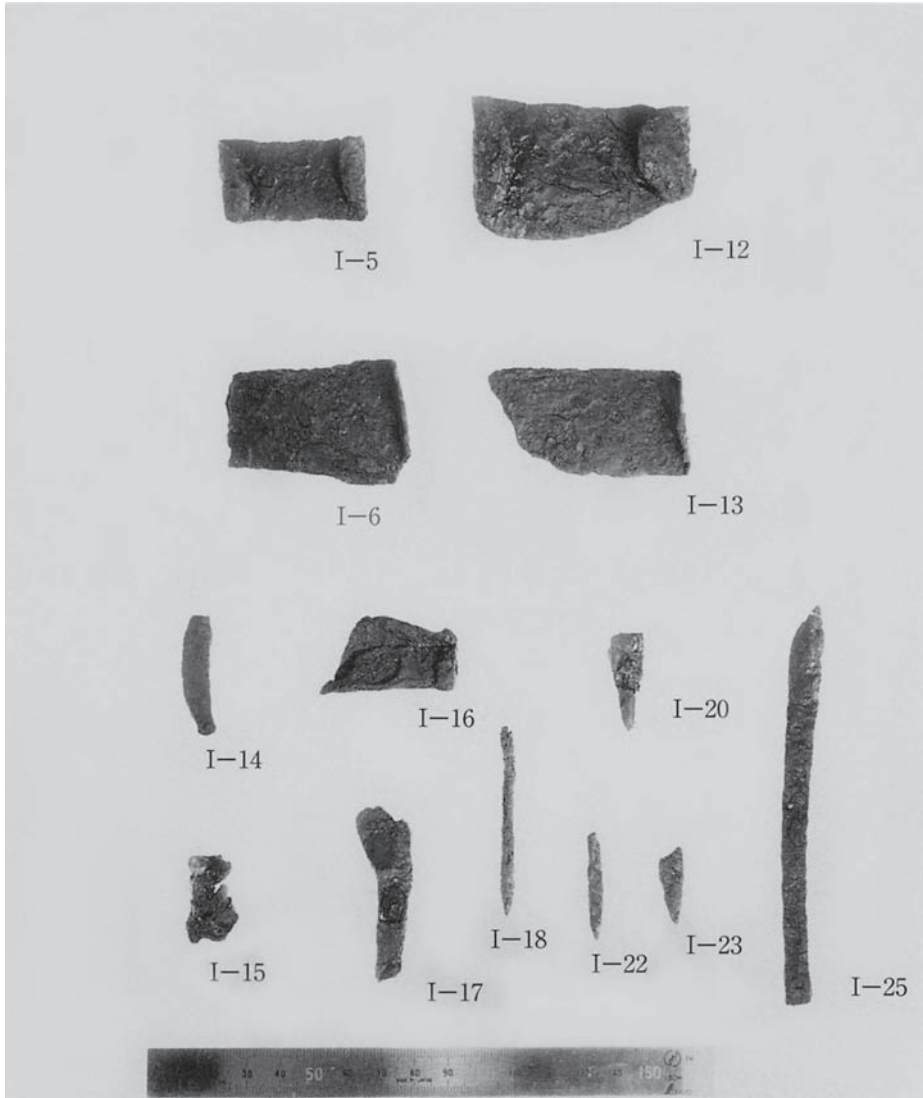


包含層及びピット出土土器

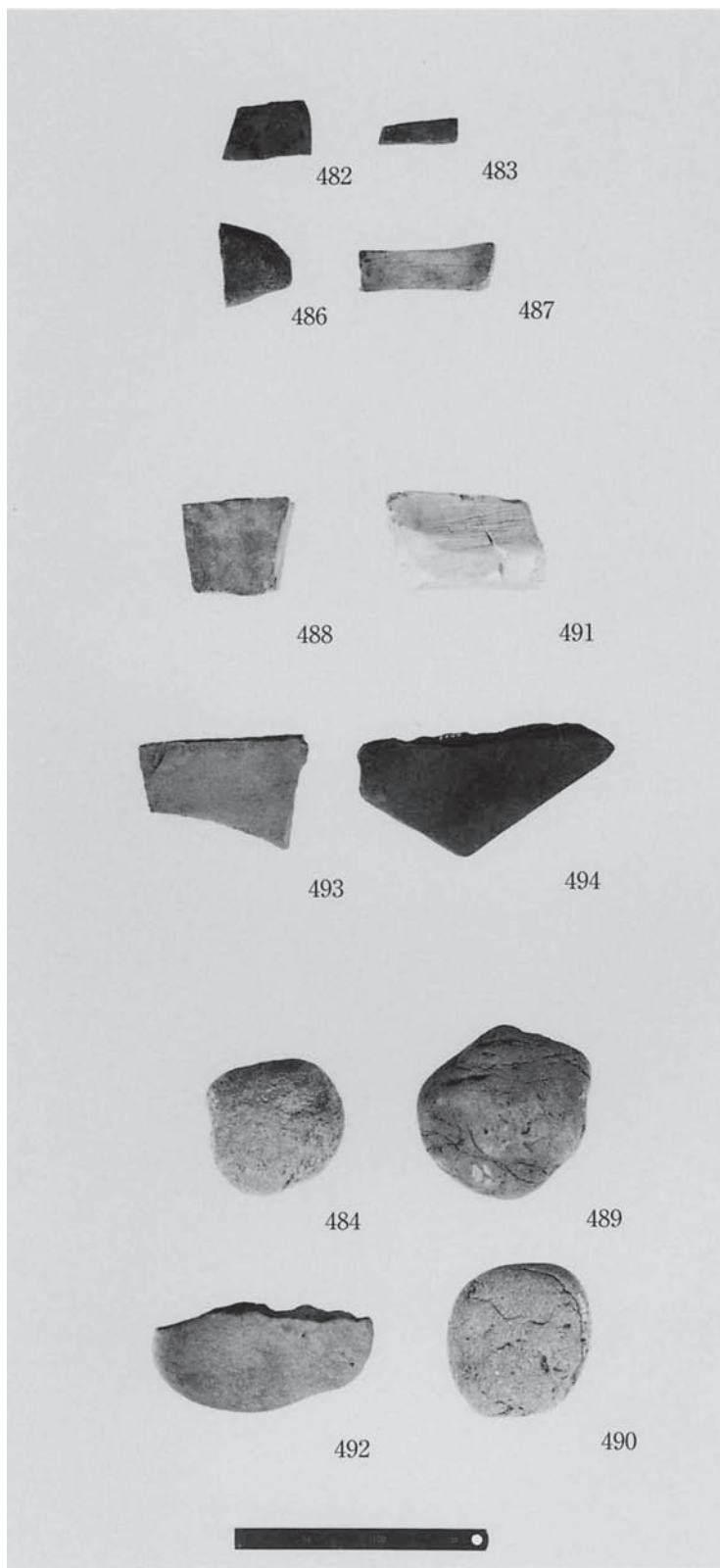


ST-1・I-1・2
 ST-4・I-3・4
 ST-5・I-7~11
 ST-7・I-19
 ST-8・I-21
 P-25・I-24

鉄製品（鉄鏃）



ST-4・I-5・6
ST-5・I-12・13
ST-6・I-14~18
ST-7・I-20
ST-8・I-22・23
T-3 (トレンチ) ・I-25



ST-2 ST-4
ST-6 ST-6

ST-8・ST-11
NWトレンチ

ST-5

東 崎 遺 跡 I

—県立高知農業高校体育館建設に伴う発掘調査報告書—

1991・3

発 行 (財)高知県文化財団
南国市岡豊町八幡字岡豊山1099-1
TEL 0888-62-2211

印 刷 有限会社 四国写植
高知市針木東町21-18
TEL 0888-44-6022